

の草はみながらあはれとぞおもふてふ歌を略きて引たり初の條にみちのくの志のぶもちずりてふ歌をば皆出したればかく略けるも文なり是をもて初の條をも知べし

昔をそこありけり好色みとしるく女をあひいへりけりさりけれどにく、はたあらざりけりまばいきけれど猶いとしろめたくさりとてはたいかではえあるまじける中なりければ(中なりの上を今本にえあるまじかりけり猶はたえあらざりけると有は字亂て又衍文もありこ、も古本に明らかなる)二日三日さはる事ありてえいかでかくなん

相いふとは相かたらふと云に同じくあひてふ語心すべしさてうしろめだけれど猶さだかならねばえゆかであらぬは世のつね何事にも侍る事なり○中なりければを句とすべし後の物がたりにおほきいひなしなり○はたてふ語は將の字を書てはた何々せんとすといふに意かよへり【はたは又てふ意にちかきもあれどそれは轉じてさも聞ゆるのみ】萬葉にみよしの、山下風のさむけきにはたやこよひも我ひとりねんとあるはまさに今夜も獨寝をせんすらんでふ意なるをおもふべし今のも

まさにゆかじとする事はえせられぬ中なりてふ意なり出てこし跡だにいまだかはらしをたがかよひちと今はなるらん

はやう變る事のたとへにはふめる跡も消ぬまにとも席もまだあた、かなるになとも常にいへり

猶伏によめるなるべし
此物うたがはしきにとは今本のま、に書きさては上うしろめだしいへるに全く同じ意に侍り此文歌の左に書る詞は巧なるぞ多きをおもへば右と同じさまには有べからず猶伏は猶豫と書に異ならず然ればたゆたひによめるなるべしとよまん歎さる時はもとよりうしろめだかりしにまばし事有てゆかねば今はさこそあだし心にやなりはてつらん猶心見てこそゆかめてふ意より

歌をまかよみてやりてたゆたひためらふ意ならんとおぼしきなり猶豫は萬葉にたゆたひとよめり
むかし賀陽のみこと申親王御座けり
賀陽親王は桓武天皇の皇子にて齊衡二年に三品より二品迄たまへり(文徳實祿にみゆ)

其みこ女をおぼしていとかしこく【かしこくはめでたき

物におはす意に轉じていふなり既に解つ【惠みつ、かよひ給けるを一人なり】最嗚而【嗚は字注に私罵將言嗚、嗚また言若不出口といへりこ、には言にはいははで艶をふくむ方にかりしならんかく遠く字をかるも又例なり】我のみとおもひけるを(一人なり)又人聞つけて文やるとて雀公のかたをかきて(一人なり)

こは一人の女に三人通ふなりはじめの親王のさまと末の人の事は明らかし中なる一人の様は語をはぶきしかば定かに聞えがたきに似たれば今本にはなまめきての下に有けるをてふ詞をそへて女のなまめく事とせしにや【今本に人なまめきて云々と有て女のさまなりと云説はわろしさてはすべての意聞えずさて人はいとを誤れる事古本に最の字を書るにて知べし若又こと人最なまめきてとありしをさては聞えず下のいと衍文ならんとて後人のひとを居ていとを去けんかしか、るたぐひも少なからねばこ、ろみにいふなり】此詞古本になし有てはいよくとわりなきを好事の例のわざならん故に古本に依ておもふにこの中の男は他人のかよふをまらで我のみとおもふ故に艶を含みて心に入て通ふを云ならんさて最てふ語の上に詞を略けるはこの上下と

おなじく書ては文つたなきとての事なり又脱文あるにやとおぼゆされど惣ての意はまるければ右のごとくいふなり○又人聞つけてとはこのひとりも今初めて聞つけたるなりさてほと、ぎす繪がきて其かたへに歌も書てやりしならん

ほと、ぎす汝が鳴里のあまたあれば猶うとまれぬおもふ物から

こは古今集の夏の歌にてた、郭公のうへのみなるをこにかく端書を作りて人々に心かよはする女にたとへたり末の句はおもひまはれながらまだく疎まる、とよめり○新撰萬葉に「うとみつ、と、むる人のなけれどや山ほと、ぎすうかれてはなくこきん集に戀にも雑にも此心の歌あり

といひければ女氣色劣而
まかいひたるに今は女のあらがひがたくあらはれつと思へばけしきのおとりてかくよわれるかへしまたりといふなり

名のみたつ死出の田長はけさぞなくいほりあまたにうとまれぬれば【今本にはいほりあまたと、あり右一首に付てはさも有べけれど古本に爾と有からは人々此時うとみ

出たるを云なりさればいよ、けしき劣るべし】

かた／＼にうとまるればせんすべなくて今はねをのみなき侍るさはいへどそは名のみなるをと猶ことを残してよみたりかくあらがはず弱れるかへしにて先にはほりかなりしが俄に劣たるけしきを知べし古本に劣の字あるも證なり（或説にけしきを執なりといへるはかなはず所にこそよらめ）【けしきを執てふ詞は源氏物がたりに金葉集にもあれどそれをもてこ、をおもふはあやまりなり古本に劣と有て假字おとるなりけしきをとりとはかなたがへり】

時はさつきになん有ける

時を書たるは郭公をたすくるのみ

廬おほきまでの田亭は猶たのむ我住さとに弊し絶すば

こはうとままう思へど猶おもひ忘れがたき心よりいへるなり○死出の田長は郭公の一名なり（亭は家長の意）異國に蜀の望帝の魂この鳥となりて夏くれば鳴なりそを聞て田家の産業をなすてふよりこ、にも此鳥は黄泉より來つ、農をす、めて唱てふ諺のあるをもて死での田長ともいひなせり（からもやまとも歌にはかゝる事をさらはずいへり）【成郡記云杜宇亦曰杜王自天

而降稱望帝好稼穡至令蜀人將農者必先祀杜王格物命曰杜鵑三四月夜鳴達旦田家俟其鳴興農事てふによりて僧家にては死出の山より來て農をす、むるといひならはしけんされば古今集には杜宇は佃稼を好みていくばくの田をつくればにや此比日ごとに田長を呼おほするよとよみてさて郭公は黄泉の鳥にてあれはそれが呼は即めい土の田長なるべきことわり故に郭鳥のみづからの名を他の田作る人におほせなしてよめるなり此轉用を意得ぬ人かれをもて是をまどへるぞか【さて郭公の冥途より來てふこと拾遺集に伊勢の御うみ奉りたる三子のなくなりて又の年郭公を聞て「までの山こえてやきつるほと、ぎす戀しき人のうへかたらなんとよめり又こきん集に「いくばくの田を作ればか郭公までの田をさを朝なくよぶむかしあがたへゆく人馬のはなむけせんとてよびてうとさ人にもあらざりければ家とうじまでさかづきさ、せ

京よりゐなかへ任などに行人に別れの宴せんとてよびて親族なれば妻などまで別れの盃さしかはさすなり○あがたは班田の意なり【班田の事戸令を見るべし】い

にしへは諸國へ班田使をつかはされて六年に一度國ごとの田地を改めて人ごとに頒ちたまへり故にあがたてふ名はありさて御使は國府にとまりて其事定めたまへば國府を指て縣ともいひ又一郡をさせる所も侍り【又郡の内に庄といふ事後にあり是をもあがたといふ事侍るを轉じて云なり】且ゐなかとは田居之方の意なるを田を略きいふと聞ゆ然ればあがたとゐなかはこまかにいふ時は別なれどすべては同じこと、もなれり【ゐなかの事は已にも出づ所をかといふは古語なり然ば方よりもたゞに所の意にもすべし】○馬のはなむけは旅行人の馬の頭をかなたへ引むかはするよきのわかれの宴なれば云のみ【はなむけとのみ云は後世の略語なり】○家どうじは家戸主なりこれをいにしへは戸母とも書て戸は一つの戸なりじは主の略にて宮主をみやじと云が如し一戸の内をつかさどるは婦なる故に後世は妻を家ぬしてふも此意なり然ればいへとじなるをとうじといふは物となふるには語のみじかきを延べ長きは約めていふ例常おほし（後世の人家童子と書は論語に邦君之妻君稱之曰夫人夫人自稱曰小童てふにつきていへど皇朝の古意に非ず）【和名抄に戸自は

老女の稱と云は中比のさだなり萬葉に坂上の郎女のむすめにおくるうたに我子のとじとよみたるは其むすめ坂上の大郎女一戸の室と成てあるをもていへり然は老少によらず家ぬしとあるをいふなりさて老女をもしもいふ事となれるはいにしへは老後となるまでも其家をゆづりてべちにもりをる事なし故に老女ある家は老女を必戸主と稱すればなりそのとじの戸は清むべきをにこるは家よりつゞくる時の音便のみなり○又いにしへは戸主とのみいひしを後に又家の語を上におきていふなりたとへば紅は吳藍なるを其後に韓國より來るが殊なりとてからくれなゐといへるたぐひにてみな後世のいひなしなるを其まゝに雅言にも用うる事となりぬ】
女のそぞくなんどかづけんとして女にあひかはりてあるじのをとこ歌よみて裳のこしにゆひつけさす
なんど、書たるは裝束の外にもおくり物行を去らせたり裳のこしは所謂ひきこしなるべし古本にゆひ指と書る指は借字にて歌は紙に書て其紐に人して結付爲せしむるといふならん【裳から衣をおくれる意なりされば妻にかはりて男のよめり是をもておもひみるに

後には男より男へも女の装束かづくるをれいのやうに
なれるは中頃よりの事なるべしさすとは草木の枝にさ
しておくるてふ事もあれば是もさる事とおもふべけれ
ど上にゆひ付といひて又さすと云べからず

出て行君が爲にとぬぎつれば我さへ喪なく成ぬべきかな
君がこゝを去につけて装束脱てまゐらすはもとより
にて去たふにつけては我さへもこゝになく成て去たひ
行べきこゝちすといふを本にて又喪なくゆけなど古く
よりいふまゝに此人の爲とてすれば残る我等さへ喪無
事なくあらんと祝ふ意をかねたり○喪なくは萬葉に
「玉きはる内のかぎりはたひらけく安けくならんを事
もなく喪なくあらんを又、今だにも喪なくゆかんを又
「喪なくはや來と我妹子がゆひてし紐はなれにけるか
も是旅ゆく人をいはひていへる語なり恙なくゆきかへ
りねと今も云めり

此かたはあるが中に面白ければ心留而不讀者腹爾深味
毛出不來

此歌已にも云如く幾重も心をこめて作りたれば大かた
にては他のよく意得がたからんふかく心のうちにおも
ひとく時はふかき味はひあらんでふ意にいひたりこれ

きむすめともかく女の傳くともいへり神につかふるも
其意同じければ古本に祠と書り凡是等の語ひとの國に
ては忌齋祝など事につきて字を分れどこゝには語も同
じくて物に従ひて心得わくるぞおほき恐懼などもそ
れが如し字を守りてこゝの古歌をおもふはあたらす
古歌を守りて字は假なる物とおもひ知べきなり【萬葉
に錦あやの中につゝめるいはひ子も云々竹とり物がた
りに几帳の内よりも出さすいづきかしづきやしなふほ
どに源氏のわかむらさきに海龍王の后になるべきいつ
きむすめ 神に仕ふるは凶穢を忌て清らを用るをいは
ひまつるともいつきまつるとも云人のよはひをいはふ
も短をいみ長をもていはひまつる又みづから凶あれば
人にいまれ人に凶あればおのれよりいむいむもいはふ
もいづくも同じ言なるを知べし又崇みておそれかしこ
むと悪きに恐れかしこむと事は別なるに似てかしこむ
詞は同じすべのとは多くは字を目印とする故に國語
にくらしかつかへりてまどひも出くるなり此國はかく
文字ならで梵字などのたぐひにかゝばまどはし物を】
母き、つけてなくく傳たりければ男まどひ來たりけれ
ど死ければ徒然とこもりをりけり

はれいの戯れていへる物にてかく書事はかへりてよろ
しからぬ歌と知べしさて今本には終の詞腹にあぢはひ
てとて下に落たるを其まゝにいひとかなとする故に或
説どもはあやまりぬ【又ある人は此時の歌あまた有べ
ければあるが中にと云なるべしといへりされど本文に
よらばさもいはめこは評語なればすべてにかゝるべし
たゞ一首出して去か云べきことわりなし此或人も此文
の意を得ず實に面白しといふとおもへる故にすべてに
かけん事はいかにおもへる成べしこはさまゝの心
ふくめてわろき歌なるをかくいひてわらはしむる物な
り】

むかし男ありけり人のむすめのかしづくいかで此男に物
やいはんとおもひけり心よわく打出ん事かたくや有けん
物やみに成て死ぬべき時にかくこそおもひしかといひけ
るを
心弱くえいひ出かねてわかきほどのひとへ心に物疾と
なる昔も今も有ならひなりさて臨死となりて去たしき
侍女などにかたりしならん○かしづくはいつきかしづ
くといひて崇は凶を忌て吉を用ゐつかふるをいひかし
づくは大切にあげめかしこまりて仕ふるを云故にいっ

母にたゞちにいほぬを去らるこれ又は、とよむべき他
なしか、る事父のとらんやは今本におやと有はわろき
を知れ
時はみな月つごもりいとあつきころほひに夜ひはあそび
をりて世更てや、涼しき風吹けり螢高く飛あがる此男見
ふせりて
いとおもしろく書たりまだみぬ人の忌にこもれる意を
よきほどに書なし且夏の末の風のさまかづく身にし
むやうも其をとこのかくてをる味はひあり○六月をみ
な月といふ事は神鳴月の上下略にて十月は雷【雷を專
ら神とのみいひなれたり雷丘をかみをか藤原をかみと
け雷鳴陣をかみなりのちんなどの如し】の鳴ぬ月なる
故に神無月と云にむかへていふと東まろ大人のいはれ
し寔によき考へなり六月【水無月と書てひでりする月
の謂と思ふは俗意なり】はことさら雷の鳴月なればな
り○いとま有てをるをも遊ぶと云なり葬禮の事のみ執
て常は公事なきを遊部と云が如し
とぶ螢雲の上までいぬべくば秋風ふくとかりにつげこせ
【今本に行螢とあるはとらず古本に右の如く有後撰にも
とぶはたるとあればなり】

こは後撰集秋の部に題しらす業平朝臣とて有を用ゐたり夜更風すしく吹螢の飛あがるに雁のこん事をしも思ふべきころほひなりすこし身にしむ初秋風のさま此男の今によくおもひよりて取つ〇つけこせば萬葉に告乞と書てつけこせともつけこそともよみてこせは願ふ意なり是によるに告よかしといふのみなり(告て來らせといふまで思ふはいにしへの意に非ず)【古本に傳越と有越はかり字なり傳は螢にことつたへよてふ意を得て書たれど古言の例告乞なり】

暮がたき夏の日ぐらしながむればそのこと、なくものぞかなしき

おりたちて悲しとならねどさすがにながめせらる、此こもり居のさまをよみたり上のは夜これは晝の意なりよりておもへばかの起もせず寐もせよるをあかしてはてふ歌のこ、ろ詞の右の二音にわたして此うたをば記者のよみたりとも見ゆ【上のはた、初秋のさまをよめる古歌を端をかへて用ゐこれはそれにつきて記者の作れるなり】○ながめとはいつもいふが如くうれひある時の事なり

ひかしをといはしき友ありけり

ても有なん木の濁るを去りて去ばらくすみてとなふるたぐひのなきにも侍らねばなり

わすれや去たまひけんといたくおもひわびつ、侍るよの中の人のはめがるれば【此めがるればより下は歌なるを今本にはあやまるならん次下にいふべし】わすれぬべき物にこそ有けれと云遣たりければ(今の本にはよみてやると侍り古本になし後に書加へたる物とみゆ其由次にいふ)

めがるともおもほえなくに忘らる、時しなれば面影にたつ【今本によればこの歌はむかしの男のなり】

目がるれば即おもひわする、世のならひなどいひおこせ給へど我は常に忘れまゐらすひまもなきま、に面かげにつとそひて見まゐらせ侍るなりされば目がる、ともおもはずといへり

右は大かた今本につきていへり然にこの詞どもの様みな一人の男の文と見んも嫌ひなし道有と二所までそれも事によりてはおこせたりともよめどこ、は上に昔男とていひくだしたればみなやりたりけりとよむかた語の勢ひありて聞ゆ依て思ふに世の中でふよりは昔の男のやりたる歌なるべし故に古本のむねをだに擧

日本紀に善友をうるはしきともよめり(こをなりひらの友誰なりといふは玄ひたる説なり)

かたとき得さらずあひおもひけるを人の國へいきけるをいとあはれとおもひてわかれにけり

古本には片時より別れにけりまでの詞はなく得不去路に往にけりとあり是はおほやけの使任などにて行を云べしされど今の本のさまもこはあしからねば擧つ是にはいと云べき事あり下に論ふべし

月日へてやりたる文に淺ましうえたいめせで月日のへぬる事(事よてふ意にてこ、は句なり)【今本によればあさましくてふより下は友の方よりの文の詞なり】

あさましは憎ましなり人をほめをぞむにも我身のいひがひなきを、ぞむにも皆いへり薊てふ草はさまのをぞましげなればあざみと云が如くあとを、音を通はしていふなり古本に淺猿と書たるは訓をかりたるのみ【あさましてふ語後世は淺き心てふ事と思へりさてはかなはぬ事多し身を、ぞましかてふことばなればあさのさをにぐるべきを後にはあさき事とのみ思ふ故にすみていひなれたりまことしくよまん人はさを濁れかしされど聞なれぬ人の聞にくしと思ふをいとほすとてまかく

昔男最華美友在けり得不去路に往けり陰精火歷而遣有文に淺猿得右得不對而月日之經寐留事忌爲將給與痛念 倦乍侍

世間之人心波目離者可所忘物爾社在禮
與言遣有ければ(此所にかへしと有つらんをさてはこ
とわりなしとて後にもらせしならん)【後の人よくも
考へずて心にまかせて書もらし又をへなどせる事常多
しこ、の返してふ詞をさりて上によみてやるてふ詞を
ばそへたる事あらばなり】

目離雖所思鳴爾所忌時者無者面影爾立
かくする時は贈答のうたなりふかくふるき書見ん人正
したまへ

むかし男ねんごろにいかでとおもふ女ありけりされど此のをとこを他なりときいて顔強のみまさりつ、いへりける

こは古今集にある女の業平朝臣を所さだめずありきすと思ひてよみてつかはしけるとて此二首有を今は端書をかへて一條とせるのみさて此物がたりにては男いかで逢見てしかなとねもごろに戀るなり○あだとは他の

字を昔より訓て他し人に心のうつろふを略してあだなりとのみもいへりそれを轉じて櫻花白露などに云も散きえなどしてあだしさまに變る意のみ【我によそなる人をあだし人よその國を他し國など云はたゞ外てふ意のみ男女の中らひにていへば外心有をいへりあだしてふ語は一つなれど用るにつけて轉せるのみ花や露などに云は又ふたゞ、ひ轉じたるにてはかなく定めなき心ともなりぬ】

大幣のひく手あまたに成ぬれば思へどえこそたのまざりけれ

祓の大ぬさ【古事記仲哀天皇の條に國の大奴佐以て祓せしめ天武紀に諸國の國造を召て幣を頒ちたまふを大幣と云るされしは公のぬさ故に大ぬさといへり此歌によめるは大の語の意ことなり】は人あまたあつまりて手ふれ引物なるにかの男はおもふかたおほくてかたがたへひかるゝにたとへたり

返しをとこ
おほぬさと名にこそたてれ流れてはつひによる瀬は有てふものを【此かへしの心を一入ふかく男の思ひていへるとせんとてはしにねんごろにいかでとおもふ女ありけり

る「わかるべき事もある物をひねもすに待とてさへもなげきつるかなと有ければまどひきにけるといへる似たる事なり】

昔をといもとうのいと可笑【をかしてふ詞はめて面しろむを云其おもしろくなど有時は云まる、物故に笑とはかきたりそを又轉じてをかしとはいへどそは後の人の語なり】有を見をりて

源氏總角に在五が物がたりを書て琴をへたる所として此所のさまあれば古くはきんの事も有しを詞の落たるか又つゞけて有し條のもれおたるにも侍るべしすべて古本今本ともにさる類少なからず

うらわかみねよげにみゆるわか草を人の結ばん事をしぞおもふ

かくばかり共疑しよげなるわかうとを人の物となさんがかひなき心ちすとなり翳草は珍らしくなつかしき物故に夫婦にもたとへきたれば妹弟にたとへ且末といひ根といひむすぶと云も草の詞なり○此をしぞ思ふと云は既にもいへる如くしは助辭にて人の結ばん事をぞ思ふと云なりされど其おもふは惜み思ふなり○むすばんとは日本紀に約の字をよみたるが如く契りむすぶを草

とは書しならん】

引かた多き名こそた、め今ながらへて見よ終のよるべとはそこをこそとおもふをと祓ひの幣の流れゆけどよりとゞまる所あるにたとへたり元真集に（朱集院の御屏風にはらへする所）大ぬさをはらへするとも此河の神は云るらんふかき心を能宣集に（六月にはらひはべる所）みそぎする河の淵せに引綱を大ぬさなりと人やみるらんこれにてぬさ引有さまも云るべし

昔男在けり物へゆく人にうまのはなむけせんとて待けるにござりければ

今ぞ云る苦しき物と人またん里をばかれすとふべかりけり
人を待わぶる我心をおして我を待ん里をば疎す間と餘意をもてよめる寔に業平朝臣の歌なり古今集に紀の利貞が阿波の介にまかりける時に馬のはなむけせんとてけふといひおくれりける時にこ、かしこまかりありきて夜更るまで見えざりけると有端の詞少かはれるのみなりかく異ならぬは稀なり【大和物がたりにひとの國の守の下りけるに馬のはなむけを堤の中納言人して云つかはしけるにくるゝまでござりければいひやりけ

むすびにをへたり
かへし（今本此かへしの上にと聞えけりとありと聞なりけりてふ詞は例なし古本になきをよしとす）

初草のなぞめづらしきことの葉をうらなく物をおもひけるかな
本にはなぞもかくめづらかにおもひもかけぬ詞は有ぞと、がめて末には且やはらぎてか、るあひだには有まじき事ぞてふ心もおかずひたぶるなる御物思ひよと云なり○初草は若くさなり萬葉に新草のめづらしけんも又わか草のま、めづらしき吾大君かなどもよめり○う

らなくてふ詞は心の裏につゝ、む事なくおもふがまゝ、に云をいへり【裏の字古本にこゝろともよみたり】萬葉に「つるばみのひとへ衣のうらもなく有らん子故戀わた

るかも「うらもなく我行道に青柳のはりて立れば物もひつゝ、も○この男は繁想にあらす妹を恵みて人にむすべかしと讀りと云説は此返しをなぞめづらしき言の葉ぞてふ詞にも叶はず源氏のあげ巻にも（女一の宮へにほふ宮のまわりたまうて）在五が物がたり書て妹にきんをしへたる所の人のむすばんといひたるを見ていかがおぼすらんすこし近くまわりていにしへの人はさる

べきほどはへだてなくならはし侍りけれと忍びて聞え
たまへば云々少しもの隔たる人と思ひ聞えましかばと
おほすに忍びがたくて【少し物へだてたる云々はま、
しき兄妹にてもあらばといふ意なり】若草のね見ん物
とはおもはねどむすぼふれたるこ、ちこそすれ（女一
の宮）ことしもこそあれあやしとおぼせば物ものたま
はずことわりにてうらなく物をといひたる姫君もざれ
てにく、おぼさる【玉葉集に妹のをかしきを見て書付
侍ける参議篁「中に行よしの、川はあせな、んいもせ
の山をこえてみるべき此かへしは峯守朝臣の女とあれ
ばこれも妹を戀し事ながらま、妹ならんは例を推て去
らるされど右の歌はいもせの山の中におつるてふ歌の
詞をとりて去らへも作りさまも天厩などの比の歌と見
えて篁朝臣の比の歌にはあらず是もたかむら物がたり
など後につくれるを實としてとりしなるべしもとより
たかむらのならぬ去らるれどこ、に引人あれば擧て明
すのみ】○校衣にも中將の君ま、妹の源氏の宮を戀給
ふ所に此繪どもを見せたまへば在五中將の日記【在五
が物がたりと云は此文を云なり定かに在五とさしてい
ふも物語と云からは嫌ひなし在五が日記といふ事は其

比すでにあやまれるなるべし又日記は前に有しにやと
いふ人も侍れど事のさま此文の事を源氏に書たるを
又うけてさ衣に書たれば別の物ならぬを知べし】をば
いとめでたう書たるなりけりとみるにあひなうひとつ
ご、ろなるこ、ちして目とまる所々おほかるにえし
のびたまはでこはいか、御覽するとてさしよせさせ給
ふま、に「よしさらば昔の跡をかへり見よ我のみ迷ふ
戀の路かは（うつば物がたりにも中將の君妹のあて君
を戀し事有）これら皆此文の事を取て妹を戀る事を書
たりさて是はま、妹なるべし右の源氏なるは同腹にお
はせばみづから有まじき事と思ひてふかくもいひたま
はず此姫君のかへしせられしをすら悪くおぼすといひ
狭衣には此意をうけてま、妹と書たるなど是ぞ我國の
いにしへのならひを知て書るものなり抑皇朝のいにし
へは同腹たはくるは大なる罪ある事紀などに去るせり
異母なるは后にしも立給へりしなれば忌ざりし事去る
べし後世もておもひはかるべからず我國のいにしへ人
はずなほに侍れば人情をかくさす大かたの事はさて
おくも中々に御代は治りて侍りから人のことばのみよ
き理談に泥みて此いにしへをはかるまじげなり【或人

問異服とても相たはけん事甚しからずやと答後世か
ら國の道を専らと思ふ時にては誰も去かおもへども
凡何事も天下の治るべき事を立て云なるに皇朝にては
二神のみとのまぐはひよりはじめてさる事としてされ
ど同腹はいとしまして異母は忌す去かありし代々に
は天の下いやさかえに榮えて御國の治まりし事知べし
されば人情のま、に制は少くてあるぞ世間の爲よろし
からんかのから國には同姓をすら娶らすとかいふなる
を聞つ、悪好する人こそおほかりけれさらばさる事は
制有て行はれざりし事去らる凡かしこにはよろしけな
る語はあれど實に用うる人はなかりしさればこそ天子
の代々つゝかすぞ侍る文を以てとく人は理談を専らと
すれど天の下は即天地のほかりがたきが如くして理に
わたる物少なすべて方角をきはめたす事は人の好
みて云物なれどみづから去か行ふ人は少なしよしかぎ
り去らぬ人の中にさる人ひとり二人あらんも益なきわ
ざなり物は大きかた制かろくてあるぞよき皇朝は直き國
にて大かたの事から國の道はかなひ侍らぬを偏に書の
うへになづみていふ人多し見よ／＼さるゆるがせなる
制の御代さかえたりし事を今と成てはさるなからひの

戀をもすべしといふにはあらねど昔はさる事有しをい
ひ且其代にはいむまじきことわりを明すのみすべてい
にしへの書などは後をもてはかるべからぬ事多しまた
から人のよき事をいひしも行はれしは少きをそれをこ
こにもて來ては行はれたる様におもひもいひもするよ
いとおろかなる事なり此ことわりをねもごろにいへ
るをさらば今の世もか、れかしと思ふとしも思ひと
れる人あるべしこは此眞ご、ろなる世の治りをいふの
み
むかしをそこ在けりうらむる人をうらみて
互に怨むるなり
鳥の子を十づ、とをはかさぬとも思はぬ人をおもふもの
かは
こは六帖に鳥の子を十づ、十はかさぬとも思はぬ人を
何かおもはんと友則のよみたるを少しかへて用ゐたり
卵を百もかさぬ事は成がたき極みながらもしそはか
さぬるわざの有も去つべし我を思はぬ人を戀るは何の
たのめもかひもなければおもはしたのめじとなり鶏子
をかさぬるたとへはから國に有しをとれるにや【説苑
云晋靈公造九層臺云々荀息聞之之上書求見云々臣

能累^三二博^三基^三定^三志意^三以^三基^三子^三置^三下加^三九鷄子
其上^三云々^三蛸蛤日記に糸もて鳥の子を十かさねたる事
あり右の歌を思へるかさらでも諺にいふ事ありてせし
歟○又六帖に同じ友則女をはなれてよめるとて「瀧つ
せに浮草の根はとめつとも人の心をいかでたのまん
といひければ女

朝露はきえのこりても有ぬべし誰か此世をたのみはつべ
き

はかなき朝の露の夕かけて消せぬもあらば有なんをあ
だ人をばいかで頼みはつべきとなり此世をたのみとは
すべて男女のそれくゝに夫婦と成て経るをいへればこ
こは夫婦の間の世をたのますと云なり○此朝露はてふ
歌は續拾遺集の哀傷の部にとられしは六帖などの歌な
るを用ゐられしなるべし然ればもとは世のはかなきを
よみたる歌なるをれの如く詞を加へなどしてこ、の
あたくらべとはせしならん(此文よりとらば戀に入べ
し)

又かへしをこ

吹風にこそこの櫻は散すともあなたのみがたひとのこ、ろ
は

こは六帖に「ちらすして去年の櫻はありつとも人の心
をいかたのまんとて在原のとき春の歌なるを例の少
しかへて此こたへとせり【白氏文集云縦舊年花殘の梢
待^三后春^三難^三頼^三是^三人心^三た^三是^三に^三同^三じ^三此^三集^三を^三専^三ら^三好^三み^三し
頃なればよみうつせしならん此歌續古今に業平のとし
て入たるはいかにぞや】○阿難とは事の切なる時にい
ふなげきの辭なり

又女返し

行水に數かくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけ
り

こは古今集に戀に入たるをこ、に用ゐたり萬葉に「水
のうへに數かく如き我いのち妹にあはんとうけひつる
かもてふより出たりこれ涅槃經に是^三身^三無^三常^三念^三々^三不^三
住^三猶^三山^三光^三暴^三水^三幻^三炎^三亦^三如^三畫^三水^三隨^三畫^三隨^三合^三て^三ふ^三以^三
てよめり

又男

ゆく水と過る齡と散花といつれまててふ言を聞らむ【新
せん萬えうに「散花のまててふことをまらませば春は行
ともこひさらましをこきんに「まててふにちらでし花の
とまらば何をさくらにおもひまらまし】

此又男てふより歌かけて古本になしよりて思ふにこの
うたは右の三首をあけて評せるのみにてむかふ人の事
をも我こ、ろをもいへる所見えすおそらくは後の人の
書加へしにもはべらん或人は待てふ事を聞ず人の心も
さこそあるをまひて猶おもふ事のはかなきといふ意と
いへど末の詞はたゞもとの三首をとくのみにこそあれ
とかくに是はいぶかし【ある説にこ、にかなふよしを
とかねば益なし】

化くらべ互にまけるをこ女忍びありきせし事なるべ
し

互に人をあだ心なりといへるをもてあだくらべとは記
者のいへるなり【あだてふ言は既にいへることく他の
義なり然るに中頃より轉じてはかなき事にも云につけ
てかく他の字を用ゐたるは俗になれるものなり】さて
かくはいひつ、も猶かよふ中なるをまらせて書たりか
つ此條は古歌どもを採あつめて贈答を作りしを却てこ
の詞をかへしがをかしきなり

昔をとこ人の家の前裁に菊うゑけるを見て
古今集に人のせんざいに菊にむすびつけてうゑける歌
とあり是を少しかへたれど猶ことなる意もなし

遷植は秋なき時やさかぎ覽花こそちらめ根さへかれめや
一度こ、にうつし裁ては世に秋のござらん時はまらさ
秋のこぬよしなれば年ごとに花ちり枝は枯るとも根
ごめには失じ物故萬代に絶せじとなり萬葉に「わぎも
こが宿の橘いとちかく植てしからならずばやまじ此
意をとりて巧みをそへ業平朝臣はよまれしにや(此こ
ころたゞ萬えうにもとづきたるなり)○うつし植ばと
はいにしへは草木を花のさかりに外より引植る事多け
ればこれも今花の時にうゑるならん六帖に兼輔卿「け
ふひきて雲るにうつす菊の花あまつ星とやあすよりは
見ん源氏手習に「うつし裁ておもひみだれぬをみなへ
し浮世をそむく草のいほりにともよめりさて今本にう
へしうへばとあれどこはうつしうゑばをあやまれる事
古本に遷植者と書業平家集にもうつしうゑばとある
にて知べし(古今の今本にうへしうへばと有もつをへ
に誤り植のかなはうゑなるをもうへとあやまりなどせ
し物なりさて其うへしうへばとあやまりたるを見てあ
る人は植し上はの意なりなどいへれど皆例をもいにし
への假字をまかうかへぬわたくし事なればいふにたら
ず【業平家集とて今あるは後にとりあつめて書たる物

とみゆれどそのとり書る人うつしうゑばとあるを見てかきたるなればいよ、さだかなり 植のかなはうゑなり古書皆老かり後世うへと書はあやまりなり上は字倍なりまどふ事なかれ】○花こそちらめを菊はまばみかれて散物ならすなど論ふはわろし萬葉に詠花とて「見わたせば向野邊のなでしこの落まくをしも雨なふりこそ後撰集に(夏)「色といへばこきもうすきもたのまれずやまとなでしこちる世なきやは此なでしこも散みだれざる物なり離騷に朝飲木蘭之露夕餐秋菊之落英」など云花といへば皆散といふぞことせばからぬいにしへの心なる(雅には委しく云と大むねにおもひわたすべき事も有を俗情にて委しくいふは皆つたなきなり)むかし男有けり人のもとより粧燕尾をおこせたりけるかへりことに

かざりちまきをかく書たるは粧とは五色の糸して轉し巻をいふならん且燕尾とは蔣の葉してつ、めるはさるかたちなれば也○拾遺集に五月五日ちひさきかざりちまきを山すげのこに入て爲まの朝臣のむすめにこ、ろざすとて(春宮大夫爲綱母)「こ、ろざし深きみぎはに刺こもはちとせのさ月いつか忘れん 續齊諧記云云

原以五月五日投汨羅而死楚人哀之每於此日以筒貯米投水祭之漢建武中長沙區回白日忽見一人自稱三閭大夫謂回曰聞君常被祭甚善但常年所遺竝爲蛟龍所竊今若有惠可以練樹葉塞上以五色絲縛之此物蛟龍所憚回依其言世人五月五日作糉並帶五色絲及練葉皆汨羅遺風也
あやめかり君は沼にぞまとひける我は野に出てかるぞわびしき」といひて雉をやりける
そこには糉をたまはん料に沼にまでひてあやめを尋め我は雉子をまゐらせんとて野に狩したりと君が勢を謝し我勢をも擧るなり古人は心なほくてみづからのらうをもことごとくしく神にも君にも誰にもいへり○或説に菅蒲にて糉せし事はなけれどけふはあやめを賞する日なればかくいへりといへれど猶おぼつかなしまづ右の拾遺に深き汀に蔣とよみ元ざね集にも三の宮に小ちまき奉るとて「さつき待ほどに澤水まさりつ、よどの真こも、おいにけるかなとあればいにしへも眞蔣もてつ、みし事知べし今遠江わたりにても必蔣にてせり又山城越後などにては蔣葉してつ、めり越後にては

能につ、みて茅の如き草して上をゆへりさてちまきてふ名は若茅して巻つ、む故にいふ歟【又土佐の國にては今も専ら茅もてつ、む事世にこもにてつ、むが如しと聞】さらばいと古へは茅にてし又蔣にても能にてもさま／＼なるをおもふにあやめにてもつ、みけんかし樂にしもあればなり

むかしをとこ有けりあひがたかりける女にあひて物がたりなどするあひだに鳥の鳴ければ
逢がたきにあひたるは歌に切なる心をそふる詞なり
いかでかは鳥の鳴らん人しらすおもふこ、ろはまだよぶかきに

いとめづらしくあひていまだ夜更すとおもひをるほどに鳥の鳴たらんはいかでかくは鳴ぞとまで思ふべきなり○いかでかくは鳥の鳴らんとおもへるは古意なり人玄れすおもふ心はと理り盡せしは少し後の歌のさまなり【歌に理りを盡さすとぞにはあらず其ことわりは理りとして時に不意に思ふ心をよむ時はことわりの上をよむにいとかなげなれどめぐらしてみれば理りは有なりわざとことわるとおのづから理有とのたがひにして後世わざとことわるとはいやしげにこそ侍れ此

歌をいと／＼よろしと云説侍り切なる心なくはあらねどかの理りつくせしは古歌に侍らす業平朝臣のはいと異なり記者の歌とみゆいにしへは月やあらぬ春や昔の云々夏の夜はまだよひながら明ぬるを云々まだきになきてせなをやりつるなどやうに其まだきなりとおもふま、にこそよみ侍れ此記者の比にはかくことわりに過ゆくめり○遊仙窟に始知難逢難見可貴可重可恰病鶴半夜驚人薄媚狂鷄三更唱曉はし書よりのさまをおもふに此句々によりて作れる條ならん

むかし男つれなかりけるをんなにいひやりける
行やらぬ夢路を尋るたもにはあまつ虚有露やおくらん
【此歌後撰に題不知よみ人しらすとて入たりされど古今よりみれば後の歌なり後撰の前にもむつかしくよめる人はたま／＼有しならん 古本に尋ると書しにてことわり有を一本に夢路をたのむと有はいかにぞや又一本に空なきと有もわろし空有と古本に書しをや】
こは古今集に「夕されば雲の旗手に物ぞおもふ天つ虚なる人を戀とて「夢路にも露やおくらんよもすがらかよへる袖のひちてかはかぬ」もろこしも夢に見しかば近かりきおもはぬ中ぞはるけかりける思ひやる境はる

かに成やするまどふ夢路にあふ人のなき是等の意詞も
てかくはよめるなるべしすべての心は相想へば夢の玉
しひも行あふといへるに我はおもはぬ人を戀つゝ見る
夢なれば夜すがら其人のもとへ行とは見れどえゆきと
どかださめたる後に袂の涙にぬれたるをみて行方も知
ぬ夢路をたどり行袖にはそこはかともまらぬ空の露の
おくならんとよめるなり

昔をとお有けりおもひかけたる人のえまぢうなりての
代に

おもはずはありもすらめどことのはの折ふしごといたの
まる、かな

こはかくなりて後は其人は思ひかけず有にやまらねど
はやくいひてしものあれば又時としておもひたのまる
るとなりこは端の詞につきていふなれどすこしおだや
かならぬこ、ちすめり然はこれも古歌の有にはしの詞
を加へたるにやそのもとはたゝあふとはなしにことば
のみよき人のうへをよみたるならん
むかしをとおありけり寝宿思ひあまりて

今本にふしておもひおきて思ひくゝあまりてと有もさ
る事なりされどうたに暮れば露のといひてたゞ夜の心

をいへば古本のかたまかるべし

我袖は草のいほりにあらねどもくるれば露のやどりとぞ
なる

夜ごとに涙のふかきをふかくいひ入たるなり端とあは
せてことの心はあきらけし

昔ひとしれぬおもひするをとおつれなき人のもとへ
古本にかく有今本に昔男人まらぬ物おもひけり云々と

有は男てふ詞のあり所此ことばにてはわろし又さまざ
ま亂れたる本あれどいふにたらず

戀わびぬ【わびとはおもひうみはてたるをいふ】蟹のか
る藻にやどるてふ我乍身をもくだきつるかな

こはこきん集に（題しらす典侍藤原直子朝臣とあり）
あまのかる藻にすむ虫の我からとねをこそなかめ世を
ばうらみじ【人はうらみじといはで世をばといへる古
歌の常にてゆるやかにてよし】てふを少しかへて端を
も作たり古今集にては人のたえたる後に我身をかへり
見ていへる篇にてあはれふかくことわりもあきらかに
まらべいとよろしきをこゝにてはまづ戀わびぬとて年
月に戀るかひなきを倦じたるをいひひきて今にいたりて
思ふにこはかひもなくみづから身をくだきても有つる

よと且悔ひかつらみたる心にて其人にいひやる歌
とせり本の歌とは同じ目に云べくもあらずいやく成
ぬこきん集に「此上に身をうしとおもふに消ぬものな
ればかくてもへぬる世にこそ有けれ「此比にあひみぬ
もうきも我身のから衣おもひしらすもとくる紐かな此
外にも同意なる多し拾遺集にも古今の歌をとりてわれ
からをよみたるも二百あれどそはつと劣たり」○われ
からといふ虫外にはいはねば知がたし後世人の説に和
布海苔などにつきたる虫の小蝦の如き物といひ又近き
比の物産者流に小虫の飼をかきてそれなりといへども
所據もなく皆強ごとなり

昔茶而好色なる男長岡といふ所に家つくりてをりけり
茶而を一にはよしづきて一には心やつきて今本にはこ

ころづきてとあり此中に心やつきては語をなさず心づ
きても色ごのみてふ語につゞくべき故なく侍ればとら
すよしづきてにまたがへり【よしは由なり後の物語に
故よし有てふは故實山縁にて事をなすを云さてそれを
轉じてかろき事にもいふなり つきては何めき何たち
何つみなど云に同じきそへ詞なり某本語のみにてはこ
とくしたればさる助辭をそへて連續をなしゆるめて味

ひをそふる此國の語の常なり 或説に好色に心つくし
ててふ事と云は強たる説なり古語はつゞきたる詞とす
べての意によりておもひ得る事なるを心づきて色好み
なるてふ事有べきかは【いかにぞなれば後の物がたり
ぶみによしはみててふは山縁ありげに物をなすをいふ
今のもさるよしめきたる事は榮耀なる方による故に榮
の字を用ひしならん此男世にわびてかゝる里住するに
あらず此條は榮ゆるあまりにすぎたる家居して在をい
はんとてまづおける詞と見えたればなり猶次下の嬪女
の好色なる條にむかへ見るべし（）長岡は山城の國乙訓
郡に在て初の條にいひし如し下に業平朝臣の母親王の
おはせし事もあれば是も此朝臣を揆したる條には侍
り

そこのとなりなりける宮腹に事もなき女どもの
こはかの伊豆内親王のみならず桓武天皇の皇女などの

其比こゝに住せたまふさまなり宮腹とは後又皇女の腹
に生れたる御子をいふさてさる宮の御子などに仕ふる
よろしき女等をこゝにいへり（源氏に宮はらの中將と
は葵上の同胞の兄にて皇女腹にて枕さうしに女らん宮
はらの屋とあるも后腹の皇女又は皇女のうみたまひた

るか住たまふ家をいふ宮たちの事とこゝろ得るは俗なり
【祭花物がたりうら／＼の巻によるづの殿ばら宮
ばらさるべき用意せさせ給ふ物のかすにもあらぬさと
人さへこれもみや腹はもとより殿ばらは大臣の室の腹
なるきんだち姫君たちを専らはいふを後には殿原とは
男たちといふ事の様におもひなれるは俗の心なり】
○事もなきとは萬葉に「大きみの御笠にぬへる有馬菅
ありつゝみれと事なき我妹うつほもの語にこゝに物せ
らるゝ中に事なきむすめ云々又かたのいと事もなし
などいひて難なくよろしきを云

鄙なりければ田かり爲とてこのをよを見て忌作之
すきもの、所行かなとてむれて入來れば此男逃ておくに
かくれけり

ゐなかといひ田かりせんといひたるは所の状をも家居
のさまをもまらするなり田刈せんと云は此女ども事も
なき云々といひしからはさるわざすべくもあらず賤
どもの刈を見に出たれと下に穂ひろはんとといへるを
むかへて思ふに其女どものさわめきて田かりせんなど
そら言にいへるさまに書たるなるべし【古本の田獵は
借字にて期なるべし次に假てふ事を繼と書たりさて

今本には田からんとてあれどさらば田將蒔と書べきを
田獵爲とあるからは田かりせんとよめりもし又將の字
の落たるかさらば田からんすととよむべし】さて女
ども田邊見るついでに此男の家に見つけて其を
こ見むとおもふより家居をほめ興するをことばにて打
むれて入なり○すきもの、まわざとはおなじ垣ほも洒
麗ておも白く作れるをいふ下に「あれにけりあはれい
く世の宿ならんなど云は男のかくれたるをいふはさる
事ながらこゝにむかへみるにかの遍昭僧正の家に秋の
野つくりけんやうにまなしたるを思はする文なりけり

【遍昭の歌「里はあれてあはれいく世の宿なれや庭も
さがきも秋の野らなる】○古本雲集はむれてとよむべ
し今本にあつまりてとあれどまづ一所にあつまりてさ
て門に入來る意ならばさもいふべきをこゝはふと用意
なき女どものみな入たるさまなれば群てとこそいはめ
荒にけりあはれ幾代の屋門成哉將極人のおとづれもせ
ぬ

こは古今集にわび人の住居せる宿のさまよめる歌ども
の中に入たるを取用たり【こきんにてはもとすみし
人のたえておとづれもせで宿のあれたるさまなり】さ

てこゝには此住むの里びてすきたるさまなるにいまあ
るじのかくれたるをいひこめたる歌としたるいとをか
し○屋門成哉と古本に書たるは萬葉の頃の詞と同じく
此頃までは宿なるやとよめるを知べし古今集の今の本
には宿なれやとあれど後の人の書かへたるならん
といひて此宮に雲集來居而ありければこのをとこ
津生であれたる宿のうれたきはかりにも醜女の出入なり
けり

女の歌をうけて寔に荒たる宿なりさて如是荒たる宿の
うればしきは假初にも鬼どもの所えてまゐれるはと彼
女等の群きたるをたとへて悪く戯れていへりこは記者
のよめるなり○うれたきは古事記に「八千矛神御う
た」うれたくも啼なる鳥の云々萬えうに慨哉まこほと
ときすなどあり○をにとは童どもがおそるゝばけ物て
ふごとき物をいへり古本に醜女と書しは神代紀に黄泉

醜女と有によりて彼女どもを罵る意を得て書り○すだ
く萬葉に多集の二字を訓たり古本に出入と書たるも義
を得て書るなるべし（或説に拾遺集平のかねもりか歌
に「みちのくのあだちが原の黒塚にをにこもれりとい
ふはまことかとよめるは彼國名取黒塚かといふ所に

重之が妹あまた有と聞てよめりをにとは女は外面似昔
薩内心如羅利てふ意なりといへるはいかにぞや羅利の
ごとくとて女をすべてをにといはゞ重之の妹を戀る意
となるべきやこはたゞ黒づかに鬼のこもりし物がたり
の有けんをたとへて女のあまた此人のもとにこもりて
あるよしを聞てゆかしくおぼゆるを云にて今とは意異
なり

となんいひ出したりける（今本にはいひの詞おちたり）
此女ども穂ひろはんといひければ
男のかくれてかくいひ出せしに女等はしたなくて穂ひ
ろはんを詞にて出ゆくさまなりかつ穂拾はんは上の詞
の始終なり【或説にとなん出したりけるとのみある本
を見て女をおし出す事といふは笑ふにたへず】
うちわびて落穂ひろふときかませば我も田頭にゆかまし
ものを

寔に世にわびておち穂ひろはんと聞かば我も共に出で
たすけひろひなん物をとなり先に逃かくれたるをおも
ひたがひたりといふが如くいひて裏には猶女どもものう
きたる心をにくむなり

伊勢物語古意卷四

むかしをとおありけりいかおもひけんひんがし山にす
まんとおもひてよめる

今本に上に京をいか云々と有はさも侍るべし下にお
もひ入てとあるはよろしからず

住わびぬ今はかざりの山ざとに身をかくすべき宿もとめ
てん

こは後撰集によの中を思ひうじて侍りける比(業平朝
臣)住わびぬいまはかざりと山ざとにつま木こるべき
宿もとめてんと有をとりて作れり

かくて物いたくやみて去に入たりければおもてに水そ、
ぎなどして生田て

水そ、ぐ事法花 經信 解 品云于時窮子(中畧) 絶
踏地父 遙見之語 使言以冷水 澆而令得醒 悟
我うへに露ぞおくなる天の川とわたる舟のかいのしづく
か

此歌本は萬葉に「此夕ふりくる雨はひと里の早榜舟の
かいの散るかもと有をとりて讀るを古今集には入たり
さて古今にては此あたり恩を賜れる時よろこび申たぐ

は見えざるそうべなりける 大河のかいの幸かよまめ
るは半死半生のほどに思さまなりさてこ、に氣出と昔
るは文の前後せるに似たれとかへりておもしろしか、
る味はひよくみぬ人此詞は用なしとおもひて去たるな
るべし今本にはなし」

となんいひて氣出たりける
上に生田てと云は死入たるが生たりと云のみさてまだ
正しくはならで夢のごとくして此歌はよみ其後まさし
く氣出たりといはん料には生こ、には氣と書るな
るべし古本に字をおく事さる所多し

むかしをとおありけり宮づかへいそがはしく心も不被儼
ける間にかのいへとうじまめに思はんといふ人につきて
他國へ往けり【今本間の字おちたり○又まめならざりけ
るほどのいへとうしとあるはわろし○儼は恭敬の意なる
を轉じて用わたるとみゆれば心もねもころならざりけれ
ばとよみたりされど下の儼に實用にてといへる條にては
いや、かよむべくおぼゆ今本は此句を心もまめならざ
りけるとよみ下にもまめに實用にてとあれどまめと去ち
やうとはおなじ言なれば去かは有べからず下にそのこと
わりは委しくいへり】

ひの歌なれば惠みの意にとりなしたるをこの文には死
入たるとき面に水そ、びるを病者の心には世のつね
の露にはあらし天の河門をわたる船の權よりある露な
らんと崇みおぼえたる事とせり○門渡るは河門をわた
るをこ、にはいふ海門水門など云門におなじ海又川に
ても其兩方に山崎など在于て門の如き所をいへり【後世
とわたるとは渡を音と訓とに云と思ふは甚しき俗解な
り】○加伊は萬葉に「おきつかいいたくなはねを邊つか
いたくなはねをとよめるは釋名に在傍撥水曰權
と有にあたりこれ今の加伊てふ物におなじく水をか
きて船をやる故の名なりけりさて萬葉にかちてふ語も
あれど今いふかちにあらずいまの櫓てふ物にて加伊も
同じきなり【今は櫓は末と本とを木にて作るなりか
いは一本にてつくるをいへど其形同じきをも思ふに
昔は共に一本にてつくれるのみありてそれをかいと
かちとも云しとみえたりされど神功紀の新羅王のちか
言に不乾船櫓而春秋獻馬梳」と有櫓をかちとよむ
は新羅の語なれば證と去がたし祈年祭祝詞に青海原爾
棹櫓不干と有は少し後に書きしなれば紀の語よりか
かれしならん然ば萬葉の中にも古歌には櫓のことばく

是は奉公に勤がはしく家に在事も少くもとより妻をね
もごろにもえおもはざりしかばかくなめげにしてあら
んよりは我こそよくて相住んといふ人に去たがひて任
の國へ行けるなり
このをとこ宇佐使にていきけるにある國の祇承の官人の
妻にてなんあるとき、て女あるじに酒杯とらせよさらす
ばのまじといひければ盃とりて出たりけるにさかな、り
ける櫓をとりて【今本には出したたりけるとあれどさらば
上にさかづきとらせてと有べきなり古本にた、盃とりて
とのみ有からは出でたりけるとよまでは語意とほらす
在五中將の物がたりとはすれど猶必しも其人ならぬさま
に書たる事すでにいふがごとし】
宇佐の使には和氣氏のたつ事なるを此男の行たるとあ
るいといふかしきやうにいへる説はれいこの此文の様を
こ、ろえぬ故なりかくさだまれる事をも書たがへたる
にて物がたりとは云なり○御使を祇承するは國の守を
はじめて郡司などまでに及ぶべし官人といへるはそれ
が中に郡司或は驛長をさしてそれらが家に宿れるなら
ん任にてある官人の宿は勅使やとすほどの屋にはあら
じかし【萬えうにかつら木の王のやどりたまへる所へ

前のうねめの出たるは采女は郡領以上の女姉妹姪などを賣る例なるをおもふに此やどりの女あるじも郡司の妻などならんかし勅使をやどすべきは郡司の家なるべく右のかつら城王のさまをおもひ合せておほゆるなり】○さかな、りける云々は酒のむあはせ物をさかなと云は酒魚の意なるを後は何物をもさる料にするをもさかなと云ならん○橋は 續日本紀に葛城王の申し文に縣犬養橋宿禰に橋の姓をたまふ時賜杯之橋、勅曰橋者菓子之長、上人所好云々かく人の好める物なれば酒料とせしならん

さ月まつ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

こはこきん集に四月の郭公と五月の郭公との間に入られて何となき昔人の香をおもひ得たる歌なるを是には右の詞をまうけて其さかなにせし橋の香につきて故の妻をそへたるいと工みに作れるものなり

といひけるにぞおもひ出て尼になりて山に入にける此御使もとの夫ならんとはおもひもよらざりけるにかくよみたるを聞いてふとおどろきはちて尼になれるとなり○右のうた古今集にては昔の人の袖の香におもひあ

はせんは何の香にてもある事なるを時につけて橋の香をよめるのみなり萬葉に「詠花」風に散花橋を袖にうけて君おはせりとおもひつるかもこれも君が袖にまがひたる例には侍れど又梅が、をも人香にまがひたる歌多きがごとし古事由縁あるやうにいへるは例の附會なり○五月待とはかならず五月に花さく物故に云のみさつきまつ山ほと、ぎすといふが如しさて古今集にては花の事なれどこ、には子の香にとりかへたりさるときはさつき待てふ詞は少しことわり遠くなれ、どさばかりの事は此文にて常ありとりかへしにはまたくはえかなふまじきなり

昔をとこつくしまでいきたりけるにこれは色このむといふ軼者【軼は借字なり】とすだれのうちなる人のいひけるを聞て

前と同じ度なるべし

そめ川をわたらん人のいかでかは色に出てふ事のなからん

此筑紫の國に來て染川をわたたらんにいかで色に出ざる事を得んやといひてこは所がらなめりと申々に其人をうちたる意さへ有べし○此歌は拾遺集に題をらす

業平朝臣とありこの集はすべておぼつかなき事多ければ朝臣の歌てふ事はあまなほねど此物語にはさるふるき歌有によりて一條を作れるなるべし【業平つくしなどへまからば史など又さらぬ文にも少しはみゆべきを此作物語と拾遺集にのみかく有はとるべからず東下りの事は史にはみえねど古今集にしもあるからはそをばとる事なり後撰集に「わたりてはあだになりてふそめ河の心づくしになりもこそすれとよめるは右の古歌有けるをとりてよめるにやはた筑紫に此河ある事は右の歌どもにてまらる【大和物がたりにも染川の歌あれど又の後の物なればこ、に不引】

女返し

名にしおはゝあだにぞあるべきたはれ島浪のぬれ衣さるといふなり

たはれ島てふ名におふからはもとよりあだにぞ有べきとなり然るをさるたはれてふ名は偽りの名を負たる島ぞといふなりとよみて是を右のこたへとせる意はそこの色好むてふはまことならんを此染川わたりてより色に出づらんとたまふはこの島のあだなる事はいつはりならじをそは波のぬれぎぬなめりといひなすがごと

きぞとなり○こは後撰集に「よみ人しらす」名にしおはゝあだにぞおもふたはれ島波のぬれぎぬいく代きつらんと有をとれり右二首ともにことなる歌なるをこ、に詞を書て贈答とせしはことに巧みに出きたる條なり【後撰に朝綱朝臣「まめなれどあだ名は立ぬたはれしまよる白波をぬれ衣にしてともよみたりそれらをもまじへて作れる物とみゆ此文の例にて古歌とて引たるも詞をかへて其條に合せて興とせしなり下のなたの汐やきいとまなみなどいひかへて其所のこといへるたぐひなり】○ぬれ衣とはいひつはりを云【いつはり云をぬれぎぬと云はふるき世のことわざの侍りしかいまだ考へず】波の濡きぬとは波は白絹にみゆる物故にはたぬることをも豫て云ならん貫之「春くれればさくてふ事をぬれぎぬに着するばかりの花にぞありけるとよめるはぬれ衣をいつはりてふ事として何のよせもなくていへり

むかし年来おとづれざりける女心がしくやあらざりけんはかなき人の言につきて他の國なりける人に仕はれけるほどに本見し人の前にいできて物などくはせける夜さり此有つる人たまへとあるじにいひければおこせたりけ

る男われをばえらすやとて
 年來なるまで男の音信せで有ける女あり【男のおとづれせざる女てふ意なるを男を略せしなり其よしは下の文にて去らる、を或説に女の方よりおとづれせざる事といへるは誤なりすていづこにも男の方よりこそ音づれはする事をおとづれを男の待事はなし又こ、のうたは男のおとろへたるを自らよめると云説もひが言なり此歌いかにいひかすむるともまかいひて理りあらんや次の文を見よかしすて此或説は此文にて教へをとかんとおもひていふ故に文の意を傍にして私言をいふめりか、る文にてもまひて教へをいはんとはあらば源氏の末つむ花のごとくすまめられずとも年へてみさをに侍ばつひのよるせもあるべきに此女のはかなさよなどいひてんかし】其女心賢くばおもひ過して時を待べき物をよからぬ人の言につきて國人のつかはしめとなりたり其昔の男事有て其國にいたりて宿れる家にしもあれば女は思ひもよらず食物持て出たるなり其夜かの女を來させて男故のわれをばえらすやとてよみたり

な
 昔ありし艶色もいづこにかうせにけんたゞ櫻の花をこきおろして枝のかざり立らんをみるがごとく疲れたりといふなりこはひとへに愛むにはあはれとおもふ心をもかねたるならん○こけるが如もを今本にはこけるからとも書あやまれるならん幹といはでも枝の意は有ぞかし（古人のかなはなだらかにてごとくと有つらんをからとよみあやまれるならんさる類多し）
 といふをいとはづかしとおもひて報もせでゐたるをなどいらへはせぬといへば涙のこぼる、にめも見えす物もいはれずといふ又をとこ（又男の詞古本になし例の私に去たるならん）
 かくおとろへておぼえずもとの夫に見えぬる女のかなしさ見るが如く書たり
 これや此我にあふみをのがれつ、年月ふれとまさりがほよき事あらんとて我に逢事をのがれて年ふれどかく勝りたるけしきもなきはと是は恥かしむるいひなしなり【なきを一本になみと書はきをみにあやまれる物をそれにつきて今本にはまさりかはなみとせるはわろしい

かにぞなればなみといふはなくしててふ言なりさては此歌にかなひ侍らすなきと有を正しとする事もとよりなり此うたは例の或説にはいと強たる説様あり皆いふにも足すすてこの條をもなり半の事とおもふ故にさるまひたるたすけ言をもいふなり此二首いかで朝臣の歌ならんまづ歌をよく見さだめて後こそともかくもいはめたゞ記者の作れるにこそ】○これや此てふ語は物二つに事のかよふ時なり既につもれば人の老となる物てふ歌にいへるが如しこ、は我に逢身をのがる、と近江の國とをかねたれば依てそれえらせんとて古本に近江をと書たり且近江をのがれといへば此夫近江に在しを女は他國へ通れたると聞ゆ此文には片田舎なる男をんなの事をも多く書しなり
 といひて衣ぬぎてとらせれどすて、往にけりいづちいぬらんともえらす
 さすがに哀とおもへばきぬ、ぎてかづけたれどはぢてそれもとらで行方もえらす去けるなり前の女は厄に成たりといひこ、は事をかへたり
 むかし世營婦女
 こ、を今本に世ご、ろづけると有を古本に世營と書る

を合せみるに年たけて世の中の事功づきたる女てふ意歟又弱きをんなの男にあへるを世を去りたると云を打かへして老女にして好ましき心の出来たるをも世心づけるも昔はいひけんかし【前に榮面をよしづきてとよみしは似たるやうにて心ことなり 或説に嫁したる女なりとのみいへるはいかにぞやかく老て子あまた有女を今さら嫁したるなどいひいづべうもあらず】○婦女を和名抄に於無など有は老女の略言なりたゞをんなと云は麻績女の意故に昔はをみなと書て音使にてをんなと唱ふさればおんなとをんなと假字にて事をわかちたり後世はみなあやまれり【祖父母をおほおほばと云を略してはおちおばと書り大父大母の意なればなり伯叔父母をばをちをばといふは小父小母の意なり仍て是はをのかなを書り假字はかくことわり有物ぞ】
 いかで情將在をここに會見てしがなと思へと云出ん【いひいでんを略してい、でんと昔はいひしならん古本に五十將出と書たればなり五十をば萬葉などに必いの一言にのみもちゐたり】言の便りなきに壱三人をよびてまことならぬ夢がたりをす（今本の詞たがへる事多しみだれたる本のま、をうつし傳へしなり）

情あらん男とは在五中將をふくめていへり
二人の子はなさけなくいらへてやみぬ三郎なりける子な
ん好御男ぞ出こんとおはするにこの女けしきいとよし
夢のやうを占べおはするなり【いにしへより夢あはす
る事は崇神紀其外にもみゆ山谷詩に茶夢小俗園ともい
へり】拾遺集に「夢よりぞ戀しき人をみそめつる今はあ
はする人もあらなん

こと人はいとなさけなしいかで此在五中將にあひてしか
な【今本にあはせてしかなと有はわろし古本にたゞ會而
志哉とかきて爲會令會などもか、ぬはもとよりこ、は三
郎かかの男に逢て其事はんの意にてあひてしかなと書
しものなり後の人はかゝる所に心短かくて云かへつら
んかし】と思ふ心有て狩しありきけるみちに往而馬のく
ちをとりに是右なんおもふといひければあはれがりてい
きて寝にけり

三郎はとかくに母に従ふ心よりさりとるとてかの男の
狩しつゝ、ありく方を尋て其由いへるに嬬女の心はふさ
はしからねど子としてまかいふをかの男のあはれとお
もひて往てねしてふ意に書しならん○在五中將てふ詞
此ふみに始て書たりこ、は名高き色好みなればそれな

和名抄に(水菜部)江浦草(豆久毛)云太久萬毛と有て
今もづくといふ物とみゆげにおほどれたる髪のごとき
物なり

といひてをとこ馬に鞍おきて出たつけしきを見てうばら
からたちにかゝりて家に来てうちふせり
女いそぎて逃かへるさまを、かしく書たり女のさまの
かるくしき事おのづからみゆ且此男馬にて出立は狩
などに行きまならん

このをとこかの女のせしやうに偲て【まのぶに偲の字を
萬葉にあまた用ゐたり凡此古本には萬葉にもとつける事
多し】立てみるに

男其女の許にゆかん料ならば女のかいまる間には出
た、じや狩のために出て女の家を垣ま見せし意なら
ん

女うちなきてぬとて
さむしろに衣かたしきこよひもや戀しき人にあはでかも
ねん

こはこきん集に本はまたくあり末は記者のそへたるな
らんげにこ、にはあはれなる歌にまなしたり○狹むし
ろは延喜式に長席狹席など見えてもとは狹き庭を云を

らでもあてによろしき男をば在五中將よなど推戯れて
いふ事のあるをもて書しならんかし例は暗に此中將な
るさまをおもはせて書しをこ、は又あらはして中々に
それならぬともみゆるなり【後にもあて人をなりひら
光源氏などいひ女のかたち人を小阿楊貴妃などいひな
すがごとし】

さてのちをとここざりければをんなをとこの家にいきて
窺けるををこ入風所道見て
も、とせにひと、せたらぬつくも髪我をこふらしおもか
げにみゆ

語のま、にては九十九の女なれどかく甚しく云が戯れ
なり萬葉に百とせに老舌出てよらむともなどよめるが
如く物をつよくいふに興はあるなり源氏物がたりの源
の内侍はこ、を思ひて書しにやそれは六十に侍るよし
書たればこ、も五六十ばかりとは推はかるべきなりさ
て女のかいまみたるを男ほのかに見て面かげにみゆと
よめることせまらでおもしろし且つ、けがらは髪より
面影と句を隔て、心得る體なり【人の面影は我思ふ心
よりみる物なれば歌に人の思ふにやおもかげにみゆる
などいふは例のをさなくよめるものなり】○つくもは

かく用うる時は狭き意なくて發語の如し○衣かたしき
はまろぬすれば我衣手のかたへの下に敷る、故にいふ
萬葉におほき語なり

とよみけるを、とこあはれと思ひてその夜はねにけり世
の中の例としておもふをば思ひたもはぬをは思はぬもの
を此人は思ふをおもはぬをもそのけちめみせぬ心なん有
ける

こればかりはことよく書たり光源氏のきみの女をみす
てぬさまに書たるもこれらにやよりけん○けちめとは
荷田在滿云別目の略なりとげにも源氏物がたりに松と
竹とのけちめといへるも必わかちめならではかなはず
此古本に穴目と書たるは借字なりけり(恭のけちと云
は空闕などの意なればそれがさまにかげめの事ともい
ふべけれどなほこ、にも源氏にもかなはず)さればけ
ぢめのちは清てよむべし【ある説に結目なりと云はい
とわろしさてはいづれにも叶はず】

むかしをとこありけり女みそかにかたらふわざもせざり
ければいづこなりけんあやしきによめる
こはもといひかはせし女の宮の内などにあるが其在と
ころもいひまらせぬは且女の心をもあやしむなり

吹風に我身をなさは玉すだれひまもとめつ、入倍ものを
 意は明らかなりされど玉簾ひま求めつ、など云は宮中
 にてよろしき女なる事を思はせたるなるべし右の詞と
 てらして去かおほゆるなり【玉すだれとてたゞひま
 もとむる冠辭のみにいへるもあれど此歌は去からず
 倍の字は次にましましとよみたり今本に入べきものをと
 有もことわりはたがはず】○或説に身を風になさばや
 なりばに切なる心有といふはわろし是は風になさば入
 ましとつゞけて一首に切なる心は侍りばやのてにをは
 にはあらず萬葉に(旋頭歌)「いきの緒に我は思へど人
 めおほみ不來吹風にあらば去ばく逢べき物を又「玉
 だれの小簾のすけきに入かよひこねたらちねの母か
 とはさば風と申さん【文選曹子建七哀詩に願爲西
 南風長逝入君懷】又「妹がぬる床のあたりに岩く
 ぐる水にもかもや入てねなまし
 女かへし
 取とめぬ風にはありとも玉すだれたがゆるさばか隙もと
 ひべき
 ゆるして待させずば風もえこそとなり此かへしのさま
 のつれなさをおもふにも更に心かはれる歎又宮中にま

ありたればはかりて絶しこゝろともすべし
 むかし帝時めきつかはせたまふ女色ゆるされたる有けり
 時めきつかはせたまふとは御寵の盛なるを云今本につ
 かう給ふと有はわろし古へはつかはせとよみたる事
 仕瀬と書たるにて去るべし【後世人古書をよむにや
 やもすれば仕はせ給ふをつかうたまふよみ給ふをよ
 う給ふなどやうに云は去ひて古めかんとておしはかり
 にいへるものなりたまはりをたうび物のたまふを物の
 たうびなど云は音使なるをすべてさる事とおもひあや
 まれるにや】○色ゆるされたるは禁色とて染色と織物
 と二つなるをそれゆるされて着るを云延喜式に(彈正)
 凡諸禁色者總雖下衣不聽服用と有は色なり
 (此前後染色の禁を云條なり) 又同式に(喚左右京
 職云々)有若禁色者邪謂綾羅錦綾之類とある
 は文織物なりされば此二つをゆるさるゝを去かいふ事
 わけられし【後世或裝束の抄に禁色とは深紅深紫の事
 とのみ有はわろし深紅深紫の外にも青色きくちん赤色
 白つるばみは上の御料の色なればゆるしなくては着
 ず凡禁色禁物は用うるに大中の儀式により又其人に
 随ひ父祖の際にもよる品々なり式などを見てあきらむ

べし後世書る物にてたがふ事多し
 大みやす所にて任ける従父兄弟なりける(此所句なり)殿
 上に侍らひける在原なりける男の未いとわか、りけるを
 此女相たりたりけり【今本にいとこなりけりと有 古本
 に稚と書たるはまたきびはの時参り馴たるがおよすけた
 れどまゐる意なるべし源氏の君のわらはにはおはせしほど
 に藤つぼの御籬の内にも入たまへるをおとなに成たまひ
 てはゆるされざりしなどおもひ合すべきかた侍り 清和
 の佛名を御心に入てとなへさせ給ふ比になり平のよはひ
 をさなからんやは實録を見て戲なる事を知べきなり】
 此大御息所はまづは清和の御母后(明子)にていとこ
 は高子(後に二條后)の御事と見ゆ在原なりける男は
 業平朝臣をおもはせたりされど業平高子を相知たるは
 文徳の御時なり清和の高子を寵せたまふ比は此朝臣
 四十餘の歳にて官位共に昇れる事史に見えたらば此時
 の事にあらずされば皆書まざらせしを知べし
 をとこ女のかたゆるされたりければ女のある所に來てむ
 かひをりければ女痛醜なり身も喪びなんかくなせそとい
 ひければ
 此男まだいと弱ければ女の方【女かたとよむ事後の物

がたりにもあれどこゝは古本に女之方と有からはいに
 しへは女のかたとよみし事去るべし】ゆるされてまゐ
 るなるべし○かたはなりとは鳥の片羽を本としていへ
 る事と見えてうづつ物語に鳥の片羽もていへる歌あま
 た有さて片羽なるを人の身の具せぬにたとへ又こゝに
 は見苦しく聞ぐるしくせるを轉じたる用るがま故に古
 本に醜とは書り【後人は隻輪車の事と思ひ推はかれど
 片輪の由はこゝの文には見えすして鳥の片羽の心によ
 める歌侍れば今もかたはと書べしはをわのごとくとな
 ふるは契沖てふ人の見出ていひたるを用ゆ】源氏物が
 たりにかの人の御爲にもいとかたはなり枕のさうしに
 見ぐるしき物色くろき人のひとへのすゞし着たるいと
 見ぐるしかしもしひとへも透たれどそれはいとかた
 はにも見えずこれらのたぐひなり
 思ふには去のぶることぞまけにけるあふにしかへばさも
 あらばあれ
 思ふ心のあまりにはえ忍びあへずしてかくおはする所
 に來るを會にしかへば身のほろびんはよしやと前に身
 もほろびなんといへるにこたへたりさて此歌は古今集
 に「おもふには忍ぶる事をまけにける色には出じとお

もひし物をとふ本を取「命やは何ぞは露のあだ物をあふにしかへばをしからなくてふ末を少しかへて用ゐて一首とせり例の事なり【此二首以て作れるは記者の常のわざなるをいかで後の集になりひらの歌として入られけん歌のさまも作り事なれば本す多少と、のはぬものを】

といひてさうしに居たまへればれいの此御曹司には他の見んをもちあらで昇りぬければこの女おもひわびて里へゆくさればなんよきこと、ていさかよひければみな人聞てわらひけり

此女出て居る時すらそこに來り侍る男なれば女の曹司に在時はいよ、人の見ん事をもちあらで曹司にのぼり來てをるなり【右に女之方といへるは臺盤所は女房の侍なればそこにゆるされて此男まゐるなるべしこ、に曹司に居といへるに對へてあらる 禁秘抄に臺盤所三間北 間朝餉方敷 黃 端 盤 東 倚 千 其 南 女 房 簡 入 袋 とも有】此所にといひてとは右の歌をいふそれよりつゞきたる詞なれば昇居ければとは男の事を云なり今本の注に曹司に居給ふを下たまふと意得たるはわろし下るる意ならば古本に居と書んや【或説は上のかくせそ

等事、助一人允一人大 厨一人少 厨一人殿部四十人使 部二十人直 丁二人 駈 使 丁八十人などみえて人数多し又殿 司 後宮職員令云 尚 殿 一人 掌 供 奉 輿 織 袴 沐 燈 油 薪 炭 之 事 典 殿 二人 尚 殿 女 婦 六 人

こは人数いと少し(只後宮の供奉の事のみ司とりて他に及べからず延喜式是に同じ)ある説に此後宮の殿司の見たるはとおほつかなしいかにぞなれば右の女官の殿司は人数少ければ只後宮の内のみにて殿上人などの早朝に侍る殿上の間などに及ぶべからず(但江次第抄元 日宴 會條云 次 上 南 殿 格 子 (掃部女婦供奉) 酒 帝 殿 上 (主殿仕女供奉かくあれは酒 帝 は か、大儀式は御前の事なるべし合式共に女官のとも司は右に云如く人少きなり仕女と云も後にはあれど古書にみえず又日中行事など云後世の物には女婦酒 帝 の 事 などもあれど此文などには後世の定は叶がたし)そのうへ里より歸り入時の事なればまづは庭上の方こそいはめ故に男の主殿づかさとせん、ぞすなほなるべきなり【殿庭とは諸殿の庭の事にてた、庭上を拂ふのみなり然を男官のとも寮より女婦を立て殿上をも司とらしむと云説はいにしへの官職の意にたがへりとのもつか

といふ詞よりつゞきてとてといふ詞は有とおもへるにや注の心たがへり居のかなはをり下のかなはおりにてまかふ事なし】○さればなん云々を或注にされば何のとよみてふてたる語とおもへるはわろし然らば何之と書べきを古本何とのみ書は皆なんの辭なる例なり女のみづからの里へ往たればまかあればなんいよ、よき事とてかよふなり【此文にとなん云けるを諸何かくなんを是何とかける類いと多し】

晨めて主殿司の見るに杳はとりて奥に抛入てぞのほりをりける

夜はかの女のさとへ行て朝まだきに内裏に歸りて常に直宿する殿上の間にのぼりあるをいふさて主殿寮の頭は毎日早朝に所部を奉て御前の庭宮掖所々を朝清めするとて侍るにそれを見るをも思はで度々如是するなり且杳は従者或はさらぬ下部など常にはとりおくべきを忍びたる事なればみづから取て猶端におかば今歸りたるをあらるべきとて奥の方へ抛入つるなり○晨は初時の上下略にて早朝を云めてとはつとづけてなど云がごとし○主殿寮は職員令云頭一人掌 供 御 輿 燈 蓋 盤 殿 扇 帷 帳 湯 沐 酒 掃 殿 庭 及 燈 燭 松 柴 炭 燈

さてふ名は同じかれど司とる事別にてこの男と女と筋ことなり】

かくかたはにしつ、有りたるに身もいたづらになりぬべければつひにほろびぬべしとて此をといいかせん我がかる心をやめたまへと神ほとけにも申けれどいやましにのみおもほえて猶わりなくこひしくのみおほえければかく人目見苦しく爲つ、有に寵おほす女の身も仕うまつる事かなはずいたづらに成ぬべし然れば男の我身終には罪なはれなんてふ意今漸おもひおこしていかでこの戀をたはる、心やめたまへといのれどもえもやまねば祓へをするなり

かななぎをんやうじをよびて戀せじといふはらへのぐしてなんはらへける隨にいとかなしき事數まさりてありしよりけにこひしくのみおもほえければ

神巫は神まつるは元よりにて雁符などをもし陰陽は卜部を豫て解除又は卜などするなり然ればいづれにもこ、は一つにて有べき事をねもごろに云んとて二つを飛たるなるべし文にはさる事多し【神巫陰陽師の下に等とか、ねば今昔物語に法師陰陽師と云がごとく神巫にてをんやうかねたるも有故にさる事ならんかとも

おもひしが猶二つあけたるは文なるべくおもひなりぬ【○祓之具太中小の祓によりて多少有其大祓へには馬鬃麻布幣帛人像などさま／＼多く出せり此度は私の事にてかろきはらへつ物なるべし】古書には祓柱とも祓具とも書てはらへつ物とよむ例なるを此古本に祓之具と有からは具は音のまゝにていふなり此文つくりし比はやう／＼に流れてさも云けんこも末の代になりて作れる一の證なり【○有しよりけには萬葉に勝異殊等の字をよみて有しよりもことにまさるをいふ戀せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけすもなりにけるかな

はらへのわざ爲るにつけて猶悲しさのまされば神はうけ給はずといへり此うた古今集に（逢ぬ人戀る篇に入てよみ入しらぬ歌なり）末を神はうけすを成にけらしもと有をなりにけるかなとかへてこゝには用ゐたり【これらはこきん集に入たる中にも古歌にてことによりしき歌なりかく有まゝにいひてしかも感情の有は少きなり萬葉に「いかにしてわする、ものぞあめつちの神をいのれと我もひましぬ」天つちの神をも吾はいのりてき戀てふ物はすべてやますけり 六帖に「つら

き人忘れなんとてはらふれば身をぐかひなく戀こそまされ】○みたらし川とはいづこにても社ちかくて祓へなどする河をいへりある物に（京極御息所の歌とて）「春日野の松し枯すばみたらしの河の流は絶じとぞおもふともあればなり○みそぎは身滌にて水もて身を洗ひ清むるをいひ祓袂は身につける穢をはらひ除くをいひて二つのわざなればその意同じければ後にはかよはしていふなり（此二つの事古事記に伊邪なきの命櫻原にて身そぎま給ふ所にみゆ後世是を御そぎと書はわろし身そぎのいひなり）といひてなん往ける

こはかのをとこ祓所の何邊より家に歸りいぬるをいへりこのみかどは御かたちよくおはしましてほとけの御名を御心にいれてあかつきには御こゑいとたふとくて申たまふを聞て此女はいたうなきけりかゝる君につかふまつらですくせつたなくかなしきこと此をとこに絆されてとなんなきける
こはおほよそ清和天皇に摸たてまつれり三代實錄に天皇風儀甚美端嚴如神性寛明仁恕温相慈順好

讀書傳、辨、思、釋、教、鷹、犬之、遊、漁、獵之、娛、未、嘗、留、意と有をもて書り○すくせは前世の果を云佛教の語なり是もいとふるき世にはいはず【いせ集に「水くきのかよふばかりをすくせにて大和物がたりに「行末のすくせもまらずなどこの比は歌にもよみたり】○被絆は男につながれてといふ意なり【釋名云絆半也物使半行不得自縦也】萬葉に「馬にこそふもたしかくも牛にこそはな細かくも云々古今集に「世のうきめ見えむ山路へ入んにはおもふ人こそほだしなりけれかゝるほどにみかどきこしめまつけてこのをとこをば流しつかはしてげり

先に終に亡びぬべしと云是なり此女をばいとこのみやす所をば退出させて殿倉にこめてまほりたまふければくらにこもりてなく前に身もいたづらに成ぬべしと云是なりさてかの五條の皇太夫人のおはする宮をも去しめて長良公の倉にこめてなやませこらしむるといふならんいまはたゞ倉にこめてと有を古本に殿倉とあり【倉はぬりこめを云ならんてふ説はさもあらん いとこのみやす所をもまかでさせて云々とのみにてはいづこ誰の倉ともなきを

殿の倉にと有にてぞ御父のかたへ歸してまほり給ふこと明らかし殿とは専ら太政大臣をいふ事ながら高子の御父長良公も後に贈官ありしかば後に書たる文故に殿とは書たるならん又物がたりなどには俗の言のまゝにたゞの大臣をも殿といへる事源氏物がたりにもありまほりは古事記にやしをりの酒萬葉に梅かえの雪にまをれて新萬にもなべて草木の芝折るればと書たればまをりのかななり然ばまほりと云ときはほをにぐるべき通音の例なりされどほををととなふるは半濁なればくるしからずほの濁をばをと、なふる例あり】○まほりければは落くば物がたりに（おちくぼの君をくらにこめてなやませよてふ所に委し）この北のかたにこめて物なくはせそまほりころしてよと父中納言おいはけて物のおぼえぬまゝにのたまへば云々次にくる、戸の扉二間あるへやの酢酒いをなごまきなくしたるへやのたゞ壘一ひら口のもとにうちまきて云々是にて意得べし木の枝などをまをりたわめるがごとくして人を懲しむるを云なり
蟹のかる藻にすむ虫の我からとねをこそなかめ世をばうらみじ（われからてふ虫は已に出ていへり）

意はあきらかにてさらになげき給ひけんとおはれにおもひやらる、なりこは古今集に(典侍直子朝臣の歌)有をこ、にかりたり女の歌にて哀なるこ、ろふかく聞ゆるをよくもこ、にとり用ゐたるかな

となきをればこのをこは他の國より夜ごとに來つ、笛をいとおもしろくふきてこゑはをかしうてうたひける

女のもし聞もぞするやと笛を吹又次にあるいたづらに行ては歸るてふ歌をうたふなりけり○他國とはいへと近流なれば夜べごとに來るなりされど流罪は其配る所の制有て私に他へ行べからぬ法なるをこは物語なれば筆にまかせたる歎又その、ちに朱雀村上などの御時と成て物の制もあらず成ぬれば其時の筆故に時に隨せて書るにも侍るべし【文徳清和の御時は猶令法行はれたれば戲にてもかくは書べからぬ事なり業平あづまへくだれるほどにて有などいふ説はいふにたらず】

如是有ければこの女はくらにこもりながらそこにそあなるとはきけどあひみるべきにもあらでなんありける六帖に「いへばえにきけばかなしき笛竹のよごるや誰と問ふ人もなし

さりともと思ふらんこそ悲しけれあるにもあらぬ身をば

ん集の今本に行ては來ぬるとあり此古本にかへると有は少しかへたるなり○萬葉に「かくしてや猶や歸らん近からぬ道のあひだをなづみまゐりて○物ゆゑにとはよめど物からといふに同じく物ながらといふ辭なり

「水尾の御時なるべし大息所は染殿皇后なり五條の掖庭とも」是は此一條のさま水尾(清和)のみかと【三代實錄に清和天皇の御骨を水尾山に納め奉りしとあり仍て水尾の帝と申なり】の高子を寵たまふ時のさまに書しかば水のをの御時なるべしといひ且其比に大夫人と聞ゆるは御母そめ殿の後【染どの、后は清和の御母后にて忠仁公の御女なり】なれば染殿皇后なりと書り然ども寔に高子のいとこと申は文徳の御母五條后【五條后は仁明の御后閑ゐんの冬嗣公の御女なり】なればいと子【二條のきさきは清和の御后にて右の五條后の御兄長良公の御むすめなれば五條后とはいとこにておはせり】といふによりて五條后といふ説も有といふ注の意なり是すべて此物がたりはわざといづれともつかぬやうに書なしたるこ、ろ得ぬもの、裏書なるを後に表へ出し書るものなり其山上にいへるを以て知る

まらずて【古本に身をばまらずと有ぞ古歌の常なるを後の集に身をまらずしてとなほして入たるを又此文をも其なほしたるによりて書るはいかにぞや】

意明らかなり是は記者の歌と見えたり○さりともとは古本の字の如く然は有と雖の略なり事出來ての上とはいへども猶いかで逢よしもがなと男の思ふらんがかなしきと女のよめるなり有にもあらぬとは我はもとの如くて在なばか、る憂め見つ、こもりあるともまらずてふなり

とおもひをり(女のおもふなり)男は女しあはねば是行と【こはすでに他國より來てうたふといへるに同じけれといと度々なれば又こ、にいふのみさるを今本に此行つつの下に人の國にありきてかくうたふと有は事重なれり傍の注を誤て本文に書しなるべし古本になきを見るべし【此文に詞かさなれりと見ゆる所々あり多くはかたへに注せしを後に書つらねたるならん】

いたづらに行てはかへる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつ、こは古今集の歌なるをよきほどの所に用ゐたり【こき

べしさて高子業平と相知たるは文徳の御時なりいかにとなれば業平は仁明の御時正六位上と聞えて文徳實錄にはかりにも見えず清和の貞觀四年に正六位下より從五位下に轉じて右近衛少將となり同五年左兵衛佐と見えてより官位いよく昇進せり然れば此文の如き事清和の御時にいたりてはあらざりける證にて文徳の御世に有し罪なりしを知べし【古今集に行平卿田村の御時津の國須磨に在けるよし有に文徳實ろくには其罪見えざるは業平のさる事有て罪せられし縁坐にて須磨へ退きて住れしを忌べき事にてすべて書ざるにや此條の次にむかし男つゝの國にくだり又世をうみわたるなどよみたるさまさるをりの事なりけん右の田村の御時事にあたりたるといふによくかなひたり次の條に有歌は後撰集にはし書有てなりひら身のうれへありてつゝの國にすむ時の事とあれば此他國よりかよひ來たるといふも思ひ合すべし委しくは次に擧ぐ】さて染殿后も貞觀六年に皇太后となりたまひ高子も同八年に女御と聞ゆ然るを大みやす所といふ事例の物がたりといひながら實を尋れば田村の御時の(文徳を申)事にて田村の御母后五條后のまだ大みやす所とまうす時の事とおもひ定

めて後この物がたりの時代をも人をも書まざらばせし
を知なり【本文の歌ども五首有が中に四首は古今集
の他人の歌をとり一首は記者の作たるとみゆるを猶
實事とおもひたる右のうら書は論にもたらぬ事ならず
や】

昔をそこありけりつの國に去る所ありて朋友貝つらねて
難波のかたに往に落を見やりて

知所とは領せる所なり昔は大かたの人にては領知て
ふ所はあらぬ制なれど物がたりなればさて有べし○只
は借字にてかきつらね打つらねなどいふが如き辭のみ
萬葉に「浦しまの子をよめる歌」かきつらねとこよに
いたり云々

なにはづをけふこそみつの浦ごとこれやこの世をうみ
わたる身【此うたにけふこそみつといひたるは初めて見
しさまなり詞に知る所有てと云によればはじめていた
ん事いかにやあらん是はた古歌を擧て詞を後に作りしか
ばたがひの出来しなり】

此海を見ては興有べきに世を倦わたる身は見る物につ
けて去かおもひよせらる、なりこは後撰集に入たる業
平朝臣の歌にて寔に意も調べも殊なるものなり【此歌

むかしをそこありけり道遙しに思ふどちかいつらねてい
づみの國へささらぎばかりにいきにけり

日本紀に道遙をあそぶとよみたるが如く是も心をやり
て遊ぶをいふなり【莊子に道遙遊の篇あり毛詩にある
も同じ】○ささらぎは二月なり此月をささらぎ月と云
は草木發月なり草木の芽をはり出す、ろなり

かふちの國いこまの山を見やればくもりみはれみ立居る
雲やますあしたよりくもりてひるはれたり雪いとまろ
木梢にふりたり

生駒山は峯をかぎりて東は大和西は河内なり其いづみ
の國へ行とて見る方は河内なればこ、に河内の國いこ
ま山といへりと國人の中せしなり【萬葉に「なには戸
をこきで、みれば神さふるいこま高ねに雲をたな引と
よみて此山いと高ければ雲のたちゐ常の事ながらけふ
は雲氣なればまかるべし】

きのふけふ雲の立まひかくろふは花のはやしをうしとな
るべし
かくえもいはずおもしろき花をば人の見んを妬みをし
みて雲の立かくしつるなりけんといへりさてこは花な
りと不意に見たるをそのま、にいへるぞ古への歌のこ

後撰に身のうれひ侍りける時つの國にまかりて住はじ
め侍りけるに業平朝臣と有是右の條にいへる高子を好
まるらせし事につきて京にはあらずきと流さる、とは
なくてつの國にこもり住しほどならん此事忌べきにて
中々に罪をば糾されざる事又類ありさて前條にはそれ
をば流しつかはしと書此條にては詞をかへてたゞ興あ
るかたに書なしたれど其もとほうれひにつきてこ、に
住をむるほど故に歌に其意はあらはれたり【且それを
こ、に擧たるは前の條により所有ならん○難波津は古
への宮津にて大津なれば御津ともいふなるべし（大と
御とは同じ事なる例あり）三の津てふ意ならぬ事は萬
葉に證どもあり然るをこの歌に三津の浦ごとといへ
れば三つの津あるにやとも云べけれどさはあらずこ、
にはたゞそこら見わたす浦々をいふなり【古事記日本
紀にも磐之姫の皇后御綱柏を弃たまふ故に御津と云と
侍るはいにしへの流言にやあらん且綱角をかよはして
いづれにも云古語の例にて御綱は三津のともよむ事な
り
これをめはれがりて人々かへりにけり
此歌をめで、人々はよまぬなり

ころなりける下に日はたがひながらよめるといへるな
ど此意にてをさなきを深き心のかぎりなりける【歌
はかくをさなく目たがひたるをそのま、によむにて深
きこ、ろのかぎりなきなりざるを後人は忘れてたとへ
ば花にあらねど花の如してふことわりをいひつくさん
とする故にすがた屈し心いやしくなり侍り凡端の詞に
其ことわりみえつればそれかうへの餘情を歌にはよむ
事なりはた此はしの詞にも花とみゆるなどいひたらば
何の味はひもなくなるべしこれらをよく見て歌とは
しの詞との間をわち去るべきなり】○詞にくもり
みはれみ立ゐる雲やますとは此頃すべて雪を催すけま
き朝よりくもりて晝はれたりとは今日はことに曇り
てつひに雪と成たる後はれたるをいふなるべしさるか
らに歌にきのふけふとよめるにもたがへる様になるべ
し○かくろふはと有はいとおぼつかかなしされど古本に
も隠呂鋪者と書たれば随ひて云時は雲のかくすはと聞
ゆ然をかくすは用の語にて雲のまかなすなりかくろふ
は體の語なれば山の雲に隠る、事と成て上に雲のとい
ひし語意をむけり依て思ふに古本の呂はををあまり
今本もそをろとまがひてかくろふに成つらん萬葉に

「三和山を去かもかくすか雲だにも心あらなくかくそふべしやとよめるが如くかくそふはと有時はかくすはてふ意にて語の意かなへり【その反すなればかくすべしと云をかくろふべしと延ていへりろふの反はるなりばかくるべしとなる故に雲に山のかくる、事となりてこ、にかなはず古人の語はか、る違ひ有事なしさるをある人は雲のかげろふてふ意といへるは上のくもりみはれみてふ詞にはよけれどかくろふといひてかげろふ意有事かつてなしもし其心ならば古本に隠と有は陰の字の誤とすべしさてはたゞにかげろふはとよまるるなりされどかげろふはとては少後の體なり凡古人は萬葉をこそ本とし侍ればかのみわ山の歌の詞より出てかくそふはとよみけんを後人は聞にくしと思ひてみだりにかくろふはとなほせしならんともおぼゆ後人のわざする事常多ければなり凡音韻をかよはせて語を釋も古例による事なり私に通はせていはゞ萬の言別なきやうに成べし】○うしとなるべしはねたみてうしと思ふ意なり或説にうしとをしと通音なりといへどうしとをしと通ふべき例なし妬む心にて愛しとよみたるこそいと宜しけれ

昔をといづみの國へいきけり住吉の郡住吉の郷住吉の濱を行にいとおもしろければ下居つ、或人住吉の濱を加へて海頭をよめといふをみな人よまんとするに或人よめり【今本におりゐつ、ゆくと有はあやまり又すみよしの濱をよめといふとのみも詞のおちたるにてことわり聞えず共に古本にあきらかなり】
 郡も郷も濱も同じ名の所を書つらねたるにて文もおもしろくそをめでたる意もおのづからこもれり○下居つ、は皆人馬よりおりゐるなり已に八橋の條にもありつ住吉はすみよしの江とよむ事なり惣て吉の字をえとよむは古人の例にて近江の口吉も古事記には日枝と有（比枝の山の社なればひえの神といふなり）凡萬葉その外の古書に皆まかりえとよみても即よき事にもなれり（又借字なるも物によりてはあり）【吉野を古事記にえしのとありされとこははやくよりよしのともいひたればさて有なんすみよしのえひえなどをすみよしひよしと云は凡延喜の比まではなかりしとみえたり】
 鴈なきて菊の花さく秋はあれど春は海邊に住の江の濱【前の條の歌は大かたの人のよめりともみえぬをよみ人のまられぬはくちをし此うたはさせせる事もなし恐らくは

記者の歌なるべし

鴈啼菊にはふなど秋も面しろけれど春の海へのけしきにはまかす我は春は海邊にこそ棲なんといふを住の江のはまとはつゞけたり住むにいひかけずば海べにてふ詞かなふべからず或説にまからずといふはいかにぞやとよみければこれにめで、人々よますなりにけり

かく書る例多し一の古本にはとよみければ皆人は是をあはれがりて云々とあり（今本にとよめりければ皆々よます云々と有は皆人とか人々とか一つにて有けんをれいの亂たる本をうつしけんかし）
 むかしをとい有けりそのをとい伊勢の國へ狩使にいきけるに

こは古今集に業平朝臣の伊勢のくに、まかりたりける時に齋宮なりける人にいとみそかにあひて又のあした人やるすべなくて思ひをりけるあひだに女のもとよりおこせたりけるとてこ、の二首有をかく詞をかへて一條とせるなり【こきんにさい宮なりける人と書るは齋宮につかふる人てふ意に書たる歟かの杉子と云女などの類にや若又齋王なれどいむべき事なればまか書まざらはせし歟知がたし必と定めて云は中々に委しから

す】さて狩づかひの事は史には使の人々をも萬の事をも委しく記されて侍れど業平朝臣をつかはされし事なし此朝臣専らさる事有べき清和の御代には鷹漁の遊びはとゞめられて一度も非ず陽成の元慶八年に再び興されたれど此朝臣はすでにみまかられしなり然ば例のこゝとぎまに作りかへたる事知べし

かの伊勢の齋宮なりける人の母つねのかりづかひよりはこの人よくいたはれといひやりたりければ母の言なりければいとねんごろにいたはりけり
 此齋宮なる人を諸説に怡子内親王にて文徳の皇女惟高の御同腹御母は紀の名虎の女静子なりと云は此文に惟高の親王紀の有常業平のまたくみゆればことにねもごろにせよと世のいひやれると有などをとていへばより所有に似たり【この母と云は染どの、后或は實母など云説は無益の事なりいづれにても有なんなりひらは忠仁公の家禮なればなど云は時世のさまをしらぬ説なり】然るに怡子内親王は貞觀元年に卜ばみて同三年に伊勢へつかはされ元慶元年陽成即位まして代まわらする例故に京に歸らせ參らせて十七年の間事なくませしなり業平朝臣は嘉祥二年廿五歳にて正六位上に叙

せられ其後文德實祿にはみえずして右より十三年歴て清和の貞觀四年に從五位下に轉任しそれより昇進すみやかにて元慶四年に卒られたり是をおもへば右に云
 怡子内親王さい王の時は業平三十歳にあまり官位もまきりにす、みたれば伊勢に下るとも放縱なるべからずもとより五位以上の人くだし給は、必史に見ゆべしかたぐ、怡子の齋王を好せしにはあらざるなりもしさる事をいは、貞觀より前十年ばかりの間の齋王のうへにやあらんとも古へより齋王好されては必廢せらる、例日本紀などにあまた見ゆ此天安の頃にも鴨の齋院の廢せられし事を秘事なりし由史にまざるされしも好されたまひし故なるべし然るに其頃の伊せの齋王は史にさる事みえざるを怡子内親王なりとさしたるは無失の罪の反坐おそるべし、【文德實祿天安元年二月己巳朔丙申廢鴨齋内親王慧子、更立无品述子内親王爲齋内親王、(中畧)其事秘者世无知之也か、ればもし伊せの齋王に事ある時は廢せらるべしいと秘みつ事なりとも右の文ばかりの事は記さるべき例なり怡子齋王には少しもさる事史にみえず然るに此たはむれたる物がたりをもて貴人の罪をさだめとさす人はいかなる

むくつけ心ぞや
 あしたには狩にいだしたて、やり夜さはそこにかへりこさせけり二日といふ夜をとこ破てあはんといふ女もはたあはじとはおもはざりけれどいと人めまげ、ればえあはず【今本そこにかへりつ、こさせてとあるはつ、の言あまれり又こさせをけりの下にかくてねんごろにいたつきけりてふも衍文なりすでにまかいへる心はこ、の出し立かへりこさせ其外にもありこは傍注の本文となれるなるべしよて古本にはなきなり】
 われてを破而と書は借字にてわりなくしてなりわりなくはことわりなくの略言にてことわりなしと思ふ事も切におもふ時はえ堪ずしてこひなげくに云を新撰萬葉に「鶯の破てはぐ、む櫻花思ひぐまなくはやもちるかなこれもわりなく強て羽ぐ、む意なる事下の句にまらるこきん集によひの間に出入ぬる三日月のわれて物思ふ頃にも有かなてふは月の片破てをば理りなくにいひかけたるなり【萬葉に「我むねのわれてくだけてとよみたるは只胸中のわれくだる様にて別なりこれをもてまどふ人有わりなくを畧してわれてなど云が如きは奈良の朝まではなき事にて今の京と成ての詞な

使眞とある人なればとほくもやどさす女の寝屋もちかくありければ女ひとをまづめて夜半一許にをとこのもとに來けり

は狩の使を十月に立ちらる仁和元年には三月同二年には二月と見えたり、むかしはいつにてもおぼろなればまか云を後世人は只春の月にのみ有事とおもふ心よりは是は春なりとさだめていふはわろし羽恒集に「秋のよのおぼろにみゆる月よりは紅葉の色ぞてりまさりけるとよめるもあり然ばおぼろなるてふに依にはあらねとすべての事のさま春にては有べき歟】

使眞は使の中に宗とする人を云日本紀に主神をかみざねと訓たるによるに是も使主と書意なり○子ひとつは夜の半なり昔は一時を四つにわかつて子一つ子二つ子三子四といふ他の時もまかり【人しづめてとは日本紀に人定を亥の時とよみたる心ならば亥の時過て子の初に來たる心に書るならん猶それまではあらざらめと文に心を付ん料にかくいふなり】
 をとこはたねられざりければ戸の方を見いだしてふせるに月のおぼろなるに人のかげのしけるを見ければちひさきわらはをさきにたて、人たてり
 或人外の方の意といへりしもあしからねと古本に戸の方と書たるに依にえねられぬま、に戸口をさ、で月を見出して倚臥たるなり次の詞に我寝る所へ將て入とあるからは今は端ちかく假に在る事知べし○此狩の使は春の末ならんか冬春共に立ちらる、例なれど冬は戸もささでは夜のかりねは堪じかし【三代實祿に元慶八年に

をといとうれしくて我ぬる所にゐて人て子ひとつより至鶏明あるにまだ何ごとをもかたらはぬに歸りにけり子の一刻より丑の三刻までなり○まだ何事も古今集に「むつごとともまだつきなくに明にけりてふよりもはかなし○或説にかくはかなくも書たれど高階の師尙は實は此齋王のうみ給へるなど云はいかなるをこのもの、云出せし事ぞ此説などに云怡子の齋王は事もおほさず歸りたまへる事既に實録を引て云がごとし努々さる事とおもふべからず大かたの人だに有を専ら物思をわざとしたまふ齋王にして懷妊の産穢をいかに去のびてあらはれ給はぬやう有べき是は齋宮の事を少もまらぬもの、言出せし事なり
 をとこいとなしくてねすなりにけりつとめていといふ

かしけれどわが人をやるべきにしもあらねばいと心もと
なくて待てるに明はなれてまはしあるに女之從許詞者
無而

鬱也を萬葉にいふかしたもおぼつかなしともおぼにと
も讀たれどこ、はかの「たらちねの母が養蠶のまゆご
もりいふせくもある歟妹にあはずてといへる如く心に
こめて思ふを云次の心許なくて待居ると云は女のかへ
りて後いかゝ有らんとおもひてかなたよりの便りを待
てるほどの意にておもひやる心のもとづく所なきを云
語なり【或説にいふかした心もとなしと同じ事とのみ
いへるはくはしからず同じ事を詞のみかへいふはつた
なき人の文にこそあれかゝる上手の文にさる事はふつ
に侍らすおよその語一言の別れてあまたになり又他言
の轉じ／＼て彼是二つ意になれるが後には多けれど
かく一條に同じ意なるを書分る事はなきわざなり是は
語の本をよく意得て書る物なるをや】○上のつとめて
は初時の事にて漸明なんとするほどなり次の明はなれ
ては既に明て後なり丑三刻より明んとするまではたゞ
別れしを悲しとおもひて寝ずなり明て後朝の文やらん
すべなればかなたの便を待はどのさま次第よく書つ

にかなはず後人はかくをさなくいふ心をばさとらざり
けり】

とよみてやりて狩に出ぬ野にありけど心はそらにて
萬葉に「わぎもこが夜戸出の姿見てしより心空なり土
はふめどもてふ如き歌三首ばかりあり
こよひだに人しづめていと、くあはんとおもふに國の守
齋の宮のかみ兼たりければ狩づかひありと聞て一夜酒の
みしければ専らあひごととえせで

貞觀の頃は伊勢の守の齋宮寮かけたるはなし是もわざ
と書かへたるなり
明は尼張の國へ將去べければをとも女も人まれず血の
なみだをながせともえあはず夜やう／＼あけなんとする
ほどに女のかたよりいだせる坏に歌をかきていだしたり
とりで見れば

取て見ればといへばさかづきに直に書たるならん今本
にはさかづきのさらにとあれど古本に返し所の所にのみ
盤と有をよしとす【今本はことばいと亂たり】
かち人のわたれどぬれぬえにしあれば
えにしは縁を江にかねたり縁は字音なれどかゝる事に
は有もまづべし【此字音をもまじへてよむは天曆など

○詞はなくてと書るげにまかるべき事なり此歌に夢歟
うつ、かとよみたる心にては詞に書んやうはなし
君やこし我やゆきけんおもほえず夢かうつ、歟ねてかさ
めて歟

はかなく別れ來つればまかおもはる、後朝の心をのみ
述たるにさま／＼深くおもふ心はこもれり昔はかく有
事の餘意をのみいふ故に姿よく心ふかきにぞかきさて
下の句は上をことわるのみなり萬葉に「うつ、にか君
が來ませる夢にかも我はまどへる戀のしげきに
をといいたう打なきてよめる
かきくらす心のやみにまどひにき夢うつ、とはこよひさ
だめよ

夜の事は我はたかきくらす心にえさだむべくもおぼ
えられず夢歟現か世人さだめ解ちてよとなりをさなく
世人といへるぞかぎりなくよろしきなり今はこよひ定
めよとあれど此古本にも古今集にも世人と有によるべ
し【忍ぶるに世人さだめよと云べからずこよひあひて
定めよといふがことわり有と思ひて今本にはなほした
る成べし此二首は夢うつ、ともわかぬほどの心にてい
ふをこよひさだめよといふはかしこき事にてこよひの心
の頃より多し是又後の世に書しをまるべし】歩にて
わたるにぬれぬばかりの水はいと淺きなるを二夜とだ
に逢がたきあさき縁をそへたり萬葉に「廣瀬川袖つく
ばかり淺きをやは人の心のあさきをよめるをこゝに
縁の淺きに轉じていへり【たゞぬれぬとは何のぬる
とも聞えぬを此萬えうの歌をてらして袖のぬれぬとし
るべきなり】かつわたれども垂たる袖のぬれぬを略し
て今はいひけん

と書て末【歌の上を本といひ下をば末と云なり】はなし
其さかづきの小盤に續松の墨して歌の末をかきつく
小盤は坏する皿なりさて上は其坏に書てあれば又書
ん所もなきか或は用ゐたれば書がたきにもあらんより
て今は小盤に書付とみゆとにかくに古書をよき○續松
の墨は清少納言もさる様書たるはこゝにやもとづきけ
ん風流なるわざなり【枕草子に蘭省花時錦帳下と書
て是が末をいかに／＼とせむるをまりがほにまんなに
てか、んもみぐるしなどおもひてそのおくにすびつ
きえたるすみの有しをして草のいほりをたれかたづね
んと書付たる事有】松明を和名抄にも續松と有松の秀
を物してまどひつぎてたく故につき松といふを音便に

てついまつと唱ふるなり(ついまつたいまつ同音なりといへるはわろし事は同じくて語は別なりたいは焼なりついは續なり)

又あふ坂の關もこえなん

こは又いかにもして逢時も有なんとなくさめていへりそれが中に京にかへりてもあふ坂を又もこえて伊勢に來て逢んでふ意をもこめつるにや

といひて明れば尾張の國へ越にけり

こえにけりとは海を越てゆけば云歟

「齋宮は水尾の御時文徳天皇の御女これたかのいもうと」

此詞今本にそへてあれど古本にはなし此齋宮はかの怡子内親王にては叶はざる事既にかへすくいへるが如し且此詞に御むすめといひ惟高とのみ書るなどかゝる人々の御名書べき例をだに去らぬ後世のをこ人のわざなり(皇女をばひめみこといふぞ古訓なる又惟高親王は文徳の一の皇子なりいにしへ皇子をたふとむ事後世にことなり然るを此附たる詞の如かく事はかへつてなき事なり)

むかし男狩のつかひよりかへり來けるに大淀のわたりに

やどりていつきの宮のわらはべにいひ懸ける

上の條の同じ度にて尾張より京へ歸るとて伊勢を又經るに大淀てふ所に宿りたれば齋宮より御使の有が中にかの心まりのわらははもあるにいひかけたるなり(大淀は延喜の神名式に伊勢國多氣郡に竹大與村の神社ありて即齋宮の同じ郡にて遠からぬには御使も有べし且さい宮くだりたまふ時先こゝに被ひして齋宮へ入給ふ例なれば京よりの道べに有ならん同式に下り給ふ語の次あり然るに或説にいせ尾張の道のわたり口なりとあるはいかゞあらん

見るめかる方やいづこそ棹さして我にをしへよあまのつり船

かの見し後あひみるよしもなくわびしきにさるますがををしへよとみち引せし童女なればいふを浦の物もて詞をなしたり篋の人には告よとよまれしを思ひて記者のよめりと見えたり【此歌 朝臣の口つきならす後の集になりひらのとして入たるはいかにぞや】

むかしをことありけり伊勢の齋宮に内の御使にて参りければかの宮にヒメコといひけるをんなわたくしごとにてこは齋宮へ御使とわきて書たれと例に因に右と同じ度

にてやとれる間に有し一つの事とすべしかくまぎらはしきが此文の常なり且榊子とは齋宮に侍る女なり故に私言と云り源氏物語の須磨に内侍のかみの御もとに中納言の君のわたくしごとのやうにてとて歌有こは後の物ながら相去らるゝ詞なり或説に是を數奇ごとしける女といひ【皇朝の古言にすきと云は物をこのまじうするを云なりそれが轉じて好色風流などの意ともなれり然るを後世の俗すきは數奇の字なりと云はいかにぞや數奇てふ字はなきなり漢書に數奇の字はあれど音さくきにて意もまばくあやしといふ事なれば俗の云すきとは異なり後人皇朝の古言に文字をあつるは多くはあやまりなるかこのあつる文字もみづから作りてあつるはあまりしき事なり】私言をさめごとといふ皆わろし古本によるべし且この使は私事にあらずと云もまどへる説なり御使は公事ながら侍女がおもふ情は私ならずや右の源氏の詞などをむかへて思ふに齋王のおぼす男を私にも戀なる意にてこをもてかのみそかごとを暗カクにまらしむるにも侍らん

ちはやぶる【ちはやぶるてふ事は上にいへり此は、わの如くよみふはにこるべしかへすく人のあやまる故に

【云】神のいがきもこえぬべし大みや人の見まくほしさに大宮人を見まくほしきには祟りある神の齋離をも越ぬべしと云なり【いがきはいみがきの略言にてけがれなどを忌へだつる垣を云俗に井垣とおほゆるはいふに足すかなもたがへり此萬葉のうたはよみ人しられぬを捨遣には人まろとて入又此文に本は萬えうの歌末は記者の作れる事あらはなるを後に集にえられしなといかなる事ぞや】まかいふ意は身のほろびんもおもほえずてふなりこは萬葉に「ちはやぶる神のいがきもこえぬべし今は我名のをしけくもなしてふ歌の本を用ゐて末をば記者の作れるものなり同集に「ゆふかけていはふ社もこえぬべしおほゆるかも戀のまげきにとも侍り」と返し

戀しくば來ても見よかし千早ぶる神の禁るみちならなく思まはり侍る神垣をみだりにこゆまじきはさる事ながらをとこ女のあふ事は神のいさめたまふ事ならぬからはいと切におぼせば齋離をもこえ來ませよとなり此男は大ぞらにおもふさまなり○神のいさむるは萬葉集に

筑波嶺爲催歌會日作歌(長歌なり此日は人妻我妻をいはず繁想するならばしと聞ゆ)此山をうしはく神のむかしより不禁行事ぞ此詞をとれる歎

昔男在けり伊勢の國なりける女を又えあはでとなりの國へいくとていみまう嘆ければ女

こは上の齋宮にて一夜あへる人を云とみえたり且古本に嘆と書てなくとよめるは意ひろくてよし今本にうらみければとあるは歌の詞になづみて例の書かへたるならん

大淀の松はつらくもあらなくに浦見てのみもかへる波かな

松を女に波を男にたとへて我つらきにはあらぬを我をうらみがほになきてかへるかなと女の云なりこは古今集に(在原元方)「あふ事の渚にしよる浪なればうらみてのみぞ立かへりけるてふをもて記者の作れるなるべし

むかしをそこ彼所にはありときけとせうそこをだになんいふべくもあらぬ女のあたりをおもひて

そこには在ときけと、いひ女のあたりを云々などいふは前に女みそかにかたうふむぎもせねばいづこなりけ

るかな

さるさかしき山などもへだてねども如是逢ぬ日の多く侍るはその心なりと怨みたるなりさてこは萬葉に「石根ふみ重なる山はあらねども逢ぬ日おほみ不相日數今の萬葉にも今訓あはぬひあまたとよみたれどさては理りつきずおほみとよむべし」戀わたるかもと有を例のとりもちゐて三の句をのみ今少かへたり今本にあらねどもと有は拾遺集によりて後になほせしにや古本に不隔と、あるからは此文にはかへたる物なり萬葉にもあらねどもとあれども後人萬葉をみねばおきて拾遺をこ、に擧たりされど此文には少かへたるは常の事なるをや」二の句古本に山はと有ぞよき今本に誤りて山にと書たるをそれにつきて説を下すはひがことなり又四の句を今本にも拾遺にもおほくと有はわろしおほみと有べきなりか、るみの辭はおほくしてふ意なり○岩根ふみ重なる山とは岩ほなどふみつ、こゆる山は深くさかしき山にして人のかよひがたきをもてたとへたるなり

昔をそこありけり伊勢の國に欲得行而將相とわりなくいひければ女

んあやしさにてふ條に似たるにこ、の歌に目には見て手にはとられぬとあるに對ひてはさも侍らず此間の意おほつかなしとも云べけれどこは萬葉の歌を少しかへて詞を作りそへたればさばかりゆきたらぬ事は常有事なり大かたに意得て有なん消息てふ字は死生を問往來の事とから國にていへるをその音のま、に用ゆされど轉じてはたゞ文をも語をもいひかよはするをいへりさてこ、は詞も文もかよはしがたきほどの女を云なり

目には見て手にはとられぬ月のうちの楓【月中桂樹の事ひとの國にはやくいひたる事なり】のごとき君にぞ有ける

こは萬葉に四の句まではかく有て終の句妹をいかにせん和有をそのみかへて擧たる例のわざなり○楓の字を後世かへでとよめるはわろし和名抄に楓(をかづら)桂(めかつら)といひてかつらとよめる事萬葉に同じ○手にとられぬてふ事は他國にもいへり文選に(陸子衡詩)明月入我廬照之有餘暉之不盈手

むかしをそと子女をいたう、らみていはねふみかさなる山は隔てねどあはぬ日おほみ戀わた

こは男女京にあれども逢がたければ既に或女を偷みて津の國のあくた川わたりいきけんたぐひにていせの國にともなひ行て相見てしがなてふなりけり伊勢をしもいふは右の齋宮わたりの意にて云にはあらじこ、の歌大淀てふ詞を得たればならん○古本に欲得と書たるは萬葉にかもてふ辭に乞願ふ意有をば欲得と書たるにやれりさればいせの國にがな行てあはんとよむべしこれを彼齋宮に行て逢んと云説は歌に見るからに心はなぎぬといふにも其外にもそむくを猶それは前に一たび見しを云といへるなどいかなるひが心ぞや文は文に隨せてこそとくべけれど

おほよとの濱におふてふみるからに心はなぎぬかたらはねども

海松を見るに云かけたる序歌なりさて共に京に在てよそながらもみるからに心はなぎみ侍りさる國に將て行てかたらはでも有なんとなり

といひてましてつれなかりければをそこ袖ぬれて蟻のかりほすわたづみの見るをあふにてやまん

とやする女の歌をうけて我は見るのみを逢にてはえたへすとい

へりさて海人の袖ぬれてみるめ期に我涙をそへたり
【此うたをなり平のとて後にとりしはいかに古歌の風
をもなりひらの口つきをもわきがたきにや】

女かへし

岩間よりおふるみるめしつれなくば去ほひ沙みちかひも
あらなん

こはかく見る事だにかはらであらば是を朝夕のかひに
てこそ有べき物なれど右の大淀の歌と又同意なりまし
てつれなかりければと書るはこゝを云なり○海松は
岩に生て且色かへぬ物なればつれなくばといへるはそ
れによれる語にもあるべし○去ほひ沙満は萬葉に「あ
しづの海玄ほひ沙みつ時はあれといづれの時かわが戀
ざらんとよめるは時有事をいひ此歌には朝夕に常に
ふ意にていへり然るを此語に泥みて或は男の心のかは
りかはらぬたとへと思ひあるは世の中はかはる事もあ
れば逢ときもあらんを云などおもへるは皆わろし語は
うへを摘てかろくとと深くもとむるとあるを物によ
りて意得ぬなるべし

又をとこ

涙にぞぬれつゝ、去ほる世の人のつらき心は袖のしづくか

かくつれなきに堪ずして涙にぬるれば袖を去ほるに半
の落るなりその半は即人のつらき心なる歎と切なる
うへにてをさなくいへりされどこの歌は例の記者のむ
つかしきなり是をも業ひら朝臣のと云にや此朝臣の心
ふかくよめると記者のとはいと異なるをいかで見わか
ざるにや

世にあふ事はかたき女になん

世にてふ詞は世間に勝れたる事を云略語なりたゞに
辭と云説は委しからず【この所に宵聞抄とやらん云も
のに甚しきひがこと有】

むかし二條の後東宮の御息所と申ける時此神にまうで給
ひけるに（古今集雜の部には二條后東宮の御息所と申け
る時大原野に詣たまひける日よめる在原業平朝臣とて左
の歌あり）

是にはいと論ふべきむねあれどまづ東宮の御息所【東
宮のみやす所とは本は東宮の妃を申事すでにいへるが
ごとし此或説は轉じたるにて此文にかなはずそのむね
下に委し】とは東宮の御母みことを申てふ説による時
は清和天皇貞觀十一年より同十八年までのあひだを申
べし（貞觀十一年二月一日此みやす所の生奉り給ふ皇

子（陽成）太子に立たまひ元慶元年正月一日（貞觀十九
年改元）に御即位まし／＼て其御みやす所（高子）皇

太夫人にのぼりたまへればなり）【高子のみやす所此

元慶元年までは女御とみゆ】さるを右年月の間に此御

息所氏神詣の事實録にも古記にもみえざるからはおほ

つかなけれど古今集と此ふみにかく有故に右のごと

く東宮の母儀とは云なるべし（おのれが考は下にあ

り）○大原野の神社は今の京と成て藤原氏のちかくて

常に詣られん料に春日の皇神を此乙訓郡の大原野にう

つし祭られたり【或説に嘉祥三年に閑院の右大臣冬嗣

公初てこゝにうつし給ふと云は誤りなり此公は嘉祥よ

り前天長三年に薨給へり實録をもみぬ人のわざなり】

其うつされし時を思ふに文德實録に仁壽元年二月乙卯

（十一日なり）別制大原野祭一准梅宮祭とあれば其

近きほどに遷されて此度祭を制められしなるべしさて

貞觀の比となりて後の詣給ふ事にはなりにけん【仁壽

元より貞觀三に五條後の詣給ふ迄は十一年になれりと

り分て御車よりたまはれるにのみたりと云詞よく歌に

合せみるべし此意を得ずば詞と歌とたがふべし諸説に

何ともいはずはいかに意は下に云】

近衛づかさにさむらひける翁人々に祿たまはりけるついでに御くるまよりたまはりてよみて奉りける

業平朝臣元慶元年正月（五十一歳）右近衛中將となりた

れば近衛司とは今年より云べし翁といへるも又歌に神

代の事も有など皆かなへり然るに今年彼太子も即位

ありつれば御母儀をみやす所と稱すと云時はたがへり

此朝臣また貞觀六年に左近衛權少將となりし時の事と

云ともさては高子をみやす所と申さぬいと前なりかく

紛らはしきぞ此文の例なるをや【或説に事を助けんと

て翁とはかりそめにいふ詞なりといへどもわかきほど

の人を翁といふ事何にもみえずすて此文のこゝろを

えぬ故にさる強言はいふ】

大原や小鹽の山もけふこそは最初（もと）の事もおもひづらめ

この皇神は（天兒屋根命）天孫に奉侍給ひてより其裔の

藤原氏萬代たえずいや榮えにさかえて今東宮の御息所

の詣給ふを皇神のよろこび給ふにつけて其神代よりの

事を神のおもひ出たまふらんとなりまことに此朝臣の

歌にてえらべ高くこゝろおもえろしさて是は古今集に

ての意をいへり此文にとりては此御息所（高子）はやく
の密事をおぼし出てや此翁に入よりことに御車よりし

も祿たまふならんといふ意をふくめてよろこぶさまにとりなしたりさる時なればおもてはたゞ此神の御心のさまにていへるとせる作りざまえもいはず巧みたり【こは女も男もいとほやくわかきほどの事なりしを我かく翁と成ても猶おぼしむすれ給はぬならんといふ意にて右に翁と書たるなどの心づかひみるべし古本にかみよを最初と書しも其心をえてうけるなり 古今集には雑部にて何事もなき歌なるを此文には端の詞を少そへて密事のさまとせるにて物がたりには侍り此わかちをよく明らめぬ人古今集にての解をもあやまり侍りそれによりては本は何事もあらぬ歌をあしくいひ定して愛む人も侍り物がたりの別なる事をかくいひとせずは有べからぬ事にこそ】且かく解すば詞書に人々にろく賜ける次でに御車より賜りてよみて奉りけると書たる詮もなく歌の意もよく得がたかるべし

とて心にもかなしとや思ひけんいかゞ思ひけんえらすか男歌にまかよみて心にもいかにばかり昔思ひ出て悲しかりけんといへり右の端の詞のみにては心をそへたる様猶あきらかならねば此詞をそへてさとしむるなりい

かゝ有けんえらすかしと書たるはいよ、下情有つらんよしを思はせたるなり

皇太后并御息所大原野に詣たまへる考
江家次第云大原野行啓起五條后順子以藤氏勸學院衆爲車副二條后高子以姪乘車後在中將書和歌與二條后入疑先是若宥密事歟是五條后(文德母后清和祖母)高子の御息所を車後に乗せて詣たまへりと云なり【文德三代等實錄略考 五條后順子仁明后文德母清和祖母閑院冬嗣公女也嘉祥三四文德即位母后爲皇太夫人仁壽四爲皇太后 貞觀三二入道同六正爲皇太后然ば仁壽四より貞觀六までに皇太后と中は順子なり染殿明子は文德后清和母忠仁女也天安二十一清和即位母后爲皇太夫人 貞觀六正爲皇太后然ば天安二より貞觀六迄は皇太夫と中なり右二つを以てみるに貞觀三年の前後同五年までに皇太后と中は順子の外なきをえらる、事明らかなり然るに三代實錄には右二后六年以後の尊稱を先へめぐらして書たる所も侍り又五條后たまゝ太政大臣の染殿の第へ行啓の事有し故に不意に見てあやまりし説も出来しならんよく右の略記をみるべし此外にも此實

録の前後をよく見すばほ意にあやまる事多かるべし】考るに三代實錄貞觀三年二月廿五日に向大原野神社以藤氏六位以下爲車從者と有をもて書るなり一此皇太后は五條后なり藤氏の六位以下と有は勅學みんの衆とえらる一されど實錄には高子の同車なる事なきはまた初めて從五位下などの人にて記すべくもあらずはた後の私に召し故にも侍りつらん然るを古今集にも此文にも東宮の御息所と有は誰も陽成のまだ東宮と聞ゆるあひだの御母の事と思ふより右貞觀三年の行啓は別の度なりとして江次第の旨は誤りなりと定家卿をはじめ其後の人々も云あへるならん三代實錄の大法師圓仁が傳に貞觀三年六月大皇太后五條の宮に僧を請し給ひし事記せし其大皇太后は順子の御事なれば右同三年二月にたゞ皇太后行啓と有は染殿后明子なりとおもひしを右の圓仁が傳は同六年に記して今年順子大皇太后となりたまへば後を先へめぐらして書たるものにて右三年に皇太后と中は順子の外になきなり其證は右同貞觀六年正月七日の宣命に以皇太后大皇太后并皇太夫人并皇太后上奉云々と有て是より先貞觀三年の比に皇太后と中は順子にて明子はま

だ皇太夫人にてませしなりか、れば江次第の旨たがひなし歌よむ人はたゞ歌書にのみつきて實錄などをば大かたに見過す故に却て古人の記を疑ふなりけり○或人問右の匡房卿の記をよしとせんならば此東宮の御息所の詣たまへるはかの陽成太子の貞觀十一年の後に別に有けんを實錄に脱せしにやと答江次第のさし世はまたちかきほどなれば實錄の正本諸記録にも依れしなすべきをたゞ右の如くのみ記されしを思ふに他后などの行啓は其世になかりし事知べし【江次第にも後人の加筆も有にやと思へど此事は定家卿の比にまかれば匡房卿のえらるされし事うたがふべからず且他の行啓もあらばさる事も記さるべきを思ふに此事たゞ一度のみありしも是にて知べきなり】又問右のごとくならば物語はひが事ともすべし古今歌集の詞をも採まじきにやと【匡房卿の比すでに古言古事は失ひて浮たる物たりふみによられし事も多ければ此高子の事は物語を以て書れしにや古今集の詞は此物がたりを實事と思ふ人のなほし又傳など作らん料に物よくこゝろ得ぬ人の書へなどせしも多ければ後のわざなるをも知がたけれどそはおして云がたければ有にまかせてとくののみ】

答ふ此事大かたにてはいひつくしがたしよりておのれが古今うた集の説書るものにて見るべしされどここに大かたを云んをもく古事を考るには先實録實記を見て有べき限りは其に従て事を定めて後よろづを思ひめぐらすべし故に右の實ろくもて貞觀三年五條后順子の行啓と定めて其後古人の記を以て其高子も詣たまひつらんとしさて古今集の様を思ふに此東宮の御息所とは東宮の母儀を申にはあらで本義のごとく東宮の妃を申なるべし【東宮のみやす所とは専ら東宮の嫡妃を申事既に云源氏物がたり六條の御息所と申は前坊の妃なるにても知べし東宮の母儀を申は同物がたりにこき殿の女御を一のみこの女御とも東宮の女御とも右大臣の女御とも書たるは後世の轉なり】されどもかの貞觀三年は清和のみかど改元の年に即位有て東宮にはおはしまさねど其前東宮にませしほどに既に高子を御息所がねとうちく定められけんかし一東宮いと御幼稚にませばよろづは攝政忠仁公の心なりとのさま始よりみやす所がねとみゆ）さて貞觀元年即位同じく三年はもとより天皇と聞え奉れど御歳まだ十一におはして高子を寵給ふにもあらず高子從五位下と聞ゆる比なり然れ

ば古今歌集えらばる、時書べきやうなければかの御息所がねなりしを以て推て去かするしたらんとおぼゆ譬へば同集に菅原の朝臣と有は既に延喜三年に左遷の宣命を燒せられて左大臣を贈たまひつれど猶藤原家には書ばかりて贈左大臣とは書がたければのがれてさは書し事あらはなりこれと打反してまだ東宮の御息所と書まじきにも侍らす時の權をさけへつらへるたぐひ世々の書に多し古今の歌撰ばる、時みかどはまだ御わかくまして時平公の心なれば撰者の意思ひやるべし又古今歌集には天皇と後の御歌をば恐れてのせざるなり然れば彼是を以て去ひて御息所と云るしけん事知べし【后と申ていと後に古今を撰の比は又既に后位を停められたり且其詣たまふ比はまた女御とも聞えざりし時なれば書べきやうなかるべし且其前御息所かねなる時の勢ひに侍ればかたくを以て去か書るならん此外こきん歌集の今本にはうたがはしき事限りもなし後世好事の人の加筆或は私に改めたる事有とみゆれば偏にはよるべからず故に實録にて事を定めて時世のさまを思ふによく思ひめぐらすべきなりけり歌書を是として實記をうたがふなどのひがとほいふにも是すされど史の脱文

伊勢物語古意卷五

などを歌書以て補ふべき事も少からずそは事によるなり古書は私をむなしくして見るべきにこそ一惣てこれらのうたがひは三十年ばかりおもひ來つ、漸去るせり人大かたに見て定めたまふ事なかれもし私の考へ誤りありとも古き文みる道去るべとならずやはあらん

むかし田村のみかど、まうす御門おはしましけり其時の女御多賀幾子と申御在けり
 文徳天皇崩たまひて山城國葛野郡田邑里眞原丘に天安二年八月葬奉たまへりよりて田むらのみかど、申すこの女御は文徳實録に嘉祥三年七月藤原朝臣多賀幾子爲女御と見え三代實録の天安二年十一月には從四位下藤原朝臣多加幾子卒多加幾子者右大臣從二位良相之第一女也少有雅樣云々とみゆ
 それうせたまひて後の御行安祥寺にてやよひのつごもりにしけり
 安祥寺文徳實録に齊衡二年六月詔以安祥寺預於定額云々三代實録貞觀元年四月に緣皇太后御願置安祥寺年分度者三人願文曰云々延喜玄蕃式云凡安祥寺果階業僧擬補諸國講讀師云々或人いへり此てらは山科にあり五條后順子の建給へりと○みわざとは次の條に七々日の御事と有て其御佛事をいふ人々の奉あつめたるさ、げ物千さ、げばかり木の枝につけて堂のまへにたてたれば山しも【山しものしは助な

伊勢物語古意卷四終

り】更にだうの前うごき出たる様になん見えける
昔は物捧るには必枝につけ侍りことにかゝる堂のまへ
など廣き所にては大きな枝にぞ有けめさて歌いはん
料にもこゝは書たり

それを右大将ふち原の常行と中人いませかりけり【今本
の詞は此常行大将を云に似ず此條もすべて古本ぞよき】

常行大将は天安二年十月從五位下周防權守より右近衛
少將となりて多加幾子卒りたまふ時はまた官位ひきか

りけるを後より以てまか書たり【右大将は極官を書た
りといへど然らば右馬頭を業平とせば中將をあぐべし

皆さる意にあらず只官位も年代もたがへるをこの文の
常とするなり】さてこは右大臣良相公の一男貞觀三年

右大将となれり右の女御の兄君におはせり
講のをはるほどに歌よむ人々を召あつめてけふのみわざ

を題にて春のこゝろばへあるうたたてまつらせたまふに
右の馬のかみなりける翁目はたがひながらよみける

此講はいづれの佛經にても有なん必八講なりと云は
まひごととなり○この右馬頭を必業平とするはたいかッ

あるべき此朝臣は貞觀五年に右馬頭と成ぬ此御わざの
此は散六位にてまだ翁といふべくもあらぬ歳なり是例

のわざなるをいぶかしむ説はまだしき事なり○目はた
がひながらとはさ、げ物どもの多きを山と見たがひた
るまゝに歌によみたりてふ事なり【或説に心得かねて
目將めさうかいたがなり目にはかいたをつくるてふ事ありな
ど云は甚しき誤なりさては歌の意をいかにかんやむ
かしの歌はをさなくよむ事にて目たがひを其まゝによ
めるこそ多けれ】

山の皆うつりてけふにあふ事は春の別れをとふとなるべ
し

此女御の御わかれと春三月の別れとをかねて且如來
入滅には海、水飛、涌大、山崩、裂など云をおもひよせ

て山々も皆此御庭にうつり來れるは此別れをとむらふ
なりけりとよめるなり【後拾遺集釋教に山階寺の涅槃

講に詣てよみ侍ける光源法師いにしへの別れの庭に會
りともけふの泪ぞ泪ならまし是も二月十五日佛入滅の

別をいへり】こは記者の歌にて事はむつかしけれと物
を甚しくとりなせしはよろしきなり【これを業平の

歌とて後世とられしはいかにぞや姿似る物にあらず】
さて其捧物を山と見たれば即山となしていへるぞ古歌

の情なりける【後世の人はこは實の山ならねばまか見

たがへらるゝてふとわりをさへ一首に云故に歌の情も
あらずなりぬ歌は目たがひを其まゝよむにこそ感はあ

れ】○此うせ給へるは天安二年十一月十四日なり辛未
の其日よりかぞふれば貞觀元年正月二日を四十九日に

はあたるを三月のつごもりといひ春の別れとよみしな
ど皆日數をもかへたるは例の事なり（この日數のたが

ひしもいぶかしなどいふにや此文をよくも心得ぬ故ぞ
かし）

とよみたりけるを今みればよくもあらざりけりそのかみ
は是やまさりけんあはれがりけり

記者の自らよみてみづから昔の事になしていへるが興
なり

むかし多賀幾子と申女御みまぞかりけりうせたまひてな
ななぬかの御事安祥寺にてしけり

前と同じ度の事なるをことに事を別におこして書るは
此文の例なり

右大将常行と中人いづか在けり其御わざぞまうでたまひてかへ
様に人々山科の禪師の親王おはしますその山しなの宮に

瀧おとし水走らせなどしておもしろく造られたるにまう
で給ひて

上の人々と云よりこゝのまうで云々と隔てつゞけり歌
にも文にもおほき例なり

年ごろ遠にはつかうまつれどちかくはいまだつかうまつ
らすこよひはこゝにさむらはんと申給うて

山科の禪師の親王は仁明天皇の四の皇子にて禪正尹と
聞なりしを貞觀元年五月に入道たまへりこも又此女

御の後のみわざの比はまだ入道したまはざりき皆つと
めてたがへたる物を此文をまゝにして實錄をもうたがひ

かへりては此文の詞をもうたがふ説多し笑つべし○禪
師とは惣て出家を云その頃のならばしにて下にも俗な

る禪師なるといへり
みこよろこびたまうて夜の御坐のまうけ作させたまふか

の大將出たばかり給ふやう宮づかへのはじめにたゞ
直なほやはあるべき

夜の御座は寝ませる所なり○出ては親王の御前より退
出てなり○たばかりはたゞ議りかんがふるを云日本紀

に慮計測等の字を各たばかりとよめり【たばかりは手
計にて本は手して物の寸尺をはかるより發りて心に思

ひはかるを云事となれりさるを後世は又轉じて譎りあ
ざむく事とのみ思へり】○直やは有べきはたゞにのみ

有べき事はといふに同じ黙然をたゞともなほともよ
みたゞ人を直人ともいへる思へ
三條の大御幸せし時紀伊の國の千さとの濱にありけるい
とおもしろき石たてまつれりおほみゆきの後奉れりし
かばある人の御曹司の前の溝にすゑたりしを鳥このみ給
ふ君なりこの石を奉らんといひて御隨身舎人してとり
つかはすいくほどもなくて持て來ぬ

三條の大御幸は貞觀八年三月廿八日に右大臣良相の百
花亭【百花亭三條北朱雀西に在と拾芥抄にゆみ】にみ
ゆき有し事三代實錄に見ゆ（是も此條と年月たがへ
り）○紀伊の國の千里の濱は古き物にはいまだみず
【一説に紀伊に千里てふ濱なしちりの濱とよむべきな
といへど古本に千里と書たれば強てちりとはよみがた
し後の條には千ひろのはまといへり】大鏡花山上皇御
幸の事をいふに「熊野の道に千さとの濱と云所にて石
の有を御枕にておほとのごもりたるに○幾ほどもなく
てこは一の古本にも今の本にもいくばくもなくとあ
れど又の古本にいくほど、有によれりこ、は程と有こ
そことわりなるなれ
この石聞しよりも見るはまされり是をたゞにたてまつら

ばすゝろなるべしとて人々に歌よませたまふ【昔人は深
切にて且風流なり今の世人は物おくるをりかくやはす
る】

たゞにはたゞちに餘情なくてなり○すゝろなるべしも
不慮をいふより起りてこ、ははえなかるべしてふ意な
り【ひとの國にては轉せし語も各字を造りて分てり御
國には一語をさまゞ轉じて用う故に其本語をよく思
ひ定て後轉しを見る時は明らけし
右のうまの頭なりける人なんあをき昔をきざみてよき繪
のかたに此うたをつけて奉りける

昔昔をこまかに切みて是をもて詩繪のかたちの如く歌
の文字を右につけたるなり○或説に右大將御監に依て
右馬頭を相伴ふ歟といへるはさる心にて書たるなるべ
し此條に二所まで右大將右馬頭を擧いへればなり（右
大將右馬寮を司する時は右馬頭を相伴ふとの意なり）
あかねども岩にぞかふる色みえぬ心を見せんよしのなけ
れば
親王を思ひ奉る心ほどを見えまゐらせんよしのなけ
れば岩に代表して見せ奉るされど是のみにては足れり
と思ふには侍らねどもなり此歌も記者の口つきな

となんよめりける
昔氏の中にみ子生れたまひにけり
某の人何の氏ともいはずで打つけに氏の中にと書たるは
此文先業平物語なればまか書て在原氏の中にてふ謂な
りさて此皇子は行平卿のむすめの更衣文子貞觀十六年
に清和のみこ貞數親王を生たてまつれる事を云なり

【三代實錄に行平卿之女の皇子うみたまへる事みゆ
國史に皇太后の四十の賀に此みこ八歳にて陵王を舞た
まへる時觀る者感涙をたる舞畢りて外祖父行平卿舞臺
の下に侍りてみ子を抱持て去たる事みゆ】
御鶴葺屋に皆人々歌よみて奉けり御外舅がたなりける翁
のよめる（古事記に鶴草葺不合符の生れ給ふ時以鶴羽
爲葺草造産殿と云を以て古本にまか書たるなり）
産家に三日の夜な、夜などには祝ひ歌よむ例なりけん
さる古歌とも多く侍り○御おほちがたなる翁は行平卿
の弟業ひら朝臣を指す詞に氏の中に云々と云も同氏に
してあるじならぬ詞なり只於是おほちと云はもとより
生れたまふみ子の爲に母かたの祖父なる意なり【和名
抄云外祖父（母方のおほち）舅母之昆弟爲舅（母方を

ち）外舅妻之父爲外舅（與婦稱天之父同）といへり然
れば外舅とは夫婦の間にて互に其父を相云語なりさて
こ、は只外祖父の意にもちぬしのみ】さてその方なる
と書たるは是大父の兄弟などを指たる語うたがひなし
古本に外舅なりける翁とのみあればおほちの下に方の
字落たる事明らけし今本によりぬ
我門に千ひろある竹をうゑつれば夏冬たれか、くれざる
べき

世にことに丈高き千尋【ちひろのひをいの如くとなふ
るも音便なり】の竹を我門に栽つるからは今よりはよ
ろづ世の夏冬に氏族家親此陰をたのみて在べきなりと
よめりさて梁王の竹園を思ひて皇子をたとへ【竹園を
親王の事といへるは大和物がたりの歌にもあれば承平
天曆の頃などよりやさる事いへるならんといにしへ
は見えずまかるをさす竹の大宮とつづけたるは此心な
りと云説はわろしる事なるまじき説は冠辭考にいへ
り】且仙境の千境の竹【千尋竹の事は山海經云在昆
崙之北有崑崙之山尋竹生焉注云尋竹大竹各長千尋此
事文選博物志玉篇等にみゆ且一尋を或は八尺或は六尺
といひて異國の書にも區々なれどこ、には大かたに心

得て有べし』をもて萬代を祝ひ氏族親は高き御陰に
 くれなんよろこびをいひなとせるを只一首によくそな
 へて安らかにいひとりたり然れども巧みの様も姿も貞
 觀の頃の歌とも聞えず是も記者のよめる中によく出来
 たるもの歟○春秋をおきて夏冬としもいへるは竹は夏
 の蔭よろしく冬にも枯ぬをめで、なり源氏の夏の御方
 にも竹を近く植られつと見えたり○今本には千尋あ
 る蔭とあれど蔭をうゝるてふ語はなきなり古本に竹と
 有ぞよろしとす思ふにたけをかげに誤りしなるべし○
 今本に是は貞敷のみ子時の人中將の子となんいひける
 兄の中納言行平のむすめのはらなりてふ詞あるは例の
 後人の裏書なりされば古本に此詞なし文のさまもいと
 拙なくて古文と異なり是をも伊勢が筆なりといへるに
 や此親王は延喜十三年までおはせしを同時にかくゑる
 すをこの者やは有べき

むかしおとろへたる家に藤の花うゑたる人有けりやよひ
 のつごもりに其日雨そほふるに人のもとへ折て奉るとて
 よめる

こは古今集にやよひのつごもりの日雨のふりけるに藤
 の花を折て人につかはしけるとて此歌ありこゝにおと

ろへたる家有をた折て奉るなどかへてあげたり
 ぬれつ、ぞまひてをりつる年のうちに春はいくかもあら
 じと思へは

古今にてはけふならでは時過て見せまゐらするにかひ
 なかるべければ雨にぬれつ、も折つるぞてふ意にてえ
 もいはずおもしろき歌なり『歌は心をよみ出る物にて
 侍れば其をりにつけたる物をもよみ入てさて心のほど
 をも皆いはんとする故に後世の姿はわろく姿わろけれ
 ば心さへつたなくなれりよりてかく詞に書てそれにゆ
 づり歌には其事をかつくいひたるこそよけれ後世の
 人は題詠になづみてよむ故にいとくしてつたなし』

○ぬれつ、に雨に折つる藤の花をおもはせ且事極まれ
 る三月の晦日をば延て春は幾日もあらじといへる寔
 に此朝臣の妙なる物なり然るを此文には右の如く詞を
 そへてぬれつ、ぞ云々てふはわびしき人のやんごとな
 きあたり折て奉る様をそへたり下に月日の行をさへ
 なげくをとこやよひのつごもりにとて、をしめども春
 のかぎりの云々とよめるは人にあひがたき人なれどそ
 れもて思ひ合するに今はおとろへてなり出ん事の待に
 かひなくて此春も幾日もあらずなりゆけばあはれをか

けたまへとて時めくあたり花を折てかくいひやれる
 としたるなるべしさもなくては詞をそへたるよしな
 し【業平朝臣はもとより王孫にて時の権貴にへつら
 はしき事はなかりけん放縱にしてか、はらずと史に記
 されしは女につけての事のみならずよろづに付てさこ
 そ有つらんをゑるべし然ば此文のごとくは有べからぬ
 を却ておとろへてかくへつらふごとく書なしたりこも
 なりひらならぬ男の歌なるやうにもちゐたるものな
 り】

むかし左大臣いまだぞかりけり賀茂川のほとり六條わた
 りに家をいとおもしろく作りて住たまひけり

こは左大臣融公【融公嵯峨天皇第八子也承和元年元服
 賜源氏叙正四位下嘉祥三年從三位貞觀四年左大臣
 寛平七年七十四薨贈正二位既從一位也續日本後紀以
 後の諸史扶桑略記等に見ゆ】の六條河原院をいへり貞
 觀十四年に左大臣に任せらる（その外史ともに委し）古
 今集に「君まさて烟たえにし鹽がまのうらさびしくも
 見えわたる哉てふ歌の注に顯昭がいほく河原の院にい
 みじき家を造りて池をほり水をたへて湖を毎月三十
 石つ、くみ入て海底の魚貝等を住しめたり陸奥國の鹽

がまの浦をうつして蟹の鹽やく屋に煎をた、せて玩ば
 れけるとなり一源順の河原院の賦に委しけれどそは淡
 文にいひかざりて虚文の多き故にことごとくはよしが
 たし一賀茂川の末を六條わたりにても賀茂川と云は
 妹夫の山の中に落るよしの、川とよめるは吉野河のい
 と末ながら猶玄か云が如しさるたぐひ世に多し
 神無月のつごもりがた菊の花うつろへるさかり紅葉のち
 ぐさに見ゆるをりみこたちおはしまさせて一日一夜酒の
 みしあそびて夜あけもてゆくほどに【古本に晦とのみ書
 たらばたつごもりとよまるされどこゝは今本によりて
 つごもりかたとす又今本にうつろひさかりなるにとあれ
 どなるにとては次の句にもそむけり故に古本によれりう
 つろへるさかりとは白き菊の此比紅にも紫にもうつろひ
 たる其色にはひさかりをいへり】
 神な月は雷のなき月てふ事既にいへり
 この殿の面白さをほむる歌かみ中玄もよむそこにありけ
 る難叟人板じきの下にはひありきて人にみなよませはて
 てよめる
 といいやしげなる翁なるにのみ出たる歌の人々より勝
 れたるきはを見せんとてかたる翁とさへいへる例の戯

れ言なりざるを此語になづみて業平の自書すばいかでか、らんなど云よ此文を心得ぬよりの事なり【甚しきは盗人として國の守にからめられ又中わたらひせる人の家に聲住せし事などいづれの男ともなきさまにひなしたり】○かたるは(古本に難の字を書はかり字なり)和名抄に乞兒列子云齊有貧者一常乞於城市乞兒云天下之屋莫過於是(和名加多井)【和名抄の假字はすべて古へにたがはぬを思へはかたると有を本とすべし難はかたいの假名なれば古本に此字を用ゐしは誤なりさて古本にもかゝる違ひどもまゝ有は思ふに已に眞字は古學の失たる世に書し物なるを去るべし】土佐日記に此かちとりは口をもえはからぬかたるなりけり云々大和物がたりに廬になひたる男のかたるのやうなる姿なる云々枕さうしのわびしげに見ゆる物に年老たるかたわいとさむきをりにもあつきにも云云か、れば本は乞兒の事なるをさらぬ人をもいやしめいふ語ともなれるなり右の土佐日記のやうを思ふべし【物がたりにはいとかしこく物をなすをぬす人なりけりなどやうに云も中々にほめあさむ事もありすべてかゝる事はいと甚しくいひて興とするのみ所に從ひて

意得べし】○板敷の下にはひありきてふも即かの翁のさまをいへり【或説にいたじきなりといへるは何の事ぞや古本に板敷の下と書たるからは他に云事なし又だいにいふ事もなき事なり下をばもと、よむべし垣下をかいもと、よむが如し下はほとりの意なり】さていにしへの殿舎は用有時板敷の上にあたりく疊を敷設るなりこ、はその敷まうけたる席に居るほどの物ならねば末のいたづらなる板のもとに人々をうやまひてある翁のさまをいへり
まほがまにいつか來にけん朝和に釣する舟はこ、によらなん
我はいつの間にもちのくなる鹽がまの浦には來りつらんかくえもいはぬけしきにつけてはかの蟹の小舟の落こぐあはれをもそへて見ばやと思ふ心をいへり古人の歌はかくこそ侍れ此さまをよく意得おきて歌はよむべきなり【或人云みじかき歌一首にて賦などのやうにはいはぬをかくよまれたるは此殿の面白をほむる意主人の心にかなふ事是に過べからずと此説はよろし凡後人は例のさまぐなる事をいひつくさんとするまゝにわろし心をだに得ていへば物といはでもそなはるな

り或人云惠崇が烟雨庵 鴈坐 我清湖洞庭 欲喚 扁舟 歸去 故 人道是丹 青 是 是 似 似 たり

となむよみけるはみちのくに、いきたりけるにあやしくおもしろき所々おほかりけり我みかど六十餘州の中にまほがまといふ所に似たるところなかりけりさればなんかの翁はさらにこ、をめで、鹽がまにいつかきにけんとはよめりける

こは彼翁のはやき時に陸奥に行て見たりし故にかくはよみたりといへるなり【或注にみちのくにに行てよめるにもあるべしといふはわろし】さて此歌は業平朝臣の似たれど詞の調へ今少居つきて聞ゆ恐らくは記者のならんかよく出来つるものなり○みかどは國家の二字朝の字等をよみて天皇の御食國をすべていへりこも其意なり【天皇の御身をさしてみかど、申すは今の都となりての事と聞ゆ】○六十餘州は本より音によみたるならんうつば物語にも妻とすべき人を六十餘州もろこしまらぎこま云々に尋めんといへり

むかしこれたかのみこと申すみ子おはしましけり山ざきのあなたなる水無瀬といふ所に宮ありけり年ごとのさくらの花ざかりにはその宮へなんおはしましける

惟喬親王は文徳の一の皇子にて御母は紀の皇子正四下紀名虎のむすめ有常の同腹なり○山崎は山城國乙訓郡にて水無瀬も同所にあり此所類聚國史三代實錄等には水生と書たり【萬葉に水瀬水無瀬などあれど是は字に心せで書たるものなりよりて後世は必水無瀬とのみ書事とするは委しからず又水生はみなしとよむべきをむかしよりみなせと、なふべきにや萬葉に右の如く書たりすべて地名はとなへなれたるくせある事なり】かく書る意は此河水は砂の底を泳りて行に又あらはれて流る、所々も有は水の生出るてふ謂なり故にこきん集の歌にみなせ川ありて行水なくばこそみなせ川下にながれてなどもよめりこ、はいと面白き所なりとて後に後鳥羽院もまたひ給ひて離宮を造らせて住たまひしなれば昔の惟喬のみこの宮思ひやるべし

その時右のうまのかみなりける人をつねにゐておはしましける時代經て久しくなりにければ其人の名わすれにけり
こは歌によるに定かに業平朝臣の事なるを中々に名を忘れたりといふは戯れのみ常に同様に書ざるを興とせるなりけり【業平賤官なるをかくして名をいはずと云

説は文の心をえぬ物なり」

狩はねんごろにもせで酒を飲つ、やまと歌にか、れりけり

歌をたゞにやまとうたてふ事古へはなし今の京の弘仁などの比専ら唐詩の行れてより云なるべし皇朝の事を皇朝にてやまと云々と云はいかにぞや（されど萬葉にも億良大夫などが詩に對して云所には倭歌とも日本歌とも一二つ侍るは別の事にて萬葉の比只歌のみの所にやまとうたとはいはず唐詩もその代には唐詩といへる事は侍らす他の國となりてこそいひたれ）【萬葉に和歌と書しはすべて返歌の事なりさるを後にやまと歌てふは大に和らぐ歌てふ心なりと云は甚しきひがことなり日本歌の心なるはもとよりなり日本紀をやまとふみ日本琴をやまとことの類にて日本歌倭歌等に書しを三代實録にいたりて和歌と書たるは又後の定なりさるに此古本に倭歌と書しは少し古きに依たるなりこは論にもたらぬ事どもなれど童の爲にのみに申すなり】
今かりするかたの、なききの院の櫻ことにおもしろし其木のもとにおりて枝を、りてかざしにさして歌よみけりかのうまのかみなりける人のよめる

こは水生より河内國の交野郡のかた野にいたりて狩したまふなりこ、は天皇の御狩場なれどまだ其比には禁れざりし歎又一のみ子なれば心にまかせて遊びたまふ歎さて其所の渚の院は度々御狩ある故に離宮めきたる院のありしにやこの親王のは既に水生にあれば又はあらかし此院のさまは土佐日記にかくて船引のぼるに渚のゐんといふ所を見つ、行其院は昔をおもひやりて見れば面白かりける所なりまゝりへなる岡には松の木どもあり中の庭には梅の花さけりこ、に人々のいはく是は名だかく聞えたる所なり故惟高のみこの御ともにて故なり平の中將の「よの中に絶て櫻のさかざらば春の心はのどけからましといふうたよめる所なりけり云云是にも必親王の家をいふとは聞えず

世の中に不絶櫻のなかりせば春の心はのどけからまし
花故は咲ちるにつけて静心なきにぞ中々おしなべて櫻しなくばもとよりの、どかなる春ならましをといへるはふかくまはる、が故の心のうらをいひたるにて誠に此朝臣の歌なり萬葉に「人よりは妹どもあしき戀もなくあらまし物を思はしめつ、とよめるが如し思ふねの歌に「春はたゞ我にてまゝりぬ花さかり心のどけき人

はあらじなどよめるは今をとりたるならん古今集に花をも鳥をもふかくめづるにつきていとふさまによめる歌どもの有はみな同意なり○此歌古今集と此今本にはたえて櫻のなかりせばと有此古本には二の句不絶と書り土佐日記には三の句さかざらばと有いづれをよしといはん絶て無かりせばとは有物の絶たらばなり古本に不絶の二字を書たるは轉じておしなべてと云意に用ゐたりと見ゆ【古本只なべててふ一語の爲に不絶と書たり櫻までに此字の心をかけてみるべからずいにしへはかくさまに字を用ゐたる例あるなり】さらばなべて咲さらばなべてなかりせばとはいづこにも本よりなくてあらばなり然れば本よりなべてなからんてふかたぞことわりも心もやすく聞ゆされど各の好みにまかすべき事歎

となんよみたりければ或人
ちればこそいとゞさくらほめでたけれうき世に何かひさしかるべき

かの歌はあまりなるまで櫻に心そみたるをいさむるさまによめりこは古今に、殘なく散ぞめでたきさくら花在て世の中果のうければてふを少かへて記者の作れる

物なり心は其古今集の歌にあはせて明らけしさて右の二首は此親王つひに世を逃れ給ふ前辭を思はせて作る歎又この二首によりて世間の事に思ひなづむまじき事とおぼしなりてのがれ給ふとおもはしめたる作りざまにも有なん【かく心を用ゐたるにて此文なりさもあらではたゞ古今集のごとく此文の意にあらず】○めでたきはほめいづるといふ語をはぶきてめでといふなり字にては愛感などの意なりたきは痛きてふ語にて上の語をつよくする辭なりうれたき見たき行たきなどのたきに同じ（痛うれし痛かなしなどのいとを下におきて云のみ異國に笑殺愁殺など、そへて云に、たり）【めでたきとは右のごとくよき古語なるを後世人歌にはよむべからずといへり俗に祝ふ事の様に云を耳なれて聞くるしとにや】と讀てその木のもととはたちてかへるに日くれになりぬ御ともなる人酒をもたせて野より出来たりこのさけをのみてんとてよき所をもとめゆくにあまのがはといふところにいたりぬ【既にいへる如く御供の中に狩のみ専らせざる人々も暮がたになれば御在所へ來たるに酒をもてこしなりはやくも酒はありしか又興をかさぬるとてなり】

天の河は右の交野のほとりにあり

みこにうまのかみ大御酒まゐる

昔は坏をさす人みづから酌うけて参らすなり○おほみ
ききは酒の古語にてくろき酒白酒など云きに同じ大御
てふ語はすべらぎの御事にのみ崇めて申事なれど此
子皇をもことになふとみてまか云なるべし(又此文書
し比はすでに事の轉せしも多ければ心のつかでも書つ
るか猶さはあらじかし)【古事記などに大御神大御食
大御歌など書たるは皆おほみとよむべしそれが中に音
便にておほんとなふるも有たおふみとよむべきも
あり意は同じきなりこれらはまれたる事ながら後世の
俗はこゝろ得かぬればいふ】みきを古本に三寸と書
しは借字なるをこれらによりてや顯昭など三寸の字に
つきて附會の説を云はあまりに古語にくらかりけり
みこのたまひけるかた野を狩てあまのがはのほとりにい
たるをだいにて歌をよみて坏はさせとのたまひければ彼
馬の頭よみて上げる
かりくらしなばたづめに宿からんあまのかはらに我は
來にけり
天の河邊には織女【織女と書たるをおりひめとよむは

にはあらじ】のすしは誦の字の音なり萬葉に誦古詠
と書たる意なり

一とせにひとたびきます君まてば宿かす人もあらじとぞ
おもふ

織女はひたふるに彦星をこそ待たれば他人に宿はかさ
じとおぼゆとなり此君はひこ星人は織女を指ていへり
○萬葉に「わたり守はや船よせよ一とせに二たび來ま
す君ならなくに又一とせに七夕のみあふ人の戀もつ
きねば夜の更行を
歸りて宮に入せ給ぬ
是は暮てかへりたまふなれば都の宮にはあらず天の川
へよりほどなき水なせの宮なり

夜更るまで酒のみ物がたりしてあるじのみこゑひて入た
まひなんとす十一日の月もかくれなんと爲とて彼うまの
頭のよめる
あかなくにまだきも月の隠る、か山のは逃ていれずもあ
らなん

夜の御座に入たまはんとするを月の入にたとへつ○山
のは逃ては後の世に少聞よからずと爲れど時につけて
はいと興ありておもしろき事に昔はいひけん土佐日記

後人の俗よみなりおりひめといふ事はたなばたつ女に
は必要な事なり】の宿の有べしこゝにしも狩くらし
ぬる今日なれば其宿をからんとなり所につけたる心詞
のをかしきなり○たなばたは柵機のことゝろにて機は女
のわざなれば女星をいふさるからにたなばたつ女とい
ふ津は助辭女はをみななり萬葉に男星にならべて織女
と書たるをたなばたづめとはよみたり是をたなばたと
のみいへるは略言なり然るを後世の人たなばた妻てふ
事と思へるはいとあやまれり(又七夕と書ては萬葉に
なぬかのよとよみたり是をも後世人はたなばたとよむ
事とおもへりいとことわりなし)【歌の題に七夕と書て
たなぬかのよとよめるはよし歌の中に七夕と書てたなば
たとよむはあやまりなりたなばたづめとも略してたな
ばたとよめる歌を字にては織女とも書べし】

みこ此歌を返々すしたまうてかへしえしたまはず紀の有
常御ともにつかうまつりてそれが返し

かの歌のめでたきにつけて御かへしの出来かねたるな
りかへすくすし給ひて云々と書るを見るべし【或説
に此み子歌よくよみたまへど酔たまふ故に御かへしの
でき給はぬにやといひたれど文のさまを思ふにまか

にこよひの月海にぞ入る是を見て業平の君の山のはに
げて入れずもあらなんといふ歌なんおぼゆるもし海べ
にてよま、しかば波立碍て入れずもあらなんとよみて
ましやと書たるにも古今集にも入たるにも貫之の興せ
られしを知べし六帖に友則の「入月を山のは逃て入す
とも人の心をいかつたのまんとよめり
み子にかはり奉りて紀のありつね
おしなべて峯もたひらになりな、ん山のはなくば月もい
らじを

峯もすべてあらず平らなる地なれかしさらば月の入ど
ころなからんをとなり○なりな、んはりなの約らなれ
ばならんてふを延て云なり○此歌は後撰に上野の峯
雄が歌にて「大かたは峯もたひらに成な、ん山のあれ
はぞ月もかくる、と有り然れば古歌なるを少かへて有
常のかへしの歌としたり他し歌をまか用ゐなすぞ此文
の例の巧なる【此文已に有て且有常の歌ならば後撰に
峯雄の歌とせんやは】且文は後撰よりも後に作れる一
の證なり落帖六帖も同じ

むかしみなせにかよひたまひしこれたかのみこれいのか
りしにおはします御ともにうまのかみなる翁つかうまつ

りぬ日ごろへて宮にかへり給ふげり
 日來經てとあれば是は京の宮にかへり給ふをいふなら
 ん祿も京にてこそあらめ
 御おくりしてとくいなんとおもふに【御送りしてとくい
 なんも京へ歸りつきての證なり】おほみきたまひろくた
 まはんとてつかはさゞりけり此馬のかみ心もとながりて
 枕とて草ひきむすぶこともせし秋の夜とだにたのまれな
 くに【草の枕といへば京の宮にはあらじと云人あれど是
 はかりそめの枕てふ事を旅よりのうつりにていひたれば
 京にていふが中々におもしろきなり】

此大兄の皇子をおきて四のみ子を太子に立られしかば
 さる事さしてうらみ給はぬ御心とはいへどなか世の
 中物うくおぼさざらんさればさる御けしき有てかくと
 さらになごりをしげに玄給ふ馬頭のうたがひて出家し
 たまはんにやとおもふ心もとなさに今夜はとけて寝べ
 からず末ながかくて見奉らん事ともたのまれねばて
 ふ意をふくみて表は春のみじか夜なれば枕もとらでつ
 かうまつり明してんと讀るなり短き事の裏にて秋の夜
 とだにとは云り【上の條にうき世に何か久しかるべき
 歌に感じ給ふよりこゝにては世をのがれたまはん御け

しきあるやうに書次には終に御くしおろしたまふとい
 ふやう／＼におもはせたる文の巧を見るべし】
 とよみける時はやよみのつごもりなりけりみこおほと
 ごもらであかしたまうてげり

大かたは前の條につゞきたる意あれどはた度々狩にお
 はしましけるよしに書たるによるに是はこと度の春の
 事ともすべし然れば終に月日をもえるし且歌に春の盡
 るを、しむにつけてねす明すてふこゝろをもそへたる
 にや【春を、しむ心をそへたるも歌のおもてのみうち
 にはみ子の御さまのおぼつかなきを思ふを云】
 如是しつ、集祇承けるをおもひのほかには御くしおろし給
 うてげり

【髪は櫛してけづる故に櫛をもやがて髪に事にいひな
 すならん皇后などの入道したまふを御かざりおろし給
 ふと云類なり】

三代實録に貞觀十四年七月四品彈正尹惟喬親王薨疾
 頓出家爲沙門(御とし廿九なり)とみえたり或説に太
 子に立たまはで出家し給へるを思ひの外なりと云とい
 へるはさる意をもふくめて書つらん事もよりなり○
 此みこ惟仁の太子と御位争ひたまひしてふ事後に云は

流言とみえたり三代實録に此み子出家の、ち封戸を辭
 し給ふ表、文三度までありし其勅、答の狀を思ふにさる
 みあらそひ有しとは聞えざるなり【すでに出家したま
 ひて深く道に入たまひ富貴に御心なかりし事實録にて
 表らる又東寺の悉曇をふかく知らせたまひしよし物に
 みえたり】かの大枝をこえてなど童謠も有しをおもへ
 ば世にはかたむきし人も有けんさればさま／＼いひけ
 んかし

む月にをがみたてまつらんとて小野にまうでたるに比枝
 の山のふもとなれば雪いと高し玄ひてみむろにまうでて
 拜みたてまつるにつれ／＼といと物がなしくておはしま
 しければや、ひさしく侍らひていにしへのことなどおも
 ひ出て聞えけり

言少くてあはれさ残る物なく書たり○む月とはもとつ
 月てふ事なりもつの約めむなれば玄か云(親月と云は
 いふにも足す古言玄らぬ人の唐字の意もていへるはみ
 なこの國の言語にたがへり)もどつは本なりとをばぶ
 きてもつをつめてむ月といふなり○小野は山城國
 愛宕郡にあり神名式和抄その外にもみゆ比枝の山の麓
 とさへいへればうたがひなし【丹波國の小野なりと云

は論にもたらず】○雪高しといふは水かさ高きてふを
 もて思ふにそこら谷も何もうづもれたるを云なるべし
 さる雪の中に物かごかならん御宜におはするさまおも
 やひるべし【古今集には惟喬のみこのもとにまかりか
 よひけるを頭おろして小野と云所に侍りけるにむ月に
 とむらはんとてまかりたりけるにひえの山の麓なれば
 雪いとふか、りけり玄ひてかのみむろにいたりて物み
 けるにつれ／＼としていと物かなしくてかへりまうで
 きてよみておくりけると有をかく此文にはかへたり】
 さてもさむらひてしがなとおもへど公事ありければえさ
 むらはで夕ぐれにかへるとよめる(む月はことに公事
 多ければつかふる人まことにいそがはし)
 わすれては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわきて君を見
 んとは

大御位にしもつき給ふべきみ子の山ざとの雪の中につ
 れ／＼としておはするを見てこは夢かとおもふとなり
 忘れてはてふ語まことに玄か有べく且雪ふみ分ててふ
 にいと思ひよらぬさまにておはする意有されど古今集
 によるにもとは歸りて後に參らせたるなれば後に夢か
 と猶おもふとなり此文には直におもひしさまに爲かへ

たり。おもひきやとはかねて思ひて有けるやはなりけり。の約めきなればまかいへり。とよみてなんなく。來にける。

此詞今本にはなし。是は古今集の旨をかへてたゞちに見奉たる時にしてよみたりとするをたしかに見せん料なるべければ古本に有ぞよき。【此時のみ子の御かへしてゆめかとも何か思はんうき世をもそむかざりけんほとぞくやしきてふ歌新古今集に入たれと古今集にも入す且此文は贈答を専らとするにもせず又歌の姿情も古歌とも聞えず夢かとも何か思はんといへる詞もおくる歌のさまとは大にことにてつたなく其比のありさまならず又古今集に此ことの歌二首あるは同じ口つきにもあらず侍るをおもへば好事の偽作なりけんを古歌を能も味はぬ世なれば誤られしなるべし。

昔男ありけり身はいやしなながら母なん内親王なりける。此いやしきとは官位のまだひききを云なりはた今本にはみやなりけるとあれと古本に内親王と書こきん集には母のみこと有に依に此文もとはみ子と有しを後世に皇子を宮と云事とのみおぼえたる人の書あやまちしならん。【宮中は本よりにて皇子皇女のおはする家をも宮

といひ又皇后皇女などの生たまふを宮腹などいふ語は天曆などの比にも漸にいひしとはみゆれどその皇子をさして宮と云事はいと後の俗なり。】

その母なが岡といふ所にすみたまひけり子は京に宮づかへしければまうづとしけれどまばくもえまうでず一子にさへ有ければいとほしくまたまひけり。

古今集によるに是は實は伊豆内親王と業平朝臣の事なりさて三代實録に父は行平卿と同じと見えたれどはた伊豆内親王を娶て業平を生むと殊に書たれば此皇女の生たまへるは業平朝臣のみなり故に此文にひとり子と書たり然れば寔にいとほしくま給ふべきなり。【三代實録云貞觀三年九月伊豆内親王薨云々桓武天皇皇女藤原氏從三位乙叡女也又云業平者故四品阿保親王第五子正三位行中納言行平之弟也阿保親王娶桓武皇女伊登内親王生業平云々此伊登を後世いとうとよむは誤なり續日本後紀に此みこを伊都内親王と書はた古へは後世にとうとよむ字をつのかなに用ゐたり豆双圖等是なりその外度登などもづに用ゐし所あり其うへいとよむべき事むかしの氏にはなき事なり。】○今本にひとり子と有はいかにそや隙にこそひとり子二つ子と

はいへ人にはひとり子とのみ昔も今もいふなり萬葉にりぬべければ云々此外歌にもさらすてふ事多し。】

鹿の子には一つ子人には獨子と書たるをも思ふべし。【但此古本に二子と書たれと例に依てひとり子とはよむべし。】萬葉に市原王悲獨子歌として、こと、はぬ木すら妹とせありとふをたゞひとり子にあるかくるし又「秋はぎを妻とふ鹿こそひとり子二つ子もたりといへ鹿子しもの我ひとり子のくさ枕旅にしゆけば云々。】○古本に最惜久と書たるは假字の漸あやまれる比のわざなり此語は續日本紀の宣命にいとほしと書れたり惜はをしのなかなる故に此字を用ゐたるは誤りなり且是によるにもこの眞字は暫く後人の筆とまらる

さるにまはすばかりにとみの事とて御ふみあり驚きてみれば（こ、に今本には歌ありとあれと古本になしなきぞよかるべき古今集にはあけて見れば詞はなくてとあり）とみの事とはいと、くいそぐべき事なりこ、は母みこの病たまへる事を告るなるべしさて頓の字音なりといへどさはあらで疾み速みなどの意なるべしみは辭なり。

老ぬればさらぬわかれのありといへばいよ／＼見まくほしき君かな【竹取物がたりに迎へに人々えすさらすまか

本句は老てはえも避のがれがたき死別のあるを云さてとみの事といふに對へみるに心ちをこなたまへる時ならん然ばいよ／＼見まほしくおぼゆとなり一人子にてことになしうたたまふればいと、かゝる時に思はる、情を端の詞に知せて書り。とありけりそれを見て馬にも乗あへず甚痛うちなきてみちすがらおもひける。

此詞古本にかくぞあるふかくなげくさまをそへたるなり。世のなかにさらぬ別れのなくもがな千代もと齋人の子のため

おくられし歌を即うけて其さらぬ死別てふ事の世になくもあれかし親をばいかで千代もまませといはひねがふ人の子の爲にとなりかくわりなく思ひ云ぞ切なる時の實情なるを其ま、に云つゝけたるなり○人の子てふは世中の人をひろく云さまにて中に我事はあるなり○四の句を古今集にはなげくと有此文の今本にはいのると有古本には齋と書たりさて其なげくは歎にて物をふかくおもひて長息つくより起りて神に深く願ふを

もいへりいはふは神に仕るにも君を彌千代といはふに
も凶をいみさけて吉を用うるをもいへり(いづくてふ
も同じ意なり)然れば右のごとくなげくといひいはふ
と云も共に神に願ふわざと見えて古本に齋と書しなる
べし(今本にいのると有もことわりは同じけれどこ、
はいはふとかなげくとか有ぞ古意なりける)【異國に
ては齋祝賀など字にて事をわかつてり皇朝にはたゞいは
ふてふ言のみなれど上下の詞によりてわかる、なり字
に目なれて今の人は古言を委しく意得ざる故にまどふ
事多し】

むかしをとこありけりわらははよりつかうまつりたる君み
ぐしおろし給うてけり

惟喬親王は業平朝臣より御歳八つばかりおとり給へば
此朝臣のまだ童形なる時よりつかうまつるなど云事う
たがはし是も物語にや(業平も二世の王にして且長岡
に生立給ふほどなるべけれど御あそびがたきなどにも
あらじかし)【或説にみこのわらははよりてふ意なりと
いへどさる心ならばわらはにはおはします時などこそか
かめ】

む月にはかならずまうでけりおほやけの宮づかへしけれ
ころなる

ばつねにはえまうでずされども本の心をうしなはでまう
出けるになん有ける昔つかうまつりし人俗なる禮師なる
あまたまゐり集ひてむ月なればことだつとておほみきた
まはりけり如是間に雪こぼすが如ふりて、日ねもすにや
ますみな人ゑひて雪にふりこめられたりといふをだいに
て歌よみけり

ことだつとは正月はよろつこの事の立をむるとて祝ふを
云古本に言立と書たれば祝言を云にも侍るべしされど
此古本事と言とを打通して書る例多きによるにも猶事
のかたならん○ひねもすは日目もさながらてふを略け
り【ねとめと通ふ故にひめもすともいへりさて萬葉に
日の目もみせずともよみ今も日のめてふ言は云なり目
はいにしへ物のみゆるにそへていふ言なり】夜もす
がらに對へる語にして是は夜もさながらてふ意なるを
えらるさてさながらは其ま、に同じこ、は雪の朝ふり
出たるま、に暮るまで降わたるを云(ちかき世にはよ
もすがらてふ語を禁むやうに云説有古語をいかに心得
たがへつるならん)

おもへども身をしわけねばめがれせぬ雪のつもるぞ我こ
ころなる

かくいつまでも此所につかうまつりなんとはおもへど
宮づかへの避がたくて分べからぬ身の爲んかたなきに
雪のつもりてかへり難にするは寔にかくて在まく思ふ
我心のするわざなりけりといへりこは古今集の別れに
(伊香のとしゆき)「おもへども身をしわけねばめにみ
えぬ心を君にたぐへてぞやるてふ歌の本を用末をば
同集の雜に(宗岳の大釋が越よりまうできたりける時
に)雪のふりけるをおのが思ひは此雪のごとくなんつ
もれるといひけるをりにてふ詞を探て一首とせる記者
の歌と見えたり【こも例のむつかしき意をこめたる記
者の歌なりこ、ろあまれるさまをうつしたれど業平の
去らべにも似るべうもあらず】○おもへどもてふ語は
おもへどもくくと深くおもふ意なりと云説はさる事な
り源氏物がたりにおもへども猶あかざりし夕がほの露
わすられたまはずと書る如しされど古今の頃より上つ
かたの歌によめるはさまでは侍らぬを其後に去か心を
含めてもちゐたり【凡いにしへは打有ま、によみたる
詞を中頃より去きりに思ひ入て用ゐたるも多く又さる
むつかしき心はあるまじき詞をさまくあかし過して
むつかしきいへるも後世には侍り】

と讀りければみこいたうあはれがり給て御衣ぬぎて
たまへりけり
みづから作りて書たるも興なり
むかしいとわかきをとこわかき女を會といへりけりおの
おの母有ければつ、みていひ殘而やみにけり年來へて女
のもとより猶この事終んといひければ男歌をよみてやれ
りける如何將念【今本にはわかき男わかき女をあひいへ
りけりとて次に女のかたよりいへる詞なくてたゞ男の方
より歌はやりたる由又次の詞もとてやみにけり男も女も
相はなれぬ宮づかへに出にけるとありよて諸説大にこと
わりことに侍れど上の文を思ふに女のかたより思ひおこ
していへるを男は思ひの外なる返しせし故にいかゞ思ひ
けんでふ詞も古本に有なりかつ次の詞にも男尙相はなれ
ぬとありなほの詞を見るにもさるななき返し返し去て尙
はた相はなれぬ所に住を一つの事とせしなり○今本には
いかゞ思ひけんでふ詞をもらしてかたぐ改たる事例
の此文を實事と思ひ又かの思ふをも思はぬをもけぢめみ
せぬなど有になづみてこは人わろしとて私になはせしな
らん】
はじめ弱きほどには男の方より女に逢んといひしがや

みつるをその後は女の許より其事とげんといへるに今となりては男のいかさまにか思ひなりけんかくなめげなる歌をやりつるてふ意なり

いま、でにわすれぬ人は世にもあらじおのがさまん、年のへぬれば【此歌をしも後の撰に入たるはいかにぞや】そこはまかのたまへとおのくゝとさまになりて年経つれば我は今はおもひたえてぞ侍る我のみさとおぼしそかくて忘れぬ人は世上にあらじとなり我わすれし事を世の中のならばしもてことわるなりかくては情なげなれど此文にはさるさまなるをもあまた舉たりこれもひとつの咲ひ種なるべし【此文には男のなさけなきをも女のなさけおくれたるをも多く書たり皆よろしきをのみ云ては興なき故なるべしさるを此文もて世の中の人々の心をも教ふべく思ふ説どもはいとまひたる事なり】といひてをとこ尙あひはなれぬ宮づかへになん出にけるこは巳にも有しは同じ所に宮づかへする男女は有物かとも思はぬを女の目には見ゆるものからなど書たる類にて女のためいたまきう書たる者也右は皆古本の旨にていへり今本には詞ども落又違ひも多きは人わろしとて好事の改めたりとみゆ此文の人わろき是のみかは

むかし男津の國うばらのこほりあしやの里にゑるよし、ていきてすみけり

ゑるよしとて今本に有も即いにしへのま、なりけんかし其意を知らせんとて古本に所知在而とは有つらん詞少たらはぬやうなれど猶昔常にいひけん語ともおぼゆればあへてことわらずさて此男はきとしたる宮などもまだなくて散位歟又權官にて暇あれば京ちかき我知れる所にも住を云ならんよりてなまみやづかへとも書たりけん

昔の歌に
蘆の屋のなだの鹽やきいとまなみつげのをぐしもさ、す來にけり
とよみけるはこの郷をよみけるなりけり此所をなんあしやなどとはいひける

古への歌は萬葉に（石川郎女が歌なり今本女を少と書たるは誤なり）まかの養は羊布刈鹽やきいとまなみ髪梳の小櫛とりも見なくにと有て筑前の國まかの海人をよめるなるを所をかへ詞をかへてこ、の蘆やの里の古歌とまたるは此文の例の事にてひとつの興なり最はじめにみらぬのまのふもちすりてふも詞をかへて用ゐ

たるに同じ凡は古歌を昔の男又女の歌ともとりかふるが多きが中には此所の古歌なりとまたるはたをかし【後の集に是をも業平の歌として入たるはいともいはんすべなしいかで古書をよく見ざりけんそれたすけんとてあらぬ説をいへり偽りかざりて注をせんよりは中々に注せであれかしいで古書をことわらんならば人の聞て明らかにゑりえんやうにこそ云べけれさるあやまれる人をたすけんわが身もにくまれじとてことわりをまげ侍れば又後の人をまどはす科いくばくぞや 今本にはとよみけるこのさとをよみけるとあるは上のよみけるの下に者の字をおとせしなり古本の正しきを思へ】

此男なま宮づかへしければ
なまてふ語は巳にいへりさて右に云がごとく此をとこは權官などなるを云るならん【此宮づかへてふに付て業平の自記なれば遙の證なりと云は例の云にたらず】それをたよりにて衛府の佐とも集ひ來にけりこの男のこのかみも衛ふのかみなりけり

こは暗に業平朝臣又行平卿の事を作れる條なれど各の任官の時をたがへてまぎらはしく書たるは此文の例な

り業平朝臣衛府の權の佐なる間は行平卿は督にあらす卿督となりては朝臣は左近衛の權少將なりされど此官等と思ひふくみて衛府の佐どものつとへかとは書りて見ゆ（佐等たれかれ來たるに督の行平卿もいたりけんを云なり下に督の歌をあげたればこ、に相てらして知べし略して書たるなり）【三代實錄に業平は貞觀五年二月左兵衛權佐同六年三月左近衛權少將行平は同六年三月に右兵衛督同十四年左衛門督と見えたり】その家のまへの海のはとりに遊びありきて卒この山のかみにありといふぬのびきの瀧見にのぼらんとといひて登りて見るに

布引の瀧は同郡の山中に有て生田川の水上市なり海邊より見ればまことに布を引かけたる如く二段におつ○いざとはことをおこす辭にて人をさそふ意とも成る故に古本に卒の字を書り【砂の山と意得しなどはいふにもたらぬひが事なり】

其瀧物よりも異なり高二十丈ひろさ五丈ばかりなる岩の面にゑら絹に岩をつ、めらんやうになん有ける【古本に高さを長さとするはわろし歌にも何れ高けん讀たり】此條すべておもしろく書なしたり○物よりは何よりな

と云がごとく其物をばさらず略して云語にて物へまか
る物してなど云類なり源氏物がたり真木柱に物よりこ
とに花やかなる御うしろ見云々枕ざうしに(五節)行事
の藏人のかいねりがさね物よりことに清らに見ゆ云
云
さる瀧のかみに茵ウラコの大ききしてさし出たる石ありその石
のうへにはしりかゝる水は小柑子栗コカシの大ききにてこぼれ
おつ

瀧の状さまよく書とりたり○わらうだは和名抄に圓坐(和
良宇太)枕冊子に(雪の山きえのこるさまを)わらうだ
ばかりに成て侍る○小柑子は三代實録に太宰府例貢
小柑子云々性靈集に(柑子をたてまつる表文)小柑
子小楸大柑子四小楸云々皇朝にて今の京のはじめつ
かたに小柑子と有は金柑子ならんか大かうじは今の柑
子てふ物歟恐らくは密柑シカを云ならんと覺ゆ【後の世に
大柑子とて常の柑子より大なる有はいと後にいたれり
とみえたり又九年母てふ物も後にわたれりと覺ゆるな
り此文の比なるは右の物にはあらでいはゆる密かん柑
子のたぐひなるべし】續日本紀神龜二年に佐味朝臣弟
兄が唐國へ行て柑子を持て來しに其兄あに蟲むしまろ其種子を

植生して今年初めて子を結びたる功を譽たまひて從五
位下を授られし事有こは今いふ柑子歟
我世をばけふかあすかと待かひのなみだの瀧といづれた
かけん【はし書又繪などの意よむは其詞其繪にゆづりて
除の意をよむべきなりたとへば杖をおくりてつくからに
といひ雨のふるをはしにいひて歌にはぬれつゝぞとよむ
が如くなり詞と歌とてらしてゑらるゝ故に心もふかく歌
もゆるやかにてよろしきなり此心を後人はわすれて侍れ
ば古歌をとくにたがふ事多しこは題とて文字にてのみ書
る時より失ひていにしへをわすれたり文字題よむにも右
の如く意得たらんにはよろしかるべしあまりに俗情を以
てことわりをせむる故に今はたゞ屈したる歌のみ出来る
ぞかし】

や、齡よほの老てつひの命を待間の物心衰さにおつる泪の
瀧の高さは此瀧に争ふこゝちすればまかよみたり唐詩
に白髮三千丈縁愁似個長といへり古人の心はい
づこも同じかりけり○待かひとは待あひだなり山の
間など云に同語にてあとかと音便にて通はしいふの
み○涙の瀧とは涙のいと多くくだるをいひてこの瀧を
見つゝ、あれば其はいはで我泪の瀧もてかれに争ふぞ古

歌のいひなしの常なる然るを後世人は意得ずして涙の
と句を切て瀧は實の瀧と意得よといふはわろし(泪の
てふ此のは之と意得んも常の事ながら此歌の類にては
まからず)古今集に「おろかなる涙に袖に玉はなす我は
せきあへず瀧つせなればともよめり(定家卿の歌に)布
引の瀧に涙をあらそひて我年なみのいづれ高けんと有
も涙の瀧に實の瀧をかねたり其流くむ人いかで其師の
歌をもよく見ざりけん後の人の歌などは引も益なけれ
とはた其説いふ人の爲にいふのみ)○いづれ高けんは
いづれが高かるらんでふを略していへり語はかるの約
めくなるをけに轉じて其けの下のらを略してけんとは
云なり○此條の意にては骨とは行平を指すなりされど
歌は古今集其外の書にも載られぬは記者のつゝれるな
るべし行平卿の口つきにも侍らず

あるじ次によむ
こは彼昔の男にて業平に擬たり
ぬき亂る人こそあるらしゑら玉のまなくもちるか袖のせ
ばきに
水上に誰人の在てかく白玉を貫亂しつゝ、我袖におとし
入ぬるにかゝせば袂にはつゝ、みあへざるをとなり

且瀧をほめてはた身のほどをうれへたりこゝを助けん
とてなま宮づかへする男など、書るなるべし且是も瀧
は見るくよめば餘意をのみいへり伊勢の御か龍門の
瀧を「たちぬはぬ衣きし人もなきものを何山姫の布さ
らすらんとよめるたぐひにて古人の歌の常なり(此後
に後撰拾遺などに右の歌をとりてよめるが多けれど皆
おとりたり)【後世の人は瀧をいひすゑてはた餘意
をいはいんとする故に風情ある事なしこゝをよよく思ふ
べし】
とよめりければかたへの人わらへごととにや有けん此歌に
めでつゝ、停とどにけり

よき歌の中にわろかめるを出してはそこらこゝらの人
の笑はれごととにや有つらんとなり是は後に記者の思ひ
はかりて書る詞なり人わらはれをわらへと云ははれの
約へなればなり【今本にわらふごとと、と有はわろしわ
らへごとと、よむべし人わらへてふ詞は物がたりともに
常ある事なり】○古本諸人をかたへの人とよむはもろ
もろある中に一人をいふ時はかたへに多くの人ある故
なり【是をしも業平の自記などいへるはいかなるひが
心ぞ人わらへごととにや有けんと云は其時他の歌共のな

きを推はかりて記者のいへる詞なるをや且日記とせば
みづからほり過したる事となるべし】
かへりくる道とほくてうせにし宮内卿茂能之家のまへ來
るに日くれぬやどりのかたを見やればあまのいさり火お
ほく見ゆるにかのあるじのをとこよむ

其瀧の邊より葦屋のさとへは今の道三里ばかり有ける
ほどにかへるさの様いとおもしろく書たり○宮内卿も
ちよしは何人とも問べからず道の行手に有べきさまを
設けて書たるなり【茂能てふ人は史に有しかどそれに
はよらでげにもさる人の家などの有が如く書たるに興
はあるなり】○いさり火の事は冠辭考にいへり
はる、夜の星か何邊の螢かもわがすむかたのあまのたく
火か

日暮て家路遠く歸るさまにあの見ゆる火影の多きをか
れは何ぞなどいひつゝ、來るけしきを即よめり故に見
まどへる事を三つ擧てみづからうたがへり歌は記者の
にてわろかめれど夜べに有ぬべきさまを思ひて作れる
をかし【此うたをしも業平のなりとて後にはとりけん
かし名とふみとに恐れて實に見わかちがたきなりけ
ん】○一首にうたがひのかを多くおく時は意のつくる

昔しにもあらん
つとめてその家の子ども出て浮みるの波によせられたる
をひろひて家のうちにもてきぬ

朝まだきに家人等の濱邊に出たるに夜への浪風に根を
たえてよりたる海松の有を持て來たるなり所のさま思
ひやるべし○つとめては已にいへりしめてとはたゞつ
けたる辭のみにあらず風まけてと云なり萬葉に夕方ま
けては夕方に向ひてなり春かたまけて春まけてともよ
めりや、春べにむかふなり夏まけて秋まけても是に同
じまけの約めなればつとまけてをつとめてとはいふ
さてまけもむきもめきもかよはせて語の便にまかせて
いふのみ【春へ夕へのへはかたてふ意なり故に萬えう
に夕かたまけてとも夕かたともいへり】
女之方より其海松を高坏に盛て解を覆ひてそのかし葉に
かけり（今本にはかゝるをみな女がたとあれど古本によ
るにむかしは女のかたといひけんかし）

かゝる物盛たる古へのさま知るべし且其かし葉に書た
るも風流なりさて萬葉に（能登國歌）かしまね【萬葉
の今本に所聞たねをぞもたねとよみたるは何の事とも
なし是は所聞たはかしましきてふ意にてかしまねてふ

所なき物なれば是に傳へごと有など後の人はいへど
穿ちたる事なり此道すがらの事をおもひなばなに事歟
あらん

とよみて家にかへりきぬその夜南風ふきて波敷虚いと
高し【定家卿のあしやの里の夏の日にうきてよるてふと
よみしは此南の風と有につけてさもとりなすべきなりさ
れど其歌になつみて此南の風を必しも夏なりとのみ思ふ
べからず續日本紀天平寶字五年九月攝津國御津村南風大
吹潮水暴溢とも見えたり此文の南風はみるめのよれるを
いはん料に書たればいつにても侍るべきにや】

なごろは萬葉に澳つなごろとも沙干のなごりともよみ
たるは沙のよく干たる時海の底に波の凝たるが如くて
有を云今の人の干ぞこりと云是なりさて神代紀に其矛
銚滴瀝之潮凝成一島名之曰磯取虚島これ自凝島
の意なる事文の旨にて明らかなればなごろとなごりは
一つ物なりすなはち紀に依て此古本には波取虚の字を
もちゐたり然れども此文はさまでの心はあらでたゞ風
吹て浪のいと高しといふまでなるを古ことなればなご
ろと書たるのみか又今の海邊の人浪のおとの高きを
波ごろといへり古へも浦人の常いふ語故に所につけて

地の名にまか借て書たるなりけりとの國の地名にて
和名抄にみゆ】の机の島の小蝶をい拾ひ持來てから鹽
にこゝともみ高坏に盛机にたて、母にまつりつやめつ
子のまけ父にまつりつや美愛子のまけ（まけは設の意
なり）これを以て書るにや
わたづみのかざしにさすといはふ藻も君が故にはをしま
ざりけり

藻は海神の挿頭にていと齋崇む物ながら君たちの御爲
には惜ますして海よりよせ來たりといへり○わたづみ
は海づ持にて海をたもつ神を云事古事記の文にてまら
るさてわたとは海を渡るてふ事古くいひなれて即わ
たを海の名としぬ山を越すといひなれし故に京より高
山を越ていたる國を越の國と云がごとし津は助辭なり
（天つそら國つ神のつ如し）持をみと云はもちの約
めみなればなりよりて此歌のごとく云時は海神の事な
り又轉じてはたゞ海の事にわたづみといへる歌も多く
侍りそは轉用なるを本末あきらめぬ人はまどへるぞか
し【或説に是をわたづみとなへよといへるは私事
なり皇朝の古書は語を主とし字を奴とせし故に字訓に
て書たるをばかな書の有をてらして訓をば定るなりた

とへばわたづみを萬葉に渡津海綿津海方便海などさ
 まく書たれど假字にては皆わたづみと書たり然ば是
 をもて訓を去り且たをすみつをにこりて唱ふべきをも
 知べきなり右の説は渡津海と書たるになづみてまかい
 へるならん古事よむ事を意得ぬものなりたとひ海てふ
 字を下に付て書たるも記に近江の海をかなにてあふみ
 のみと書る如くたづみの一言のかなに用たるなりかつ
 其用ゐざまは梅を宇梅柳を楊奈木と書しが如くそれに
 付たる字をもちゐて興とせしなりかく字をばいかにも
 もちゐたれば字にはよらで語の本を極めて後に解はな
 すべきを後人は不意にのみ思ふ故にあやまれるなり」
 ○わたづみのかざし云々とよめるは古今集に「わたづ
 みのかざしにさせる白栲の波もてゆへる淡路しま山又
 萬葉に「おきつ波よせくる玉藻片よりにかづらにつく
 り妹が爲手に免もちて云々これらをもて記者のよめる
 なるべし
 ゐなかうどの歌にはあまれりやたらすや
 上に田舎人の詞にてはよしやあしやと書しに同じくさ
 だかに書ぬがおもしろきなり
 昔いとわかき人にはあらぬこれかれ友だちとも雲集而月

を見てそれが中にひとり
 凡四十ばかりの心にて書るならんこきん集には題を
 ずと有をかく詞をそへたり歌はまがふべからぬ業平朝
 臣のうたなり
 大方の月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるも
 の
 凡の虚の月影をめぐるはもとよりの事ながらそをだに
 めづまなくおぼゆるは此月てふ物のつもりつ、年とな
 りてかく老となりゆく物にしあればとよめり此意を合
 みて端にいとわかき人にあらぬとは書たりさて此うた
 の本には天の月の事をいひ末には是ぞ此てふ詞をおき
 て年月の月に轉せしなり【或人月を見て損顔色てふ
 如く感慨に過て老となる意なりといへるは是や此てふ
 詞の例を考へぬ説なり】これぞ此てふは何にても語同
 じくこゝろの異なるをいひつゞけて比をなす一つの語
 なり萬葉に（阿倍皇女越前山時）「これやこの大和に
 しては我こふる紀路にありとふ名におふ夫の山とよみ
 たまふも夫の皇子の夫を轉じて勢山の名によせたるな
 り此外いと多き詞ぞかし（これや此のやは疑のやに非
 ずよと通ふやにてこれよこのといふ意なり然ば是を此

てふ詞も同意となれり）【萬葉にはいづれもこれや此
 と有を朝臣は是ぞ此とよまれしのみ】○大かたは凡と
 云に同じさて此歌は古今集にも此文の今本にも大かた
 はと有を古本には大方之とあり然れば常に天に見ゆる
 月をおほかたの月といひさてそれがつもりて終に身に
 つもるとし月の月となるとよめるにて理り明らかな
 り大かたはと有ては大概ならば月をも愛まじきてふ意
 となる故に下にかけて見る時むづかしくて明らかに解
 がたく古意ならぬ所あり仍て思に此文に大かたはと書
 ぞこなひしを古本もてよくも正さぬ例の人古今集をも
 なほしけんかしさる類多き事なり○物といひとむめた
 る歌いにしへ一つ二つ有たゞはかなくいへるのみ
 むかしいやしからぬ男我よりはまさりたる人を思ひかけ
 て年へける
 男も賤からぬが上にそれよりは増りたる人を戀ると云
 はいともやんごとなき女を云されば戀るとだにえまら
 れがたきあたりなりけり
 人まれず我戀しなばあぢきなくいづれの神になき名おほ
 せむ
 思ふとだにいひもまられずて戀死んずるかなさてだに

かひも有はいづれの神の崇りとか神になき名のみ負せ
 んずらんがいたづらにあぢきなき事よといへり人まれ
 ん戀するも有ならひながらこはいとやんごとなきあた
 り故にえまらするよしなきなり○古本味氣無は此字あ
 たり凡人情を五味にたとへて云中に是は苦々しと云
 が如く心に味氣のなきなり心よしと思ふをば古へはう
 ましといひつるにむかへてまらべし（から園にも五味
 にたとへていへる事常なり）此歌は萬葉のあづまうた
 に「我せこにわが戀まなばそわへかもかめにおほせん
 心まらずて又「ちはやぶる神にも莫負うらべす系偏も
 なやきを戀しくにいたき我身を云々古今集に「戀しな
 ばたが名はた、じ世中の常なき物といひはなすともこ
 れらの歌を以て記者の作れるなり
 むかし男つれなき人-いかでと思ひわたりければあはれ
 とや思けん
 是は昔男いかでとおもひければつれなき人のあはれと
 や思ひけんと隔句における文の一體なり（今本には男
 てふ語をもらしたり思ひわたりければと有はさてもよ
 し）
 さらばあす物ごしにて物將云といへりけるをかぎりなく

うれしがるまたうたがはしかりければ面白かりける櫻につけて

かるのかはくあの約かなればうれしくあるをつめていふなり○また古本に復と書からは清てよむべし濁るは未といふとは意ことなり【古本に猶をうたがはしとよめるは猶豫の略にはあらで疑の草の手よりあやまりしならん猶といとちかし】

櫻花けふこそかくもにほふらめあなたのみがたあすの代のこと

櫻花のあだなるにたとへて明日の代の人心の頼まれがたきをいへり代に夜をかねたるなるべしといふこゝろばへもあるべしかく詞をそへたるはいとも強顔かりつる人の物いはんといへるがうれしき餘りに中々うたがひのおこれるを云なるべし

昔月日のゆくをさへなげくをとこ三月の晦日に大かたの人の過る月日を怨むとは異にておもふ人にえあはでいたづらにことしの春もくる、事よとなげくなり故にさへてふ語をおけり只一言にて意をふくめたるは一つの文の體なり

をしめども春のかぎりのけふの日の夕ぐれにさへなりにけるかな

心は右に云が如しさて此うたは後撰集に（題しらすよみ人不知）三句をけふも又と有てた、春の暮るを惜むのみなるを端の詞を加へて戀の歌とせる巧いと面しろし【なだらかにて意ある歌なり今もかくこそよむべかりけれ】

聞知る人もなしや右の詞と合せて意得べく書たるを今の本には此詞落たり

むかし戀しさに來つ、かへれと女にせうそをだにえせでよめる（えせでてふ詞によるに女の下ににのことは落たるなりける）來てはいたづらにかへりつ、まかりとだに女に傳ことせん山のなきなり

あしべこごたな、し小舟いくそ度ゆきかへるらんまゐる人をなみあまた、び來れと女にさとしもまられでかへるを慮の繁みを行かへる小舟の見えぬに譬へたりこは古今集に（よみ人まらず）「堀江こご棚なしをふねこごかへり同

じ人にや戀わたるべきてふをなほして作れるなり【是をも業平の歌として後の集にとりしはいかにぞや】○棚なし小舟は萬葉に舟だなうちともよみたるに和名抄に柩をふなだたと記せるを合せて見れば其柩の無き小舟を云なり【柩は舟の左右のはたにある板を云俗にあかぎの板なり】○いくそたびとは幾十度の意なり十をそといふは古語なり

むかし男身はいやしうていと高き人を思ひけり少しもたのみぬべきさまにあらすやありけんふしておもひおきておもひ侘て

いやしき身もて似つかぬ貴人を思ひかけたればいかに思へども少だに成ぬべきよしのなくや侍りつらんされば夜晝おもへどもかひなきにわびはてたる後に我身をつみたる歌をよみしを云なり○今本に右の詞を少たのみぬべきさまにや有けんとは有は詞の落たるなりさらばなどかふして思ひおきて思ひ侘てといはん前後の詞と歌とをよく考へば語の脱たるもあまれるもまことあやまりも明らかならんを後人は疎かに見過せしなりけり○になき人とは似つかざる人を云六帖に似なき思てふ題に皆我より高き人を戀る歌を載たるにてうたがひ

なき事なり或説に二無なりといへるは俗解なり古語に字音はなし

随分おもひはすべし比なく高きいやしき苦しかりけり身の分に随ひたる戀をこそすべけれいやしき身のほどに比類がたき貴人を思ひ懸れば成がたくしてくるしきなりといへりならぬ戀に侘はて、後に思ひさとれるさまなり○おふなくてふ語はよく解得たる説なかりしを此古本に随分と書たるにて明らけしいかにぞなれば我身のほどに随ふ意にてまか書たれば我身力のほどに随ひたる重荷を負いたとへたる語なり故に假字もおふなおふたと書べし（なほそへていふ辭にて朝な／＼などのなと同じきなり）物語におふな／＼のたまふてふ語多きも皆身の分を盡していふ意なり負氣無てふは力に堪ぬ重荷より出たる語なるにてもおもへ（此語の本は御位につきます時の宣命などに續日本紀に見えたり【源氏物がたりなどにおふな／＼のたまふなど云もその身の力のかぎりをたとへ云にて侍れば摘ではねもごろなる意となれりされど其ねもごろなる心とはいかで聞ゆるにやと問に答る人なし凡のことばに本末輕重轉用あり其本をきはめたる時はいかに轉じながれたる

をもちたる、なり又本の意は前なる語の轉じて他のことばと同じ様に聞えなざる、もあれどそれも本を尋ねてみれば去らる、なり】○なぞへなくとは比類せざるを云語にてこ、は高きと賤きとひとしからぬをいふのみ【或説になぞへなくとは平等と書と云はいかにぞや平等にてはなぞへとはよむべしなくと云からは不平等とこそか、め只なぞへとのみいへば萬葉に「我やどにまきしなでしこいつしかも花にさかなんなぞへつゝ見ん又「ほと、ぎすこゆ鳴わたれ灯を月夜になぞへ其影に見んこれらなりそれになきてふ語をそへて意得るに何のうたがひかならん】此語共を意得ざる故に此條をいと思ひ誤れる説あり

むかしもかゝる事は世のことわりにや有けん末の世には物ごとと貴き賤きけちめをなすが昔は人の心なほければさもあらざりけんとおもはるゝに昔すら世はさる物にて及ばぬ極はきはとこそ有けるらめと評せり此評にて右の歌の意いよ、明らかなり昔をとこ女ありけりいかゝありけむその男住すなりにけり後に夫有けれど子ある中なりければ細かにこそあらねど時々ものいひおこせけり

とみゆれば必とは老がたき事なり心をやりてみるべきのみ○あらはひはあらひを延て煮かいふ】

かの男いとつらくておのが聞ゆることをば今まで煮てたまはねばことわりとおもへどうらみつべき物になんありけるとよみてやりける時は秋になん有ければ今本によみての上にならうじてと有はあしからず是は暁の字音にてあざけりてといふ意なりさか木の巻にさらにかろめろうせらる事にこそはとおぼしなすにと有に同じ【ある説に瀬の字なりといへるはより所もなし】○時は秋と書るは今の夫を今の秋にたとへたるを煮らするなり

秋の夜は春日わする、物なればかすみに霧や立勝るらん
秋と成ては去し春をば忘る、事世のならはしなるをおもふに春霞よりも秋霧はいかに立まされる故にやあらんといひて昔の我よりも今の夫をばいと思ひまさるらんとそへたり○古本に立勝ると有にてこと足れるを今本にもへまさるらんと有は語の俄且めきたるをもて思ふに立の草書をちへとよみあやまれるならんか三の句も今は物なれやと有はわろしさてはことわりも明らか

近きほど或人のいへるは此男は業平なり女は右大臣良相公のむすめ染殿内侍にて子は滋春なり【此内侍は滋春の母なれば子ある中とはいへり】後に夫ありとは近院右大臣能有公なり大和物語にさるさま見えたりと此説よくあたり然れども此條の歌は業平の讀りとも聞えず記者のならんより思ふにさる面かけ有事もて端の詞は作りてさて歌は記者の讀て一條とせしなるべし女のかた【是も古本女之方と有】にゑかく人なりければ扇にかきにやりけるを今のをこの物すとてひとひふつかおこせざりけり

大和物語に染殿の内侍といふいますかりけりそれをよしありのおとゝと申けるなん時々すみたまひける物をよく煮たまひければ御衣どもをなんあづけさせ給ひけるに云々又云在五中將すまますなりて後中將のもとよりきぬをなんおこせたりけるこれに洗はひなどする人なきていとわびしくなんといひやりけるを猶必して給へとなん有れば云々と有は此文を書かへたるなるべし【大和物語は此いせ物がたりの文を書かへたる所多しそれが中に人の名をさだかに書るはさるいひ傳へ有し故にも有べく又おしはかりにまひて名を書たるもあり

かならず古本に物成者と有に從ふべしとなむよめりければ女かへし

ちの秋ひとつの春にむかはめやもみちも花もともにこぞちれ
又譬へもてよみたり今の夫の如きは幾許ありとも故の一人に及ぶべきには侍らすされど共にあだ心は同じければと云て事のついでにあだなりしをうらみたるなり
昔二條の后につかうまつる男ありけり女のつかうまつるをつねに見かはしてよばひわたりけりいかで物ごしにてもたいめんしておぼつかなくおもひつめたることすこしはるかさんといひければ女いと惣て物ごしにあひにけりもの語などして男

此男女例のたはふれ事なれば誰とも指べからず然るをこれらをも業平は忠仁公の家禮なれば煮かるなどいふよ時代を煮らぬ人の定なり王孫の人臣家の禮を學ぶ事などはかつてなき時なり已にもいへば略けり
ひこ星に今夜はましぬあまの河へだつる寒をいまはやめてよ
二星の年の契りも物隔てはあはねば我は彥星にまさり

たる戀をするとなげきたり且男のみづからを云故に彦星とはよみたり今本に戀はまさりぬと有もあしからねど猶古本に今夜はましぬとある方を用う

此歌にめで、あひにけり
よくも聞えぬ歌を撃てかへりてかくいふが興なるべし

伊勢物語古意卷六

むかしをとこ有けり女をとかくいふ事月日へにけり岩木にしあらねば心ぐるしとやおもひけんやうく哀とおもひけり

いは木にあらずてふ詞は白氏文集に人非木石皆有情又遊仙窟にもあるより物語ぶみにかたぐ書しなるべし○心ぐるしとは源氏物がたりなどに多き語にて今の俗の苦に思ふと云に同じくなほざりに捨てあられぬ事なり

そのころみな月のもちばかりなりければ女之身に風疹もひとつふたつ出たりければ女のいひおこせたりける今は何の心もなし身に疹も一つ二つ出たり時もいとあつしすこし秋風吹立なん後【少し秋風吹立なん後といへるは秋たちて即の事とのみ思ふはわろし七月の末などの事と見て有なんさらでは此條の始終かなはず】に必あはんといへりけり【今本の詞わろき所々古本によりて改めつ】

今てふより女の詞なりさきには故有てつれなうしつれど今は逢まじき心有て云ならず身に疹も出来時もあるつきに堪ねばこの時過してこそと云なり實に苦きほど

伊勢物語古意卷五終

は身も汗ければ女の用意すべきなり（此かさをいつはりごとく云はわろしさてはやうく哀とおもひけりとあるにかなはず）【古今集に「さかしらに夏は人まねさの葉のさやく霜夜は我ひとりぬる 曾丹集に「せみの羽のうすら衣になりしよりいものとぬる夜のまとほなる哉「うとまねど誰も汗こき夏なれば間とほにぬとや心へだてん」○かさは古本に上に風疹下には疹と書たれば上はかざぼろしともよまるれど暑き最中をいふに熱沸疹なるべきを女のさまで委しくはことわりやらでかさとのみいへるぞよからんさらば二ところともにかさとよむなれど記者の意もて一所に風疹と書てかさの状を去らする歟【和名抄云風癰疹（かさぼろし）人皮膚瘡爲風寒所折則起也又熱沸疹癰熱時潤疹也（あせも）○六月の望は暑氣の最中なれば萬葉に「ふじのねに降おける雪はみな月の望に消ぬれば其夜ふりけりともよめり望は和名抄に釋名に望月（毛知都伎）月大十六日小十五日日在東月在西遙相望也と皇朝にては月と日と相對ひてあれば持てふ意に云ならんむかふ物の増おとりなきを持といふに同じ

秋まつころほひ【今本に秋たつころほひとあれど古本に

待の字を用ゐたるによるべし其外古本の詞とも宜し【こ、かしこより口舌【口舌てふ言は其頃よりの俗言なり萬葉にこちたきと云に、たる事なり】出来爾人者其之人の許へ往なんといひの、じりけりさきりければ此女のせうどにはかにむかへにきたりければ
まか契りて其秋を待間にとなりこはまた六月の末にていへるなりさて秋の來てはさる事言痛いはれてより後つひに紅葉の落をむるほどに兄人に率てゆかるれば契りし事はあらずなりぬるを遠く思ひ含めて書たるなり○せうど、は兄人を延て唱ふる言なり弟人をおとうとと云にむかへて意得べし（昔と書はかり字のみ）日本紀に汝をなびと、云は依にすべて人てふ言をそへて云ぞ古意なりける
この女かへでのほつもみちをひろはせて歌を書つておこせたり
いひの、じれる間に秋もなかば比になりて初黄葉のやや散たるも有を拾はせてそれに歌は書たるなり
秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ
歌の意は契りし事もかくあらぬさまに成行は寔に淺き

縁にて有けると云なりさて既に秋風吹立なん時にあは
んと契しをいへば其時も過て木葉の散しくといひて月
日のうつり來しを詞のつゞけにて去らせかつ木葉のち
りつもの水は淺くなる物をもてあさき縁に江をそへて
たとへたりかくむつかしきは例の記者の歌なりけり

已に黄葉に書付ておこせたる山有は落着を先いひしな
りさて其後の事をまじくにまゐるすは文の例なり(是
を意得ぬ人は詞の前後せしにやとうたがふべし)
さてやがてより後つひにいま、で去らすよくてや在らん
悪てやあるらんいにし所も去らす

【或注にたゞ初秋の事としていとくもみぢするも有
べしといひ又病葉などのちりたるならんといへどもい
とはやくもみづる山遊とてもはつ秋には色つかず又病
葉ならばうちつけてかくは書まじさて捨ふとはちりた
るをいふ文なり且歌にはともかくも云習ひながら木の

かのをとこは天之逆手を打てなんのろひをりけるなる
古本ける成と書るは上につけてよむべし
むくつけきこと人の、ろひごとはおふ物にやあらんおは
ぬものにやあらんいまこそは見めとぞいふなる

葉ふりしくなど云は秋の末の事なり然ども初もみぢと
いへる彼是あはせて思ふに秋のなかば頃にしたるを
去らせて去か書たるならんかく物とほく思ひふくみて
書が此文の常なりかの六月の半より初秋をかけたるに
其初秋に口舌のおこりてつひに兄人の來てつれて行た
るを此紅葉を捨ふにて思はせし物とみゆ】○あらなく
にのなくはぬを延して云あらぬにといふなり【江に縁
をそへたるは已にかち人のわたれどぬれぬえにしあれ
ばと云に同じ】

むかしばかり河のおほいまうちぎみと申在けり四十の賀九
條の家【此公の九條の家他には見えねど此文と古今集の
此歌とに去か有はありけんか】にてせられけるに中將な
りける翁
堀河の大殿とは基經公を云なり(盞昭宣公)此公は貞
觀十四年八月に三十七にて右大臣の左大臣となりたま
ひ四十は同十八年なり此時まだ業平朝臣は中将ならず
翁ともいふべからぬほどなるを例の此文の書ざまな
りされど歌は古今集に有て此朝臣のなり【或説にこは
朝臣の極官もて書かといふは歌の集などにての事なり
物語てふ文は後に書ながらたゞ其時のさまをいふ物な
れば文によりて云べき事をさる意を得ぬ説なり】○四
十歳を老の初とて賀ふ事は懷風藻に正六位上刀利宣令
詩五首賀五八年、従五位上總守伊岐連右麻呂一首五
言賀五八年安云々か、ればいと古き代より侍り【仁
明の四十の御賀はいと後なれば不引】藤原の朝より平

と聞きおきてかしこより人おこさば是をやれとて去ぬ

の男の吼へる時のわざなる事明らけし然るを或人は是
をも業平の事と思ふよりこは實にのろへるにはあらず
といひ又海人の海に入時の手つきなど云はあまりなる
強言なり

はもみぢかくてよろしきなり】○むくつけきと報ひ
がましきてふを略きて云り(むくひに善惡の二つあれ
ど常には悪報をのみいひおそる、よりむくつけきとい
へばおのづから悪報の事となるは俗言のならはしな
り)おふは其報ひを負を萬葉に「ますらをのおもひわ
びつ、あまた、びなげくなげきはおはぬものかはうつ
ほ物語にさても人をのろふ人は三とせに死るなり大將
足手のいさ、かの恙もあらば朝臣の爲ると思はんをせ
ちに怨じたまへば云々○あまの逆手とは天之はいにし
への常にて天より傳へたる事を始とし物の稱美にも奇
妙なる義にも冠らせ云詞なり(たゞ稱美に天之といへ
る事古事記日本紀に多し)さか手は吉事には手を我前
の方にて打凶事には後方に手をめぐらして打なり古事
記に事代主神この國を天孫に遊て海に入時の文に踏
傾其船而天逆手矣於青柴垣打成而隱也又日本紀に
彦火々出見尊に海神のをしへていはく以此釣給其兄
時言狀者此釣者於須須釣釣須釣釣流釣云而於後
手賜云々これらなり【おほちより下皆のろひて釣をか
へす言なり逆手は訓をもて書後手は義をもて書り然ば
後手をもさか手とよむべし】か、ればこの此文の意か

の男の吼へる時のわざなる事明らけし然るを或人は是
をも業平の事と思ふよりこは實にのろへるにはあらず
といひ又海人の海に入時の手つきなど云はあまりなる
強言なり
むかしばかり河のおほいまうちぎみと申在けり四十の賀九
條の家【此公の九條の家他には見えねど此文と古今集の
此歌とに去か有はありけんか】にてせられけるに中將な
りける翁
堀河の大殿とは基經公を云なり(盞昭宣公)此公は貞
觀十四年八月に三十七にて右大臣の左大臣となりたま
ひ四十は同十八年なり此時まだ業平朝臣は中将ならず
翁ともいふべからぬほどなるを例の此文の書ざまな
りされど歌は古今集に有て此朝臣のなり【或説にこは
朝臣の極官もて書かといふは歌の集などにての事なり
物語てふ文は後に書ながらたゞ其時のさまをいふ物な
れば文によりて云べき事をさる意を得ぬ説なり】○四
十歳を老の初とて賀ふ事は懷風藻に正六位上刀利宣令
詩五首賀五八年、従五位上總守伊岐連右麻呂一首五
言賀五八年安云々か、ればいと古き代より侍り【仁
明の四十の御賀はいと後なれば不引】藤原の朝より平

城の初めにいたれる人々なり

さくら花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まどふかに

古きん集に「老らくのこんと云りせば門さしてなしとこたへてあはざらましをこはいと古歌なればとりて業平はよまれしならん老をば人の如く云にをさなくてをかき味ありの散かひは散ちがふなり萬葉にゆきかひと云を往反と書たるに依べし○老らくは老るといふを延て老らくといふなり【萬葉に見らくすくなく戀らくの多きと云は見るは少なくこふるは多きといふ事なりらくの約めるなるを知べし】まがふかにのかは疑ひの詞なるを或人賀の意自然により來れりと云はいかにぞや自然により來るといふからは作者の意ならぬは知つづ猶いかで云らん古人の歌は言少なにこそあれむかしおほきおほいまうちぎみと聞ゆるみますかりけり

此文は文徳清和の御時のさまに書たればそのほどの太政大臣は藤原良房公なり（謚忠仁公清和之外祖父天安元年二月太政大臣同四年從一位二年十二月攝政貞觀十四年九月罷攝河太政大臣と申す）【前にはり河のおと

どとありしは此御子なり】

此つかうまつる男なが月ばかりに梅のつくりえだに雉をつけてたてまつると【長月としも書は夏より八月迄雉を賞せず又冬春は實の梅花あれば作枝は用べからずかれ是思ひて長月ぞよきほど、ていへるなるべし是もて思ふに梅がえに雉をつくるも花の有時は其ま、付べきなり花をこきおろして付るが故實なりといふは故實を守るがごとくして古意にはあらじと覺ゆ】

此男をしも業平として忠仁公の家禮なりなど云説は前にもいへる如くいとひが心得なり此時などまだおほやけの禮法行はるれば臣家の家禮を用うる人なしまして王孫をや

我たのむ君が爲にと折花は時しもわかぬものにぞありける【古今集此歌の左に前のおほきおほいまうち君の歌なりといふは一時の好事の注にてとるにたらず古今左注論前にあり】

こは古今集にも六帖にも初の句は限りなきと有て題もよみ人も云らえぬ歌なり然れば時ならぬかへり咲の花など折て公家に奉りし時の歌なりけんを今は端書に梅の作枝とし雉を着たりと書て時しもの詞に雉子をか

せりとつくりなしたりさて太政大臣にたてまつるなどをかしく巧にとりかへたるなり（本集の意のま、にのみ思ひてかつ此文を實事と心得てはいかにときあやまらざらんや）
とよみて奉りければいと賢がりたまひて使に祿たまへりけり
かしこがりととはかしこきとりなしなりとほめたるなりさて記者のみづから作りなして且ほむるは例のとりなしなり

昔右近馬場之射禮日

こは世に難き事として云説あれど猶わろければ年經て思ふが中に一二つ侍りし右のつは先馬場の埒をばひをりと云べし引はへて長き柵なれば引柵の意なりさて此古本に射禮日と書たれば騎射の日なるを知べし此事有には必埒をゆひてそれが中にて馳れは其日を其比の語にひをりの日とはいひしなるべし萬葉に馬柵をうまをりと訓たるは馬をこめおくをりなり是に准らへて馬場の埒も馳る馬を左右へはぶれざらしめん料にて引はへゆへればひをりといふべき物なり（引を略きてひとのみいふは水田の引板をひた盗人の引刺をひはぎとい

ふ類猶多し）【顯昭などの説に五月五日六日に近衛の舍人の乗馬の事をいひて六日には楊の尻を前さまに引折てのる故にひをりの日と云といへるはいとさ、かなる由にて日になつべくもあらず且此日は此馬場にもなきをだに考へぬほどの事なれば云に足す】又ひとつは埒をたゞをりとよみ（訓の意右に同）【埒の字諸記に多かれどいづれも訓なし古へ此字をのみ音にて云べきにあらねば必をりとかひをりとかまみけんかし】ひは標の事が貞觀延喜の式などを考るに競馬には必馬場の埒の末に馬どめの標をたつめり然ばくらへ馬ある日を標埒の日ともいふべきなり（標をひと云は字音なれどすでに寛平延喜の比となりては常云語には音訓打ませていへる事多かりしなり且標をはぶきてひと、なふるは標位をひいと云が如し）【左兵衛門式云凡内馬場埒料二百四十荷葛二十荷云々自四月十二日一始一帯除并造埒か、れば埒は常になしひをりの日と云べき一、證なり右近馬場など云是に准へて知べし】かくはあれど右に射禮の日と有からは騎射をいひてくらへ馬の事ならずおほゆれば猶前の旨によるべし○右近の馬場は一條京極の末に在よし拾芥抄にいへる

も是なり或説にこれを五月六日の右近衛の眞手結の事といへど其日なるは内馬場にて行はれて武徳殿に行幸有なれば右近の馬場にての日は他日なる事明らかしもし五月三日四日の荒手結はこゝにて有もやせん考べし且五日六日は物見車の立べき所にもあらず右近の馬場にて行なはるゝは他日なる事は知べきなり（今昔物がたり云種合の戯れも右近の馬場にてせしに物見ぐるま多かりしとみゆるなど思ひ合すべし）是より下に式の文を引は射禮競馬のさまをかの五日六日の事を明さん料のみ ○馬寮式五月五日車駕幸武徳殿云々諸衛射人皆以次列向於馬場又云五月五日云々同月六日競馬并射式車駕幸武徳殿云々寮官率近衛十人令騎細馬即以次度畢頭以下從殿後至於馬出埒下左右近衛中少將與寮頭助共令競走又云左右近衛將監左右馬寮充屬各一人就馬留標下注勝負丈尺競馬訖還寮近衛兵衛官人率舍人等到來裝束而騎調馬陣列向射場騎射訖諸衛更騎御馬供雜戲○左名近衛式凡五月五日五位以上競馬將監就標下記勝負又云五月六日騎射官人近衛總十人（六人五寸的四人四寸的）訖供雜戲（近衛准之）

むかひにたてたりける車に女のかほの下帷裳よりほのかに見えければ中將なりける翁
此男の物みる馬場の埒を隔て、むかひの方に女車は立たるなりけり此文のさまも馬場なるべき據なり○またすだれは和名抄に轆轤（俗車籠）車帷也と云物なり○中將云々は或説に中少將は馬場のおとゝ屋に着なければ女車たてらんほどは遠くてはたみゆべからずはた歌よみてやるべうもあらずなどいへど此ところ古今集に中將と書ず何の官の時ともまがりがたし又此文は例の書かへたれば實をもて論ずまじきなり大和物がたりにも物見に出たるよしいへり
みずもあらずみせぬ人のこひしくばあやなくけふやながめくらさむ
見ざるにもあらず又見つるともなくはづかに見し人かく戀しむならば何のわかちもなき物思ひして今日の日をくらすにこそあらめとてほのかなりしも心にまみておぼゆる心をいへりまことに業平の歌にて高貴にして心ふかきなり（例の記者の歌又あだし人のまらへたみて心むつかしき歌との別ちをこれらにてまれかし甚なるものなり）○あやなくは古本に文無と書たるは

正義にて織物の文などの鮮やかならぬよりおこりて物のわかちのなき事にはみないふ事となるなり聞はあやなしてふにてよく心得らるゝなりさてこゝは見すもあらず見もせぬてふ事よりあやなくけふやとはいへり或説に無益なりといへるはこゝに少あたらす○ながめは默然として物思ひをる時のことわりすでにいへりかへし
知悉らぬなにかあやなくわきていはん思ひのみこそ指南なりけれ
男の歌をとがめてもとより知ぬ人をば戀まじとやうにのたまへどなにか知しらぬをわきていはんやことわりなき事なり知もしらぬも心こそ道しるべとなりて思ひはつく物なるをといへり○まるとは日本紀には導の字を訓み新撰萬葉には指南と書たるをこの古本には用ゐたり
昔をこそ後涼殿のはざまをわたりければ
此殿は清涼殿の後北にある故に後涼殿と云○はざまはこゝは殿と殿とのあはひを行なれば古本に迫の字を書たり常に間の字をまか訓むもことわり同じ
あるやんごとなき人の御局より菅草をまのぶぐさとい

ふと出させたまへりければたまはりて
此貴人は例の誰とさすべからずされどもと此男の相知たりしが絶たるには侍るべしよりて女の方より萱ぐさを出してこは忍草とや云と問に男のいな是はまのふには侍らす忘草といはんとささればこそと答めんため
にそらおぼれして問へるなり○わすれ草は萬葉に「わすれ草我下紐につけたれど戀はわすれずといふ意にまめるに萱草と書たる多し和名抄に萱草一名忘愛（和名和須禮久左）と記し後撰に「おもふとはいふものからにとすればわするゝ草の花にやはあらぬ枕さうしに六月に忘草の花さける事も書たり然ば今も萱草とて夏の比黄なる花の咲ものを云事明らかし【大和物語にわすれ草を即まのぶ草とも云と心得誤りて書たるにつきて此歌の所にたがへばいづれとも解がたしと思ふ人草木の名は大かたにて有べしといへるこそひが事なれ古き名を一つにてもとき得れば用有事なるをおのれときがたしとて人をもあやまつものなり物は本を極めて末に轉じ分れ若又末に思ひあやまりていひたりしを明らめつべきなりこゝに引ごとく此草は二つながら明らかなるを以て大和物がたりの誤りを知べしすべて大和物語

にはさるあやまり少からず後の集に「わする、もまのぶもおなじふる郷の軒端の草の名こそつらけれとよめる歌は大和物がたりによりて此文をも思ひあやまりてよみたるものなり」○まのぶ草は和名抄の苔の類に本草云垣衣一名烏菲(和名之乃布久左)とて苦なる事此初めの條にいへるが如しさて右の二種は甚異なる物をわざと呼たがへて問たるにをかしき意は侍るを後の人は一草に此二名ありと云にやこ、の意を覺らぬ故なり

わすれ草おふる野べとは見るらめどこはまのぶなり後もたのまん

こは忍ぶぐさなるからは後たのもしとよそごとの様にいひて我忍び思てふ事をそへたり女のそら問ひを心得てあらがはぬさまにてこは忍ぶなりといへるがいとおもしろきなり

むかし左兵衛督なりける在原のゆきひらといふ人有けりその人の家に美旨酒ありと聞てうへにありける左中辨藤原の良近といふ人をなんその日客直にてあるじまうけしたり【こ、に人々まうで來りければといふ如き詞のおちたるなるべしさなくては詞つゝかす】

行平卿は三代實録に貞觀六年三月從四位上備前權守在原朝臣行平爲左兵衛督と見えたり良近朝臣は【良近朝臣三代實録に容儀可觀風望清美無學以政理見推といひ又大力にて上戸なりとみゆ此人の女は貞平親王を生まゐらせしかば時のよせある人なるべし】貞觀十二年正月右中辨となり同十六年に左中辨には轉せれば行平左兵衛督なる時は良近は左中辨にあらず又下に云太政大臣は(忠仁公)同十四年に薨たまひて良近まだ左中辨のほどなりみな事をかへたる例のわざなり上戸なりければこ、に擧たるにや○上に在けるとは殿上に侍らひけると云に同じ○まろうどざねとは客人の中にての上客を云既に使ざねと云に同じ

情ある人にて瓶に花をさしたり其花の中にあやしき藤のはなありけり花の糺三尺餘なんありける
瓶に花させし事後撰集にも枕ざうしにもみゆ櫻藤などの大なるは大きならんかめにさして高欄のもとなどにおけるさまみゆ○藤の花ぶさ今は五尺ばかりなるも有はやしなへる故なりいにしへおのづから三尺あまりなりけんは珍らしとまづらん
それをだいにて歌よむみはてがたにあるどのほらから

【はらからとは同母にて云古言なりこ、を行平業平とする時は異母ならんからにかなはずされど物語の事はとてもかくても有べし】なるあるじまうけしたまふとき、て來たりければとらへてよませけるもとより歌の詞はえらざりければすまひけれどまひてよませければかくなん
あるじの行平卿の弟多かればいづれともいひがたき中に是も業平朝臣をあてたるなるべしさて史にすら歌をよく作ると有ほどの人を歌の詞をらぬよし書はたこ、の歌のわろきなどみな記者の狂言なりける條を幾重もだがへて人を咲はしむるものなり

さく花のしたにかくる、人おほみありしにまさるふじの陰かも

次の詞を以てみれば藤原の太政大臣の先祖にこえて榮えたまふも同じ氏族にて良近朝臣の如きよき人々其下に多ければかくは有らんと其日の上客をはじめて其席なる藤原氏の人を藤の花にそへていへりこは主人がたの垣下あるじの云べきさまなり

などかくしもよむといひければおほきおとゞのえいぐわのさかりにみまぞかりて藤氏の所々にさかゆるをおもひてよめるとなんいひける皆人不囀なりにけり

いにしへの歌はなだらかにてことわりもよく聞え侍るを此歌まことに歌の詞をらぬ姿情なれば笑ひそしるべきを時の權貴をほめつと云は中々に刺る意もあるか且記者のみづがら歌の如くもなくよみ出て自ら爾いへるは例の興のみ【或説に歌をそしるに非と云は此歌をしもなり平のならんと思へば恐れていふのみ上に歌の詞をえらすといへるを謙退の詞といふも歌を心得ぬよりの説なり實にえらぬ由は此うたのわろきになどかえらざりけんいかで古歌のよしあしをおもひわかぬにやことなり平の歌のことなるをや】

むかし男ありけり歌はえよまざりけれど世を少しおもひまじたりけり

古への歌はおもふ心をたゞにいひ出るのみにて人も我もさるからおのづから人情をえらる其人情やがて世の中のあらふることわりなればげにいにしへ歌よむ人はまか有べき歌の藝となりて後の世の人はまかはあらず【ある人歌をよめば仁義禮智をまさるといへるは似たる事のやうにてまたしきほとの人や、もすれば云事なり皇朝の道はさる名をあげてかたくなにては治り侍らず然ば歌の心をとくにもかなはず歌は人情をたゞに

云出る物にて其情は邪にまれ不義にまれいつはらぬ故
に毛詩を多く思無邪と云にはかなふべしさて世間は
理のみにてはたす風雅の情を交へざれば論につのり
て物に屈しわろきなりといふことわりをよく心得るを
歌の道知りと云べしされど中世より後の歌は巧作れば
此意にかなはず萬葉の中にて此意を心得べし】さて
次の歌にいへることわりを對へて見るべし且其人のよ
める歌を擧て得よますとはよくはよますといふなり
あてなる女の尼になりて世間をおもひ入れて花城にもあ
らずはるかなる山家にすみけり

おもひ入てといふと上の少思ひしるといふとをてらし
てみるべし(今本におもひうんじてといへどすべて
さまをおもへば思ひ入てとあるによるべきなり)
氏族なりければよみてやりける

この男の氏族の尼なればとむらひがてらによみてやる
意なりもとあひし中なりなど云は悪し
そむくとて雲にはのらぬものなれど世のうきことぞそら
になるてふ

世をそむくとて雲に乗て飛行ほどのことくしきわ
ぎはあらねどおのづから世間の憂事は大空に成て思ひ

もとゞめず有物ぞといひて且さこそおはすらんやと問
よしなりそらとは物のとりとめもなきたとへにてこ
はうき世を忘れゆくを云さて空の語より雲にはのらぬ
といひよせたり(今本によそにと有も雲の語にはあれ
ど古本の空まされり)今本の右の末に「となんいひや
りける齋宮のみやなり」と有此語古本になし後人のく
はへしなる事知べしさて齋宮二字にていつきのみやと
よむ事なるを又下に宮てふ字あるはいかなる事ぞと思
に後世の俗は皇子皇女をさして宮と申をいにしへなき
事ともあらぬものゝわざなりけり

むかし男ありけりいと儼に實用にてあだなる心なかりけ
り
古本に儼にと書たるは恭の意なればいや、かともむべ
し實用は實様なるを音にとなへ來れるを去らせて用の
字をかりて書るにや【實用はもし實用をあやまりけん
かし】今本にまめに實やうにてと有はまめと實やうと

同意なればあやまれる事明らかなり
ふかくさのみかどになんつかうまつりける心あやまりや
しけんみたちのつかひたまふびる人をあひ云りけるさて
深草のみかと、は仁明天皇を申す嘉祥三年三月廿一日

崩御同廿四日深草山に葬奉られし故なりさて此うたは
古きん集にては業平朝臣の歌なるを採て例の誰ともさ
すべからずなしたりかくいや、かにしてまめなる人の
今はた其いやまふべき親王達のおぼす女にしも物云事
は心あやまりやまけんかといふなり先かくいひて下
をおこす文のこゝろを思ふべし

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにも成ま
さるかな
よへ逢しは只夢のごとくおぼえてはかなければ定かに
も見ねば彌はかなく成まさりて堪がたき心ちすといふ
なり艶に心ふかくまことに朝臣の歌なり○右の如く解
は古今集にも此文の今本にも三の句まどろめばと有に
よれり古本には夢乎慕無見覽者とあるを右の二書にま
たがひて思へば覽は臥見の二字をあやまりて一字に

寫たるなるべく覺ゆる故なり(若又覽は覺の字をあや
まりたらばさめぬればとよむべしさて上は右と同じく
て三の句より下はさる夢のごとくなりしがさめてけさ
思ふにいよ／＼はかなくなごり思ふ心のまさり行と云
歎此文には一句をかへて心をいとことにせる例あれば
なり)

昔ことなることなくて尼になれる人有けりかたちをやつ
したれど物やゆかしかりけん賀茂のまつり見に出たりけ
るを、とこ歌よみてやる
已にも夫の覺えぬ事によりて家出せし女の事をいへり
こ、もそれに似たりさて尼に成たるを猶物見まほしが
るにつけて夫のよみてやれるなり○今本にかたちをや

つしたれど、有に古本に貌平志有望と書たるは有望の字は尼のすがたは似つかはしくさるかたによろしき心にて書たるか意得がたけれどまばらしく今本に隨ひて訓は改め侍らす(若又望は替たれとてふ字をあやまれるにやとも思へどまからは有の字は望の下に書べき例なるを上にあるからはさも侍らす字の落たるなるべし)

世をうみのあまとし人をみるからに胸せよともたのまるかな

世をうしとて尼になれ、どかく物ゆかしきてふ心と見るからは猶互に目をくはせて心かよはずべき人なり今かく離れてあれど猶たのもしくおぼゆといひて嘲るなりさて尼を海人によせて世を海といひかけ海藻喰せよとそへたり海邊の人は海松を専ら喰へばなり〇めぐはせは源氏物語に人々目をくはせつ、あまりなるみ心やりかなと云べし云々後拾遺集に(清少納言)「あさりする蟹のすみをそこなりとゆめいふなみやめをくはせつ、史記(項羽本紀)に梁陶(師古曰動目而使之也)文選(屈原九歌云滿堂美人忽獨與余目成とも有に同じ(めをくはせと云を略してめくはせと云今もまか

いへり)

歌の左にこれは齋宮の物見たまひける車にかく聞えたりければ見さしてかへり給ひにけりとなんと言とあれど一の古本にはなし例の後世の俗のなすわざなる事上に云るがごとし殊に本文に異なる事無くて尼になりたると書しはかの夫はおぼえぬ事をうらみなどして家出せし女のたぐひこそ見ゆれ齋宮のかへりて尼になりたまふをまか書べきかは

むかし男かくては死ぬべしといひやりたりければ女

白露は消なばけな、んきえずとて玉に貫べき人もあらなくに
是は男はいと切に戀るを女の情なきを擧て一つの興とせるなりさて歌の心はよしや消なばきえよさて有とも玉とぬきてめづる人はあらじ物をといへるなり後撰集にまだあはず侍りける女の許に死ぬべしといひやりければはやしねかしといへりければ又つかはしけると有類なり且古今集に「櫻花ちらば散なんちらすとて故郷人のきても見なくにてふ歌を探て萬葉に(元興寺の僧自歌のせどう歌)「白玉は人にまられず不知ともよしまらすとも我しまれらは知ずともよし古今に「秋のつゆ

玉にぬかんくれば消ぬよし見む人は枝ながら見よなと云歌の詞をとりて記者の作れるなるべし
といへりければいとなめしとおもひけれど心ざしはいやまさりけり

此ことば古本には無し落たるなるべし〇なめしとは崇むべき人をおし平等たるさまに爲すを云故に萬葉に妹といへば無禮恐し云々此ほかにも無禮の字をなめしとよみ孝徳紀には輕の字を訓たり物語ともになめげなるなめぐなどいへる皆是なりさて此女のよめる歌のさまあまりに無禮とは思ひながら猶こひまう思ふと云のみ

むかしをこそ親王たちのせうえうまたまふ所にまうで、たつた川のほとりにて

こは古今集に二條後の東宮のみやすん所と申ける時に御屏風に立田川にもみち流たる圖かけるを題にてよめるとて素性法師の「もみち葉のながれてとまるみな戸には紅ふかき浪や立らんでふ歌の次に業平朝臣の歌とて侍るを此文に端の詞をかへてとりたる例の事なり〇道遙はあそぶ心なる事既に出たり
ちはやぶる神代も聞ず龍田川からくれなるに水く、ると

こは立田河に紅葉の流る、は紅して水を絞染にまたりと見えてえもいはず珍らしきさまなれば神代よりもまだ聞きしけしきなりとほめたりさるを近きほどの説に紅の下より水の泳るを云と云るは理りも聞えずせる面白きふしもなし其上紅は色にて體なき物なれば紅に水の泳るといはんは後の俗なるべし絞るといふ時は實に珍らし且或家の傳にも絞る事とせるをさては詞の聞にくしとおもひて用ゐざるよそれこそ後の俗の心なれば古今六帖に霜の題「木の葉みながら紅にく、るとて霜の紋にもおきまさる哉とよめるはたしかに絞染なる證なり又在原の友干の「時雨にはたつたの川も染にけりから紅に木葉く、れば是も絞り染なりさて絞りぞめは縹緗にて是をゆばたといふは結機(結機)の略言なり然れば機ものを糸してゆひく、りさて染るを云事まるとし(今の俗まぼり染と云是なりかのこ染なりと云はわろし)〇ちはやぶるてふ語は已に出つ〇からくれなるは延喜式に深紅の事を韓紅と書たり我朝にて染たるよりは韓より来るはことに色深ければ又それがやうに染るをまかいふめり

昔あてなるをとこ有けり其男のもとなりける人をうち
ありける(一本かく有もよし)内記なりける藤原の敏行と
いふ人よばひけり

敏行朝臣の内記なりける事こ、にみゆ此文官位の時を
ばわざと書かへたれど又其人になき官をば云ぬ例なれ
ば是に従ふべし(或説に貞觀元年少内記といへり其任
せし時は三代實録には見えす何によりけん外に考ふべ
きもある歟)○一本に裏に有ける云々いへり内記なれ
ば殿上に有を上に在けるといへるが如し

されどまだわかれば文もをさくしからずいはんや歌
はえよまざりければ此あるじなる人案を書てか、せてや
りけり可愛まどひにけりさて男のよめる

稚ければ文も専らえが、ず歌は本よりまたまねばあ
るじ下書してか、せしなり○をさくしからずを古本
に不幹と書しは日本紀に幹了ををさくしとよみたるに
因くならん此語は物の長たるををさくしと云にて不長を、
さくしからずと云事知べし萬葉にをさくしもあはぬ
子故に物思ふてふ意なれば長より轉じて専らなる意に
もなれるなり○案とは俗に下書てふ事を云(合に案と
はとめ書の事を云とめ書下書相似たる事なり)○或説

らねつらねをつめてつれくといふ

返しれいのをとこ女にかはりて

あさみこそ袖はひつらめ涙川身さへながるときかばたの
まん

其涙川はあさくしてこそ袖ひづるばかりは有らめわた
るとて身も流る、ばかりのふかきほどならばおもひけ
りとはたのみぬべきをとなり萬葉に「廣瀬川袖つくば
かり浅きをや何にふかめて我戀るらんと有をおもひて
よめるなるべし

といへりければ男いといたうめで、文箱に入てもたりと
なんいふなる(古本最痛可愛而文箱に入而用行而云有と
あり用行而は用利與のあやまりなるべし)【今本の詞に
はいといたうめで、今までまきてふばこに入てありとな
んいふなるとあり少と、のはぬ所あり】

これまで一條のごとしいと秘藏におもひて文箱に入て
久しく持たるとなりこは記者の詞なり

をとこふみおこせたりえてのちの事なりけり
前のは女を繫装せるあひだのかたなり今は得て後の事
としも有からはこと時の事なれど同じ男女の事故書つ
づけたるなるべし仍てさる意もて説なり

に此女をか初草のなごめすらしきてふこたへせし同
人として兼平の妹なりと云はおぼつかなし事の状妹と
もおぼしけれとさらば兄人など書べきにあるじの男
と有は妹と、せぬ書ざまなり此もとは古今集に業平朝
臣の家侍りける女のもとによみてつかはしけると
しゆき朝臣と有を思ふに兼平朝臣の母親王につかふる
やうにてある氏族の女にや

しもなし

つれくのがめにまさるなみだ川袖のみひぢてあふよ
女を心に思ひつらねつ、長日してをればいと、しき涙
の川は水まさりゆきてわたりがたくいたづらに袖のみ
ぬらしつ、逢べきよしもなしとなりいふもなかな雨のふ
るによれる詞なり○長雨をながめによせ云事已にも云
る如くまして此歌は六帖に長雨と涙川と一所に擧たり
又此歌を探て同六帖につれくしと袖のみひぢて春の日
のながめは軒のつまにざりけりともあり○つれくしと
は連々物を思ひつ、をるは獨いとまある時の事なりそ
れを轉じてさびしき心ともなれるを後にはた、さひし
きを云のみおもひて此歌をも心得たがひたる説ありこ
こは其女をおもひつらねくし長日するをいふのみ(つ

雨のふりぬべきになんみわづらひ侍りぬる身さはいはいあ
らばこの雨はふらじといへりければ例の男女にかはりて
よみてやる

數々に思ひおもはずとひがたみ身をまゐる雨はふりぞまさ
れる

そこにはおもひ思はぬかたの數々あれば雨ざはりせぬ
かたも有なんを我をば雨のふらば問じとのたまふから
は我身の幸ひの有無をも雨にて知べきに其雨のかく降
まさるがかなしとなり男の身幸ひあらば此雨はふらじ
といへる女の我がたにとりて云なり○數々にてふ語を
ただ我を思ひおもはぬ數々にと云といふ説侍れど此歌
には問といひ身をまゐるといへる詞のさまを考るにとか
くにおもふかたをば雨にも問ひおもはぬかたをばさ
はるてふ意なれば思ひ思はぬ人を數々もたる男をさ
すなりけり【かすくの語は次に説有右にくはしきい
ふ】○古今集の此歌の次に「大ぬさの引手あまたになり
ぬればてふ歌をつらね入られし編のついでをも思ふべ
し同古今に數々に我を思はぬ物ならば山の霞をあはれ
とは見よとよまれつるも、花がたみめならぶ人のあま
たあればとよめるごとくおほからん中にも我を忘れた

まはぬよしのあらばてふ意なり(但萬葉に「かすく」に思はぬ人はありといへとまばしも我はわすれえぬかもとよめるは世間にさのみ物おもひせぬ人は多しといへどもと先設ていへり是は同言にてももちゐやうのことなるのみされど猶數の人をいふは今も同じ)○身をまゐる雨とは右に云ごとく男の詞をそのまゝうけ其雨にさはりてこぬからは我身の幸ひなさは此雨にてまらるゝといふのみ或説に身をまゐる雨とは涙を云などいふは此文をよくも心得ぬものなり

とよみてやれりければ篋も笠もとりあへずまゝとぬれてまどひ來にけり

まゝとぬれては萬葉にまゝのぬれてといふに同じくぬれしなへたるなり衣手も何もぬるればまばくとなへるなり後世の語のまばくと云に同じ【まをく】まはくとましのなどみな句かよひて同じことばなりまのを後世まけき事とおもふはあやまれりみなしなへたる事なり】萬葉に「春雨にまゝとぬれてよぶこ鳥(又しの、にとも有)六帖に「春雨にまゝとぬれに袖をぬらしつ、などもいへり○篋も笠も云々萬葉に「かきくらし雨のふる川を我門にみの笠きすてくる人

かすくはもとよりきけとて云なれば右の如くいひては今更めくなり】歌は記者の口つきなり

よひごとくに蝦のあまたなく田には水こそまされ雨はふらねど

かはづの鳴は女のおのれ鳴て袖ぬらすなりたとへ雨はふらねどとは男の心にうらまるべきふしなきをたとへたりさて男は女の歌をきながらあらがはずよごとくのやうに鼻吟してをる有さまなり○蝦のなくに水まざるは鶯の氷れる涙とよめるがごとく鳴といへば涙の有さまにいへり○よひは萬葉に初夜と書てもよみ又すべてたゞ夜の事によひといへるも多しこゝはたゞ夜ごとになり

昔をこ友だちの人をうしなへるが許へやりける

女におくれたる友だちのもとへやれるなり

花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきにこひんとか見し
あたにちるめる花をこそ戀んものところ誰も思へりしにかく人こそはかなくなりたまへりけれ其許はいづれをさきに戀んとかおぼしつるぞと問ふなりされど下の心には人を先にはおもひかけしをてふながら暫くか

や誰とよめり

むかしをんな人の心をたとへみて

風ふけばとはに波こそ岩なれや我衣手のかはくときなきことわり明らけしさて歌にうらむとはよまねど涙のふかきを云にて端のことばを合せ見て怨の涙とまらるゝは古歌のこゝろなり○とはとは常磐の略なり(とこいはの約めときはなるを略してとはといふなり)さてときはにはかはらぬ事を何にもいふ事となりければ物の止ぬ事にも轉せる故に古本に不止とも書たり且其ときは二つあり一つは常磐堅岩のこゝろなり(ときはとこいはの語上の如しかきは、かたきいはのたといを略せるなり)又ひとつには常葉とて松柏などの葉がへせぬ物を云事萬葉に分ちてよめりされどいにしへはそれをすぐにとこはとよみたるを後の世には松杉などにもときはといへるはまがひたるものなり後の人は此分ちを心得ぬなり

とつねのことぐさにいひけるをき、をりける男

男の聞つ、をれどまかうらまるべき事を覚えねば大かたに聞過しつるにあまた、びとなれば讀るなり【ある説に業平此女のかうたふを身に聞負てなりと云はい

りに問のみされど端の詞に花の事少もあらでは此歌花もてたとへたる不意なるやうなり仍ておもふに妻を失なへるがもとへ櫻の花に挿てやりけるなど有けんを今は詞のおちたるなるべし○或説に花を先とも人をさきとも見ざりしがと云はわろし此歌は古今集(哀傷の部)に入て詞書に櫻をうゑてありけるにや、咲ぬべき

時にかの植ける人みまかりければ其花を見てよめる紀茂行)とあり是もと花をこそ期したれ今此文にとりて詞をかへたれど歌はかはれる意も見えざるなり昔をこみそかにかよふ女ありけりそれがもとよりこよひ夢になん見えたまひつるといへりければをこ

おもひあまり出にし玉の有ならん夜ぶかく見えはたまひすびせよ

みそかなる中なればえゆきあひがたき時はおもひあまりて魂のうかれで、こそゆきつらめさるをりはむすびとめよといひて幸に我思ひのほどをのべやるなり○諺に人だまを見て「魂はみつぬしはたれともまらねどもむすびぞとむる下がへのつまと三たび唱へて衣の下がへのつまと結ぶ事といへり此諺の歌は古き口つきにあらず然を此文にまかよめるは玉むすぶてふ事の本より

有しよりよめるなるべしかのことわざの歌をとりてよめるとは見えぬ歌の口つきなり（是は吉備公のよめると云はいふにもたらす奈良の朝の歌はさる物にあらずただ此物がたりの頃に歌もえよまぬもの、作り出たるなるべし）【さ衣に「あくがる、我玉しひもかへりなん思ふあたりに玉むすびせよかへし」「玉しひのかよふあたりにあらずともむすびやせまし下かへのつま 又小侍従「君こふとうきぬる玉のさよふけていかなるつまにむすばれぬらんこはみな玉むすびの歌によれるならん其頃の陰陽士巫子などのいひける事なるべし】
 むかし男やんごとなき女のもとになくなりたる女をとむらふやう文ていひやりける
 此貴人は女なりきて其たふとき女のもとに在し又の女の身まかりたるをとむらふやうにて實には其貴き女を戀る歌なり（今本にはやんごとなき女のもとになくなりたるをとむらふやうにてと下に女のこととはなしさてはことのみ明らかならざれば古本によれり）
 いにしへはありもやまけんいまだみぬ人をこふるものとは
 家にさる女の死たる時此歌を得ばげにまだみぬ人の身

まかれりと聞てかくまたひかなしまる、哉むかしへにはさるためのしありきあらずばまらねどまづめづらかなる我心ぞとよめりと聞ゆべしさて其貴女の心を得てよくよまばかの女を云にはあらで我を戀るなりけりとおもひうべきこゝろまらびなりさて此歌は古今集（賀部）に「いにしへにありきあらずはまらねども千とせのためし君にはじめん同集（戀部）に「よの中はかくこそ有けれ吹風のめに見ぬ人も戀しかりけりてふ二首を以て作りて端書をそへたるにや
 昔をこつれなかりける人のもとに
 古本に如是あり（今本には此詞おちて）次の詞も歌も亂れたり
 こひしとは更にもいはじまたひものとけんを人はそれとまらなん
 人に戀らるれば下紐のとくるといひ來ればさこそあらんそれを我こふるまるとはまたまへ今より更に戀しといひたらじとなり
 かへし
 またひものまるとするもあらなくにかゝるかごととはかけずぞ有べき

まか戀るゑるしとせよとのたまへど我下紐はとけ侍らざめりかくばかりいたづらなるいひよせ言はいひかけたまはで有べき物か是はそら言なりといふ意なり古き諺をたのみていひやりしにまると見えすとこたへられしは口を開きて笑ふべきなり○古本には右のごとく有て理りあきらかなり今本には右のはしの詞おち又歌も今と前後してあげて且下紐のまるとするを前の條のいにしへは有もやまけんてふ歌の女のかへしとせり（此かへしにはよりもつかぬをいかでよく見ざりけん）又戀しとは更にもいはじてふをば上に又かへしと書て男の又のかへし歌とせり（右の男の歌とせば又おくるなどこそいはめ又返しとは何ともなき事なり）此二首は後撰集に戀しとは更にも云々を在原元方のおくる歌とし下紐のまると云々を女の返しとして有をとりて一條の物語とせるのみなり或説に此ものがたりには歌を前後して作れりといへるは誤を飾らんとするなり凡此文にはさまゝにとりかふるを巧とすといへど断もなきやうにとりかへたるためしは侍らす○人に戀らるれば我した紐のとくるとも又人に逢ん祥に我下紐の解るともいふことわざ萬葉に見えればいと古き諺

なり（鼻紐とけ眉ねかきなどいふみなしかり）古本にかゝる鹿言は不懸云々この鹿言は借たるにて實には託言と書べしさてかごと、はかこつけ言の略言なり
 むかしをこねんごろにいひ契りける女のごとまに成にければ
 こは古今集に題まらずとて有を此文に端の詞を作れるなり
 須麻の蟹の鹽やく煙風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり
 我思ふ女のあらぬかたになびきつきたるをたとへたりげに是はよろすよくよみたる物なれば上の品の歌とは定めしぞかし○古は萬葉に「網の浦に鹽焼烟夕されば行過かねて山にたなびく又「まかのあまの鹽やく煙風をいたみ立はのぼらで山にたなびくこれらもてよめるを古今集にはとれり
 昔をこ有けり鯨にて居て
 やむをば和名抄に鯨夫とて釋名を引て無妻曰鯨（夜無乎）と有て男なり又寡は無夫曰寡（夜毛女）と有て女なり故に古本に鯨と書て且此條のさまをも男の事

なるからはやむをとよむ事なるを今本にはやもめと書
あやまれり

ながからぬいのちのほどにわする、はいかにみじかき心
なるらん

こは逢たる女のわすれし後男は猶したひてこと女をも
よばでやむ男にて任つ、うらみてよめる意なり歌のこ
ころは明らけし

昔仁和のみかど芹河に行幸またまひけるとき生翁の今は
さることげなくおもひけれども本づきにける事なれば
大方之鷹飼にて候はせたまひける

荷田の東麻呂はいく仁和のみかど芹川行幸の事は仁
和二年十二月十四日に有し事三代實録に委しく見ゆ此
時行平卿供奉にて翁さひ云々とよまれたる事後撰集に
入てうたがひなしさるに此物語にては業平朝臣の供奉
してよめるが如く作りなしたり此朝臣は此時已に卒
られて七年の後なるを猶かくも作りなすは此文の常な
り生翁とも中將なりけるとも書たるからは他人の事な
らぬは明らけし【中將など云はこの條には行平にもな
りひらにもかなはぬ時なれば今本にはわざと書もらし
たるなるべしよりにて古本もて加へたり】さるを此文

しと云なり

翁さび人ながめを狩ころもけふば狩とぞたづもなくな
る

翁さきみに中々花やかなる出たちするを人ながめ
そよかゝる齡にて今日ばかりの狩にこそあらめ鶴すら
けふばかりとぞ鳴といへり此けふ斗に今日は狩とそへ
たりいとも風流なる事ぞかし○翁さびは翁さきみの略
なり(ひの濁とみの清とかよふ例なり)心に進む事を
云故に轉じては懋と云意にも落るなり萬葉に(大伴池
主)針袋今はたばりぬすり袋今は得てしが翁さびせん
と云も翁さきみと云心なり

おほやけの御けしきあしかりけりおのがよはひを思ひけ
れどわか、らぬ人は聞おひけるとかや

こは記者のそへて一つの心をなせり且此みかど今年御
とし五十七におはしければ御身におぼし負せたまひて
みけしきあしかりと云なり

むかしみちの國にて男女住けりをとこ都へいなんといふ
この女いとなしうて馬のはなむけをだにせんとておき
の井みやこ島といふ所にて酒のませてよめる
此一條古本になし落たるなるべし

よく意得ぬ人は時世のたがひたるにつけていとく難
き事とうたがふよいふにもたらぬ事なり○なま翁はや
や年老たるほどを云俗になま年より我物ぶるてふに
同じ○本付にける事は大方之鷹かひ云々前にも其かた
に付たる人なればとて凡の鷹飼部に入て供奉にさむら
はするとなり今本に大鷹の鷹飼と有は大かたを大たか
と見ぞこなへるならんさてはことわりむつかしくこ、
の趣にかなひてもみえず
すりかりぎぬの袂に鶴をぬひて書つけ、る

鶴を緋て云々は後撰集に嵯峨の帝の例にて芹川に行幸
したまひける日(在原行平朝臣)さかの山みゆきたえ
にしせり河の千よの古道あとはありけり又同日鷹かひ
にて狩衣のたもとに鶴のかたをぬいて書つけ、る(同
人)翁さび人ながめを云々是をもて書たり且嵯峨の
御かどの例といへるを以て芹河行幸は嵯峨の御時に始
めたまへりと云説は悪し類聚國史帝王部に(桓武)天
皇延暦十五年正月遊獵于芹河野と見えて已に桓武の
御時有しなり然れば其始をいふにはあらず凡行幸には
國司に官位をまし田租を免じ老を恵みたまひ又供奉
の次第装束などさま々の事有を嵯峨の例に依せられ

おきの居て身を焼よりもかなしきはみやこじまへのわか
れなりけり

こは古今集の物の名に沖の井都島を隠して小野小町が
よめる歌なるをかくはし書を作りて一條とせしなりさ
てこきん集にての意はおきの井は嫌の居て身をやくと
隠したるに宮こ島は隠れずと云人あれと今憶ふに加役
流人に別る、意にて身役島へ行別れが悲しきといふを
そへたるが役とやこと音をかよはし且上の身を焼とみ
やこと語のひゞきをかさねたるを曲とせり且物の名は
島方なるをべをえのごとく唱ふるも又ことを異ならん
むるは隠れざるにあらずさて此文には都へ歸る夫の別
れをかなしむ事と採かへて宮こ島方を都へと聞するな
るべし詞の中に他し言の交りても凡の語の韻にて聞し
むるは古歌の常なり(へは此文にては元のごとくな
へて都の方てふこ、ろとするなり)○此歌古今集に載
たるを或家にては墨もてけしたり其謂は伊勢物語は朝
臣の實事なりと思ふ人此歌古今集に小町のとて有時は
業平とまたく夫婦のごとくなり然とも此二人夫婦てふ
事は物にもみえず必さは有べからぬ事とて此歌をけち
て取ぬなるべし常に云が如く古今集よりいと後に作れ

る此文をよくも意得ずしてみだりに古書をけちなどせ
るよ悪むべきに堪たり

むかし男すゝろにみちのくにまでまどひいきけり夫みや
こにおもふ人にかくいひやりける

波間よりみゆる小島の濱久木ひさしくなりぬ君爾不
會而

(こは萬葉に「浪間より見ゆる小島の濱久木久しくなり
ぬ君に不相四手と有を其ま、川をてさて陸奥に在て京
をおもひやるに似つかはしと思ひよりて右の詞を加へ
て一條とせしなりけり歌の意いと久しく離れりて戀し
く覺ゆるてふ事は萬葉の如くなりされど此文には何事
も皆よくなほりにけるてふ詞をそへたるによるに今ま
では好たる心の進びに本の妻をば大かたに思ひて在つ
るをさる心なほりてより今更になつかしくおぼえ侍る
意とえたるならん〇濱久木は濱邊に生ずる楸の屬をい
ふ萬葉に「吉野にて赤人」ぬば玉の夜の更ゆけば久木お
ふる清き河原に下鳥まば啼又わたらひの大川のべの
若麻木我久ならば妹こひんかもなどよみて此本は水氣
ある所に専らある物ならんよりて濱邊にも有べしさて
此文の今本に濱久とあるは定めて定家卿の本はまか有
けんを後にかたくなに守りて書しならん此同し歌萬葉

にも此文の古本にも濱久木とありそれを取たる拾遺集
にも濱ひさぎと有からは後の家々の本にいかにも有とも
とるに足すいはんや濱ひさしてふ語はすべて例なき事
なり
なにごとみみなよくなほりにけるとなんいひやりける
昔放縦なりし事ども今はよくなほりたるといへり此詞
たゞに見ては此文の意に適はず右に其旨はいへり今本
にはよくなりけるとあれど古本になほりにけると有
方よし
昔みかど住吉に行幸し給ひたりけるに
かくて此左の歌御製ならばみゆきまたまひてよませ給
ふとか又歌の次によませ給ふければなど書べきをたゞ
行幸したまひたりけるとのみ有は其時にかの男のよ
める意とみゆ
我見てもひさしくなりぬ住吉のきしのひめ松いく世へぬ
らむ

るのみまかも萬葉のよりはまらべ劣りたるを古今にと
られしは今少委しからざりけんかく古歌を犯せしもの
なるをいづれのみかどの時なりなどいへる例の由意得
ぬ人のさだのみ【古今集にだいまよみ人もまらぬてふ
歌には萬葉の歌を犯したる多し凡かの集えらばれし時
も萬えうをば今はかり委しくは心得られざりしなり】
御神現禮給而

らすやとかけり世にもまか言ならへり君は業半なりと
いへり眞淵今考ふるにさるうたがひいくらもおこるべ
き歌なり委しくは次に云べしさて此君は天皇をさま奉
るなり久しき代よりいはひそめて君が代を守りぬるむ
つまじき神の御心を天皇には更にも知たまはじやと云
意なればなり昔の男のうへを久しき代より齋ひそめた
まふよしは前後に見えずたとひ其男のよめる歌として
それにつけて神の現れてよみ給ふともこたびは行幸の
從駕にての事なれば大神は天皇の御事をおぼしてよみ
たまふとすべきなり〇荷田のあづま麻呂いはく住の江
の大神の事は神功紀に見え其後に神功皇后をも相せ齋
ひ奉れる事誰もえれるが如くなりさて此御神海路を守
り又神功皇后の天の下治め給へるみわざにつきてすめ
ら御國を守りたまふ事は云にや及ぶ然るを後世六百年
ばかりの人は此御神は歌を守りたまふとぞいふいにし
へ今の書ども、神の秘事てふものも見きはめ侍れどさ
る事は見えすたゞ此物語の此條を戯れ事ともえらぬ人
のいひ出たるなりけり【或説に住吉には別て歌守り
給ふ子細有などいへるは例の古今集傳などのむねな
りすべてさる事はあげて云にたらず】さまぐにもい

今本には現形したまひてと字音によみたれどさよみて
はこの文の詞の例にもそむきて且いやしげなり文かく
に妙なる此記者いかでまかつたなき詞書んや古本に右
の如くあるぞよきなり(されど一の古本には現形とも
有を思ふに禮を形にあやまれるならん若又現形正字な
りとも此二字をあらはれとよまんに何のきらひかあら
ん今は現形とあるを見て訓をつくべき例をも雅俗をも
わきまへずして音によむならん)

そめてき
或人此歌の詞どものと、のひ侍らぬをうたがひて瑞を
水になして水より浪はたてばまかつけたるにやまか
らねば白浪の詞こ、ろえられぬなり興義抄には君はま

へる此文を誰かまこと、せんかつ物毎に神のまするは古へのむねなれど人の言語をこと更に守りたまふ事は有べうもあらず幸ひを祈らんにはいづれの神にても守りおはしなんと眞淵考るに右の論實の言にてぞ侍る是をば神の御歌とてかしくみても誰もよくとかぬにや【神代の歌は心朴にしてときがたきやうに貫之の書たるは一わたり的事のみ凡古事古言をきはめて明らむる時は古事記日本紀の歌ども、皆明らかに解る、なりよりて神詠はとくべからぬ事あらんと思ふはいにしへを明らめぬ人の詞なり又後世神の御歌てふにことわりもとののはぬ多きを神の御心なれば人のはかるべからぬと云説有然らば古事記などの神詠の心明らかなるはいかに古書に擧られし神詠の明らかなるをおして後世云神詠の明らかならぬは皆實の神詠ならぬを知るべし】よく見ればたゞ例の記者の作れるが中にもいとわろき歌なりけりいで其由をいはんには實に神の御歌ならば古事記日本紀などにみゆる皇神たちの御歌の様にや有べき又其時に從ひてよみたまはゞ時の上手の歌さまにも有べきをいと委情もわろき此記者の口つきなるはいかにぞやさてかの君は自浪して詞もつゝかぬ如きは

と古き代の歌にも見えぬ事なりみづかきの久しきとは磯城瑞籬宮の御時に（崇神天皇の御代を云）初めて大和國山の邊郡石上邑に社を建神寶を納めて齋ひたまひしより石上の布留の社を瑞籬の久しきといひなれ來て萬葉に（人まろ）をとりぬらぬ袖ふる山のみづかきの久しき時ゆおもひき我はとよみそれより轉じて同萬葉にも少し後には栞垣久時從とて布留ならでもよめる事となりたり然るに此神詠にたゞ久しき事の冠辭とのみせられしは此御神は古しへをば捨ていと後に轉々せる例を用ゐたまふとせん歎其うへかの人まろの久時從と有はひさしきときゆとよむべき事は他の卷に此歌の再び入たるに時山と書しを證とすべし（ゆはよりてふつゝめ言なり）さるを今本に久しき代よりと訓あやまりたるまゝに神も詠たまふにや古語の意は明らかなるものを又齋とは因をいみ吉を用うる事を云ば身に物いみして神にも君にも仕ふるをも人の上を祝ふてふも皆さる心にて云語にては侍れどかく久しき代よりいはひそめてきといひては此神を齋ひはじめし事の久しき事と聞えて神の君を祝ひ給ふとせんには少こと筋違へるに似たり又已に云る如く萬葉にあめのか

山を讀る歌を墨の江に云かへたるのみにて實には古歌を犯せし歌なりその歌を唱ふるを聞給ひて神のいと感たまひて現れたまふとは古歌に委しからぬ神と聞ゆべし皆そらをあふぎて笑ふべき事ならずや歌よく意得たらん人は學問に私すまじき理りを知て心の鬼をやはらげつゝ考べき事なり【天下の古き書を委しくする人の後の書をもよく見侍るに付ていにしへよりの世のさま人の心をも明らかにみるべし然るを後の人は物をかくせばかくさるゝ事と思ひて物しり顔し古き傳あり顔するよその宮の内見すともいづこにはいかなるほどの書をいかさまに意得いかなる心さまてふ事とも云らるるものなり必々私事すまじきは學問の道なり】或人云さのみにては道の立侍らじと答ふ道は直きを専らとこそすれ柱て立んと爲るは道を失ふわざなり幾ほどもなからん己が命のうちにもむなしき事もて人を懐けんは何の爲ぞ極りなからんすめらぎの御代ゆく末の人に笑はるべき事をこそ恐れめとある人又云然らばこの條はいかに解にやと答ふ凡古書をかくまで先論ろひて後になだらかに心をやりて解べきなりよりておもふに物語てふものにはあやしげなる事を云ぞ興なる故にかくも

作りその且此記者は文よく書歌もよろしきも有をかくわろく作りてまかも神の御歌なりとしもいへるは後世好事の作りて神のよみ給ふてふによくと、のひたる歌はなし其比はさこそ有けめ故に中々にかく人笑ふべく作りけんあらはに古今集に載たる歌に端詞をつくりて出したるを誰か作り事とせざらん其歌をめでたまふ故に顯はれたまひて即神のよみたまふとする歌を誰か實の事とせん後世おもひまどへる説あればこそかくあけつろひも侍れそのかみは人皆物がたりと云りてさるかたの興にこそまたれ只後の世こそかなしけれ昔をそこひさしくおともせでわするゝ心もなし参りこんといへりければ此男久しくおとづれだにせず在て今更に忘れたるにはあらずゆきて逢んといひおこせたるなり○まありこんとは参りは聞えて來んとは先の方にて云べき語なるを此比の語にやありけん已にも男の方より今参出來といひたる即このまありこんと云に同じきなりさて歌は女のよめるなり然るを或説に女の男のかたへ参りこんといふ事とし歌も其心にて云はいかなるひが目なるらん

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ言葉のうれし
げもなし【今本たえぬ心のとあり古本ことの葉玉かづら
によれ、ばよろしきなり】

ひとつ葛のかたぐにはひわかれてあまたの木にか、
れるを男のあだし心多きにたとへて且久しく音づれも
せず有て我にも絶ぬ心といふはうれしとおもはずと
いへりたえぬもこと葉も葛の語なりさて是も古今集の
歌に詞をそへたるのみ(葛に實あれば玉かづらといへ
り或説に是を綾の事と云はまどへり玉鬘と玉葛は語は
同じくて事は別なり萬葉に此二つ有をことに付て見わ
かつべきなりこ、は草かづらならではいかにかとかん
むかし女あだなる男の念記とおきたるものどもを見て
かたみは形見の意にて昔在つる人の形のかはりに其物
を見る故に云【或人かたみは忘難の心と思へるは事の
すぢを誤れり是は歌などのいひかけに忘がたみと云に
て本語にあらず】○遊仙窟に念記をかたみとよめり古
本是に依て書るならん
かたみこそ今は怨なれこれなくばわする、ときもあらま
しものを
こは又こきん集に題をらすとて有歌なり心明らかにて

よろしき歌なりさて中々にかたみは怨敵にこそあれと
云のみこれを他と濁りてとなふるはひがことなり【或
説に定家卿のかたみこそあだの大野とよまれし歌を
講ずる人あだをすみととなふべしと云に鹿中にて女の
あな恐ろしといひしに付て聞よきに随てもありぬべし
と定家のいはれしからは今もにござるべきに云はいかに
ぞや右のかたみこそあだの大野てふはあだの大野にい
ひかけたるなればもとより其所の名の本につきてに
るべきなりたとへばかくとだにえやはいぶきのさしも
ぐさといふはえやは云といひかけたれど本の伊吹の地
のにござるをば其ま、にていひかけの方のすむ語にはか
かはらぬなり玉かづらおもかけとつゞけしは上は面
懸なるを下の面影をすゑてにござるがごとく右も阿陀の
大野の方をすべて濁るべき事なるをかの講師の委しか
らでとなへそこなへるものなり是らはいひかけたる
詞の時の定にてこ、には用なけれど後の人は古語を委
しくせず清濁の語をよくも辨へぬ故にかの説にてまど
ふ事多ければ云のみ又みだりに見よく聞よきにのみ
たがひて古實を失ふわざも多し學者は心すべし】伊
勢の集に「我爲に何のあたとて春風のをしむとまれる

花に吹らん貫之集にも怨の心なる有源氏のさか木の巻
に「あふ事のかたきをけふにかざらすば今幾代をかな
げきつ、經ん(敵を難にいひかけたり)御ほだしにもこ
そと聞えたまへばさすがに打なげきたまひて「ながき
世のかたみを人のこしてもかつは心を怨ととるらん
これらを見てあがたきてふ意なるを知べし

昔をとこ女のまだ世經ずとおぼえたる人の御もとに忍び
てものきこえてのちほどへて(こ、は物きこゆると聞て
後とか又物云と聞えて後とか有つらんを語の落たるなら
ん今の如くては詞たり侍らざるなり)【此條古本になし
おちたるなるべし】

女の弱くてまだ男にあひなどせぬを世を經ずといへり
さてまか思ひてをりつる女のはやく人にあひつと聞て
よめるなり後撰に女にも云男二人有けり一人にかへ
り言すと聞て今ひとりがつかはしける「なびくかた有
けるものをなよ竹のよにへぬものとおもひける哉とよ
めるがごとし○ほどへて後と書たるはまか聞しより後
はいよ、かたぐへもいひかよはすらんとおしはかり
たる意なるべしさらでは鍋のかす見んとよめるにかな
はずほどへてのちてふ詞もたゞにては益なかるべし

あふみなる筑摩のまつりはやせなんつれなき人の鍋のか
す見ん
筑摩の社の祭には女の男せし數ほど鍋をかづきてわた
ると云りよりて其所の人ならねどたとへてよめるなり
女の我につれなきを悪みてまか云なり○近江の筑摩は
御厨なれば延喜式などに多く出たり此神は文德實錄に
仁壽二年二月授近江國筑摩神從五位下と見えたり
むかし男凝華舎【拾芥抄に凝華舎は飛香舎之北五間四面
也といへり】より雨にぬれて人の往を見て

か、る所々の名は其庭に藤あるを藤つば桐あるを桐つ
ばと云こ、は歌によるにも梅有によれる名なりつばと
は大きな庭ならで殿どもの間にてつばかなる庭を云
○まかるは宮中より退くを云今本にまかりいづると有
もまかながら古本にまかると有にこ、はたれり
鶯の花をぬふてふ笠もがなぬるめる人にきせてかへさん
こは古今集に「鶯の笠に縫てふ梅の花折てかさ、ん老
隠るやとよめるをとりて記者のよめるなり【或説にさ
いばらに「青柳をかた系によりてうぐひすのぬふてふ
かさは梅の花笠てふを引てちかき古今集より前に出來
たるてふあやまりにつけてなるべしゆめくまかはあ

らす古今集よりはいと後の文なり】○ぬるめるはぬれ
るてふ語を延ていへり(るめの反れなり)此類にゆくめ
るはゆけるなり(くめの反けなり)いぬめるはいねる
なり(ぬめの反ねなり)すべてこをもて知べし
かへし

うぐひすの花をぬふてふ筈はいなおもひをつけよほして
かへらん

雨に濡て退るを鶯の縫てふ花笠きせてかへさばやとの
たまへど是をばほしからずたゞその思ひを付てたま
へさらば袖を干て立歸りぬべしとおもひを火にとり
なしたり後撰集に「にくからぬ人のきせたるぬれ衣は
おもひにあへず今はききなんとよめる類なりさて此終
の句をほしてかへさんと有は書ぞこなへるなるべし古
本に將還と有て理りもなく聞ゆ花笠はいなといへばほ
してかへさん物はなし我袖を干て歸らんとこそよみた
れ【ある説に干てその志をむくひんとなりといへる
は去ひたるものなりそれを又たすけて我袖を干てかへ
りてのち報ひをなさんと云にやとも云よたゞかへさん
といふのみにさる意まで有べきかはそはともあれ古本
によるにことわりも心も明らけきなり】○此二首例

の記者のよめらんが中に返しはこといやしげにいて
にしへの歌の容姿ならす
昔をとちぎれる言あやまれる人に
契れる言のあらずたがひたる時に其女にいひやれるな
り

山城の井田の玉水手にくみてたのみしかひもなき世なり
けり

此本は水を手にくみてのみしといひかけたる序にて末
はたのみしかひもなき世の中ぞとなく意のみなり水
を手にくみて飲てふ事已に貫之の「むすぶ手のまづく
ににぐる」とよめる類多し○たのみとは契おきつれば終
にはあはんとおもひたのむを云○玉水は袋ざうしに井
出の玉水とてめでたき水ありてゆき、の人手にむすび
てのむといへりさも有事歎猶おぼつかなし【玉とはめ
いふ語にさま／＼有が中に此玉水は即玉川の事ならん
水の字をかはとよめる事古く例あればたま水とよむも
即玉川に同じからん】○大和物語に此歌の本の句に心
あらせて詞を作りたるは又一つの作りざまなりされど
も序歌の上の句にいはいはれあるやうに爲たるは同じ作り
ことの中にもわりなきなり

といひやれど報へもせずなん

こは女の方に有まじうにくき心なるを擧て次の條のま
ことある女のさまをつよく聞せん料なるべしさる例此
文に多し(かくならへる例によりてあげおとしなどせ
る事條ごとに有もやすらん猶さまでは心やりがたくて
おち／＼にはいはず後の人心しておもひたまへ
むかしをそこありけり深くさすみける女をやう／＼あ
きがたにやおもひけんか、る歌をよみける

こは古今集(雜部)に深草のさとに住はべりて京へまう
でくとてそこなりける人によみておくりける(業平朝
臣)と有て此前後友だちなどの贈答せる篇なれば是も
去たしき人におくりつらんを此文には夫婦となりて住
ける女にむかひてよめる事とつくりかへたりされど古
今集にもかへしはよみ人去らずとあれば女にても有け
ん其次に男どちの贈答も戀のごとくよみたるによるに
たゞまたしき女とは去らる

としをへてすみこし里を出ていなばいと深草野とやな
りなむ

年経ていと／＼草ふかく住なしたる郷をわがすて、い
なばまことの野とやならんといひて深くさの郷を詞に

せり且四の句にいと深草といひつめたるが中々に上
手のわざにて面をろし
女かへし

野とならばうづらとなりて鳴をらんかりにだにやは人の
こざらむ

聞えたるごとくなり其中にかりにとはかりそめてふ語
なるを鶉狩にだに來んものといひそへたり【かりそめ
に狩をかねたる事六帖の歌にてもしれ六帖に「我宿は
うづら伏まではらはせせじ小鷹手にすゑこん人の爲とも
よみたり或説に鶉狩を豫たるにあらすと云は例のひが
こ、ろ得にて強たるものなりすべて鶉は野に住もの故
に荒たる所をつよくいはんとては萬葉に(故郷)「うづ
ら啼ふりにし里の秋はぎの云々」鶉なく人の古家に云
云「鶉なくふるしと人はおもへども云々などさへよめ
りこれらをうけてこきん集六帖などにはよめる物を
とよめりけるにめで、將往と思ふこ、ろなくなりにけり
前の條には男のまたへども女のまことなきをいひこ、

には男のあきがたになりて出ていなんとするを女のう
らむるけしきもなくたゞ野となるま、に鳴をりつ、
いとせめて狩にこんやすがをだに待居らんと云へるか

ざりなき女の眞ことを感て男のとゞまれるをいへり作
りなしたる物といへど是をよむときあはれす、まざる
はなし然れば此こゝろをそへんとて巧に端の詞をかへ
はたこれぞ男女の中らひを云終なればいとたはれた
りし事共の末にまかしながら見る人心せよとて記者の
心せるにや侍らん見よ、次の二つの條に故あるつら
ねざまなるを

むかしをといひかなることをおもひけるをりにかよめる
此思ふ事を何々など云はわろしいかなる事をおもひけ
る節にかと書たれば手を觸まじきてふ説はよし
おもふ事いはずたゞにやみぬべき我にひとしき人しな
ければ【新勅撰には此二の句いはでたゞにぞとあれど古
本に不言會直爾とあるによるべし】

人の心の裏に常ある事なれば云とかずとも有なんこは
大かたの人の歌とも聞えず業平朝臣の年たけてよみし
にやあらん婆情似たる所あり○たゞにとは萬葉に黙然
と書たるにかなへり
昔男わづらひてこゝちまぬべくおもほえければ
古今集にはやまひしてよわくなりける時よめる（業
平朝臣）とありいづれも理りはたがはず○こゝちまは心

持を略せる言なり心地と書るも假字なり（かなにいふ
時はあやまりにはあらねど心地の字になづみて誤る人
あれば心地とは書まじきなり）
つひにゆく道とはかねてき、しかどきのふ今日とはおも
はざりしを
こは心ことば明らかにて心の眞言をいひたればいかな
る賤だにも聞得て且いにしへ今にふたつなき身の終の
歌なりけり歌てふ物はかくまことをいひ出るものなる
を後の人は工みにからめられて心も心ならぬ事をいふ
者くちをしまして身のはてに讀るにも心ともなきさと
りがましき事いふよいとくちをし／＼○豫兼等の字を
かねててふ語に用ゐたる事萬葉に多し前より末をかね
たる事を云なり。業平朝臣は元慶四年五月二十八日に
齡五十六にて卒られし事三代實録に見ゆ其ほどの歌に
や有けん此物がたりを實記のやうに思ひまどへる事久
しざるは是を以て古今歌集などをも誤れる人あり仍て
其理りを云とかんとするまゝにいひ過したる事もおほ
かりきすべての書ざまをいともあらばなほしつべし

伊勢物語古意卷六終

よしやあしや
五十瀬の海のふかき心をときあかせしふみこたび昔清
むるなべにいでやふりにし世の事は波のみちきえて跡
なきが中にも猶一つふたつおぼしよりし事どもをか、
るたよりにもこそとくらぶの山路たどる／＼かいつら
ねてある人に見せ侍ればこや難波人のことぐさのよし
やあしやは、さだすべくもあらねどいにしへよりから
のやまとのふみとく人もおのれいふかきから筆はは
じむとこそおほゆれ野中の清水もとのこゝろいかなら
むとも射めたて、は遠からじなど打あざめるやうなる
をましてはた世の人わらへ草なるべくなむ

一 此物語の題故は在五中將物語といひけんが伊勢物語
とはまばら後なる人の別號にや稱出つらんとおほゆ
るなり其由は此文に妹のいとおかしかりけるを見て云
云の條の注に源氏物語の總角の巻に在五中將の日記と
云はたゞに此ふみを云なり又狹衣に在五中將の日記と
云もまたく源氏の文をうけて一つ事を云るなれば日記
とは既に其比物がたりと云を詛れるなるべしといはれ

よしやあしや

たるによるに當時某等のふみに在五中將の日記又ざい
五が物語などいへるにつけて私にまか思ゆるなりけり
いにしへの物がたりふみには其ふみの中に主と爲る人
の名もて題とせし例まづ竹とりの翁を初めうつぼの
俊陰はこやの刀自かたの、少將おちくぼの君光源氏な
ど猶多かりき又さらしなの記に在五中將の集と有は其
比までではさるふみも有しかさらば或説に在五中將の物
語の外にざい五が日記又集てふ物も有しにやと云もま
ひて悪むまじき事なり其は日記てふ書ざまは土佐日記
かげろうさらしなさいぎよひ等に見よ能とに作り物せし
寓言にはあらでおのが上なる行狀どもを年月の編次の
まゝに記せしかば此むかし男云々と條毎にいひおこせ
しとはいとも異體なるをおもへばなりひとり榮花物語
こそ日記の體なるをまか名づけし事のいふかきさよ思
ふに是はおのが上にはあらねど實に世に有し事どもを
書あらはしたるが時をはかりて書の題ばかりそら言
のためしなる物がたりとはかいつけしにやあらんさて
伊勢物語てふ名も源氏の繪合の巻にいせ物がたりに正
三位を合せてまた定めやらすと有を見ればはやく其比
にはまかよびし事のまきもて此文作りてまばらく世

の別名ならんとは云なりざるを後々の人はまかのみ稱ぶ事となる由をおもふに伊勢の國へ狩の使にいきけるに齋宮なりける人と密事有し物語をいともはかなげに作りなせしがおもしろしとて伊勢物語ともいひはやしつらんを後に在る五物がたりてふ名は忘れにいていふ人もなくなん成にたるを憶ふに加茂の翁の委しく論せられし此いつきの宮なりける人を怡子内親王の御事と諸説に云はあやまりなる事國史に正してことわられしかば今者誰人か皇女にさる汚しき御名をおふせまらすべきこゝに文徳實録に嘉祥三年七月九日晏子内親王爲伊勢齋宮、賀茂齋宮親王、更立無品述子、爲齋内親王、遺右大臣藤原朝臣良相於神社、告事、山、其事、無知之者也、この加茂の齋王の廢られたまひし事ふかく秘めたまふにはまじき事世にだにあらはにより所も見えぬにはさだくと云べからぬをもむかへて思ふに業平あそんの放縱なりし事どもは文徳の御時なりけん事後の御事につきてもあづまくだりの事につきても委しく論せられしなりざるは此加茂のい

つきの廢られたまひしも同じ御時の事なればよしやは朝臣と物らいひ歌よみかはし給し事を露されて齋院をまか出させられたまひし其山神に告させたまへるものかされど深くおほし恵ませ給ふてや何の故とも世にはあらはさせたまはぬを京童べのまかふの事有てよなどいひさやめけるを摘て此文には作りなせしが猶秘したまへるを其御かたと指ん事後の世ながらもはかりて加茂のいつきを伊勢にとりかへなどしてあらぬさまに記者のあめるを世の人殊におもしろしとて伊勢物語とはひとつの名にやよびけん伊勢の齋王の汚しきにおろされたまふは文徳清和の御時にはあらざりしかば伊勢のいつきと書なすとも實事ならぬは國史にまじき近き世の事は人も大かたに知なんものぞさてなむ業平ならぬ在る五物がたりの伊勢ならぬ伊勢物語なるには彼袋ざう子に有る密事之故爲稱、密事之由も此所謂なるべき歟然ども古今集の今の本に朝臣のい勢の國にまかりける時にいつきの宮なりける人にいとみそかにあひてと云詞も見えれば伊勢にまかられしはあづまの國國ありきしけるついでといはんには誰も諸なふべきを猶いは古きん集も今の事は業平の歌の此物語に採たる

のみは端の詞の長々しきをみれば大かたは此書もてかれを補なひなせしが如くみゆるよと我翁のいはれたり此伊せの國に云々も其がかたにいふかしくもおぼえ且此ほかにも彼集には後より改めおきなひたらん事間々みゆめるは今の本のたのまれがたき事まろくぞ侍るそはとまれかくまれ此ふみ故は在る五中將の物語と云しを伊勢の齋宮の物がたりとにおもしろしとて伊勢物語とはまばらくの後に云榮しけん事おほゆ又和泉式部の本と云には伊せの齋宮の條を初條に出せしと有をもて古本とすべくいふ人もあれど其も一時の人の稱言につきなどしてまか書あらためしをや傳へけんとかくぞ初冠の條をはじめとせん事本注にいはれたるぞことわりなるさて業平朝臣の事此物がたりをより所として世のうかれ人にいひ定めしはうけがたき事なり源氏の繪合に此物語の事をいへるに世の常のあだ言の引つくりひかざれるにおされてなり平が名をやくだすべきと書るをおもひてにや或博士の在中將の論と云物に國史稱體貌閑麗放縱不抱含、是它無所考又云至如、其好色、牀、芽不、脩世固病、焉然觀、其世、宣、姪是競、貴、遊、子、弟乘、堊、垣、望、復關、握、手無、罪、目、貽、不、禁、則、習、尙

之使然也乃病其風、俗乎可也矣、獨責在中將、爲姪首、哉昔司馬相如自作傳叙其臨、甲之奔、且文辭靡麗、不爲行藏、古之人乎亦不足怪已後、世刻、刺之流好揚惡德、令古人無所容、足則莫取、諸風、雅、和歌者流、家傳戶誦、而不問其人、可謂厚矣、この論實にいはれたり猶いは其ほしいま、なりしも文徳の御代のあひだの事にて清和の御世となりし頃は身も修まりしかば官位もす、みて見え且貞觀十四年五月十七日敕遣正五位下右馬頭在原朝臣業平、向鴻臚館、勞問、渤海客、是月客、徒賜宴、といふ事も見えたり異國の客に應接の任放縱の人はつかはさるべかず且此日の宴には客人と言談贈和の遊びなどもあるべしさるは翁の略無才學とあるは國史の寫したがへにて無は有の字をふと書あやまれるなりといはれしも宣言にて源氏の物がたりに業平が名をやくだすきてふ文の義をもやすく解うべかりける

一むかし男うひかうむりしてな良のみやこ春日の里にまるとよしとてかりにいにけり、此いにけり古本に往の字を書ていきけりとよみたりしならんをいさといにとの相似たるに寫たがへしとぞ思ゆ領せし所へ狩しに

ゆくをいきけりとは云べしいにけりとは文をなさるなり古本に所々往の字を書るはいにもいきとも其文につきてよむ事なりこ、は必いきけりところよむべけれ

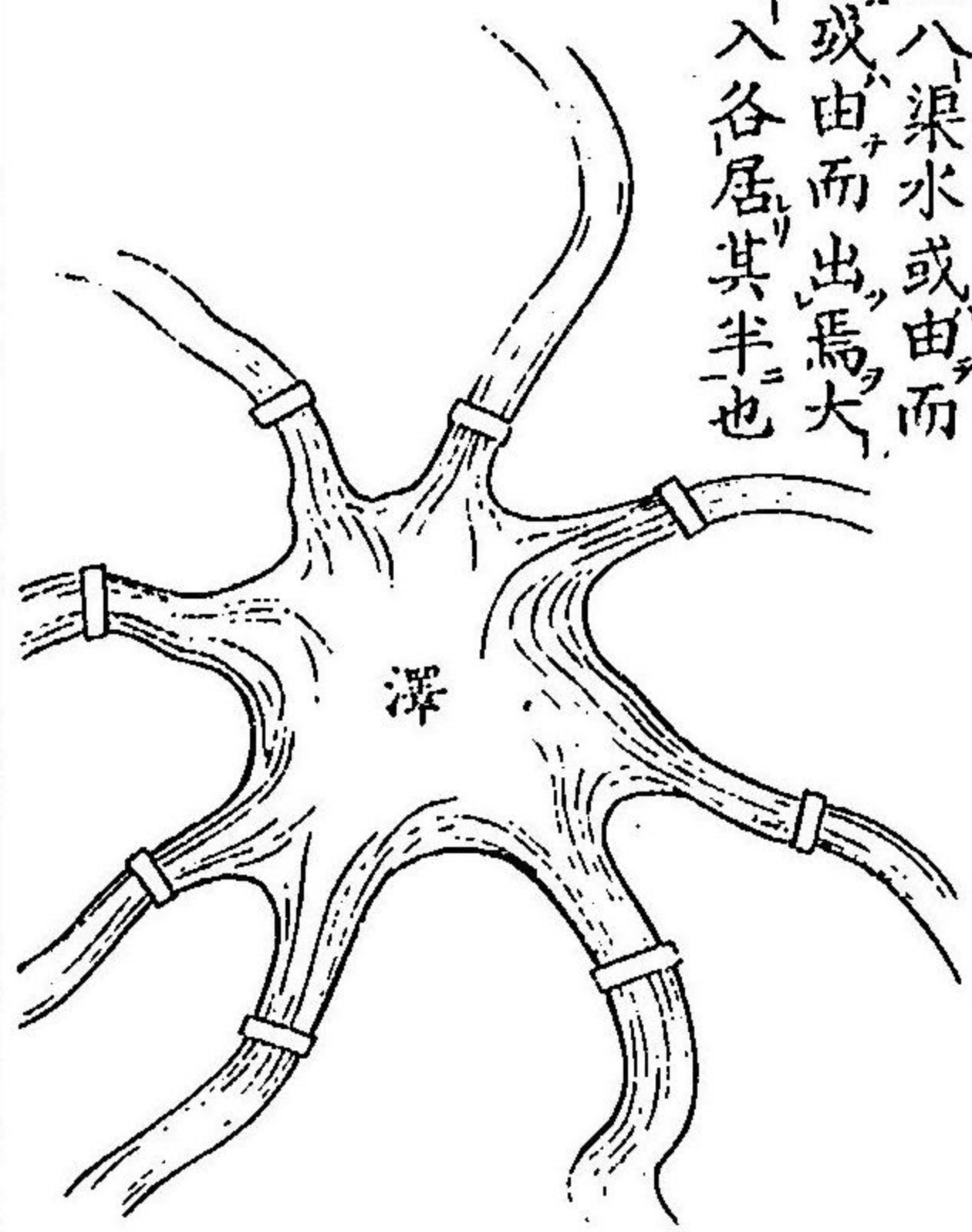
一 思ひあらば葎の宿に寝もまなん云々此歌萬葉集の「玉しける家も何せんやへむぐらおほへる小屋も妹としをらばと云を摘たりといはれたり又此玉まけるてふ歌は古書記の神武のおほんに「蘆原のまげ、き小屋に菅だ、みいやさや敷て我二人ねしとよみませしを擬したるものなるべし

一 草の上の露を是は何ぞとなん男にとひけるをゆくさきとほく夜もふけにければおにある所ともまらで此文には何ぞと男に問けるをの下に何とか詞章の二句ばかり脱たるならんかくては文章と、のはす覺ゆさて注にいかなる人か露をまらざらむといひ又問には露は見えざるをかく書るはいとも里ばなれたる川邊を問の夜更て行はいと物恐しきに雷の光の彼處此所の露にきらめくをあやしき鬼の目などのにらめる状におほえて問こ、るなりと有て歌の注に草の上の露を雷の光に見て露とこにへながら又云其時自玉かとは問ねと歌の詞に

みて出たりけるを兄人たちのとりかへし給てふ事もそのかみにいひつたへし事のありしかばこ、には書加へけん古事談に業平朝臣盜二條后(宮仕以前)將去之間兄弟達(昭宣公等)追至奔返之時切業平之本島云々仍生髮之程稱見歌枕發向關東云々この書は實も廬もえらばすむかしの口碑どもを聞しま、に書集たる物なればたしかなるより所とはすべからぬと事のついでに出すのみそれを注にとう出て本文をいたはらざるは拙きものぞ

一 八つ橋の圖或人の補へるなりおほかたにかくざまなるべく思ゆ仍てこ、に出す

縦横八渠水或由而入焉或由而出焉大抵出入各居其半也



よしやあしや

かくいふのみ白玉てふ詞一首には叶へど前の文に能もかなはぬを思へばか、る古歌の有しを摘て詞を作りたるにも有べしこは文を扶けてとかれたるが猶盡さるるに似たり能々見れば芥川てふ川をいきければ草の上におきたりける露を是は何ぞと問までは神なり雨降ともいはず且問ければの下に詞もおちて見えさて歌にまら玉か何ぞと、ひしとよめるを合せて草葉の露を玉かと、ひし文ならずやかく細かに文と歌とを照して見るべきが古へ風にて且此記者の巧妙なるよしを幾たびかいはれたるにこ、のみ白玉かとは問ぬとはいかにぞやおほゆかつ神なり雨もいたくふらば草葉に露は満まじくさるおそろしきにはたをやめのやがてそにても魂消んものぞさらばこは何ぞとは小夜の道しは分ならはぬ心にかばかりおきみだりける露原をとせせる松明或は問の雲間の星の光などに玉ぬきみだしたるごとくもそらめして問んはなまざかしき女ご、ろと見ばいかに又今昔物語に業平朝臣の妾を鬼に喫れしは山科にての事と記せりさるは其頃の浮説にそはかしこにての事なりなどとりかたりし事とおほゆさてこ、のうら書に二條后のいことの女御の許におほせしを偷

一 かれひは本注に云るこは飯をほしからして行旅に携る糧なるが和名抄には餉をかれいひにおくるとも又俗に云かれひともよみ又糧をほしひと讀り古言にはすとかる、とは同言なるをや餉は自家而之野と云よりふと見て旅の糧の乾飯に借たるにて字はあたらす糧も乾糗也と注して米麥を蒸たるを糗といへば共に叶はず御國の言語は字を儲奴として意得べきと云教へは宜し

一 鳴はまほじり 比枝の山に難波の河を対してたとへんに文は愛たけれど沙をり云が即河をり事なりといはんはいかにぞや思ゆ我難波の河後は河の流の海に入所にて今の俗に河口と云土左日記にみをつぐしのほどより出てなに波津きて川をり入ると有をも見よ其わたりさらにく沙のみよせて鳴べきにあらすこはた沙後にて沙さきの磯にふれて音たかきを鳴は沙をりのといふ歎古歌に打よする波を磯にふりともいそぶりともよめるが見ゆさらばいづこにもあれ海への沙の打よする音もてたとへしとは聞ゆべきが猶これより他には見ぬ詞なればまひて定めがたし(近頃さぬきの國へいきし人のかたれる彼國にては波の磯にふる、所を沙をりと云とぞ)

一 父はなほ人にて 古本に直人と背て平直の意なり
 平人といはんがごとしと、かれたり是常倫の義にてた
 だ人つね人と云も同じ是につきて言辭になほと云もた
 だにつねにと云に同かるべし常の服を直衣云はこれな
 り又正直をなほしと云も質朴をすなほと讀るも物事
 あらはにて常たがはぬ人を云なり黄泉のけがれを身袂
 去たまへば大なほびの神生れませるも大神のいさぎよ
 き常になほらせたまふ祥なり神事さはりなく終りて神
 部等宴につく所を直相殿と云も物忌はて、常になほる
 よろこびの宴をなす名なりさるはそれを用語として
 はただに常にと云それより轉じてはまだ其うへなど、
 用ふるなるべし翁のまだの意にのみとかれしは盡さ
 るものにおほゆ

一 みよしの、田面の雁 或人云この二首のおくりこた
 へは古今六帖に雁の歌に入たりさるを此記者のよみた
 りとするはいかにと一わたりにはまか意得べけれど又
 おもへ彼六帖に部類して出せるは物を題してよめる歌
 のみならず物事に比興してよめるをも他に摘て其物
 の部に入ればこの記者のよめりや否やは定かに去ら
 ねども此文より彼に入たりとは云べし六帖は世に貫之

なるも朽ばみたるも渚に風の吹きよせしからと云意な
 がらこはからくだ物てふ名をかくしてよめれば言に引
 れてさまではえことわりがたきは此類ひの歌に多し朽
 るをくだと云は古言なり萬葉に卵の花くだしふる雨に
 又くだみ山を朽綱山とかけり

一 栗原のあねわの松の人ならば 或説に古今のうちの
 く歌に「をぐる崎うつの小鳥の人ならば都のつとにい
 ざといはまし此歌をとりて少かへたりといへり松を人
 ならばといふ歌日本武尊の御歌に「尾張にたむか
 へる小津の崎なるひとつ松吾兄を一つ松人にありせば
 太刀はけましを衣きせましを今古の歌はこれをとて
 よめるなるべし

一 手を、りてあひみし事をかぞふれば 或人この歌古
 本に十々五四葉と書たるはとをくいつくよつはとよ
 むべしさては四十年の事とは云さだめがたしといへり
 古本の書さまこ、のみならずうたてたはれ過てよみう
 まじき事有かつ假字の法などはすべて用ひずぞあるさ
 るからことく今本にまさりたるにあらすまじへてよ
 きに去たがひて翁はとかれたり
 一 君がみけし みけしは御着衣なり古事記日本紀等に

のむすめの撰なりとて紀氏六帖ともよべど其はうけら
 れぬ事にて寛和の頃(花山の御時)の才士の手に成たる
 物ならんかと高津の阿闍梨(契沖)のいはれたりさらば
 年代の前後をもておもひはかるべし

一 とはぬもつらし問ふもうるさし 此うるさしを古本
 に愁の字もて義を去らせしには言の意は明らかなり或
 人は是はうれはしの義といひ又ある人は心せばしと云言
 を約めたるなりといへりされど翁は此頃よりの語にて
 古言にあらずといはれたるをおもへば解がたきものな
 り又源氏物語にうるせきといひて喜しき意に用ひしも
 同じくこ、ろえがたき語なりいづれ此頃よりの俗言な
 るべし

一 くだかけを百濟鶏なりといふ説は大かたの人語なふ
 べし或説に東國の方言に家をくだと云歟さらば家鶏の
 義なりと云るを翁はあづまにても家をくだといふ事な
 し是は彼説の引歌に「こゆるぎの渚に風の吹しからく
 だも残さず波はよせけりてふもくだは磯べの蟹が家な
 どの事にあらずくだとは芥の上略なりといはるれど其
 にかにぞやおほゆ芥をくだとのみ云し例ありやこれ
 は朽ばみたる沖津藻を朽藻と云にはあらぬか歌は香青

衣裳をみけしとよめり然るを御とらしの弓のしのの例に
 て助辭なりと、かれしはわろし衣をそといひ去といふ
 御衣衣手御着衣直衣などいへりそと去とかよひてとな
 へかふるは常の事なり

一 男去らずよみによみけり 古本に不知讀けりと書る
 につきて此男此歌の深きこ、ろも去らずこたへし本意
 なさの物がなりと、く人ありこも古本は落字なるべし
 女のなまざかしきを悪みて去らず貌してこたへしと云
 は面去ろし又契沖の女の歌を去ら翁は後紅に、ほふ
 物と聞しをいづらや其紅はた雪の枝もたわ、に降か
 かりたると見えてさらに紅にはほはずといひて此お
 くれるは紅によくにはひたる花にたとへて色このむて
 ふ名におふ人のさもあらぬさまなるによせたりとか
 れしに去たがふべくおほゆ

一 こだち ある人御達の説はわろし古本に兒達と書る
 をこだちとよむべき證なりといへるは宜し古言には男
 女ともに子と稱ふる事其一二をあげん男には「いざ子
 等はやく日本へ」ならの都をねるはたが子を女を云は
 「阿倍の市路にあひし子等はも」この丘に榮つます子
 など猶多しさて國史には赤猪子大葉子又皇女の御名の

みならず仕ふる女房たちにも杉子俊子などいと多しひと
 伊勢は亭子院(宇多天皇)の皇子を生たまへば大和
 物語に伊勢のみやすむ所とも書るにつきて伊せの御と
 稱す事と人みなおもへども是も出羽の子若狭の子等の例
 にてはじめ帝のめされざりしよりの名ならんにはい勢
 の子とよびしなるべくおぼゆか、るはすべて童名と云
 物にて今猶むかしにかはらずともうけ給はる貴女を
 稱御と云はうしろ見はかくしき御宮づかへ人のう
 へにてこそあらめ

一 出ていなば心かるしといひやせん 此出ていにしは
 女の人まぬ物うさに倦て家出せしなりとや此注うけ
 がたくおぼゆるは次の詞をよく見れば男の出て去しと
 こそおぼゆれ此女かく書たるを見て云々これ出ていに
 し女の書捨たるとならばこの女のと有べき文なり又次
 にいたう打なきていづかたにもとめゆかんと問に出て
 左見右見々れどいづこをはかともおぼえねばかへり
 入てとは深き窓の内に養はれて戸外をまらぬをんな子
 のなげきならずや又此女いと久しく在て忍じわびてや
 ありけんいひ遣けると云をまひて云遣けるとよみて出
 ていにし女の方よりおこせけると見しから始終たがへ

んと、よみたり或人さてはさき心の心となりて歌の意
 劣れり此歌古今集にはわすれんと、あればさるかたに
 意得べく云はよし古本に忘らんと、書たるをわすらん
 と、よみて我心とせんとにやまかとなへばはた向の心
 となるべし

一 おなかわたらひしける人の子ども 注にこは京の片
 ほとりに住もの、物もて中へかよひつ、世わたらひ
 すといへりこは大和人の河内へかよふ物がたりならず
 や又此おなじ物がたりをば大和物語には昔大和の國か
 づら木の郡にすむをとこ女ありけりとも見えたりさる
 を京のかたほとりに住とはおなかわたらひてふ詞にふ
 といざなはれしものとおぼゆ大和も其頃はお中なれど
 又そこより他國へゆくをこ、には云なるべしさておな
 かとは田居之所てふ其田を上略していへるなりといへ
 り此語は萬葉集に(なにはの宮を造あらためられし時)
 「昔こそ難波おなかといはれけめと見えれば古言な
 る事あるし又田居は同集に(久仁の都をことふける歌)
 「大君は神にしませば赤駒のはらばふ田居も都となし
 ぬおもふにおなかは田居之所の義ならば田は略きがた
 きをそれをはぶきて居なかといはん事古言ともおぼえ

たるなりいひやりけるとよみていにし男を戀つ、ねん
 じわびたりと見て上の詞どもに能かなへりさて此男の
 出ていにしをいかにと間に契沖の説のごとくこの條の
 終の詞におのが世々に成にければ疎くなりけりと云
 にまらるはじめ女の方に男の住て在しが此男は身まづ
 しくて憑なき故女の親の見はなちてうちくよき人の
 子に娶せんとはかるを聞つけて我身のいふがひなきに
 世をうしとさへおもひて出ていなばてふ歌をよみて書
 おきて去けんを女はさる事ありともまだ聞えらねば異
 しい心おかるべき事も思えねば何によりてか、るらん
 とおもふあひだにはた母の親男のいにしをよき事とお
 もひてやうくさる事云まらすなるべしさりけれどか
 たみにおもひはなれぬ中なればまのびくりに男時々
 かよひくるも隔らる、戀はいといたうかなしくて在し
 昔より殊に打物かたらへどつひには親のこと男をあは
 するに遠ざけられ男も又かくてありはつべからねばこ
 と女に任ておのが世々になりければ終にうとくぞ成
 にけると書たるにて男の出ていにしをまらせたるもの
 なり

忘れんとおもふ心のつくからに 今の本には忘れな
 ず川舎と書は義字にておなかと云義は他にあるべし學
 者よく考べし

一 龍田山 萬えうに白雲の龍田の山の瀧の上のをぐら
 の嶺とよめるは今のくらがり嶺と云ぞいにしへの立田
 山の小倉の嶺なると云考へは前に高津のあざりのあや
 まられしをあづま人のふとまたがはれしはさる事なり
 くらがり嶺といふは河内國の河内郡に屬り龍田は大和
 の平群こほりに在て今は龍野越とも又龜瀬越ともいへ
 る坂路なりこえての西は河内の大縣郡なり山脈はつ
 きたれど其あひだに高安郡は在て信貴(井のへ山なり)
 十三鳴川など云山路隔たれりたつた山東へこゆれば龍
 野の里にて山は大和川の北の岸にたてり小倉の峯は此
 山の一名なり大和志に云小倉峯有^二一^一在立野
 村^一西^一一^一在小倉村^一上方^一この立野村の西と云ぞ
 いにしへの龍田山のをぐらの峯なるべしこ、を瀧の上
 といふは山の南に沿て流る、を今はやまと川とよぶが
 即いにしへの龍田川なり大和志に龍田川^一自廣瀬郡^一
 流^一經勢野^一至立野村^一西龜瀬^一入^一于河州^一と云るせり
 この龜の瀬といふあたり岩むらにむせぶ瀧つ瀧なれば
 こ、を瀧のうへのをぐらの峯とはよめり龍田の社の風

祭の祝詞に我宮は朝日の日むかふ所夕日の日ぐる所の立田のたつ野に我宮はさだめてと見えたり山の東のふもとに天津社國津社龍田彦たつた姫の社あり今の龍田の里なるはいにしへは行の社なりと並河の翁もまゑるされたりさて高安の郡にかよはんは龍田山をこえて北のかた程もあらず後の歌に高やすの里など、もよめり生駒山は其わたりより少し北なれどこの並たてる中には秀で高き山なれば大和の方を望まんにまづ打ながめらる、なりかつ歌は萬葉のを摘とりて作れ、ばいささかゆきあはぬ所有も物がたりのさまなり

一 梓弓まゆみ梶弓 注にこは弓を鳴して神をむかへまつりて誓ひをなす故に上に弓を云出てさて我爲し神言の忠さの祥を見せたまへと今更に神に訴ふるなりと、かれしを我愚さにやえこ、ろ得ずかごと、云語は大かたの例は証言を約めていへる事文にも歌にも多かり神言をかごと、よみし例有やいまだ見えず神功紀に時得神語の詞あり是を古事記に見れば諸神之命と書り合せて共に神のみこと、よむべしさらばこ、の證には引がたし因て憶ふに古本に神言と書しは義もてちかひとよみて歌は年月に己がちかひせし言のまゑるしは

いづら見せよとよめるにはあらぬ歎きて上に梓弓眞弓つき弓とかぞへしは詞の章ながら年を経てと云に能もか、らすかつ誓言に弓ひきならせし事とはいひえたらず女のうたにこそ梓弓ひけどひかねど、云しにからざる事とも聞ゆれ又うるはしと云に忠の字はいかにめぐらせても迂還なりこは誤字などにはあらぬか翁云此ふみ故は假字書なりしをまばらくの後に眞字には書改めしならんと其改めし人の心よりもとめたがへたはれ過つ、又の後の人のよみわづらへるま、にもとの文とは異かたになれる所々も少からずおぼゆ此歌も其數に入べきものなり

一 袖に浪渡のさわぐ哉 是も浪渡をなみだともみなとともよみ得がたし
一 彼ござりける男聞つけて 注に今の本には立聞てと有さてもよしといはれし女の手あらひけはひなどする時分に一夜来てこぬ男のあらはに來て立ぎ、などすべからずこ、は古本にき、つけてとあるをよき
一 いにしへの倭文のをだまき 或説にいにしへむかしはひとつ事なり今はかくはよむべからずといへり古言學ばぬ人はすべてかやうの事を教へだちていへりい

しへとは過去し方を云なりむかしは古き世の事を今に對へて去る義なり此歌それをよくいひわかちたるものなり又倭文織は今の縦横にもいかさまにも文なせしま織と云類のよしいはれたり大藏の古布いかなりし物ぞ其さままゑられねど憶ふに今の世に浮織と云物あり色を吸しもたゞに素きにもたて横又はたてさまのみにもして糸すじを浮沈せし文布あり浮はまづむの反對なる言なればむかしは沈織といひしが今は浮織とよぶかこはあとなし事ながら事のついでに云のみ

一 紀の有常がり 許の字かりとよむ事妹がりなど云例あまたなり清濁の例有常がり妹がりなど間にてにをはを隔すしては濁る誰のかりといふ類はすみてかりとよむは常のとなりさて人の許をかりと云語いかなる義にやこ、ろえず新井白石の云へらく御國の古言の中には三韓の方言も聞れる歎都をこほると云をこ、にはこほりと云この類猶有べしと憶ふにさる事あるべくおぼゆ語を釋く人こ、に意すべき事なり
一 いとひては誰か別れのかたからん 或人云眞淵此歌末のみをときて本の句をとわらずと云て猶解わづらひて聞ゆる人の注に我も世にあり經ん事有まじければ

共に別るべしと云は世をいとひての事とすれば歌のころたがふべしこは古本に厭の字を書たるはいとふとも飽とも足とも注する字なれば世をいとひ身をいとふと末にては同義となれ、ど其語の本は異なり世をも身をいとふはおのが憂からいたむと云義なるを轉じては身にも世にもあきはたたる物にきこゆるなりさて歌の意は今ほ厭たくいとふばかりの中ならば此別れも難からじをこはおもひはなれぬ心よりかねて思ひたりしよりも今日のわかれば悲しきと云にはあらぬか六帖にいとひてもと載しはいよ、とき得がたくおぼゆ今本の出ていなば、何とも解えられずこは注にいはいし誤なるべし

一 なほざり 或人直去の字のま、に過しやるばかりの義なりといへるはよろし
一 いとあつきころほひに夕は遊びをり 契沖云古事記云天若日子の死りに父妻子等泣かなしびつ、喪家を造りて日八日夜八夜以遊也と云に同じくよろづの所業を打やめて遊ぶなりといはれしは遊ぶてふ語をよくとかれたり遊遊とつゞけ遊は逸也と云義にてこ、にあそぶと云に能かなへり物がたりに糸竹もてする事を遊ぶ

といひ蹴鞠を亂れてあそぶといへりすべて公事をやめてなす事を皆遊ぶといへり

一 うらむる人を怨みて 此贈答のついでいづれの本も前後わきなくみだりて見ゆ今試みに改む

鳥の子を十づ、十は累ぬともおもはぬ人をおもふものかは

といへりければ女

行水に敷かくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

返し男(今本に又男と有よし)

吹風に去年の櫻は散すともあなたのみがた人のこ、ろは

又女かへし

朝露はきえのこりても有ぬべし誰かこの世をたのみはつべき

あだくらべかたみに去けるをとこ女のまのびありきしける事なるべし憶ふに此夜いきてあひしかどかねて女のと人に心かよはずと聞つる事のあれば妬くておもしろ人を思ふ物かはと怨みて聞えしかば女もいとさかしき人にて此男のあまたに忍びありきすとさ、てあれば

を云かともおぼゆ

一 かざりちまき 或人こは真こも刈君は沼にぞと有つらんを後にふと書あやまちし本もて寫傳へしかといへり我津の國にては蘆の葉もてまづ苞みさて上を菰の葉にかざりなし茅或は菅蘭などの葉もて纏なせば茅纏の名むなしからずとおもふをある人は故は五色の糸もて千々にまきなせし物よといへり

一 われから虫の事定かならぬを今はむかし人なる桑名の雅言がいへりしは六帖には藻の類について、題にしも出されたれば其世には人の識たる物なるべし藻くさなどにつきて小蝦の如くなる物と云るによりておもへば浮藻につきて小螺蝸牛などのかたちしていと小やかなる貝にすむ虫の魚介などに化する時おのが殻を脱出する物ありさる物の中におのれ其殻を破て出る故破殻虫とはいふ歟といへりさる屬の物の中にさるまわざするはおのれくが京えたる性のま、にていと怪しき事多かりいにしへの人探めで、歌にもよみけん物やうやうとりはやさぬ世となりては今も有ながらそれと指す人もなく名も稱かはりて去らるまじき物をかたまの木いなおふせ鳥の類去ひて知んとするは益なき事なり

男のいひおこせし詞をたゞにおのが詞としてさればよ我は思はぬ人を我ばかりおもふなりけりと打つけにいひかへしつれば男いと悪くなりてさいふ人の心こそたのみがたけれといひてやれば女いよ、さかしたちて其は人の心のみかはかくて在經る世をだにたのみはつべからぬをまして人の心をやなど情を除してこたへしものとおぼゆるをかく編次の亂りしをいかにと尋るに今の本に「ゆく水と過るよはひと散花といづれ待てふ事を聞らんといふ歌を何ご、ろしてか後の人の裏書せしを又の人のよくもおもはです、ろわざして本文に書入しならんを又後になまわろき人の行水てふ詞にかかりてかれや是とさかしらしてあとさき入亂せし物とおぼゆる齡と散花てふ歌は古本に載ざるもてうら書なる事も去るく且歌の意もおのが齡の老おとろへゆくをなげくにて男女のあだくらべには似げなきものなりさて古本にもついでと同じきは後の人今の本に據りて書改めしなるべしこの條いかにたすけてときなすとも今のついでのみ、にてはことわり爲すべからずさてあだくらべとはかたみにほか心あるをいひきそふとのみにはあらで累卵書水落華朝露のあだ物もて云きそひし

一 昔榮而色このみなる男 この榮の字をよしづきとよむ事心ゆかすおぼゆ今本にこ、ろづきと有も詞をなさざるなり仍て思ふに下の條に世營と書てよご、ろづけるとよめるを對へみればこ、の榮は營の訛字にてよごころづきとよむべき歟且上に世の字をや寫もらしけんとおも思ゆこ、の世こ、ろづきて色好む男と云をかしこにては言を略きてよご、ろづける嫗と書て色このむを聞せたる文にもあるべし世の中おもひまじりたると云もいもせの情を知たるにいへば同じ意なり又此條に女を鬼といへるも拾遺集の歌も佛説より摘來れりと云は悪むまじき説なり又すたと云語は集は義字にて或人巢抱にて鳥の巢にこもれるより云といへりさらば巢群をつめたる言にてすたと云とすべしすべて語を釋くは各自がさかしらのま、にいかさまにもいはれて後又おもひかふる事出くるものを延言約言は御國の言靈の妙用なり返切は西土の音韻の樞機なりこ、に用ひておのづから叶ふ事あり合はざる事ありこれに泥むも一つの僻學なるべし

一 いへとうじ 允恭紀に厭乞戸母注に戸母此云、觀白と見えて本語は明らかなり戸は家母は女あるじの義に

て人妻の稱ちかき世の語にいはらじと云は家主といふ義にてよく聞えたりざるを此文源氏物がたり等にいへとうじと稱へるは語の重なるのみかは刀自の音のまにとなへ訛れる此比の俗語なり今をいへとじとよむべしそれだに重語なるをや

浪のぬれぎぬ 此事爲家卿の後撰集の抄を引いてつはりを濡衣と云事昔は濡とまことを正さんために天のかぐ山におのゝが衣をぬらして神樂をして神に奏するにいつはらぬ人のきぬはたゞに干る亦いつはれる人の乾かすと是よりいつはりを濡ぎぬとはいひ傳ふと或人のいへり此事古めいたる説なれど何てふ古書に出たりともまざるされず淺學のいまだ見ざる所なれば其正説をまらさずて古本に浪廼沾衣將着與云也と書たればきんといふなりとよむべしさても歌の意は同じ

つくも髪 或人若狭の小濱にいさし時つくもてふ物を見き常ある藻の葉末に寄生のごとくなる物ありそれをとりて見れば世にいふつくもなり藻にとりつく故にまか云と所の人のかたりぬといへり今の海雲てふ物を見るに老たる人の髪の手すのかれたるに似たりされどふとはたとへてよむまじきなりそのかみはたゞにつく

はれしはいぶかし

津國に領所ありけるに 下の條にも津の國菟原の郡あしの里に去るよし、ていきて住けりと見えたり物がたりながらかゝる事は其由ありて書るなるべし初めの條にもならぬ都春日の里に去るよし、てと有是は朝臣等の御父阿保親王は平城天皇の第一の皇子也天皇御くらるを嵯峨天皇に譲りまして平城の舊京におはしまえし其御よせなどの有て在原氏の領じたまふ地も有し歟なくともさるいはれの有て作れるなるべし傳云親王素性謙退才兼文武有智力妙歌云々薨たまふ日橋の逸勢伴の健岑が隠謀をあらはして忠誠をおぼしたまひし功によりて一品の位を贈らせたまひし事國史に見えたりさるは在世にも功封など給はりしにや國史に脱し事も歌物語等によりていにしへを知る、事有津の國にも八部夷原二部のあひだに在原氏の領せられし地もありしにや今も芦やの都ならびに打出の里といふには阿保山親王寺といふ佛宇あり傳へて親王の庶所なりといへり又古今集に行平卿の事にあたりてつこの國須磨におはせし事も見えたるはいづれ去るよし、ていきて住けりと書事其よしなくてはあらじ

も髪とやよびげん今の俗にはもぞくと、なへあやまれり

一 さむしろ 延喜式に廣席狹席長席は見えたるにはせばきむしろと意得よとある人の云もよし

一つとめて 初時向てと云釋はいかゝあらん時をと、のみいへる例は古歌に夜のふけぬ時になど有てよく聞ゆ初をつとのみいはん事他に例あるか是はもし早疾等の字をとくとよむ其とくを約めてつといひさて疾々と重ねいはんに上は音を通はしてつといひ下はととのみ下略して云歟又下は時を略して疾時といふ歟物がたり詞につと侍らひてつと入來てなど云も物もとあへず動きありく狀を云にて疾と、云義かと思ゆさてめとは向の義にもあるべし人を叱しめいやしめなどいふたぐひもこのめと云にひとつこゝろなるべき歟さてつとめといふ語は夙旦の義ともなり又轉じては勤行の義とも聞ゆるなり

一 殿の倉にこめてまほり給ふければ 此まほりは例えをりの假字なるを古本に保と書るにつきて翁のかやかくいはれたれど古本の書ま假字は法例なく眞字も所々まかよみうまじきが見えたるをこゝのみ扶けてい

伊勢のいつきの宮の物がたりの條々の中にはいつきの宮のわらはべ又杉子など、名をさへ作りものして書るによりて女一人のうへにあらすと翁はいはれしを或人々はもとより一人の物がたりを例の條々にあやなせし物と云り能見るに一人の於なるべきか上に二條後の物がたりとおほしきも前後の編次を亂し或ははるかに條を隔て又所々には其御事とおもはせなどして作りなせるを見れば本より人ひとりの上に且伊勢物がたりの中にさし入るに在とはきけどせうそをだに云べくもあらぬ女のあたりをおもひける「目には見て手にはとられぬ月の中の桂のごとき君にぞありける又次に「岩手ふみかさなる山は隔てねどこれ等歌をも詞をもみればかの賀茂の齋王の下りておはすあたりをおもひかくる心に物してそれと去らす用意と見ゆめり次に賀茂の祭見に人の出たるうら書にこれは齋王の物見たまひける車に聞えたりけると有も後までかたりつぎし事のありてなるべし齋宮齋院をとりかへし物と思ふ私ごゝろは彼はおもひあはされてかくまでは云なりけり

一 大よどの濱ある人去るべして今の新茶屋と云里のう

らでの濱なり大淀の松と云も云傳へて有といへり是につきておもふに伊勢の國には名ある所々も多きをこの大淀の濱をしも幾度も出せしむかしいつきの宮在し所とて今は齋宮村と云が此あたり程なくてあれば近きところの名もてそれとおもはする記者の心づかひかとも思ゆ

一 伊勢の國に欲得いきてあはんとある古本の文をこは伊勢と云は右の齋宮わたりを云にはあらじ歌に大淀てふ詞を得たればならんと翁はとかれたり今本には伊せの國に將ていきてあはんと云を照し見れば或説のごとく文の面のまゝに都よりいきてがなあはんとまきりに男のいひつかはすと見るべし共に京に在てよそながら見んよりはの意と見るかたやすきやうながら猶とかくに心得がたき條なり

一 岩間よりおふる見るめしつれなくば 此歌誰々の説も心ゆかすとかくに記者の巧に有たるもの歟もし末の句沙干まほみちかひもあらなんはかひもあらしなど有しを寫たがへしにはあらぬかさらばひとたびさへつれなしとならば沙のみち干如言かよはすととかひはあらじものをといふにてこゝろえやすしこはまひ言ながら

科の隣村なれば出しなのみこと申事も便あり又人康親王を禪師のみこと申事國史には見えず貞觀元年五月五日に出家またまふと云事は三代實錄に出たり云々禪師親王のより所はよく考へられたり然ども此文の編年のたがへる事は本注に委しくはれて時代の證もむなしきものなりことに下にも俗なる禪師なると云文をおもへ禪師とはたゞ祝髮の人を云事にて踏踏太子など申綽號のたぐひにはあらでたゞ法親王など、稱すにことなる事なし小栗柄となりたりとて山玄なのみことともまうすまじき事なり高岳人康いづれの御うへともさだめぬが此文をよむこゝろまらびなるべし

一 ぬれつゝぞまひて折つる 注にいはいはれし雨にぬる、ともいはず藤の花を折ともいはねど今ふる雨の中に花を折てそれに結びそへておくれるには得し人のこゝろえぬ事なしすべて昔はかくぞ有けるざるを後に撰べる時やよひのつごもりの日雨の降けるに藤の花を折て人につかはしける(古今集のはし詞なり)と詞を作りて書載るが撰者の所業なり今の世の人の詩歌の詞書を見れば此撰集の例又はおのれが家の日記などにかいとゝめおきぬる書ざまして人に贈るよいともおもは

試に云のみ

一 山のみなうつりてけふにあふ事は 或人うつしてといふを寫たがへしかといへり人うつしきてなど云にておもへば是も一説とすべし

一 せじのみ子 吉備の國人の春湊浪話と云書に伊勢物語に山科の禪師の親王と申奉るをばいづれの抄物にも仁明天皇之皇子人康親王の御事と注したり是は天安二年十一月十四日女御多加幾子死せたまひしと(死は卒の寫たがへ歟)三代實錄に見えたり則七七日の御わざ安祥寺にてまたまひし時の事なりこの時に禪師の親王と申は國史に見えて高岳親王の御事なりこの親王の御子大江谷淵(國史には在原善淵とあり)貞觀四年十二月廿七日(國史に廿五日)の奏言に禪師親王と書て奉りし詞三代實錄に見えたりしかばまがふべくもあらず其うへ是は阿保親王の兄みこにて業平の叔父なれば(高岳親王は平城天皇の第三子なり然ば阿保の弟みこにて叔父の字あたれり)またしく參りたまへるいはれあり又云承和二年落飾貞觀三年入唐元慶五年唐にて遷化またまふ眞如親王とも踏踏太子とも申せしなり小栗柄に住たまふ事何によりてか保元物語に出たり山

ざるなり

一 我みかど六十餘國 萬葉に筑紫路も國のみかど、よめり語の本は宮門を稱すを轉じて服へる國の極りは宮門の内ぞと云義なり契沖の孝徳の詔に我日本豊田天皇の世と有を引れしも是なり帝畿内をみかきのうちつ國とよめるも此意なりすめらみこと、たゞにまうさんは恐しとて宮門と申てあがめ奉る事なりもろこしの天子を陛下とまうすも同じ義なり

一 みなせ 萬葉に戀にもぞ我は死するみなせ川またにわすれず月日へにけり古今に「言に出ていはぬばかりぞみなせ河下にかよひて戀しき物を」みなせ川ありてゆく水なくてこそつひに我身をたえぬとおもはめこの川の水脈一たび地下をゆきて又下流にあらはるゝ事注にいはいはれたり有て行水なくてこそと有に見れば水なし川の名義なるべし水生とも書ると論せられしかど類聚國史日本紀畧などには水無瀬水生瀬水成瀬など書しもあるば生成ともになの音に假しのみにて義なき事とおぼゆ

一 ひと、せにひとたびきます君までば 古本に君成者とありさては歌のこゝろたゞに親王のまれ人なるを云

のみ君までばの方天の河てふ地につきて面をろしさてかの交野郡の中に君家と書ておほやとなふる氏名の農家あり昔維喬親王遊獨の度に宿らせたまひて此氏名を給ひしとぞかたりつたへたる其枝流の人今難波に住てかたりき

一 あしの屋の灘の鹽やきいとまなみ 注に萬葉のまかの蟹の歌をかつくとりかへてむかしの歌なりと作れるが巧妙なりといはれたり猶強言をそへんには其本の歌は楠筒の小ぐしとりも見なくにとよめるははろばろ筑紫の極に來てこの蟹をとめらがなすわざを見ればいと悲しな風に梳り雨に沐すてふ古言の葉のおもひ出らるゝぞかしあやしげなる物身にまとひつるも所々肌あらはれて打かくる高波にぬれをぼちつ、身は有ものともなくて立奔るありさまもとよりおどろ髪色もなくふり亂したるを都のたをやめの見るめに世にはかくても有けりとあはれさいと切たる心によみたるなり其はふりたる世のさまにてこそありけれ今はさるものらまで常に亂ればかりはかき上なすにぞ黃楊の小櫛など額にかいさしていとなみはすなるをけふは勤しさをあまりにやさ、でも來にけりとよみかへて昔の飛鳥

の都人の歌もて今を思はしむる巧みにはあらぬか大和物語にも河内女のはしたなきさまを云とて我にはよく見えしかどいとあやしきさまなる衣をきて大櫛をつらぐしにさしかけてをり手づから飯もりをりけるといへる其状いかなりけんまらねど其比のまづのめどもはまかりけんおぼゆ今の世とてもぬれくしくあげゆふはむ月の事たつあした孟蘭盆の亡靈むかふ夕べ或は神に新嘗たてまつる豊の秋こそあれ常あるさまはながきかづら髪なすけなくかい巻上て土もさけぬべきあつき日脛を澤田に漬し顔は泥土にまみれつ、田草とるわびするにはひたひのおくれ髪に汗のまづくするがいと苦しくそれかきあげん料にとつま櫛などはさすなりきさればこそ高き御あたりにはつぶねする女房たちまでもあげゆふ外はくし筒の物とのみおぼしたまへりきさは櫛は常にさすぞいやしきもの、さまなる

いにしへのならひに吉事には末ほど大けくうち凶事には末ほどちひさくうちしとぞ神に詣て願事奏すにたゞ今己が告す事は實誠のかきりにしも侍れば幸福あらせたまへとてかしは手でふを拍にも末を大けくうちて吉事を願ふなり【もろこしにて響といふ事あり人に手を拍せてそのひびきを聞て吉凶をうらなふとなり】さてかしは手でふ語は堅石手てふを約めていへる言にてかたく響ひする所山なり(かしは手でふ語古くは見あたらす若これは拍手の字を拍手にうつしたかへしよりかしは手とも云ならへるにはあらぬか)古事記に天逆手突於青柴垣打成而隠也と云は青ふし垣は即枯玄をる物なればそれに背て凶かれとのろへる誓事なりさるを火遠理命の後手に物あたへたまふ事もてひとつ事とこゝろえあやまれるはあまゝとのたまへるはいと有がたくぞ承り侍る(まゝりへ手もさか事にてあしかれとのろへるさがなわざなり)

れしを翁はよしといはれたるをまひていはんと爲るはつたなきわざなれど此比見し或人の説に作者此條にいたりて己が下情を見せたるよといへるぞかぬておもひしにかなへるもの故猶云はん此條をしも終焉の條の前に出せしは實に記者の意をあらはせるなるべし凡物學びて才ある人の時にはあはぬは我「寶劍」といひまら玉はよしまらすとも我しまればとよみ或は書は憤りになるとも云やまともろこし人の心は異ならぬものなりけり彼土にては演義小説といひこゝには物がかりとよぶそれ作り出る人の心は身幸ひなきを歎くより世をもいきどほりては昔を戀しのび或は今の世の中さく花のにはふが如く榮ゆくを見てはや、うつろひなん事をおもひあるは時めく人の末いかならんを私ながらもあざみ又ためしなき齡をねがふもつひには玉手匣のむなしきをさとしえがたき寶をしも、とめあるく痴もの、うへを愧かしむにもたゞ今の世の開えをはかりてむかしくの跡なし言に何の罪なげなる物がたりして書つゝくるなんか、るふみの心まらびなりけるこのふみも在五中將ならぬ在五物がたりしてそれにかこつけつ、世のさまのあまりにたはけたるをいひ刺し

れるにも猶おのが思ふかたはしだにおそりて打いづべからぬにはふみの終に我に等しき人なきてふ打ほこりたるなげきせしこそおのが心をなぐさめかつは命やしなふぞえ人のまわぎなれとおぼゆそはよしやあしやかゝるゐなかな言もことわりあらば人えらびとらせたまへと云

よしやあしや終

大和物語直解

加茂真淵著

凡例

この物語の注、世におこなはれたるは、ふようなることも、ひがめるも、いと多うくなんありけるを、縣居の大人つばらかに考正して、もとの注をけち、あるはかき加へなどし給へりしを、我友村田春海ぬしが、家にひめおけり、そをこひ寫して、此度はうしのほいのま、にかきつらねたり、いち早くことの意を思ひ解む料にとてし給へるなれば、まばらく大和物語直解となん、これが名をばおほせにける、【井上頼因云田島本凡例なく大和物語抄とも大和物語打聞とも記せりこは季吟の抄を合せたる故にて打聞は此書の初の名にぞありけらし】
此物語注なき本は二卷にわかれて、又季吟主が注の本は六にわかれて、早くよりさる本どもの有しにや、又かける人のこゝろもてわかれてるにや、おぼつかなければ、そのわかれてる所々に、そのよしことわりおきつ、

大和物語直解

今はたよりにつきて三卷にわかれて、【清水濱臣云く首書本は五卷とせりいづれも使よきにしたがへるのみ素本の二卷とせるも又同じ原は一卷にてぞありけん】本文の傍に真字をしるせるは、おのが心にかつゝ思ひよれるなり、猶たらざるは次々におきなふべし、又かく思ひよれるもいとしげかるなりはひのいとまに、机のもとに燈火をか、げてかきうつせるなれば、をぐらき心に思ひたがへたるもかきあやまれるも多くなんあるべき、そは後に見ん人更に正しつべきにこそ、寛政五年九月源躬弦しるす、

【清水濱臣云此物語の大旨は打聞にて作物語には非ず歌をもとにて文は末なり凡て撰集家集どものはし書にちかしされば撰者の歌と思しきはなしみな古今の人々の歌を打聞にしるしたるばかりなり伊勢物語に其勢の似通ひたるころもあれどよく考れば伊勢にはこと遠くして中々に宇治大納言物語の書ぶりに近しされば作物語には非らずして打聞物語なりその打聞の歌をかきとめんとてはしがきせる程の文詞ども多しさればこそ歌はよくて文はつたなしこれまことつたなきにはあらず伊勢などのやうにわざと作

三千六百六十五

りかまへしものならねばなり古今後撰の歌をのせたる中に撰集にはよみ人しらすとある歌の此物語に作者をたしかにせるるありこれはた伊勢のしひて引あてし例とはたがひてさる傳を打聞のまゝにせるせしなれば中々に古今後撰にかくれたる作者をしるべきことありかのかつらのみこの御歌などは古今にはわざといみて御名をしるざるを此物語にて知る、などは古今にははゝかる處ありてわざとよみ人しらすとかける一の例なるべし又この物語に時の人々の古のまじれるも打聞のならひなり古ありしことゝもをつたへのまゝに今物がたりきかするをがまゝにかけるもあるべし又文勢に功拙ありて一人の手にならぬやうに見ゆるも打聞には人のかきおけるまゝをたまゝ筆に任るもなきことならずよくあぢはへて作物語にあらぬ打聞物語なることをわきまふべし】

にいふのみなり、すべて此名のことをさまゝに云ひしらふ人もあれど、よるべき事は聞えずぞある、此書は在原滋春【岡本保孝云百卅五段に在次君といふは則ち滋春のことなり】のかけりといへど、時世いことにて則この人の事も入たればいふにもたらず、花山院のか、せまし、などもいへり、今考るに此院のかせまし、てふ事は去りがたけれど、凡此ふみかきけんは其御時などの手ぶりと見えたり、されどこのおはしまし、頃まで有けん人の歌も入たり、かゝる物にはむかし人のうへをこそいへるならひなれば、いかにもおぼつかなし、そのほどに遠からぬ清輔朝臣のかける物にすら作れる人は去らずとあれば、後にいへるはおしはかりのことしるきなり、さて【これより以下上に引續きたりしを田本により別章とす】此ふみに先帝と有を、延喜の御代とし、おほきおほいまうち君とあるを、貞信公とし、今のひだりのおとゝとあるを、小野宮どのとするにつけて、天曆などの頃に出こしなどいへど、こは條々異にて古なる後なるまじれり、その古をいふ時は、そのをりにしたがひて、今のひだりのおとゝなど書ことつねなれば、是

大和物語直解

こをやまと物語と名づけたるは、伊勢物語にむかへたる名なるべし、となんある人は云ひける、げに條々のついでも定めず、書たるさまかれにならへるものなれば、名もさるこゝろにこそあらめ、されど、やまと、は上つ代には今の大和國をのみ云ひしを、藤原奈良などの都の頃よりぞ自ら此食國【異本日本國】のすべたる名ともなれりける、しかればこの山しろの都にての事をかきたるものを、大和物語と云んはよしなきに似たれども、猶伊勢にむかへて都物語てふこゝろと聞ゆるにつけて、去ばらくこそ助けていは、萬葉集に吉野の離宮へ幸ませし時の歌に、「やまとには鳴てか來らん呼子鳥象の中山よびぞこゆなる、とよみたり吉野もやがて大和國なるに、更にやまとにはとよめるは、此時の藤原の都をさせるものなり、去かあらば國はいづこにもあれ、都べをさしてやまと、いひけん事後までも傳へいへれば、山代【田本作山城】の都をさしても【田本作さしてしも】やまと、はいひつらん、萬葉などもて云んは、此程の世の人のこゝろめかす思へど、こゝろも

も時をさすによしなし、たゞ平兼盛ぬしは専ら天曆の御時にみえたる人にて、花山の御時の頃までも有つらんこと誰のいへるも同じ、且ことばのさま、古言の残れるも、誤れるも、又これかける人のみづからよみつらんと思ゆる歌の有に、其歌とも圓融、花山、一條のはじめつかたの御時までの、てぶりとこそみゆれ、いせ物語は、天曆などの頃に書しとは見ゆれど、文のさま古にならびて、こと少くて心こもり、みやびかにして物あつく、このやまとは詞多くして、よわく、をかき古言も、つたなきもまじれり、そが中にはじめと末のをぢくにはよく書きなせるもあり、なからのはどにはいとことわりもなく、ことばもつたなきあり、且伊勢物語などにあることをかへてかきしは、いよいよつたなくわろし、又奈良のみかど柿本人まろなどの事書しは、ことに時世をもしらぬもの、およづれことによれるものなり、(古今集の序に此事あるは此流言をもて好事の加へしこと明らかなり其論古今序注にいへり)【分注田本標注とせり】そのよしは其所々にせるを見よ、さて古き物語ぶみの今あるもていは、伊勢物語はこのさま古により、詞あつくてみやびか

なり、源氏物語は後の世につきてことうすくて心やり過たり、それらの間なるものと見ゆるは、おちくぼ、うつぼ、やまと、などなり（竹取は古しといへど猶このさまつたなければいふにたらず又佳吉物語は今あるは後の詞にて事のさまも古ならぬこと多しにいしへありしは失て後に偽り作れるにや又古きがはしく有しに後の人の作りそへしにや）【此の分注田本標注とせり】か、れば、このやまとを古きものとせぬをもしれ、又枕草紙に【又枕草子以下別章なりしを田本により引き續く】古き物語ふみの名をならべあげしにも、大和は末に出せしを思へ、さて此物語の言葉はさはいへどなだらかにして古き意もまされ、ば、末の世の人のいにしへにかへりのぼらんはしの一きたとならずしもあらず、歌ももとより延喜などの頃よりほどなき人のほさらなり、其後なるもおのづからのどやかなる調もあれば、又みるべきものなり、これにいと近きほどの人注をかきしに、ふみにもよらずして、ことの意たがへる多し、中にもいせ大和などの物語にて、人のをしへをいはんとせしこそ人わらへなれ、【いせ物語のこと後の人々のいへるはみな誤れ

り委くは古注てふものに書たり源氏も新説を書たり後の注どもはよろしきものなければなり）【元書伊勢物語云々の注なし今田本標注とせるを例により分注とす】伊勢物語は古の歌を、わさととりかへなどしてあるが中に、たはれかき、此物語はたそれにならひてかけるに、いかなるところか教とならん、凡そ皇らみ國の古は天地にしたがひてをさめ給へば、せばき教などいふことはなかりき、此御國の心をしらぬ人く、たるからぶみのはしくを見聞て、さる事のみ覺えて強言せるなり、此み國の大御教は、いと大きにひろければ、民は知ずしておのづから治れり、必ず、ひとりかくに細に教ふとも守る人もなく、廣き世にしきいたることもなし、その教を云るから國に治れる世なきにて、などか思はざりけん、されど源氏物語は人の心に思はんことを多く書しかば、事にふれては女房などのこまかなるかたの教がましきと、偶なきにしもあらず、此はた世の下りはて、心せばしく、邪にのみなりにたる頃の女心よりは、さる事をも云思へるなるべし、此物語などにては、一言もさる心はいひ出べからぬもので、寶曆十年の冬人々集ひてよみ侍ける時に賀茂真淵しるす

大和物語直解上卷

(一)亭子院のみかど、いまはおりの給ひなんとするころ、弘徽殿のかへに伊勢の御のかきつけ、る、宇多天皇おりさせ給ひて、はじめは朱雀院におぼしまし、其後亭子の院【冬曰亭子院は拾芥抄云七條坊門北西洞院西二町】を作らせ給ひて、そこにおはしますゆゑに亭子院と申なり、其御位ゆづり奉られ給ひており居させ給ひは寛平九年七月なり、伊勢の御は伊勢守繼隆の女なる時、立出て仕し故にいせと呼ぶなり、かの家集に大和におやもたると云は、其後大和の任の時と見ゆ、此院のみかどの皇子をうみし故にあがめて御といふ、惣て皇子うめるをば御息所といふを略きたるなり、【濱臣云此説非也本朝文粹菅公詩曰閨巷稱辨御俗謂貴女爲御蓋取夫人女御之義也とあるにて知るべしされば皇子生まぬ女房をも某の御といへり某の子なりとて清てよむ説あるはいか、】
(後撰離別)
 わかるれどあひもをしまぬも、しきを見ざらんことのか、なしき、
 大鏡には「あひもおもはぬ」とあり、さても、しきは

百石城てふことにて皇宮をはめたる語なり、今の京の頃となりては、轉してたゞ宮城のことにいへり、古は百敷の大宮とのみ云り、そは冠辭考に委し、こ、ろはおりのさせ給は、伊勢も同じくまかでぬべきなごりを思ひて、あひも思はぬなどよめるがあはれなり、とありければ、みかど御覽して、そのかたはらにかきつけさせ給ひける、
 みひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもなにか見ざらん【ゆきめぐりてもなにかみざらんとあるを一本にゆきかへりてもなかみざらんとあり】
 天皇はわれ御一人ばかりにもあらねば、罷出るとても又行廻り参りて、なべての帝にも仕へ奉りて、内裡わたりをも見ざらんやとよみませるなり、大鏡には「行かへりてもなかみざらん」とあり、又の説に「法皇のか、せ給へりけるを延喜の、ちに御覽しつけて傍に書つけさせ給へるなりとうけたまはるはいづれかまことならん」と有り、されど上をば亭子院の大御歌としても聞ゆれど、此歌を延喜の大御歌としてはいかに聞えん、此又の説は誤なり、此二首後撰集にも出づ、
 となんありける、

(二)みかどおり給ひて、又のとしの秋、御ぐしおろし給ひて、ところ／＼山ぶみし給ひて、おこなひ給ひけり、宇多の帝の御髪おろしませしは、ある書に昌泰二年十月十四日仁和寺にて出家ましませしといへり、此秋冬のたがひいづれにても有なん、ともにたしかなる書ならねばなり、さて後撰集に「やまぶみしてみとせといふにみかどかへらせ給ふ」とあれば、其間高野熊野などに御幸のことおはしけん、

ひせんのせうにて、たちばなのよしとし【橘良利恭の上手なりしこと扶桑略記などに見えたり】といひけるひと、うちにおはしましける時、【田本時字の下にまだみよしろしめすほどなりの注あり】殿上【同本殿上にの下に紫宸清涼などに殿上の間といふありの注あり田本殿上は人々のとのゐなどに候せらる所なり禁秘抄に委し】にさふらひて御ぐしおろし給ひてければやがて御ともにかしらおろしてけり、人にもまられ給はでありき給ひける御ともに、これなんおくれ奉らでさぶらひける、か、る、御ありきし給ふいとあしき事なりとて、内【内とは今上延喜帝をさして申奉るなり】より少將中將【堀本中將などの字なし】などこれかれさぶらへとて奉らせ

給ひけれど、たがひつ、ありき給ふ、いづみの國にいたり給ひて、ひねといふ所におはします夜ありいとこ、ろぼそかすかにておはします事を思ひて、かなしかりけり、さてひねといふ事を歌によめとおほせごとありければ、このよしとしのたいとく、【大徳とは法師をいふなり】
ふるさとのたびねのゆめにみえつるはうらみやすらんまたと、はねば
旅寝といふに日根の地名をかくしたり、さて故郷人のうらむるによりて夢に見えつらんと云なり、
とありけるにみな人なきて、えよますなりにけり、その名をなん、寛運大とくといひて、後までもさぶらひける、

(三)故源大納言【清陰なり】宰相におはしけるとき、京極もとの源大納言は正二位清陰(陽成院の御子なり)拾遺集に歌入たり、京極の御息所は養子本院左大臣時平公の女にて、宇多の帝おり居の後に、院へ参り給ひて雅明親王(親王など)み給へり、亭子院の御賀は拾

遺集に「延長四年九月廿八日法皇六十の御賀京極の御息所つかうまつりける」とあり、又貫之家集にもみゆ、
か、ることをなんせんとおもふ、さ、げ物、一えだ二えだせさせて給へときこえ給ひければ、

こは御息所より御賀の(賀は四十より十年十年にする例なり)【賀はの注田本による】設の事を清陰へいひ遣し給ふなり、古は物を枝につけてさ、げし故、さ、げ物一枝とはいへり、其枝は松(松は五葉の松を用てよし)くろ松は葉のわろければなり【松はの注田本による】梅櫻其外何にても、よしある枝をするなり、さて多くは作り枝なり、姿みなどするがうるさければ、祝ふ時はいよ、作枝につくるなり、

ひげこをあまたせさせ給ひて、とし子に色々にそめさせ給ひけり、まき物のおり物ども、いろ／＼にそめよくりみ、なにかとみなあづけてせさせ給ひけり、

清陰ぬしよるとし子に此事をたのみ預らしめたるなり、とし子は後撰集に歌入たり、拾遺集に承香殿の俊子とみゆ、【補注云俊子は藤原千兼の妻なり】髭籠は右にいへる枝に組して結つくるなり、(ひげこは、こを一に

く、りてつくることあり、く、りやうよしあり)敷物は枝もの、外にた、おく物に敷をいふ、それは先下には地敷と云あり、又臺あれば、臺の上にも敷て、それが上に俵物をおくなり、其敷物どもは色々なり、錦にても、又綾などにきぬのうらつけなどもす、よりくみは、髭籠を枝につくる料にも、又かの臺の敷物に四方にぐみをふせて、その伏組の末を四隅より引下て、足の所にてあけまきむすびて、末に總つけて足と等しく下るなり、その組はいろ／＼あり、段にとめわけなどもせり、【段により下田本によりて加ふ】

その物どもを、【を字一本なし】九月つごもりに、みないそぎはて、けり、さてそのかみな月ついたちの日、この物、いそぎ給ひける人のもとにおこせたりける、

ち、の色にいそぎし秋はすきにけり、いまはしぐれになにをそめまし、【此歌新勅撰冬部にあり、堀本及び六帖にいそぎしをうつりしに作り六帖にいまはを今日はに一本すきにをくれに作る】

かくさま／＼の色を染め盡して、秋も過しかば、今よりは時雨のそむるものもあらじと、はかなくよみしがをかしきなり【よめるなりとありしを田本によりてよ

みしがをかききなりと改む」

その物いそぎ給ひける時は、ひまもなく、これよりもかれよりもいひかはし給ひけるを、それより後は、其事とやなかりけん、せうそこもいはで、まはすのつごもりになりにければ、

其事とやとは此事にとりあへぬるとまやなかりけんとなり、まはすは「年はつるといふ語を略てつをすに通したるなり」と東廬のいはれたるこそ、古語のときやうなれ、奥義抄などの説はいとわろし、

かたかけのふねにやのりし【一本のれるに作る】まらなみのさわぐときのみおもひ出るきみ

風波たてる時は鳥蔭などのかたかけによりて舟は漕ぐを、それに乗れる人にや、波のさわぐ時のみ物してまづかなれば、思も出ぬよといへり、萬葉に、風をさけて鳥蔭をこぐこと多くよめり、【濱臣云、かたかけの舟は危きたとへにてかたのりと云ふに同し、人の片よりのれる舟はかへらんかと危なり、頼政集に「櫻咲く磯山かけをこぐ舟のかたのりせぬはあらじとぞおもふ】此かたのりの調思ひ合すべし、季吟の説に片帆かけたることくせるはいはれたる中なり、されど帆と云

はずしてはいかゞ、○保孝按、躬恒集わかれの歌に「かたかけの舟にやのれる白浪もたつはわびしくおもほゆる哉」

となんいへりけるを、其返しをもせで、年こえにけり。さてきさらぎばかりに、柳のしなひ、物よりけにながきなん、この家にありけるををりて、

其柳の中にて異に長きを物よりといへり、物とは、凡て其物をさして云ふ詞なり、けには、萬葉に異の字勝の字などを書て、ことにまさりてなどいふこゝろなり、あをやぎのいとうちはへてのどかなるはる日しもこそおもひでけれ

俊子のさわぐ時のみ思出る君といひしにこたへて、のどかなるをりしもこそ思出れとなり、とてなん、やり給へりければ、いとにくめで、のちまでなんかたりける、

ふ誤れり、
（四）野大貳、すみともがさわぎの時、うての使にさ、れて、少將にてくだりけり、おほやけにもつかうまつり、四位にもなりぬべき年にあたりければ、むつきのか、いたう

ばりの事、いとゆかしうおほえけれど、京よりくだる人もをさく聞えず、ある人にとへど、四位になりたりともいふ、或人はさもあらずともいふ、さだかなる事、いかできかんとおもふほどに、

野大貳は参議小野好古なり、天慶三年正月、兼追捕囚賊使正五位下左近少將、四年五月一日四位下、五年正月薨、此討手の使のこと扶桑略記日本紀略等にも見えたり、純友がさわぎとは、朱雀院の御時、伊與守從五位下藤原純友おほやけにそむき奉りて、天慶四年に終にはろびたりし事は、李邵王記等にもゆ、か、いとうはりとは加階は位の、ほること、たうはりは此度の功に田戸など給るべき事なり、をさくは長々とかくべく、轉じては専らの意にいへり、こゝも其意にて、専ら聞えずとなり、【直長云をさくは俗にアンマリと云にあたり】

京のたよりあるに、近江守公忠のきみの文をなんもてきたる、
近江守源公忠は大藏卿國紀の男、右大弁滋野井の弁ともいへり、國紀は光孝の御子也、
いとゆかしうれしうて、あけてみれば、よろづのこと

ともかきもていきて、月日などかきておくに、【田本一本端本におくのかたにかくなんとあり】
たまくしげふたとせあはぬきみが身をあけなからやはあらんとおもひし

あけながらとは、五位の袍は赦色なれば、そのま、にてあるべしと思はざりしといふなり、後撰に入れり、これをみて、かぎりなくかしくてなきける、四位にならぬよし、詞にはなくて、【端本詞の上に文の字あり】ただかくなんありける、

後撰に好古の返し、「あけながらとしふることは玉篋みのいたづらになればなりけり」とあり、今こゝにもありつらんを、後にやかきおとしけん【季吟云、かく五位の緋衣ながら年をふるも、何故なればかく追捕使にさ、れて、外國に苦みていたづらなる身となるぞ、都にあらば四位にならんものをとなり】

（五）前坊の君うせ給ひければ、大輔、かぎりなくかしくのみおほゆるに、きさいの宮、きさいに立給ふ日に成にければ、ゆ、しとてかくしけり、さりければ、【一本さりければかう有ければに作る】よみていだしける、
坊は東宮坊なり、前とは前にかくれさせ給へるをいへ

り、こは保明親王の御事なり、延長元年三月二十一日に薨し給へり、御謚號をば文彦太子と申き、同年四月二十六日女御穩子中宮に立給ふ、これは昭宣公の女太子の御母なり、忘々しとは大輔が涙にのみくれあれば、後の立ませしころ思はしきとはなり、(大鏡にも、大輔前坊を夢に見侍りて、「戀しさはなぐさむべくもあらざりき夢のうちにも夢とみしかばとよみしこと侍り」)

五字田本により加ふ】かのをとは其女のまことの夫をいふなり、ひとの國の守とは、京より畿内又は外の諸國をさしていふなり、これもかれも【これもかれも以下田本により加ふ】かの男受領にて其國へ下るとて、此女をも引ぐしたる故、朝忠も女も哀に悲く思ふなり、光源氏空蟬の伊豫介にぐして下りし名残を思して、けふわかる、もふたかたになどよみ給ひしに似侍れば、此段のていをもて紫式部もかけるにや、たぐへるやわがたましひをいかにしてはかなきそらにもてはなるらん

【大鏡にも云々の注田本によりて加へたれば次の歌の解の終にいへるは略きつ】
わびぬればいまはとものおもへどもこゝろにぬはなみだなりけり
此ものをといへるは、物思ふといふにはあらず、ものは事をと云んが如し、今は思ひうしてせん方もなしと思へども、其心にも似ず泪の落るとなり、

我は魂もこ、になきまでたぐへやるものを、君はいかでそこはかとなき遠き道の空に、我を離れて行らんとうらめるなり、此はかなきはそこはかとなり、
となん、くだりける日いひやりける、

(六)あさたの中將、人のめにてありける人に、まのびてあひわたりけるを、女も思ひかはしてすみけるほどに、かの男、ひとの國の守になりてくだりければ、これもかれもいとあはれとおもひけり、さてよみてやりける、
朝忠は三條右大臣の男、天慶五年正月二十日左近中將六年十二月參議後中納言右衛門督、【天慶より下二十

(七)男女、あひしりてとしへにけるを、いさ、かなることによりてはなれにけれど、あくとしもなく、やみにしかばにやありけん、男もあはれと思ひけり、かくなんいひやりける、
かく様にその人ともさ、ぬは、物語のつねにて、實は知べからず、強て求るはわろし、

逢事は絶て涙は絶えぬといふなり、あふことをかざるならば、【あふことを限るならば以下田本より加ふ】
泪も今はたえぬべき事をとなり、たぐわかれの悲き事をいはんとてなり、
をんな、いとあはれとおもひけり、
(八)監の命婦のもとに、中務の宮、おはしましかよひけるを、かたのふたがれば、こよひはえなんまうでぬとのたまへりければ、その御かへりごとに、

あふことのかたはさのみぞふたがらん、ひとよめぐりの君とおもへば、
天一神の一夜づ、めぐりて給ふ如く、かた／＼へかよひ給ふ君なれば、その間我方へはふたかるべきことわりなり、とうらみたるなり、後撰に「あふ事のかたふたがりてきみこすばおもふこゝろのたがふ計ぞ、と有ければ、かたふたがりたりけれど、おはしましてなん、おほとこのもりにける、かくて又、ひさしくおとちまたまはざりけるに、さかのゐんにかりすとてなん、ひさしくせうそなども物せざりける、いかにおぼつかなくおもひつらんなどのたまへける、御返しに、

命婦はもとは五位以上の官女をすべしふ事なるを、中比よりは五位の勅命ある女房を云り、又五位以上の男の妻をも外命婦とは云、こゝはたゞつかふる女房をいふにて、監の命婦とあれば、將監なる人のむすめの命婦なるをいふなり、すべて官女はその父などの官をもてよび名とするなり、さて此人はかうがへがたし、中務の宮延喜の皇子兼明親王なるべし、前中書王と申奉りき、かたのふたがるとは、その神のいますかたへはゆかぬ事といひて、方違といふ事をす、それは他所へ行て、そこより行もかへりもすれば、方の違ふなり、

此み子嵯峨に別業しておはしまして兎裘賦など作り玉へり、そこに狩しにおはして日かすへたるよしなり、おほさはの池のみづくきたえぬともなにかうらみんさがのつらさは
さかは性なり、神性休祥など紀にもかきてうまれつきときざしをいふより轉じてくせのかたへもいふなり悪といへるはわろしそれはさがなしとこそいへ、さて嵯峨の地名によせたり、
御返しはこれにやおとりけん。人わすれにけり、

(九)も、その、兵衛卿の宮うせ給ひて、御はて九月つごもりに去給ひけるに、とし子、かのみやの北のかたにたてまつりける、

宮は寛平第四の御子敦固二品兵部卿寛平第四(母同延喜帝内大臣高藤女)寛平第四母同云々高藤女まで十九字、今依田本補之)延長五年九月七日に薨し給へり、さて又のとしの九月九日までを御喪として、其祓など有て後に御はての法事など有しにや、さはりあらばさる事も有べし、此北方は何れの御方と考がたし、おほかたの秋のはてだにかなしきにつふはいかでかきみくらすらむ

この歌續後撰集雜下に見えたり
かぎりなくかなしとおもひて、なきむ給へりけるに、か
くいへりければ、かへし、
あらばこそはしめもはてもおもはえめけふにもあはでき
えにしものを

となんかへし給ひける、【この十字異本活稿にあり】
此五文字、みこの世におはしまさば、こそといふには
あらず、北のかたの世に思ひきえ給へるあまりに、我
身もなきにひとしき物といふなり、

(二)監の命婦、堤にありける家を、人にうりて後、あはたといふ所にいきけるに、その家のまへをわたりければ、よみたりける、

堤は加茂川の堤なるべし、家をうりしためしは古今に、伊勢が家をうりて「あすか川淵にもあらぬ我宿もせにかはり行ものにぞ有ける」又新古今に、周防内侍家をうりて「住わびて我さへのきの忍草まのぶかたく多き宿哉」などみえたり、あはたは今粟田口といふわたりか、そのうりし家の前を命婦の通るとて過がてによめるなり、前わたりするを川わたるによす、ふるさとをかはとみつ、もわたるかなふちせありとほうべもいひけり

かはとみつとは、彼はわが家とみつ、といふを川によせたり、あはとみるといふも同じ事なるを、川になし
ていはんとて、かはといへるか、惣てかれあれは同じ
語なればなり、わたる哉とは前わたりするを、川わた
るによせたり、さて此歌は、かはいせの歌をとりてよ
めるにや、

(二)故源大納言の君、た、ふさぬしのむすめ、ひかしのか
たを、としごろおもひてすみわたり給ひけるを、亭子院

のわかみやにつき奉り給ひて、ほどへにけり、

右京大夫藤原忠房は大貳廣敏源信濃按輿嗣男也、ぬし
はあがめいふ詞なり、ひがしの方は忠房の女清蔭の室
なり、亭子院のわかみやはある人考云亭子院の皇女に
はあらず、延喜の皇女にて前齋院留子也、【紹運録云
留子内親王配大納言清蔭○眞淵云紹運録多誤謬不可從
未詳】

子どもなど有ければ、こともたえず、おなじ所になんす
み給ひける、さてよみてやり給ひける、

すみの江のまつならなくにひさしくもきみとねぬ夜のな
りにけるかな【古今、われみても久しく成ぬ住の江の岸
の姫松いくよへぬらん】

とありければ、返し、
ひさしくはおもほえねどもすみのえのまつやふた、びお
ひかはるらん

松や二たびとはいたりてひさしきと云んとてなり、二
首ともに拾遺に入たり、
となんありける、

(三)おなじおとゞ、かのみやを得たてまつり給ひて、みか
どのあはせ奉り給へりけれど、はじめころしのびてよる

よるかまひ給ひけるころ、かへりて、

【新古今集三】
あくとといへばまづこ、ろなきはるの夜のゆめとやきみを
よるのみはみん

よるのみ通へば、まばしばかりの夢とみんといへり、
さて、あくとは夜の明るをおもてにて、思ひあかれん
事のかたをいふなり、新古今に入たり、

(三)うまのせう藤原のちかぬといふ人のめには、としこと
いふ人なん有ける、子どもなどあまたいできて、思ひて
すみける程に、なくなりければ、かぎりなくかなしと
のみおもひありくほどに、

藤原千兼は忠房の二男(母陰陽亮帶雄女)【七字依田本
肥後守五位

うちの藏人にて有ける、一條の君といひける人は、とし
こをいとよくまれりける人なりけり、かくなりける【人
なりけりかくなりけるは依田本】ほどにしも、とはざ
りければ、あやしとおもひありくほどに、此とはぬ人の
すさの女なん、あひたりけるをみて、かくなん、

ある書に、一條の君は三品神祇伯貞平親王女といへ
り、後に陽成院の一條の君とある同人歟、女藏人にて有
しなるべし、とはぬ人のすさとは、此君の従者の女に

此うたをことつけたるなり、
おもひきやすぎにしひとのかなしきにきみさへつらくな
らんものとは

ときこえよといひければ、返し、
なき人をきみかきかくにかけじとてなくく、まのぶほど
なうらみぞ

きかくにはきくを延たる詞にて、古今集にもあり、此
歌はそのなき人の事をかけてとむらひなどいは、君
が聞て、かなしみを増べき物とて、音もせで、こ、に
なくく、まのびてあるほとぞとなり、【保孝按古今戀
五にあり、此物語の下文第二十六にも此歌あり、】

本院のきたのかたの御おとうとのわらは名を、おほつ
ぶねといふいまぞかりけり、

本院は左大臣時平公也、北の方は右衛門佐從五位上棟
梁の女なり、御おとうとは御妹なり、つふねは、和名
抄に、奴僕(豆布禰)とあるにて、いにしへはいやしき
名をつけば、いのち長しとてつくるなり、後撰におほ
つほねとあるも古今には大つぶねとあり、
陽成院のみかどに奉りけるに、おはしまさざりければ、
よみてたてまつりける、

陽成院は清和帝第一の皇子なり、おはしまさざりけれ
ばとて、大つぶねの方へ帝のわたり給はぬなり、
あら玉のとはへねどもさるさはいけのたまもはみつ
べかりけり【拾遺哀傷人丸】「わきも子がねくたれかみを
さるさはいけの玉もとみるぞかなしき又本書百五十二
段】

むかしの采女のごとく、身をなげんとまで思ふといふ
なり、としはへねどもとは、まゐりていと年久しくは
あらねどといふか、さして年久しきまで御渡のたえた
るにはあらねど、いふ歎、

【又つりどの、みやに、わかさのごといひける人をめし
たりけるが、【みやにのほり侍るといふ詞落し歎】又も
めしなかりければ、よみて奉りける、

釣殿宮は光孝の皇女綏子内親王也、陽成天皇「つくば
ねのみねより落る」とよませ給へるも、此みこのおほ
らせ給へるなり、
かすならぬ身におくよひのしら玉はひかりみえさすもの
にぞ有ける
帝を玉にそへ奉りて、末とげさせ給はぬを光みえさす
といへり、此歌後撰には「陽成院のみかど、時ことの

給、さふらはせ給うけるを、久しくめしなかりければ
奉りける、武藏」とあり、いづれかよからん、

とよみて奉りければ、見給ひて、あなおもしろの玉の歌
よみやとなんのたまひける、

玉は歌の詞によりて、且ほめさせ給ふなるべし、
【陽成院のすけのご、ま、ち、の少將のもとに、
典侍の御と少將は異父兄弟也此少將誰にか【保孝按此
注誤本文明白】

はるの野ははるけきながらもわすれぐさおふるはみゆる
ものにぞありける
はるけきなからとは、よそながらといはんがごとし、
さてをとこのやうさだかにはあらねど、わすれゆく心
有とはみゆると云なり、

少將、返し、
はるの野におひじとぞおもふわすれ草つらきこ、あのだ
ねしなれば【古今「わすれ草何をか種と思ひしはつれ
なき人の心也けり】

【故式部卿の宮の、いではのこ【活異本に出羽の子とあ
り】に、ま、ち、の少將すみけるを、はなれて後、女す
すきに文をつけてつかはしければ、少將、

式部卿宮は宇多皇子敦慶親王二品式部卿、延長八年
月廿八日薨、出羽の御は此宮の女房なるべし、

秋風になびくをばなはむかしみしたもとに似てぞこひし
かりける【古今「秋の野の草の袂か花す、きはに出てま
ねく袖とみゆらん】

女のもとよりは文のみ贈りしなり、その返しに少將の
よめるなり、
いではのこ、返し、

たもと、もまのばざらまし秋風になびくを花のおどろか
さすは
こは立かへり女のいひやれるなり、わすれてあるをお
どろかしたるなり、

【故式部卿の宮、二條【堀本作二位】の御息所に後給ひ
て、又のとしのむつきの七日の日、わかれ奉り給ひける
に、

二條御息所は三條右大臣定方女なり、
ふるさと、あれにしやどのくさの葉もきみがためとぞま
づはつみける
宮の後給へる事をそへて故郷とはよみ給へり、
とありけり、

(元)おなじ人、おなじみこの御もとに、ひさしくおはしまさざりければ、秋の事なりけり、

世にふればこひもせぬ身のゆふさればすゝろにもの、かなしきやなぞ

すゝろはそゝろといふにおなじ、戀をもせぬ身ながら、かくそゝろにかなしきはいかなる事ぞとなり、

とありければ、御返し、
夕くれにものおもふときはかみなつきわれもまぐれにおとらざりけり

此神無月は時雨といはん料のみ、古今集秋に「神無月時雨もいまだふらなくに」と有用ざまなり、

となんありける、こゝろにいらであしくなんよみ給ひけるとぞ、

御こたへ大そうなる様也

(三)故式部卿の宮を、かつらのみこ、せちによばひ給ひけれど、おはしまさざりける時、月のいとおもしろかりける夜、御ふみたてまつり給へりける【一本には歌のみ有て此前文を脱】

かつらのみこは寛平の皇女宇子内親王也、さてこの文は、式部卿の宮かつらのみこをせちによばひ給ひと

あるべき事なり、必書たがへとみゆ、又おはしまさぬは式部卿宮也、さて式部卿宮より歌をまゐらせられしなり【山云よばひは喚の字なり、或人呼こと、のみせれど、さにては歌のつかひ様に意あたらす、此ヨバヒはヨブをたゞに延たるにはあらず、内に戀情有て忍びあへず、口に發言よばふなり、そは雉の妻をこひ、男鹿の妻をこふる杯、なべて戀情聲に出るなり、扱か、る鳥獸すらもヨバフは雄にのみ有て、雌に無は、女は思ひくゆらして、泪にのみ出る天然の理なり、さる故、

人としても女よりヨバフ事のなきは此謂なりけり【後撰かつらのみこまうできけれどあはずしてかへして又の口遣しける、かつらのみこ「から衣きてかへりにし

さすすから哀と思ふをうらむらんはた】

ひさかたの空なる月の身なりせばゆくともみえて君は見

てまし

式部卿宮の歌なり、かつらのみこの歌にしては、ゆくともみえてなどいかに、さてゆくともなくてゐながらといふなり、

となんありける、

(三)良少將、兵衛の佐なりけるころ、監の命婦になんすみ

ける、女のもとより、

良少將は良家義方なり、承平六年右少將、天慶三年藏人、八年中將、天曆元年卒、此物がたりのおく【百七十段】に良少將とあるは、宗貞にてことなり、

かしは木のもりの下草おひぬとも身をいたづらになさずもあらなん【古今、大あらしの任の下草老ぬればこまも

すさめずかる人もなし】

源氏に右衛門督をかしは木といへるを思へば、兵衛は中重、左右衛門は外重なれど、ともに御門守さま同じ

き故に同じ稱ある歟、【田本云此歌柏木を良少將にそへ、わか身を下草にたとへて、たとひ年老ぬともふる

しはて給ひそとたのめたる心なり】

返し、
かしは木のもりの下草おひぬよにか、るおもひはあらじとぞおもふ

となんいひける、

(三)良少將、たちのをにすべきかはをもとめければ、監命婦なん、我もとに有といひて、久しく出さざりければ、

あたるのたのめわたりしそめ川のいろのふかきをみでややみなん【拾遺物名、をかはのはしといふ事をうつくし

よりこ、までくれどつともなし太刀のをがはのよしのみぞある】

染川は筑前の地名なり、いせ物語に、つくしにてそめ川をわたらん人のとよめる歌あり、

となんよめりければ、監命婦めでくつがへりて、もとめてやりけり、

はじめは空言なりしかば今わざともとめてやるなり、

(三)陽成院の二のみこ、後蔭【端本作俊蔭古今集も今本に

はとしかげと有、誤れり、古本には後蔭とあり】の中將のむすめに、としごろすみ給ひけるを、女五のみこをえ

奉り給うて後、さらにとひたまはざりければ、

陽成院の二のみこは、三品彈正尹元平親王也、後蔭は古今集にも出たり、中納言有穂男、延喜十年右少將、

十二年藏人、十九年四位、九月中將、廿一年卒、女五の宮は寛平第五皇女依子内親王也、それを元平のみこ

え給ひて、後蔭の女に絶給へるなり、

いまはおはしますまじきなんめりとおもひ絶えて、いとあはれにてゐ給へりけるに、いとひさしくありて、思ひがけぬほどに、おはしましたりければ、えものも聞えて、

にげて戸のうちに入にけり、歸給ひて、みこあしたに、

などかとしごろの事も申さんとて、まうでたりしに、かくれ給ひにしと有ければ、ことばはなくてかくなん、せかなくにたえとたえにし山水のたれまのべとか聲もきかせん

すべて物語に、御こゑきかせ給へなどいふも、物いふ事をこゑといふなり、

(二)先帝の御時に、右大臣の女御、うへのみつばねにまうのぼり給ひて、侍らひ給ひけり、おはしましやすすと、またまち給ひけるに、おはしまささりければ、

袋草紙に、此先帝は延喜の御宇とあり、またまちとは

またまち待るるなり、
萬代五また拾遺
ひぐらしにきみまつ山のほと、ぎすとはぬ時にぞこゑもをしまぬ

拾遺集にいれり
となんきこえける、

(三)ひえの山に、ねんがくといふ法師のやまごもりにて有けるに、まとくにてましくける大徳のはやうまにけるが、むろに松の木のかれたるを見て、

念覺は俊子の兄なり、じとくとは、何にても天子の師を侍讀といふと禁秘抄にも見ゆ、むろとは法師のおこ

なひにこもりをる所をいへり、ぬしもなき屋どのかれたる松みればちよ過にけるこ、ちこそすれ

とよみければ、かのむろにとまりたりける弟子ども、あはれがりけり、此念覺は、としこがせうとなりけり、

(三)かつらのみこ、みそかにあふまじき人にあひ給ひたりけり、男のもとに、よみておこせ給へりけり、

古今戀五よみまらす
それをだにおもふこと、てわが屋をみきとないひそ人のきかくに

おもふ事とは、わが屋を見きといふをだに思へば

さはいふと、人のおもはん事とていふなり、【山云戀

忍び思ひあまること、て、それをだに見きと人に語るな、夫よりして世にうき名は立事の有物なりとよめりしなり、是逢まじき人に逢給へれば、如此はよませ給ひしなり、打聞に、絶て後の歌と説るは悪し、遠鏡は己が説と少し違へど宜し】

となんありける、

(三)かいせうといふ人法師になりて、山にすむあひだに、あらはひ【山云、あらはひはをわと音便によむべし、よろこびをヨロコボヒと延たると同例なり】などする人

のなかりければ、

かいせうは後撰に戒仙とある同人歟、又こと人か、あらはひとは衣を洗事なり、さて古語にていはえひの反ひなれば、延てあらはひといひしとすべし、されど、此頃となりては、か、る所に何となく語をこめおもはせて云類あれば、あらはしめなどするてふ事をかくいふなるべし、

おやのもとに、きぬをなんあらひにおこせたりけるを、いかなるをりにか有けん、むつがりて、親はらからのいふ事もきかで、法師に成ぬる人は、かくうるさき事いふ物かといひければ、よみてやりける、

むつがりてはふづくみていふなり、親はらからたれと

まらす
いまはわれいづちゆかましやまにても世のうきことはなほもたえぬる【古今、世を捨て山に入人山にても杉をさときはいづちゆかまし】

あらはひする人もなくて、親などもむつかれば、かくはよめり、

(六)おれじ人、かのち、の兵衛佐、うけにけるとしの秋、家にこれかれあつまりて、よひより酒のみなどす、いま

すからぬ事のあはれなる事を、まらうどもあるじもこひけり、あさばらけにきりたちわたりけり、まらうど、

あさきり【六帖一川務】のなかにきみますものならばはる、まにうれしからまし

といひけり、かいせう返し、

ことならばはれずもあらなん秋務のまぎれにみえぬ君とおもはん

此ことならば、上の歌に、秋務の中に君ますといへるをうけて、そのごとくならばといへるならん、總てことならばといふは、萬葉にては、殊ならばの意のみなり、古今集には、殊と如と二つ有とみゆ、いまこ、

は如なり、【灌臣云、ことならばと云詞は如ならばには

あらす、如此とならばをかくの二言轉約して、ことなればなり、すみてよむべし、中むかしの抄物にも如此とならばなりといひ、本居氏などもその説にしたがはれたり、この意はともかく霧のふかたつくらるならば、はれずもあれとなり、古今にも、ことならばといひ、ことはふらなんともよめる、皆同じ、此詞ふるく古事記の歌にもみえたり、別に委しくいふべ

し

まらうとは、貫之友則などになん有ける、

(元)故式部卿の宮に、三でうの右のおと、こと上達部など、類いして「類いしてといふ語なし、陪してを誤れるか、へとるとまがひしにや、又へを類に見しにや、菴臣云へいしての誤といはれたるはいみじきひがごとなり、下文百三段にもるいしての詞あり、ともに類の字にてたぐふなり、俗につれだちて行など云に同じ、保孝、此は師の説よろし、されば類いとあるいば違へしもし假字にか、んとならばいの格にあらず、外のかななり、(岡本保孝は菴臣の弟子也)「まわり給て、恭うち御あそびなどし給ひて、夜ふけぬれば、これかれ多し給ひて、ものごたりし、かつけものなどせらる、をみなべしをかざし給ひて、みぎのおと、

宮は敦慶のみこなり、右のおと、は定方公なり、延長二年正月廿二日右大臣、承平二年八月四日薨、内大臣高藤公の二男なり、かつけものは女の装束などかづくるなり、

をみなへしをる手にかゝるゑら露はむかしのけふにあらぬなみだか

とかくに今はなくなりし人有をおもひ給へるなるべし、女郎花とあればさる筋の人のなきか、

となんありける、こと人このおほかれと、よからぬはわすれにけり、

(三)故右京のかみ宗子のきみ、なり出べきほどに、わが身のえなり出ぬ事を、思ひ給ひけるころほひ、亭子の御かどに、紀伊國より石につきたるみるをなん、奉りたりけるを題にて、人々歌よみけるに、右京のかみ、

むねゆきは、ある説に光孝天皇の御子忠親王の子といへり、此下に南院に此人其外あそびて「きてみればこゝろもゆかず故郷は」とよみたり、南院は忠親王の家と拾芥にもあり、

おきつ風ふけひのうらにたつ波の「保孝按、ふけひの浦はすなはち吹上の濱のはし、玉かつまかに或人の説をあけていへり、ひらきみて其論をみるべし、」なごりにさへやわれはまづまん【河社云此歌新千二戀に入られたるいかゞ覺束なし】

なごりは沙千のなごりと萬葉によみて、總ては干たるに深き所々のみ波の有をいふ、まかれれば、こゝもその心にて、沙千ゆけどなほまづみて有石に、身をそへた

るなり、たつ波とは先いひてそれがひしほになるを次にいふなり、

(三)又おなじ右京のかみ、監の命婦に、
後撰更讀人不知
よそながらおもひしよりも夏のよのみはてぬ夢ぞはかばかりける

こゝろあきらかなり、

(三)亭子のみかどに、右京のかみのよみて奉りたりける、あはれてふ人もあるべくむさし野のくさとだにこそおふべかりけれ【古今「むらさきの一もと故に武藏の、草はみながらあわれとぞみる】

むさし野の草ならば、袈とだに思ひ聞ゆる人もあらんとなり、こは身の爵位をも得ず、なりのぼらぬ事を此院へうたへ申て、御かへりみをこひねがへるなるべし、

又

まぐれのみふる山ざとの木のしたはをる人からやもりすきぬらん【もりすくは漏り透くなり】

をる人からとは、居人によりてといふなり、「わび人のわきて立よる木の本はたのむかげなくもみぢちりけり」といへるに似たり

とありければ「菴臣云、ありけれど、ありしをうつし改めたるなるべし、或人云けるはの誤」かへりみ給はぬ心ばへなりけり、

こは先落着を書ぬ體ともすべけれど、詞の違あるべし、且帝の御うへならば御こゝろはへとかくべし、みかど御覽じて、なにごとぞ、是をこゝろえぬとて、そらうづのきみになんみせ給ひけるとき、しかば、かひなくなんありしとかたり給ひける、

僧都の君誰とまらず、
(三)みつねが、院によみてたてまつりける、

躬恒は祖詳ならず、古今序には前甲斐に目とみゆ、院は宇多帝にや、【歌仙傳云、寛平六年二月廿八日任甲斐權少目、延喜七年正月十一日任丹波少目(御厨同所)同十一年任和泉權掾、作者部類云、延喜廿一年正月晦日任淡路權掾、父祖は不知人凡河内は古事記云天津彦根命後云々】

たちよらんこのもともなきつたのみはときはながらに秋ぞかなしき

羅耳ツクミはといひて身をそへたり、さてつたより直にときはとつゞくにはあらず、つたのみはと切て、さていつ

もかなしなから、秋ぞことにかなしといふなり、まかればつたの色づく秋のかれしき意さへこもれり、つたにとことばも有れといふは、此歌をよく思ひとかぬなり、

(高)右京のかみのもとに、をんな、いろぞともおもはえずともこの花はときにつけつ、おもひ出なん

初の匂いつぞとはと有べし、このはなは木の花なり、梅とのみ思へるは誤なり、さてこは何ぞの花を贈りしか、又子ある中にていへるか、

(景)つ、みの中納言、内の御つかひにて、おほうち山に、院のみかとおはしますにまゐり給へり、物ご、ろほそげにておはします、いとあはれなり、たかき所なれば、雲はまより、いとおほくたちのぼるやうにみえければ、かくなん、

堤中納言は兼輔なり、良門孫利基男、承平三年薨、【関言、勸修寺祖贈太政大臣良門の孫右中將利基子、號堤中納言云々、承平三年二月十八日薨、年五十七、】おほうち山は仁和寺の山なり、法皇おはしましければ此御使

有しなり、大内山は大和國にある事、紀にも式にもみえたり、又此所をいふはいつよりの事にや、新勸修寺中納言兼輔まらくものこ、のへにたつみねなればおほうち山といふにぞありける

(三)伊勢の國に、前の齋宮のおはしましける時に、堤の中納言、勸使にてくだり給ひて、前齋宮は宇多の皇女柔子内親王なり

いつきの宮の久しく絶せぬをいはひ給へるなり、御返しはきかず、彼齋宮のおはします所は、たけのみやことなんいひける、和名抄伊勢國多氣郡多氣(多介)

(四)いづもがはらから、ひとり殿上して、われはえせざりける時によみたりける、いづもはまられず、かくさける花もこそあれわがためにおなじはるとやいふべかりける【濱臣云、此はるは君恩をかくる事をそへいへるなり、はるといひて君恩のこと、せしは、古今の「春の日のひかりにあたるわれなれどかしらの雪となるぞわ

びしき」又後撰に「まら雪のみのしろ衣うちきつ、はるきにけりとおどろかれぬる」猶外にも多く例あり】

とやはとやはの畧なり
(六)先帝の五のみこの御むすめは、一條の君といひて、京極のみやす所の御もとにさふらひ給ひけり、よくもあらぬ事ありて、まかひ給ひて、ゆきのかみのめにていまして、

先帝の五のみこ何れともまりがたし、何くれといふは、みなおしはかりにてとるにたらず、ゆきのかみは登岐寺なりこれもまられず、

たまさかにとふ人あらばわたのはらなけきはにあげていぬとこたへよ【古今、「わくらばに問人あらばわかぬ浦にもしほたれつ、わぶとこたへよ】

こはゆきの守にぐして海の上へゆく時の歌なり、初の句猶わくらはにといはまほし【濱臣云、ほにいづる、ほにあらはる、ほにあくる、皆日本紀に秀をほとよめり、さて此歌はその詞に帆をよせてよめり】

(完)伊勢のかみもろみちのむすめを、た、あきらの中將の君にあはせたりける時に、そこなりけるうなるをば、右京のかみよび出でかたらひて、あしたによみておこせた

りける、

伊勢守知がたし、源正明は南院式部卿是忠親王男、承平四年十二月右中將、天慶八年左中將、うなるはわらはの事なり、男女にかよはしいふ、躬茲云和名抄鬘髮(和名字奈爲)おく露のほどをもまたねあさかほは見すぞなか／＼あるべかりける

まばしのあひだは中々にうきてふ意なり、(四)かつらのみに、式部卿の宮すみ給ひける時、其宮にさふらひけるうなるなん、このをとこ宮を、いとめでたしとおもひかけたてまつりけるをも、えまら給はざりけり、ほたるのとびありきけるを、かれとらへてと、このわらはにのたまはせければ、かざみの袖にほたるをとらへて、つ、みて御らんせさすときこえさせける、後撰集讀人不知つ、めどもかくれぬものはなつむしのみよりあまれるおもひなりけり【濱臣云、後撰集戀、人に身よりあまたる人を思ひかけて遣はしけると云ことばがきの歌あり、わが身に不相應なる貴人をおもひかけたることなるをまゐるべし、それをこ、には螢の身よりあまる火と云かけたなり、

かざみは女のわらはのうはぎなり、此歌後撰にあり、

のがるともたれかきざらむぬれごろもあめのしたにしす
まんかぎりは

(聖)堤の中納言のきみ、十三のみこの母みやすん所を、うち
に奉り給ひけるはじめに、みかどはいかがおぼしめす
らんなど、いとかしこくおもひなげき給ひけり、さて帝
によりて奉り給ひける、

堤中納言は兼輔卿なり、十三のみこは延喜皇子彈正尹
章明親王なり、御母は桑子兼輔卿の女なり、

後撰集
人のおやのこ、ろはやみにあらねどもこをおもふみちに
まどひぬるかな

先帝いとあはれにおぼしめしたりけり、御返しはありけ
れど、人えしらす、

(哭)平仲、かんろんのごにたえて後、ほどへてあひたりけ
り、さてのちにいひおこせたる、

平貞文字は仲といひし故平仲といへり、右中將好風男
(好風は中野親王の孫茂世王の子) 関院の御は或説に
宗干の女なりと、

うちとけて君はねつらんわれはしも露のおきみてこひに
あかしつ
おんな、返し、

亭子院の帝なり、齋院はいづくともさして知りがたし、
【齋宮齋院は當時皇女のみならず、先帝の皇女を専立給
へり、然れば陽成光孝などの皇女にやまらず、】

ゆきてみぬひとのためにとおもはずばたれかをらましわ
がやどのきく【百云、この歌續古今に「誰かをらまし庭
の白菊」とあり、】

帝のゆきてみ給はぬなり、戀給ふよしなり、【濱臣云、此
注非なり、ゆきてみぬは即来てみぬといふに同じく、
齋院の來まして見給ぬをいふ、帝の行てみ給はぬには
あらず、ゆくといくとをかはしていへる例いと多
し、別考あり、○山云、此歌注の意にては二三の句の語
勢弱し、此初句は古意にて来て、見ぬ事よみ給しなら
ん、】

さいろんの御返し、
わが屋どにいろをりとむるきみなくばよそにもきくのは
なをみましや

をりておくりとむる意なるべし【山云、此歌君まし
まさすばよそにもきくの花を見むやは君色をとめま
しまさすとも、我はよその菊の花を見じとなり、色
をとむとは、心をさして色といへるなり、】

【新拾遺四閑院】
まら露のおきふし誰をこひつらんわれはき、おはすいそ
のかみにて

伊勢物語にき、おひける男とある類なり、古今に「石
上ふりぬるこひの神さひてた、るにわれはいぞねかね
つる」といふ歌の意もていへるなるべし、

(聖)陽成院の一條の君、
おく山にこ、ろをいれてたつねすばふかきもみちのいろ
をみましや

(哭)先帝の御時、刑部の君とてさぶらひ給ひける、更衣の
里にまかり出給ひて、ひさしうまわり給はざりけるにつ
かはしける【新古今には亭子院の御製とていれり、これ
にまがふべし、延喜帝にはあらず亭子院の帝なり、】
刑部の君は誰としらす、更衣とは御妾の一つにて、女
御は三位、更衣は四位なり、
おほそらをわたる春日の影なれやよそにのみしてのどけ
かるらん
うへの御こ、ろにはこひしくおほし給ふに、更衣はい
かで心のどかに里住し給ふらんとなり、
(哭)おなしみかど、齋院のみこの御もとに、きくにつけ
て、

(五)かいせん、山にのぼりて、
【新拾遺中成仙法師】
雲ならでこたかき峯にゐるものはうき世をそむくわが身
なりけり

(五)齋院よりうちに、
おなじ枝をわきて霜おく秋なればひかりもつらくおもほ
ゆるかな

霜の深き浅きあるは、日影のあたりあたためぬ所ある故
なれば、おなじ木ずるながらさかえさかえぬかた有と
いふにて、下には御はらからの中にも、吾はかくあり
と御こ、ろゆかぬなるべし、

御返し、
花のいろをみてもまらなん初しものこ、ろわきてはおか
じとぞおもふ

これも、うちの御、
大御歌の歌を略しいふ事、源氏物語などにもあり、
わたつみのふかき心をおきながらうらみられぬるものに
ぞ有ける【山云、此歌意に沖をそへたり、われは恨られ
ぬると含たるなり、さらでは物と云ふ詞ゆく所なし、】

(五)陽成院にありける、坂上のはみちといふをこ、お
なじろんにありけるをんな、さはること有とてあはざり

ければ、

秋の野をわくらんまかも我ごとやまげきさはりにねをば

なくらん

(壘)右京のかみ、むねゆきのきみの三郎にあたりける人、はくえう【是延語にはあらず、音便なり】をして、おやにもはらからにもにくまれければ、あしのむかつかたへゆかんとて、【竹取物語に、いづちもくあしのむきたらんかたへいなんとす】と有【人の國へなんいきける、さておもひけるともだちのもとへ、よみておこせたりける、博奕のえきをのべてはくえうといふなり、まをりしてゆくだびなれどかりそめのいのちまらねばかへりしもせじ

父の折檻にあひてゆくを道の標折のことにいひそへしなり、【濱臣云、人を責さいなみうちた、くをまをると云事、伊勢物語に、倉にこめてまをり給ふ、又女をまかりさせてまほり給ふ、落窪物語に、物なくはせぞまをりころしてよと有、この歌にかくいひかけしにてをのかな、ること明なり、まかるを、六條本伊勢物語に志保里とあるは誤なり、六條本は假字違へる多し、されば假字の證には引がたし、(濱臣云、いのちの道を道にい

ひかけて、道しらねばかへりしもせじとつゞけたるなり】

(高)をとこ、かぎりなくおもひける女をおきて、ひとの國へいにけり、いつしかとまちけるに、まにきといひてきたりければ、いまこんといひてわかれし人なればかぎりときけど猶ぞまたる、

となんいひける、

(壘)越前のごんの守かねもり、兵衛の君といふ人にすみけるを、としごろはなれて又いきけり、扱よみける、

兵衛の君は參議兼茂女後拾遺集にみえたり

後撰よみ人まらすゆふされば道もみえねどふるさととはもと來しこまにまかせてぞゆく

韓非子と云書に、齊の管仲が大雪に道をまどへる時老馬の智用べしとて馬にまかせてゆき至れる事あるをいへり

女、返し、

こまにこそまかせたりければかなくもこ、ろの來るとおもひけるかな【山云、心のくるとは心のくとも有けんを、後人書違へるなるべし】

(壘)あふみのすけ平中興の、むすめをいいたうかしづけるを、おやなくなりてのち、とかくはふれて、【山云、此とかくは一種のつかひざまなり、今俗にいふとかく貧乏し

てといふに同じ、落ぶれたるざまなり、さてハフレテの辭は常につかふはハフラムハフリハフルハフレと四段に活で、然することなり、今は己が身の自らあるにやあらぬ身と成行をいふなり、此辭は下二段にてハフレハフルハフル、ハフルレと活くなり、【人の國にはかなき所にすみけるを、あはれがりて、兼盛がよみておこせたりける、

このむすめをかしつきたる事末にもみゆ

をちこちの人めまれなるやまざとにいへぬせんとはおもひきやきみ

此歌後撰集によみ人まらずとていれり、端の詞に「昔おなじ所に宮仕しける女の、男につきて人の國におちゐたるをき、て、心ある人なればいひ遣しける、」とあり、

とよみてなんおこせたりければ、かへりごともせでよ、とぞなきける、女もいとらうある人なりけり、らうあるとはよろづに功勞をつみし人と云なり、後撰

にはかへし「身をうしと人まれぬよをたづねこし雲のやへたつ山にやはあらぬ」とあり、

(壘)おなじかねもり、みちのくににて、かんぬんの三のみこのむすめにありける人、くろつかといふ所に住けり、そのむすめどもにおこせたりける、

閑院は元貞親王(清和第三皇子)三のみこは從五位下源兼信、重之の父なり、

(拾遺集)みちのくのあたちのはらの黒づかにおに【和名抄人神(和名於邇)猶伊勢物語古意にくはし、】こもれりときくはまことか

拾遺集には「みちのくにくろづか【久云、和名抄藤原韻云食陵反又作蝶和名與昨同云々、ともにクロとよめり、字鏡に堀刀龍反塚也久昌】といふ所に源重之がいもうと有とき、て遣しける」とていれり、家集もおなじ、こは重之の方へ戯にいひやりしなるべし、塚といふより鬼といへば、直にその娘へもおやへもいひやるべきものならず、重之は歌よみにて、兼盛のこ、ろしりなればさもいふべきなり、

といひたりけり、かくてそのむすめをえんといひたりければ、おやまたいとわかくなんある、いまさるべから

んをりにをといひければ、京にいくとて、山吹につけて、

花ざかり過もやするとかはづなくゐでの山吹うしろめたしも【古今一蛙なくゐでの山吹散にけり花の盛にあはましものを】

といひけり、かくてなとりのみゆといふ事を、つねたゞの君のめよみたりけりといふなん、このくろづかのあるじなりける、

なとりのみゆは陸奥名取の郡にある出湯なるべし、兼盛ぬしの心かけし女、この恒たゞの君てふ人のめになれるなるべし、

拾遺にはおぼつかなくおほそらの雲のかよひちみてしかなとりのみゆけばあとはかもなし

なとりのみゆをかくしたるなり、拾遺物名には兼盛のうたとて入たり、

となんよみたりけるを、かねもりのおほきみ同じこ、ろを、

兼盛王とは、まだ平の氏給はらぬ先とわくべし、
まはがまのうらにはあまやたえにけんなどすなとりのみゆるときなき

となんよみたりける、さてこの心かけしむすめ、こと男して京にのぼりたりければ、き、て、かねもりのぼりも

のし給ふなるを、つけたまはせでといひたりければ、ゐでの山吹うしろめたしもといへりけるふみを、これなん

みちのくにのつと、て、おこせたりければ、をとこ、としをへてぬれわたらへる衣手を【山按、を文字はの文字の誤か】けふのなみだにくちやしぬらん【濱臣云、た

しの約ちなり、くたしやしぬらんとなり、三の句衣手をとあるをもじにと心得べし、】

といへりけり、
【世中をうんじて、つくしへくだりける人、女のもとにおこせたりける、
わするやと出て來しかどいづくにもうさははなれぬ物にぞ有ける

うさはつくしうさてふ地の名をそへたり、
【五でうの御といふ人ありけり、をこのもとに我かたをえにかきて、女のもえたるかたをかきて、けふりをいとおほくくゆらせて、かくなんかきたりける、

五でうの御は、末に山陰中納言のみめひとあり、
きみをおもひなましくし身をやく時はけふりおほくも

藤を淵にいひて飛鳥川のこともてつ、げたり、時なくなりたるかの君たちの心をよめり、

のにさりける

藤を淵にいひて飛鳥川のこともてつ、げたり、時なくなりたるかの君たちの心をよめり、

おもひに火をそへたり、
【亭子院に、みやすん所たちあまた、みぞうし煮てすみ給ふに、としごろありて、かはらのゐんのおもしろくつくられたりけるを、京極の御息所、ひと、ころのみ

ざうしをのみして、わたらせ給ひにけり、
融公六條河原の院を作りて住給ひけるを、後に宇多の

帝へ奉り給ひけるに、帝又いみじく作りそへ給へる事、
宇治拾遺などにもみえたり、

はるの事なりけり、とまり給へるみざうしとも、いと思ひの外にさうぐゝまき事をおもほしけり、

外の御ざうしの君達は、思ひの外に御とも、せでとまり給ひてひさしきなり、
殿上人などかよひまゐりて、藤の花のいとおもしろきを、これかれさかりをだに御らんせでなどいひて見ありくに、ふみをなんむすびつけたりける、あけてみれば、

本より文のつけて有しなり、
よの中のあさきせにのみなりゆけばきのふのふちの花とこそみれ

藤の御心のうつりに給ひしをそふるのみ、
【三】のうさんのきみといひける人、淨藏とはいとなうおもひかはす中なりけり、かぎりなくちぎりて、思ふ事をいひかはしけり、のうさんのきみ、

いかなる事をか聞えけんとなり、
といひおこせたりければ、淨藏たいとくの返し、
ゆくすゑのすくせをえらぬこ、ろにはきみにかぎりの身

いかなる事をか聞えけんとなり、
といひおこせたりければ、淨藏たいとくの返し、
ゆくすゑのすくせをえらぬこ、ろにはきみにかぎりの身

とぞいひける

かねてかく思ふ人あるべきすくせありともあらざりしかば、たゞまづ其今あふ人をのみおもふ限りといひこしとなり、

(三)故左京のかみ、人のむすめを去のびてえたりけるを、おやき、つけて、の、しりてあはせざりければ、侘てかへりにけり、さてあしたによりてやりける、

さもこそは峯のあらしはあらからめなびきしえだをうらみてこそし【山按、此歌風を其女の親になぞへ、枝を其女になぞへていへるなり、扱、歌の意は、さもこそは親の峯のいましむる風はあらからめ、さ有とても、其親の目のひまを盗み、いかにもして逢べかんめるを、さはなくして、親のいましめ風になびきてあはざるそなたの枝を恨て歸りしとなり】

(空)平仲、にくからず思ふわかき女を、めのもとにゐてきおきたりけり、にくげなる事どもをいひて、めつひにおひ出しけり、このめにえたがふにやありけん、らうたしとおもひながらえとめす、いちはやくいひければ、

【濱臣云、いちはやき、うちはやき、むちはやき、皆同語なり、辨徳紀天平神護元年詔云、如此奉治方夜伎時身けるいみのこをけさうじけり、こんといひければ、御息所の御もとに、うちへなんまゐるといひおこせたりければ、

南院は四條北壬生西とみえたり、こは光孝の皇子是忠親王の御事なり、承香殿は高藤公女胤子なり、古今に僧正通昭のもとへならへまかりけると書る類にて、内に御息所のおはし所へまゐるといふなり、

たますだれうちとかかるはいとしくかけをみせじとおもふなりけり
内外に塵をかくれば透影もみえじといふなり(さてうちへなんまゐるといひしにあたりて、内と云に懸ていふはといふ心をこめたり)
といへりけり、又、

なげきのみしげきみやまのは、ぎすこがくれゐてもねをのみぞなく
などいひけり、かくてきたりけるを、いまはかへりねとやらひければ、

まねとてやとりもあへずはやはらる、いといきがたきこちこそすれ
往かたきに生の語をそへたり、

命乎不惜之天遊仙窟、嗟蓮の命之連遷、源氏須磨、いち

はやき世のいとおそろしう侍るなり、伊勢物語に、いちはやきみやびをなんなしけるとあるは心かはれり、されど別語にはあらず、さかすと云詞と峻嶮の義にもなし、

賢良の義にも用ふるに同じく轉用せしものなり、くはしくは予が伊勢物語添注の附考にいへるを合せ見るべし【ちかくだにえよらで、四尺の屏風によりか、りて、たてりていひける、

かのわかき女にいへるなり、
よの中のかく思ひの外にある事、ことせかいにものし給ふとも、忘れでせうこそし給へ、おのれもさなんおもふといひけり、この女つ、みに物などいれて、くるまとり

にやりてまつほどなり、いとあはれと思ひけり、さて女いにけり、とばかり有ておこせたりける、
いとあはれとは、平仲が意にしか思ふなり

わすらるなわすれやしぬるはるがすみけさたちながらちぎりつること【山按、此初五文字己をいへるなり、そは今朝立ながら契はしつれど、立隔ては忘らるらむ忘らるな我身よ君は忘れやしぬらんと心得べし】
【南院の五郎、みかはのかみにて有ける、承香殿にあり

返しをかしかりけれとえきかず、又雪のふる夜きたりけるを、物はいひてよふけぬ、かへり給ひねといひければ、えいかて歸りける程に、とをさしてあけざりければ、

物はいひての下にあはねばかへるにてふ語落たる成べし、さなくては次の歌の心も聞えず、このことばもつかす【山考、本の儘にても聞ゆ、是は夜ふけては御か許を立出れど我家にえいかでまた御が許へ立歸しなり】
われはさは雪ふるそらのきえねとやたちかへれどもあけぬ板戸は【濱臣云、下句たちかへれども板戸は明ぬとかへして心得べし、詞花冬藤原長能か「あられふりかたののみの、かり衣ぬれぬやどかす人しなれば」とよめともやどかす人しなればぬれぬとの意なり、思ひ合すべし】

となんいひてゐたりける、かく歌もよみ、あはれにいひるたれば、いかにせましと思ひて、のぞきてみれば、かはこそいにくげなかりしかとなんかたりしとか、
いかにせましとは、あは、やとおもひしとなり、

(空)としこ、ちかぬをまらける夜、こざりければ、

さよふけていなおほせどりの鳴けるをきみがた、くとおもひけるかな

いなおほせ鳥は庭た、きなり、待わびてし心にはあらぬ物の音もそれかとおどろくべし、【濱臣云、此た、くは、稻負鳥をにはた、きとして、にはた、きの名よりた、くとはよみし成べし、又此た、くといふより、稻負鳥をくいなりといふ説もあるは、いみしきひがことなるよし契沖師いはれたり、】

(空)又、としこ、雨のふりける夜ちかぬをまちけり、雨にやさはりけん、こざりけり、こばれたる家にて、いたくもりけり、雨のいたくふりしかば、えまゐらすなりにき、さるところに、いかで物し給ひつるといへりければ、としこ、

君をおもひ隙なき屋ど、おもへどもこよひのあめはもらぬまぞなき

屋ねのひまと思ひの隙を合せいへり、

(空)枇杷殿より、としこが家にかしはぎの有けるを、をりにたまへりけり、をらせてかきつけてたてまつりける、

枇杷殿は左大臣仲平、昭宣公の子なり、
後撰三
わか屋どをいつかは君かならしばのならばほにはをり

におこせる

後撰にはいつならしてかならの葉のとていれり、かしは、なら、ならしば、おなじ物なり、さて返しをもかねて思ふに、こはたゞにあらすむかし心かよひし間なるべし、さなくは此歌何ともなし、

御返し、
後撰ならのはつ
かしは木に葉守の神のましけるを去らでぞをりした、りなざるな

照昭法師の袖中抄に、はもりの神とは樹神なり、よろづの木をまもる神なりといへり、さて此歌はとしこにぬしある事をの給へるなり、もとの心あらずばかくはよみたまはじ、

(空)忠文が、みちのくの將軍になりてくだりける時、それがむすこなりける人を、監命婦^{ツツミ}のびてあひかたらひけり、

天慶三年正月に、藤原忠文平貞盛などみことのりをうけて東にいたり、平將門をたひらげし事あり、其ほど
の事なるべし、
うまのはなむけに、めとりく、りのかりきぬ、うちぎ、ぬさなどやりたりける、かのえたるをとしこ、

く、り染は今いふまばりぞめの事なり、ゆはだともいへり、うちぎは男女とも下に着る物にて鞋とかく、襦みえつやと同じ物にて、すその長きと短とのわかちのみ、ぬさは五色のきぬをこまかに切て袋に入れて旅のれうにもつなり、

よひくこひしさまさるかりごろもこ、ろつくしの物にぞありける
旅に立出て後、程へていひおこせたるにや、さもあらではふつにと、のはぬものなり、さていとくだけてわろき歌なるを、いかでめでけん、歌はわろかれど、別

のかなしきにつけてこの心をあはれみしにや、
とよみたりければ、女めでなきけり、
(空)おなじ人に、監命婦、屋まも、【躬弦云、和名抄楊梅

和名夜末毛々】をやりたりければ、
みちのくのあたちの屋まももろともにこえばわかれのかなしからじを
となんいひける、さてつ、みなる家に住ける、さてあゆをなんとりてやりける、

上に監命婦か堤に在ける家を人にうりてとあれば、こは命婦が家なり、

かも河の瀬にふすあゆのいをとりにてねてこそあかせ夢にみえつや
かくて此をこと、みちのくにへくだりけるたよりにつけて、あはれなるふみどもおこせけるも、道にてやまひしてなんまにけると聞て、女いとあはれとなんおもひける、かく聞てのち、まのづかのうまやといふ所より、たよりにつけて、あはれなる事どもをかきたる文をなんもてきたりける、いとかなしくて、これはいつのぞと、ひければ、つかひの久しく成て、もてきたるになん有ける、をんな、
まのつかのうまやくとまちわびしきみはむなく成ぞしにける

篠塚驛陸奥にあり、さていとうを通はしていまやといひなしたり【濱臣云、拾遺雜下、「なしといへばをしむかもと思ふらんまやうまとぞいふべかりける」○六帖うまや、「東路のうまや」とかぞへつ、あふみのちかくなるがうれしき「東路のさとのとほくもあうなくにうまや」と君を待哉○小馬命婦集「ひとねはかひなかりけり駒なべてかけのうまやと待てたのまん○いづれも馬を今によせたり】

とよみてなんなきける、わらはにて殿上して、大七といひけるを、かうぶりして、くらうど所におりて、かねのつかひかけて、やがておやのもとにいくになんありける、

童にて殿上するをわらは殿上といふ、常の事なり、こは六位藏人の巡符して五位になりて、地下になるをおりてといふべし、然らば藏人所【藏人所は職原抄拾芥抄等にみえたり】にとあるにの字は誤にて、藏人所をなるべし、藏人所よりといふにおなじ、かねのつかひは、いにしへ他國に金すくなくて、たゞ陸奥より貢せしなれば、その事の使なり、

(吉)故式部卿の宮うせ給ひける時は、きさらぎのつごもり、花のさかりになん有ける、つ、みの中納言のよみ給ひける、

式部卿宮は敦慶親王、延長八年二月廿九日薨、
(新勅雜三納言兼輔)
さきにはひ風まつ程のやまさくらひとのよ、りはひさしかりけり【山本云、よき歌なるを、はじめの句わろし、かく、はしくいはでも聞ゆるを、此ほどよりやくはしくなりしなり、】
三條の右のおとりの御返し、

(續古哀傷)
はる／＼のはなはちるとも咲ぬべし又あひがたき人の世ぞうき

(三)おなじ宮おはしましける時、亭子院に住給ひけり、此宮の御もとに、兼盛まゐりけり、めし出て、ものゝたまひなどしけり、うせ給ひて後、かの院をみるにいとあはれなり、池のいとおもしろきに、あはれなりければよめる、

或本にもとのたまひとあるは、物などの給ひといふなり、古今集にもあり、

いけばなほむかしながらのかゞみにてかけみし君がなきぞかなしき

(三)人のくにかみのくだりける、うまのはなむけを、堤の中納言してまち給ひけるに、くる、までこざりければ、いひやり給ひける、

わかるべき事もあるものをひねもすにまつとてさへもなげきつるかな

「とありければまどひきにけり」一活字

(三)おなじ中納言、かのとの、まんでんのまへに、すこしとほくたてりけるさくらを、ちかくほりうゑ給ひけるが、かれさまにみえければ、

(後撰集上、兼輔集)
やとちかくうつしてうゑしかひもなくまるとほにのみみゆる花かな
とよみたまひける、

まもどほにとは、屋とちかくといふにむかへいふ、さて枯様とはいへど、かれてさかざるにもあらぬにやあらん、後撰集には「前栽に紅梅をうゑて又の年おそくひらきければ」とて此歌いれり、

(四)おなじ中納言、くらうどにて有ける人の、加賀の守にてくだりけるに、別をしみける夜、中納言、

(古今雜別)
きみがゆくこしのまら山まらねどもゆきのまに／＼あとはたづねん
君が行のまに／＼そのあとをとめゆかんと云に、雪をかねたり、古今の歌なり、ことば書に大江千古がこしへまかりける馬の儀によめるとあり、こしのまら山は今加賀に入り、

となんよみ給ひける、
(五)かつらのみこの御もとに、よしたねがきたりけるを、母みやす所き、つけ給ひて、かどをさ、せ給ひければ、夜ひとよたちわづらひてかへるとて、かくきこえ給へとて、かどのさまよりいひいれける、

かつらのみこは寛平の皇女宇子内親王、喜仲は正五位下美作介と物にみえたり、從三位刑部卿長猷男なり、かとのさまは門の間なり、

こよひこそ【山考、此コソの諸句の下にアラメと含めたり、】なみだの川にゐることりなきてかへると君はまらざるや
初五文字にかづく、忍びて通ひし事をふくめたり、

(六)これもおなじみに、おなじをとこ、
(續後撰集二)
ながきよをあかしのうらにやくしほのけぶりはそらに立

やのぼらぬ【立やのぼらんと有本はいたく誤れり○濱田云、やはのやなり、立やはのぼらぬたちのぼるとなり、】かくてまのびつ、あひ給ひけるほどに、院に八月【八月をはずきと云事、誰も秋のみみちより云といへど、八月は紅葉はまだし、此月の名のみは心えず、】十五夜せられけるに、まゐり給へとありければ、まゐり給ふに、院にて

はあふまじければ、せめてこよひはなまゐり給ひそとどめけり、されどめしなりければ、えと、まらでいそぎまゐり給ひければ、よしたね、

たかとりかよ、になきつ、とめけんきみはきみにとこよひしもゆく

竹取の翁がやしなひし娘の、天にのぼらんとせしを、こりすまのうらにかづかんうきみるは波さわがしくありとむれどきかで、八月十五夜月のあかき空にむかひこそはせめ【古今、「こりすまに又もうき名は立ぬべし」のばりにしを、此みこをとむれど、猶院の御所人にくからぬ世にしすまへば】

へまわり給ふをたとへたるなり、さて上句はみな竹取の姫君の事、下句の一つの君はかつらのみこ、下の君は院の御事を申ししなり、

一たび名立しに、又あは、いかにいひさわがれんすらんとなり、こりすまはこりぬ事にいひかけたるのみ、

(七) 宇多院の花おもしろかりける頃、南院の君たちと、こみこ見給ひて、にはかにまどひけさう【けさう、古くは係想又繁念などかけり、懸の字を用ひし事はなし】し給ひけり、御かへりことに、

宇多院は西京土御門北木辻東（此小路當東洞院【田本此小路當東洞院の七字あり今補ふ】法皇御所刑部卿源湛宅と拾芥抄にみえたり、南院の君達は是忠親王の御子たちなり、此條のさまを思ふに、宗干のきみは南院の御息成べし、

朝拜は元日に百官庭上にて拜するなり、其時は女王以下官女も殿上の威儀あり、此命婦その威儀にさふらひしなり、威儀の命婦は總節會には皆あれど、こは、朝拜をいふ、

(新千懸) うちつけにまがふこ、ろときくからになぐさめやすくおもほゆる哉

そのまどひこふる心をなごめやすきなり、うちつけ事なればなごむるもはやからんといふなり、

きてみれどこ、ろもゆかすふるさとはむかしながらの花とちれども

心もゆかすばなぐさまぬなり、こは宇多院崩御の後の事なるべし、

みこの御うたはいか、有けん、わすれにけり、

(次父おなじみこに、おなじをんな、

こと人も有けらし、

(三) 季繩の少將のむすめ右近、古きさいの宮にさふらひけ

る頃、故權中納言の君おはしける、たのめ給ふ事なりありけるを、宮にまいる事絶て里に有けるに、更にとひ給はざりけり、内わたりの人きたりけるに、いかにぞまいり給ふやと、ひければ、常にさふらひ給ふといひければ、御文たてまつりける、

季繩は交野の少將といはれし人なり、故きさいの宮は穩子昭宣公の女、故權中納言は敦忠朝臣なり、

わすれしとたのめし人はありときくいひしことのはいつちいにけん

後撰にいれり、初句おもはんと、あり、

となん有ける、

(二) おなじ女のもとに、さらにおともせで、きじをなんおこせ給へりける、かへりごとに、

六帖(三) くりこまの山にあさたつきじよりもかりにはあはじとおもひしものを

ふかくたのめてし中なるを、うとくてかくかりそめことにし給ふよとらむるなり、和名抄山城國久世郡栗隈(久里久末)こ、か、【濱臣云、六帖下句我とばかりに思ひける哉、〇契沖云、和名抄山城久世郡栗隈(久里久末)夫木十一、貫之家歌合、(讀人不知)みかりするくり

こま山の鹿よりも獨ぬる夜ぞかなしかりける、下文百四十二段にみえたる歌なり、くりこま山くりこ山同じ、能宣集云、くりこま山なる人の我にをうなにも紅葉し侍り、もみちみるくりこま山の夕かけをいさわがやどにうつしもたらん、保元平治物語「奈良法師くりこま山までしふり来て、いかもの、ぐをよきぞとらる、」

となんいひやりける活

(三) おなじ女、うちの御ざうしにすみける時、まのびて通ひ給ふ人有けり、頭なりければ、殿上に常にありけり、雨のふる夜、ざうしのまとのつらに立より給へりけるもあらで、雨のもりければ、薙をひきかへすとて、

頭は藏人頭なり、こはいとあがめ書たれば、謙徳公のはじめ天曆の頃に頭になられしをいふにや、

おもふ人あめとふりくるものならばわがもるとこはかへさしらし

守るに雨のもるをかぬ、

となんうちいひければ、いと哀と聞給ひて、ふとはひ人給ひにけり、

(三) おなじ女、男の忘れじと、よろづの事をかけてちかひけれど、忘れにけるのちにいひやりける、

(拾遺四) わすらる、身をばおもはずちかひてし人のいのちのをし
くもあるかな

神ほとけにちかひて忘れじなどはじめいひしが、忘れ
にたれば、其人の命ぞ先いとほしきといふなり、

返しはえきかず、

(六) おなじ右近、も、その、宰相の君なん、すみ給ふなど
いひの、しりけれど、そらごとなりければ、かの君によ
みてたてまつりける、

桃園は一條北、大宮西、世尊寺南、保光卿家と拾芥抄
にみえたり、こは代明親王の御事なり、

よしおもへあまのひろはぬうつせがひむなしき名をばた
つべしや君【新勅戀二後滑性寺、わが戀はあはての浦の
うつせがひむなしくのみもぬる、袖哉】
うつせがひはみなさかひをいへば、むなしといはん料
なり、

(七) むつきのついたちころ、堀本云願忠 大納言殿に兼盛まいたりけ
るに、物などのたまはせて、すゞろにうたよめとのたま
ひければ、ふとよみて奉りたりける、

大納言どの誰ともまらず、すゞろは心におほへすある
事なるを轉して、こ、は何のくさはひもなく、ふと歌
ほそきに

をこふなり、
けふよりは萩のやけはをかきわけてわかなつみにと誰を
さそはん

春野はやけば草は皆やけ原なるを一つをいふのみ、さ
て初春は發生の氣にて野邊このましくをりからのおも
むきをよめり、此歌後撰にいれり、

とよみたりければ、になくめで給ひて、御返し、
かたをかにわらびもえずはたづねつ、こ、ろやりにやわ
かなつま、し

となんよみ給ひける、
心やりは心のなぐさめなり、後撰に此返しなし、

(八) たちまの國にかよひける、兵庫のかみなりける男の、
かのくになりける女をおきて、京へのぼりければ、雪の
ふりけるにいひおこせたりける、
兵庫のかみ誰とまらず、

山里にわれをとめてわかれちのゆきのまに／＼ふかく
といひたりければ、
山里にかよふこ、ろもたえぬべしゆくもとまるもこ、ろ
ほそきに

是も雪のいと深きにつけて心ぼそしといひしか、
となんかへしたりける、

(九) おなじ男、きのくに、くだるに、さむしとて、きぬを
とりにおこせたりければ、おんな、

きのくにのむろのこほりにゆく人は風のさむさもおもひ
まられし

むろとはぬりごめにて、あた、かなる所なるを紀伊の
牟婁郡によせたり、

返し、をとこ、
きのくにのむろのこほりにゆきながらきみとふすまのな
きぞわびしきかなしき堀本

臥間に衾をそへたり、
(一〇) 修理のきみに、うまのかみすみける時、かたのふたが
りければ、方たがへにまかるとでなん、えまゐりこぬと
いへりければ、

修理の君は内匠允藤原眞行女といへり、拾遺に此人の
歌人たり、うまのかみたれとまらず、【堀本傍注勘物
云、内匠允藤原眞行女云々、この注之を引るなるべし】
これならぬことをもおほくたがふればうらみんかたもな
きぞわびしき

かくて、馬のかみいかす成にける頃、よみておこせたり
ける、
拾遺雜歌
いかでなほあじろのひをに事とはんなに、よりにかわれ
をとほぬと

水魚の網代によるに添たり、拾遺に藏人所に侍ひける
人のひをの使にまかりけるとて、京に侍ながら昔もし
侍らざりければとて此歌いれり、

といへりければ、返し、
あじろより外にはひをのよるものかまらずばうちの人に
とへかし【濱臣云、あじろよりほかにはといへるにむか
へて、宇治の地名に内といひよせたり、】

ひをにとはんといふをなじりて、宇治人にとへといふ
なり、水魚は専ら宇治にあればなり、

(一一) 又おなじ女にかよひける時、つとめてよみたりける、
つとめてはあけほのなり、

あけぬとていそぎもぞするあふ坂のきりたちぬとも人に
きかすな

女の歌にて、男にきかすなといふなり、あふ坂に今あ
ひたるをそへたり、霧は朝と夕に立、こ、は朝立をいへ
り、【古今】あふくまに霧立わたり明ぬとも君をばやら

じまてばすべなし(あふ坂はあふ隈とありしが後に誤れるなるべし、全古今の歌によりてよめりとみゆ、)

(告)をとこはじめころよみたりける、

かよひ初たる後朝なるべし、

いかにしてわれはきえなん去ら露のかへりてのちのものはおもはじ

あひみしほどに死たらばかくけきの物はおもはじを、

今はいかにしてか消んといふなり、

返し、

かきほなる君が朝かほみてしかなかへりて後はものやおもふと

(二)おなじ女に、けちかく物などいひて、かへりてのちによみてやりける、

こゝろをし君にとめて來にしかばものおもふことわれにやあるらん

またふ心をは君が方にとめて置て來しに、猶物思ふ事

のみわが、たに残りてあるよしなり、

修理すりがかへし、

たましひはをかしき事もなかりよろづのものはからにぞ有ける

大和物語直解中卷

(三)三條の右のをと、中將にいまそかりける時、まつりのつかひにさ、れて、出立給けり、かよひ給ひける女の、

絶て久しく成にけるに、かゝる事になん出たり、あふきもたるべかりけるを、さわがしうてなんわすれにける、

ひとつ給へといひやり給へりけり、よしある女なりければ、よくておこせてんとおもひけるに、いろなどいときよくなるあふきの、かなどもいとかうばしうておこせたり、ひきかへしたるうらの、はしのかたにかきたりける、

右大臣は定方公なり、まつりは賀茂祭なり、

(拾遺雜記)人不知ゆ、しとていむともいまはかひもあらじうきをばこれに

風につけてやりなんおもひよせなん

扇は夏の程はわりさむれども、秋になればやがてすて

らる、物ゆゑ、昔は人に扇を贈る事をいめりといへり、

こもそのこゝろなるべし、

とあるをみて、いとあはれとおぼして、かへし、

ゆ、しとていみけるものをわがためになしといはぬは誰

がつらきなる

心をとめておかれても、そは何にかはをかしからん、人はかたちこそあれとなり、

(三)おなじ女に、故兵部卿の宮御せうそなどし給ひけり、おはしまさんとのたまひければきこえける、

兵部卿の宮は元良親王なり、

(新勅修)たかくとも何にかはせんくれたけのひとよふたよのあだ

のふしをば

いとかしこき事なれど、たゞかりそめのあたる契を

ば何にかはせんといふなり、さて親王の御事を竹によ

そへいふは、から國の梁の孝王(孝王は漢文帝の子なり)

の脩竹苑(脩竹苑の事史記孝王世家註にあり)の

事よりおこれるにて、いとふるくはさる事はいはず、

此頃よりの事なるべし、

大和物語直解上卷終

(尚)故權中納言左のおほいどの、きみをよび給ひけるとしのまはすのつごもりに、

權中納言は敦忠、おほいどの、君は清慎公の女、後撰

集にみくしげどの、べたうとあるなり、

(後撰冬)藤原敦忠(すくも月か)ものおもふと月日のゆくもしらぬまにことしはけふに

はてぬとかきく(保孝按、後撰秋下、)物おもふと月日

の行も去らざりつかりこそなきて秋とつけけれ(六帖六

鴈)

となん有ける 又かくなん、

(同)いかにしてかくおもふてふことをだに人つてなして君に

かたらん(これと同じはしの詞に、忍びてみくしげどの

のべたうにあひかたらふと聞て、父の左大臣せいしけれ

ばとあり)

かくいひくつて、つひにあひにける、

あしたに、

けふさへにくれざらめやはとおもへどもたへぬはひとの

こゝろなりけり(けふそへにとある本は訛なり、是も後

撰集にいれり、)

たへぬはけふもくれぬことあらじと思ふにも、猶くれ

をまつに堪かぬは、人のこゝろとなり、

(左)これもをなじ中納言、齋宮のみこをとしごろよばひたてまつり給ひて、けふあすあひなんとしける程に、伊勢の齋宮のみうらにあひ給ひにけり、いふかひなく口をしと、をと思ひたまひけり、さてよみて奉りたまひける、

齋宮のみこは延喜の皇女雅子内親王、承平二年十二月廿五日卜定、六年御母の喪にて退給ふ、後撰集に西四

條の前齋宮とあるなり、
(後撰集五)いせのうみ千ひろの濱にひろふともいまはかひなくおもほゆるかな、

催馬樂に「いせの海清きなぎさのまほかひになのりそやつまんかひやひろはん玉やひろはん」とあるをおもへり、此歌後撰集には末句「今はなにてふかひかあるべき」といれり、しかあるぞよき、今の末句の如くはひろふともいふてにはかなはずとなんありける、

(矣)故中務のみやの北のかたうせ給ひて、ちひさききんだちをひきく、して、三條の右大臣殿にすみ給ひけり、御いみなど過しては、つひに獨は過し給ふまじかりければ、かの北のかたの御おとうと、九の君をやがて兄のいへとおぼしけるを、何かはさもとおやはらからもおぼし

たりけるに、

中務宮は代明親王、北の方は右大臣の女なるべし、御いみとは、服忌令云、妻服九十日、暇廿日、御おとうとは妹なり、何かはさもとは何にくるしからんさもあるべしとなり、

いか、有けん、左兵衛のかみのきみ、侍従に拜し給ひける頃、この御文もてくとなんき、給ひける、さて心つきなしとおぼしけん、もとのみやになんわたり給ひにける、その時にみやす所の御もとより、

左兵衛督は眞信公の男、小一條左大臣師尹公なり、御息所は女御能子、三條右大臣女、九の君の姉君なり、なき人のすもりにだにもなるべきにいまはとかへるけふのかなしさ

巢守とは鳥のかひこのかへらすして巢に残りたるをいふなり【射弦考に、和名抄(和名須毛里)卵不解也、かげろふ日記中巻長歌に、よつにわかる、すこどりの、おのがちりく、巢ばなれて、わづかにのこるすもりに、なにかはかひのあるべきと、】こは九の君を姉君の御かはりにもとおもひしを、かの左兵衛のかみの御文もてくるといふ事によりて、みこのかへらせ給ふ

をよそへいふなり、

みやの御返し、
すもりにとおもふこ、ろはとむれどかひあるべくもなしとこそきけ

かの左兵衛のかみの、御事によりてとの給ふなり、【拾遺物名いぬかひの見ゆ、鳥の子はまたひなながらたちていぬかひの見ゆるはすもりなりけり】(射弦考和名抄)卵(和名加比古)となん有ける、

(右)おなじ右のおほいどの、みやす所、みかどおはしまさすなりてのち、式部卿の宮なんすみたてまつり給ひけるを、いか、ありけん、おはしまささりける頃、齋宮の御もとより、御文奉り給へりけるに、みやす所みやの、おもほゆるかな

はしまさぬ事なときこえ給ひて、おくに、
式部卿宮は宇多皇子敦實親王也、齋宮は親王の御妹柔子内親王なり、
(後撰拾遺集)ゆきかりぬれば後
老ら山に降にしゆきのあしたえていまはこしらのひともかよはず

後撰集には式部卿あつみのみこをのびてかよふ所侍りけるを、後に絶々になりければ、いもうとの前齋宮のければ、

みこのもとより、此ころはいかにぞと有ければ、其返事にとて入たり、【保孝按後撰の方雪降に行日を兼たり】となん有ける、御返しあれど、

此下に詞落たるなるべし、今の本には末になしとありといふ詞あれど、こは後の人のかけるものなり、
(矣)かくて九の君、侍従の君にあはせ奉り給ひてけり、おなじころみやす所も、宮おはしまさすなりにければ、左のおと、の左衛門の督におはしけるころ、御文奉り給ひけり、かの君むことられ給ひぬとき、給ひて、おと、みやす所に、

宮は式部卿宮、左のおと、は小野宮實賴公也、侍従の君の三條殿へ聲とられたるをうらやみて、御息所へのけさうをいふなり、御息所の御心のよるかたも

しらすといふなり、つひにはかよひ給へるとおぼし、
(先)おほきおと、の北のかたうせ給ひて、御はての月になりて、御わざの事いそがせ給ふころ、月のおもしろかりけるに、はしに出る給て、もの、いとあはれにおぼされければ、

おほきおとゞは眞信公なり、北の方は寛平の皇女、次の段に左のおとゞの御母すがはらの君とある同じ人なり、御わざとは佛事をいふ、【別人の様にかきて同じ人なる事外にもあり】

（續後撰下眞信公）かくれにし月はめぐりてきにしかどかげにもひとほみえすぞ有ける

（三）をなじおほきおとゞ、左のおとゞの御は、すがはらの君かくれ給ひにける時、御ふくはて給ひにけるころ、

左のおとゞは實頼なり、大鏡にいふこれ忠平おとゞの一男におはします、小野宮のおとゞと申し、御母は寛平法皇の御むすめと、【忠平は眞信公なり、此北のかたの御母かた菅原氏なれば、菅原の君とは申せしなるべし、】

亭子の帝なん、うちに御さうそこ聞え給ひて、色ゆるされ給へる、さりければ、おとゞいとよきに、すはうかさねなどき給ひて、きさいの宮にまゐり給ひて、院の御せうそこの、いとうれしく侍りて、かく色ゆるされ侍る事なときこえ給ふ、さてよみ給ひける、
眞信公に色ゆるし給はん事を院より當今は奏せさせ給

ひて、さてゆるされ給へるなり、后の宮は七條后宮温子、眞信公の姉君なり、ぬくをのみかなしとおもひしなき人のかたみのいろは又もありけり

うせ給ひしの方は寛平の皇女にて、即寛平の御さたにて色ゆり給へればかたみの色といふ、
とてなん日記給ける、其ほどは中辨になんものし給ひける、

眞信公は中辨を歴すして四位侍臣にて參議に任じ、後に右大辨に成給へりといへり、公卿補任など、合考べし、
（三）亭子のみかどの御ともにおほきおとゞ大井につかうまつり給へるに、もみぢをぐらの山にいろくいとおもしろかりけるを、かぎりなくめで給て行幸もあらんにいとうある所になん有ける、かならず奏してせさせ奉らんなど申給ひて、ついでに、

こ、の事はいたうたがひあり、百人一首の此歌の所にことわれり、眞信公大納言の時の事なり、【拾遺端詞、亭子院大井河に御幸ありて行幸もありぬべき所なりとおほせ給ふにこのよしそうせんと申て小一條太政大臣とて眞信公なり】

（紅葉の色も大鏡）をくら山客のちみち葉こ、のあらはいまひとたびのみゆきまたなん

となん有ける、かくてかへり給ひてそうし給ひければ、いとけうある事なりとて、大和の行幸といふことはじめ給ひける、

（三）おほむに季繩の少將【宇治拾遺には季直とあり】すみける頃、みかどの、給ひける、花おもしろくなりなばかならず御らんせんとありける、おぼし忘れておはしまさざりければ、少將、
（新拾遺下藤原季繩）ちりぬればくやしきものを大和川きしの山吹今さかりなり【古今、一蛙なくるでの山吹散にけり花の盛にあは

ましものを】
とありければ、いたうあはれがり給ひて、いそぎおはしましてなん御らんじける、
いづれの御時にか、もしは宇多の院にや、

（三）同じ少將やまひにいたうわづらひて、すこしをこたりてうちにまゐりたりけり、近江守公忠のきみ掃部助にて藏人なりけるころなりけり、

公忠前に出、延喜の八年正月掃部助、二月藏人とある書に見えたり、

そのかまりのすけにあひていひけるやう、みだりご、はまだをこたりはてねど、いとむつかしう心もとなく侍ればなんまゐりつる、

物むつかしう心のさわやがねど、餘に久しうまゐらねばといふなり、

のちはしらねどかくまで侍る事、まかり出てあさてばかりまゐりこん、よきにそうし給へなどいひおきてまかぬ【宇治拾遺に、後はえらねどかくまではべればと有ば明らかなり、こ、も下に奏し給へと云によれば、上にかくまで侍る事を奏し給へとつゝくなればあしからず、】
三日ばかりありて、少將のもとより文をなんおこせたりけるをみれば、
（新古今集季繩）くやしきそのちにあはんと契りけるけふをかぎりといはましものを

とのみかきたり、いとあさましくてなみだをこぼしてつかひにとふ、いかゞものし給ふと、へばつかひもいとよはくなり給ひにたりといひて、なくをきくにさらにもきこえず、みづからたゞ今まゐりてといひて、さとにくる

まとりにやりてまつ程いと心もとなく、この名のみかどに出たちてまちつけて、のりてはせゆく、五條にぞ少將の

家あるに、いきつきてみれば、いとみじうさわぎの、しりてかどさしつ、しぬるなりけり、せうそこいひいるれど何のかひなし、いみじうかなしくてなく／＼かへりにけり、かくてありける事をかんのくだりさうしければ、みかどもかぎりなくあはれがり給ひける、

かんのくだりは上の條なり、然れば季繩【季繩少將は延喜十九卒】の奏し給へといひしを本に奏するをいふなり、

(四) 土佐のかみにありけるさかゐのひとぎねといひける人、やまひしてよわくなりて、とばなりける家にゆくてよみける、

酒井人古今集にみえたり、
ゆく人はそのかみこんといふものをこ、ろぼそしやけふのわかれば

そのかみとは或注にそのをりといふにて、過にしかたをも今ゆくさきをもいふといへり、語の心いさ、かこころゆかねど、先しか心得ても有ぬるべし、いつばかりと時をさすを、さ、でいふことばなるべし、

(五) 平仲か色このみけるさかりに市にいきけり、なかごるはよき人々市にいきてなんいろこのむわざはしける、

それにこきさいのみやのごたち市に出ける日なん有ける、平仲いろこのみか、りてになう懸想しけり、のちに文をなんおこせたりける、女ども車なりし人は多かりしを、たれにとあるふみにかとなんいひやりける、さりければをこのもとより、

色このみか、りとはたはぶれわざしたるなり、になうは二無うなり、【濱臣云、源氏帚木巻に云、わらはに侍りしとき、女房などの物語よみしをき、て、いとあはれにかなしく心ふかき事哉云々、此條によれるなるべし、伊勢物語をひけるは考たらず】

(續後) におまたのそてはうえしかど續後
も、しきのたもとのかずはみしかどもわきておもひのいろぞこひしき

といへりけるは、むさしのかみのむすめになん有りける、それなんいと濃きかいねりきたりける、それをとおもふなりけり、さればそのむさしなんのちはかへりごとしていひつきにける、かたちきよげに、かみながくなどして、よきわかうどになん有ける、いといたう人々懸想しけれど、思ひあがりて男などもせでなんありける、されどせちによはひければ、あひにけり、そのあしたふみをもおこせず、よるまでおともせず心うしとおもひあかし

て、又の日までも文もおこせず、その夜去たまちければ來ず、あしたにつかふ人などいとあだにもし給ふとききし人を、ありありて、かくあひたてまつり給ひて、みづからこそいとまもさはり給ふこと有とも、御ふみをだに奉り給はぬ心うき事などこれかれいふ、心ちにも思ひたる事を、人もいひければ、心うくくやしとおもひてなきけり、その夜もしやおもひてまで又こせず、又の日も文もおこせず、すべておともせで五六日になりぬ、此女ねをのみなきで物もくはず、つかふ人など、大方は、

なほしそ、かくてのみやみ給ふべき御身にもあらず、人にはしらすでやみ給ひて、ことわざをもし給ひてんといひけり、

つかふ人の數ある中に、大かたの人は、それはそれに思ひ絶給ひて、又他の人にもといふなり、【濱臣云、ことわざはこと男をいふに、上文わかくありきわぶをねたみてことわざするにやあらんといへるを思ふべし】

物もいほでこもりゐて、つかふ人にもみえで、いとながかりけるかみをかいきりて、手づから尾になりにけり、つかふ人あつまりてなきけれど、いふかひもなく、いと

いと心うき身なれば、しなんと思ふにも死なれず、かくだになりて、おこなひをだにせん、かしがましくかくな人々いひさわぎそとなんいひける、か、りけるやうは、平仲そのあひけるつとめて人おこせんと思ひけるに、つかさのかみ俄に物へいますとてよりいまして、

よりふしたりけるをおひおこして、いま、でねたりけるとして
平仲か朝寝したるを憎のおこして、いぎたなきといふなり、

せうえうしに【冬云、古今集秋上に、うへのをのこともかものかはらに川せうえうしたる云々、伊勢物語にもむかしおとこみこたちのせうえうし給ふ、源氏須磨に、浦つたひにせうえうしつ、かへるに云々、重元集にたんごにてふ猶せうえうに云々などあるは皆逍遙の心なり、莊子にも逍遙の遊あり】遠き所へゐていまして、さけのみものしりて、さらにかへし給はず、からうじて歸るま、に亭子の御門の御ともに大井にゐておはしましぬ、そこにまた二夜さふらふに、いみじうゑひにけり、夜ふけてかへり給ふにこの女のがりがいかんとするに、かたのふたが

りければ、おほかたみなたがふかたへ、院の人々類【保
孝按、るゝと云べし、上の巻の首にすでにいへり】してい
にけり、此をんないかにおぼつかなくあやしと思ふらん
とこひしきに、けふだに口もとく暮れなん、いきてあり
さまもみづからいはん、かつ文も遣らんとおひさめてお
もひけるに、人なん來て打た、く、たぞと、へば、猶そ
の君に物きこえんといふ、

平仲この頃はまださうなりしなるべし、

さしのぞきてみれば、此家の女なり、むねつぶれて、こ
ち來と云て、文をとりて見れば、いとかうばしき紙に、
きれなる髪【濱臣云、そぎたる髪の本をいふ、きれはし
と今もいふなり、緋、紙、木などにかぎらず、又物をもて
たちしもの、惣名と見えたり、和泉式部集、宮法師にな
りて髪のをきおこせたまへるを云々○林葉集三、「さをし
かのむねわけにする小萩原たゞきれ」の錦なりけり○
山家集下、鹿のたつ野への錦のきりはしは殘おほかるこ
ちこそすれ○續世繼白川のわたり紫檀のきれもてきて
そのかうらんのをれたるつくなん○今物語、ゆふしでの
きれに書たりける云々】をすこしかいわがねて、つ、み
たり、いとあやしう覺えてかいたることをみれば、

あまの川そらなるものとき、しかどわが目のまへの涙な
りけり
天川に尾をそへつるならん、
とかきたり、尾になりたることなるべしとみるに、目も
くれぬ、心きもまごはしてこのつかひにとへば、はやう
みぐしおろし給ひてき、か、ればこたちもきのふけふい
みじうなきまどひ給ふ、下すのこ、ちにも、いと胸いた
くなん、さばかりに侍りし御ぐしをといひてなく時に、
男のこ、ちいとみじ、なでふか、るすきありきをして
かくわびしきめをみるらんとおもへど、かひなし、なく
なくかへりごとかく、
世をわぶるなみだながれてはやくともあまの川にはさや
はなるべき

世の髪きことたへがたくとも、尾になるべき事はと
いへり、
いとあさましきにえものもきこえず、みづから只今まゐ
りてとなん云ひたりける、かくてすなはちきにけり、そ
のかみ、女はぬりごめに入りけり、事のあるやうさばか
りを、つかふ人々にいひてなく事限なし、物をだにきこ
えん御聲をだに去たまへといひけれど、さらにはいらへを

だにせず、か、るさきはりをばしらで猶たゞいとほしきに
云とや思ひけんとしてなん、男は世にいみじき事にしける、
そのかみはそのをりなり、ぬりごめは物おく所にて又
人も引こもるべく去つらひたる物なり、事のあるやう
とは平仲比叺の事さまをいひてといふなり、さばかり
はそればかりなり、

(三) 去げもとの少將に女、
藤原滋幹は大納言國經男、延長六年六月右少將兵衛、
承平元年卒と物に見えたり、女誰としらす、
(新古今集四讀人不知、
こひしさに去ぬる命を思ひ出てとふ人あらばなしとこた
へよ

いのち去なん時に、もし男のおもひ出て來てとは、と
なり、
少將かへし、
からにたにわれきたりてへ露の身のきえばともにと契お
きてよ

てへはといへなり、といの反ちなるをてに廻していふな
り、だにといふに、女の生てあるよに去らせたらば其に
去なんものを、よし先だちぬともといふ心をこめたり、
(三) 中興のあふみのすけがむすめ、もの、けにわづらひ

てじやうざうたいとくをけんぎに去けるほどに、人とか
くいひたりけり、なほしもはたあらざりけり、
うき名のみにはあらぬといふなり、たゞにしちといふ
に同じ、
しのびてありへて後、人のものいひなどもうたてあり、
いとかさねくいはる、なり、
猶世にへじなどおもひいひてうせにけり、くらまといふ
所にこもりていみじうおこなひをり、さすがにいとわび
しうおぼえけり、京をおもひやりつ、よろづの事いとあ
はれにおぼえておこなひけり、なくくうらふしてかた
はらをみればふみなん見えける、なそのふみぞとおもひ
てとりてみれば、このわがおもふ人のふみなりけり、こ
とばはなくて、
(後撰戀四
すみぞめのくらまのやまにいろひとはたどるくもかへ
りきな、む

此歌後撰に入、こと書に淨藏くらまへなんいるといへ
りければ中興の女とあり、
とかけり、いとあやしうたれしておこせつらんとおもひ
をり、もてくべきたよりもおぼえず、いとあやしかりけ
れば、又ひとりまどひきにけり、かくて又山に入にけり、

さておこせたりける、
からくしておもひわする、わびしさをうたてなきつるう
ぐひすのこゑ

やう／＼におもひわすれつるを、又文おこせて催しつ
るとかこちたり、たどる／＼もとよみしを恣にそへて
いふなり、

返し、
さても君わすれけりかしうぐひすのなくをりのみやおも
ひ出べき

といへりける、又じやうざう大とく、
詞花戀上淨観法師
わかたぬにつらき人をばおきながらにのつみなき世を
やうらみん

此歌は前のうたとおなじ時には有べからず、いつにて
もつかはしたるなるべし、世をうきといふもかくつら
き人につけてこそあめれ、世にとりては何のうらむべ
きよしなきをといふなり、

ともいひけり、此女はになくかしづきてみこたちかんた
ちめよばひ給へど、みかどにたてまつらんとてあはせざ
りけれど、此事出来ければおやもみずなりにけり、
(二六) 依兵部卿の宮、この女のかゝる事まだしかりける時

ければ、みこおはしましたりけるに、月のいとあかけれ
ばよみたまひける、
折々宮に物がたりなどし奉れど、うちとけたることは
なかりしなり、

よなく／＼にいづとみしかどはかなくていりにし月といひ
てやみなん
とのたまひて、かくてあふぎをおとし給へりけるをとり
て見れば、老らぬ女の手にてかくかけり、
わすらる、身はわれからのあやまちになしてだにこそ君
をうらみめ

こは老らぬ女の歌なれば、いかなるあやまち有しやま
るべからず、
とかけりけるをみて、そのかたはらにかきつけて奉りけ
る、

ゆ、しくもおもほゆるかな人ごととまれにける世に
こそ有けれ【濱臣云、上文の歌にもよめるごとく扇はわ
すらる、ならひにて、ゆ、しきものなるよしの故事もあ
れば、此歌あふぎとはいはねども、直に扇にかきつけた
るにて、扇をおもはせて、さてゆ、しくもとはよめるな
るべし】

よばひにけり、みこ、
をぎの葉のそよごととにぞうらみつる風にうつりてつら
きこゝろを

萩の葉の風のまに／＼何方へも打なびくを、女の心の
あだなるにそへたり、まへにみこたちかんだちめ此を
んなをよばひ給ひしと有しも此心なるべし、

これもおなじみや、
(新勅四兵部卿元長親王)とし新勅
あさくこそ人はみるらめせき川のたゆるこゝろはあらし
とぞおもふ

打まかせて關川といへるは逢坂の關川なり、おのづか
らあひあふ坂てふ戀もこえたるなるべし【寛平菊合十
番、逢坂關、「此はなにはなつきぬらし關川のたえずも
みよとよれる菊の葉〇一説にせきたる川を關川といへ
るはわろし、さる詞やあるべき】

返し、
(新勅平中興女)
せき川の岩間をくゞる水あさみたえぬべくのみ見ゆるこ
ころを

かくまのあたりにだに絶々にみえ給ふ御心を、いかで
あさくはおもひ給へざらんとふくめたり、
かくて此女出てものきこえなとすれど、あはでのみあり

となん、又この女、
わすらる、ときは山のねをぞなく秋野のむしの聲にみ
だれて

かへし、
なくなれどおぼつかなくぞおもほゆるこゑきく時のいま
はなけれど【濱臣云、山の嶺とつゞけて哭とそへたり、
異本のときはの山もとあるはわろし】

なくと云ふなれど、いふなり、こは絶て後のことなり、
又同じみや、
雲井にてよをふるころはさみだれのあめの下にぞいける
かひなき【二三の句つゞきわろし、すべてもわろし】

雲井とは萬葉にも遠き事をたとへいへり、然れば中の
遠くへだ、りての後をいふなり、
かへし

ふればこそこゑも雲井に聞えけめいとゞはるけきこゝろ
のみして

雲井にて世をふると聞え給ふをうけて、吾をへだて、
世に経ればこそ今のたもふ言もこと遠く聞ゆらめ、そ
れにつけても君ははるかに成たまへるこゝろのすると
いふなり、

(二九) おなじみやにことをんな

あふことのねがふばかりになりぬればた、にかへまし時ぞこひしき

いたづらにかへし奉りし事もありしを、今は御夜がれがちなれば、其時だにとりかへさまはしきといふなり、【あふことのねがふといふ詞こ、ろゆかねと、外にいはんよしもなし】

(三〇) 南院のいまきみといふは右京のかみむねゆきの君のむすめなり、それにおほきおと、の内侍のかんのきみのかたにさぶらひけり、それを兵衛のかみの君あやぎみと聞えける時さうしにまばくおはしけり、おはしたえにければとこ夏のかれたるにつけてかくなん、南院の今君後撰に出、かんの君は眞信女貴子なり、兵衛の君誰としらすあや君はをさ名なり、

かりそめに君かふしみしとこなつのねもかれにしをいかでさきけん【古今、ちりをだにするじとぞおもふ咲しより妹とわがぬる床夏のはな】
根枯といふに寝離るをそへたり、
となんありける、
(二) おなじ女おはきがうしをかりて、又後にかりたりける、すまざりければよみてやりける、

れば、奉りたりし牛は去にきといひたりける返りごとに、源巨城後撰集にみえたり、【後撰端詞、人のうしをかりて侍けるに、去に侍りければいひつかはしける、閑院のみこ、案此本閑作南閑誤なり】

わがのりし事をうしとや消にけんくさにか、れるつゆの命は
牛は草をかふゆゑに草にか、れるといへり、

(三一) おなじ女人に、
おほそらはくもらすながら神無月としのふるにも袖はぬれけり
としのふるといふに泪も時雨もこめてきてあはでとしふる事をそへたり、【拾遺一よみ人しらす「しぐれにもあめにもあらで君こふる下句同】

(三二) 大膳のかみきんひらのむすめどもあかたのゐといふ所にすみけり、【冬云、縣井戸地名也、拾芥抄云井戸殿又縣井戸一條北、東洞院西角云々】おほいごはきさいの宮に少將のごといひてさぶらひけり、三にあたりにけるは備前守さねあきら、まだ若をとこ【わかをとこ一四一段にもあり】なりける時になんはじめのをとこにしたりける、すまざりければよみてやりける、

橘公平後撰に出、縣井戸は一條よりかみと云り、後撰春下にあがたの井戸といふ家より藤原治方に遣しける公平女、【都人きてもみよかし蛙なくあがたの井戸の山吹の花】大子はじめの姉をいふ、さて第三のむすめは信明にあひそめしとなり、信明は源公忠男、これも後撰にみゆ、

このよにはかくてもやみぬわかれちのふちせをたれにとひてわたらん
かく捨られてこの世は忙つ、も有ぬべきを、渡り川の淵瀬をばいかにせんといふなり、女の死してかの川をわたる時は、はじめにあひたる男と、もにわたる事むかしよりいへるといふ、【十王經云、葬頭阿曲云々尋初開男肩其女牛頭鐵棒挾二人肩追渡疾瀬】
となん有ける

(二四) おなじ女後に兵尉もろたゝにあひて、よみておこせたりける、風吹雨降ける日のことになん、
藤原庶忠中納言兼輔四男、天慶九年藏人の兵衛尉、こち風はけふひくらしにふくめれとあめもよにはたゆきもよにあらじな

雨もよのものは添て語をのぶる例紀にも萬葉にも多し、

雪もよも同じく雨の夜雪の夜といふなり、けふは雨風もあれど今夜は雨夜にはあらじといひて、男をまつ時の女心あはれなり、
とよみけり、兵衛のせうはなれて後、臨時の祭の舞人にさ、れていきけり、此女とも物みに出たりけり、さて歸りてよみてやりける、

こは賀茂臨時祭なるべし、【冬云江次第云、祭前未日或中日行之祭日覽前駐同日若青色不具之前驅者先參入付藏人奏此山有仰召藏人奏給之今日監下重丸鞆帶鼻切役又給賀茂祭使舞人十二人着座】
むかしきてなれしをすれる衣手をあなめづらしとよそにみるかな

臨時祭の使の青摺きる事古き記録どもに多し、【冬日、弘仁内裡式云、十一月新嘗式今日小齋不論高下皆青摺衣、臨時祭條云舞人裝束青摺衣袍赤紐着左方云々、神事には右の隨を傳へて、後まで大嘗新嘗及賀茂臨時祭などには定まりて摺衣を用ひらる、其外種々有證今脱之】かくて兵衛尉やまぶきにつけておこせたりける、もろともにゐでの里こそこひしけれひとりをりうき山ぶきのほな

みでを居によせて下に獨をりうきといへり、且をりうきに居と折をかぬ、「古今」かはづなくみでの山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを「井出里は山城の相樂郡なり、橘諸兄公の家有て、井出の左大臣と云」となん、かへしはえらす、かくてこれは女通ひける時におほそらもたゞならぬかな神無月われのみまたにしぐるとおもへば

これもおなじ人、冬日、新古今戀五にあり
あふ事なみの下草みかくれてまづ心なくねこそながる

みかくれては水に隠れたるなり、それを人にしられぬにそへたり、且浪にゆらる、よりの事を詞として、まづ心なくとはいひしならん、

(二五) かつらのみこ、なぬか【なぬかは七月七日なり】のころ忍びて人にあひ給へりけり、さてやり給へりける、袖をしもかさゞりしかどたなばたのあかぬわかれにひぢにけるかな

たなばたのあふ夜衣をかす事例なり、さてわれは袖をもかさゞりしに、わかれに袖のぬれしとたなばたによせて我わかれのあかざりしをいふ、

かくはやく死ぬる身なるをあらで、長く有ん物とたのみしとなげくなり、袖に涙はつけていへるのみ、

(二六) かつらのみこよしたねに(新古今戀四下内親王)つゆしげみ草のたもとを枕にてきままつむしのねをのみぞなく

つゆしげみといふは末の匂へかけたるなり、さなくばただ露しげきといふべし、

(二七) かんろんのおほいぎみ、
後撰集に出

むかしよりおもふ心はありそうみのはまのまさごはかすもえられず

(二八) おなじ女にみちのくにのかみにてまにし藤原のさねきがよみておこせたりける、やまひいとおもくしておこたりける頃なり、いかでたいめたまはらんとて、こは京にての事なり、眞樹は彈正忠保生男右大臣是公後、

からくしてをしみとめたる命もてあふ事をさへやまんとやする
やまひせしたにあるを、あふ事さへやまかといふに病をそへたり、

(二六) 右のおとゞ頭におはしける時に、小式部のめのこのもとによみてたまひける、

三條右大臣にや、小貳のめのと後撰に出、天曆の御乳母といへれどおぼつかなし、

(繪後撰戀三九條右大臣)
秋の夜をまてとたのめし言のはにいまをか、れるつゆのはかなさ

さらば戀も死べきをまてといひし契にか、りて、ながらへけるがはかなきといふなり、

秋も來ると露もおかねどことの葉のわがためにこそ色かはりけれ

これは小貳のこたへなるべきを、言葉の落たるならん、さてこ、ろに秋も來ずといへるよりみれば、上のもまた秋ならねど露をいはんとて、設て秋の夜をとよみ給ひしなるべし、さて上のみゆは右の歌を皆うけたり、末は男は今さはいへど、實はうとく成ての後の心故に、こ、にはおして色かはれりといふべし、

(二七) きんひらがむすめしぬとて、
ながけくもたのみける哉世の中をそでになみだのか、る身をもて

といへりければおほいぎみかへし、
もろともいざとはいはでまでの山などかはひとりこえんとはせし【後撰戀五公賴朝臣のむすめにま給ひて住侍りけるに、わづらふ事ありてまぬべしといへりければ、つかはしける、あきたゞの朝臣、「もろともいざとはいはでまでの山こゆともこさん物ならなくに、朝忠集にもあり】

といひたりけり、さてきたりける夜もあふまじき事やありけん、えあはざりければかへりにけり、さてあしたに男のもとよりいひおこせたりける、
あかつきはゆふつけどりのわびごゑにおとらぬねをぞなきてかへりし
おほいぎみかへし、
あかつきのねさめのそらにき、しかどとりよりほかの聲はせざりき

おとらぬねを鳴しといへるをとがめたり、
(二八) おほきおとゞは大臣になり給てとしごろおはするに、枇杷のおとゞはえなりたまばでありわたりけるを、つひに大臣になり給にける御よろこびに、おほきおとゞ梅を、りてかざし給ひて、

おほきおと、は信公、延喜十四年八月廿五日右大臣、
延長二年正月廿二日左大臣の左大将、八年攝政、承平
六年八月太政大臣、枇杷のおと、は仲平公承平三年二
月十三日右大臣左大将、同七年正月十日左大臣、天慶
八年九月一日出家、【季吟云、貞信公よりは御兄にわ
たらせ給へど、廿年まで大臣になりおくれ給へりし、
つひになりたまへれば】

(新撰上貞信公)
おそくとくつひにさきけるうめのはなたがうゑおきした
ねにかあるらん

と有りけり、其日の事どもをうたなどかきて齋宮に奉り給
ふとて、三條の右の大臣かの女御やがてこれにかきつけ
給ひける、

齋宮は寛平皇女柔子、右の大臣の女御は定方公の娘な
り、【後撰端詞云、三條右大臣身まかりてあくるとし
の春、大臣めしありとき、て齋宮のみこに遣しけると
て此歌あり】

(後撰雜、しすめの女御)
いかでかくとしきりもせぬ種もかなあれゆく庭のかげと
たのまん【後撰雜一、贈太政大臣、いま、でになどかは花
のさかすしてよそとせあまりとしきりはする】

らひ反里にて、としきりは年嫌なり、貞信公のたがう

といへりければ、女かへし、
ち、の音はことばのふかきふえ竹のこちくのこゑも聞え
こなくに

ことばのふきては口笛なり笛の譜など、なふる事をい
ふなるべし、こちくは漢土の書に孤竹三管といふ事あ
るを、こなたへ來るといふによせたるなり、

(三)としこが志賀にまうでたりけるに、増喜君といふ法
師ありけり、それはひえにすむ院の殿上もする法師にな
ん有ける、それ此としこのまうでたる日志賀に歸らで逢
にけり、はしどのにつばねをしてゐてよろづの事をいひ
かはしけり、いまはとしこかへりなんとしけり、それにそ
うきのもとより、

後撰に増基法師といふあるを、袋雙紙に此僧喜と云人歟
といへり、さだかならず、はしどののは山谷かけて橋のご
とく作れる家をいふべし、廊をわた殿といふに似たり、
(後撰戀三詠人不知)
あひみてもわかる、事のなかりせばかつく物はおもは
ざらまし

萬葉に小端をはつく、とよめる同じ語なり、
かへし、としこ、
(新撰吉戀、としこ)
いかなればかつくものをおもふらんなごりもなくぞわ

おおきしたねにかとよみ給へるをうけて、昭宣公の御
末のかくとりく、にさかえ給ふに、右大臣は是よりさ
きにうせ給ひて、女御の心ばそく思すよりよみ給へり、
とありけり、その御返し齋宮より有ける、わすれにけ
り、かくてねがひ給ひけるかひありて、古のおと、の中納
言わたり住給ひければ、たね皆ひろごり給ひて、かげお
ほくなりけり、さりける時に齋宮よう、

中納言は清慎公中納言にておはせし時なり、延喜の帝
崩まして後、此女御お給ひしによりて中納言の住給
ふにや、
はなざかりはるほみにこんとしきりもせずといふたねは
おひぬとかきく

此歌後撰にはかの女御左の大臣にあひけりと聞て遣し
ける齋宮のみこととて、上句春ごとにゆきてのみ見んと
あり、みにこんも見にゆかんと同じ事なり、

(三)さねたふの小貳といひける人の娘のをとこさねたふ
かうかへす
ふえ竹のひとよも君とねぬときはちぐさのこゑにねこそ
なかるれ
千種の聲なり、一夜といふにむかへたり、
れはかなしき
なごりもなくとはかなしきのおもひのこす事なきをい
へり、
となん有ける、ことばもいとおほくなん有ける、
(四)おなしぞうき君やれり、人のもととはとらさず、かくよ
めりけり、
くさの葉にか、れる露の身なればやこ、ろうごくになみ
だおつらん
(五)本院の北のかた、まだ師の大納言のめにていますか
りけるをりに、平仲がよみてきこえける、
本院の北のかたは時平公の室、前に出、師大納言は國經
卿にて、長良卿息、昭宣公弟なり、此北の方始は國經のめ
にておはせし事、今昔うち語にくはし、【濱臣云、此國經
の妻を左大臣の得られし始末、宇治大納言物語に詳し、
○又云後撰戀三云、大納言國經朝臣の家に侍ける女に
平定文いと忍びてかたらひ侍て、行末まで契り侍ける
頃、此女にはかに贈太政大臣にむかへられてわたり侍
りにければ、ふみにだにもかよはずかたなく成にけれ
ば、かの女の子いつ、ばかりなるが、本院の西の對にあ
そびあるきけるをよびよせて、母によせ奉れとてかひ

なに書付侍ける、平定文、「むかしせしわかかねことのかなしきはいかにちぎりしなごりなるらん、かへしよみ人老らず、「うつ、にてこれちぎりけんさだめなき夢路にまどふわれはわれかは左のおと、則時平公なり」はるの野にみどりにはへるさねかづらわがきみさねとたのむいかにぞ

上は君さねといはん序のみ、わが君さねとは或本妻にといふ戀のみ、さねは其正身をいふ、つかひさねは正使、まらうとさねは上客をいふにおもひ合すべし、

といへりけり、かくいひく「てあひちぎること有けり、その後左のおと、の北のかたにての、しり給ける時、よみておこせたりける、

ゆくすゑのすくせもしらすわがむかしちぎりし事はおもほゆやきみ

となんいへりける、その返しそれよりまへへも歌はいとおほかりけれどえきかす、

(三) いづみの大將故右のおほとにまうで給へりけり、ほかにて酒などまゐりゑひて夜いたくふけて、ゆくりもなく物し給へり、おと、驚き給ひていづくにも物し給へるたよりにかあらんときこえ給て、みかうしあげさわ

給ひて、大將に物かづけ忠峯もろく給はりなど去けり、物かづけは装束、ろく給はりは俵祿なり、

(三) そのたゞみねがむすめありとき、て、ある人なんえんといひけるをいとよき事なりといひけり、をよこのもとふりかのため給ひしことこのごろのほどにとなんおもふといへりけるかへりごととに、

わがやどのひととす、きうらわかみむすび時にはまだしかりけり

かのむすめのまだかたおひなるをいふ【伊勢物語、「うらわかみねよげにみゆるわかき人を人のむすばん事をしぞおもふ」後撰戀二、まだ年わか、りける女につかはしける源中正、「葉をわかみほにこそいでねはなす、きまたの心はむすばざらめや」

となんよみたりける、まことにまだいとちひさきむすめになん有ける、

(三) つくしにありけるひがきのごといひけるは、いとらうあり、をかしくて世をへける物になん有ける、としつきかくてありわたりけるを、すみともがさわぎにあひて、家もやけ、物の具【濱臣云、物の具は調度の事なり】後撰集雜二、年頭すみける女を男思ひはなれて、物の具などはこび

ぐに、みぶのたゞみね御ともあり、みはしのもとに松ともしながらひざまづきて御せうそこまうす、

泉大將は高藤男定國、故左のおほいどのは時平公なり、ゆくりもなくはおもひかけずといふなり、忠峯は古今集の序に右衛門府生と見えたり、此大將の隨身にて有しなるべし、さて階下に續松もちながら大將の御せうそこまうすなり【閑云、壬生はみぶとよむは下は水の如くおもへる後人のわざか、躬恒が集にみぶの忠峯と有、和名抄土佐國安藝郡丹生（爾布）筑前國上坐郡壬（生布）とありて、丹生はもとより壬生とかけるもにふとよめり、或人の藏の後撰集にはことごとくにふのたゞみねとあり、忠峯先祖不詳、作者部類云從五位下安綱子云云、一説、府生木工允忠衛子】

かさ、ぎのわたせるはしの霜の上をよはにふみわけことさらこそ

時平公の何處にもし給ふ使にかと有故に、わざと此殿へとなり、かさ、ぎの橋は、唐詩に烏鵲橋邊烏鵲飛とあるごとく禁中の橋をいふ、

となんのたまふとまうす、あさじのおと、いとあはれにをかしとおほして、その夜ひと夜おほみきまらりあそび

侍ければ女のよめる、もみなとられはて、いとみじうなりにけり、

ひがきのご後撰に出、筑前の遊女といへり、【冬云、袋草紙三云、肥後國の遊君、檜垣老後落魄者なり云々】

か、りともまらで、野大貳よしふるうての使にくだり給て、【上文野大貳すみともがさわぎの時うての使にされて、○冬云、うての使の事後撰雜一の端詞にあり、小野好古朝臣にしの國うての使にまかりて二年といふ年云々と見えたり、勘物云、朱雀院御宇天慶元年正月右少將、二年正五位下、三年兼追捕囚賊役伊豫海賊純友追罪之事なり、それがいへのありしわたりをたづねてひがきのごといひけん人に、いかであはん、いづくにかすむらんとのたまへば、此わたりになんすみ侍りしなど、もなる人もいひけり、あはれか、るさわぎにいか成にけん、たづねてしがなとのたまひけるほどに、かしらまろきおうなの水くめるなん、まへよりあやしきやうなるいへにいりける、ある人有てこれなんひがきのごといひけり、あはれがり給ひてよばすれど、はぢてこでかくなん、

好古うてのつかひの事前に出、後撰集此檜垣がうたのこと、書に大貳藤原與範とあるは異なる説なり、おう

なほ和名抄編(於無奈)こはおいをみな畧なり、そ

(三) 又おなじ人大貳のたちにて、秋の紅葉をよませけれ

をおうなともかよはしいへるなるべし、
ぬば玉のわがくろかみは(後撰雜三)おひはて、かしらのかみも(袋)

おかのねはいくらばかりのくれなるぞふり出るからに山

草子楡垣家集志ら川のみつばくむまでなりにけるかな

木のほのみみづるころ鹿も鳴なれば、たゞかくいひな

後撰には一としふればわがくろかみも一とあり、志ら川

したるのみ、

は肥後國阿蘇山より出る川なりといへり、【躬弦云、源

(三) このひがきのご歌なんよむといひて、すきものども

氏物語新釋にいはい、古本今昔物語卷十二、増賀法師

あつまりて讀がたかるべき末をつけさせんとてかくいひ

の事をいへる條に、美豆波左須夜曾知阿未利乃於以乃

けり、

奈美久良介乃保彌爾阿布宇禮志伎ともあれば、三齒

すき物は事このむものといふなり、

さすともいふなり、老て齒のまはらに落て、上の齒下の

わたづみのなかにぞたてるさをしかはとて、すゑをつけ

齒とみつさし合て、あふ様になりたるをいふならん、

さするに、

三輪とこ、ろえていふ説はみな誤なり、今昔にも美豆

秋の山べやそこ(其所底兼)に見ゆらん(連歌)

波とこそ書たれ、かの楡垣の編がよめるもおなじ

とぞつけたりける、

とよみたりければあはれがりてきたりけり、御そめきてかづ

(三) つくしなりける女京にをとこをやりてよみける、

かさねぬきてなんやりける、けたひけり

(新後拾遺三監命婦)

あこめは鴉かほくことは鞋に同じくて鴉は束帶の下に

人をまつやどはくらくぞなりにける

も着れば、身の長とひとしくす、鞋はうちうちにも着、

ちぎりも月のうちにみへねば

又はよるの物ともすれば、裾いと長きなり、是をもてわ

其月のうちに歸らんと契りしをみえざればなるべし、

かつべし、後世のさうぞく抄どもに、此けぢめを去りわ

となんいへりける、

きまへたるなし、

(三) これもつくしなりける女、

秋風のこ、ろやつらさ花す、きふきくるかたをまづそむ

大袷は男のものはら下にきる物なり、女もきる、又小袷と

くらん

いふは女のうへにきるものなり、

たゞ打見たるさまをいへり、

まらくものこのかた【肩方兼】にしもおりゐるは天津風

(三) 先帝の御時、うづきのついたちのほうぐひすのなか

こそふきてきつらし【保孝按、おりゐると云詞は後撰冬

ぬをよませ給ひける、公忠【冬云、公忠、後撰雜一、好

題不知讀人不知→志ら雲のおりゐる山とみえつるはふり

古のうての使のとき歌讀し人なり、源公忠朝臣と見えた

つむ雪のきえぬなりけり、此歌菅萬上冬にもみゆ【

り】

白き大うちきゆゑに白雲、にたとへたり、

りけり、みかど御らんじてみそかにめしてけり、これを人にも知らせ給はで時々めしけり、さてのたまはせけり、(新勅撰)あかでのみふればなるべしあはぬよもあふよも人をあはれとぞおもふ【新勅撰に、題を知らず、延喜御製とていれり】

あかでとし月を經ると思ふなり、

とのたまはせけるを、わらはのこ、ちにもかぎりなくあはれにおぼえければ、しのびあへともだちにさなんのたまひしとかたりければ、此まうなるみやすん所き、ておひ出給ひける、

(三)三條の右大臣の女つ、みの中納言におひはじめ給ひけるあひだは、くらのすけにてうちの殿上をなんし給ひける、女はあはんの心やなかりけん、心もゆかずなんいませかりける、男も宮つかへし給ひければ、えつねにもいませ、りける頃、女、

兼輔朝臣は延喜九年三月補藏人右衛門佐、元兵衛佐内藏助、十三年左少輔(内藏如元)と物に見えたり、(新勅撰)三條右大臣女、たきもの、くゆるこ、ろはありしかどひとりはたへてねられざりけり

兼輔朝臣は延喜九年三月補藏人右衛門佐、元兵衛佐内藏助、十三年左少輔(内藏如元)と物に見えたり、たきもの、くゆるこ、ろはありしかどひとりはたへてねられざりけり

按君は兵部卿をさす

となんかきつけていける、

(四)こやくしくそといひける人、あるひとをよばひておこせたりける、

古今著聞にや、此小薬師菘の事侍りき、くそとは人のきたなき物のみにあらず、本草のかき葉をも、よろづの物のくづになりぬるをいふ【濱臣云、くそはこそと通語にて名の下につけいふ詞なり、菘の義】(新勅撰)批左大臣、かくれぬのそこのしたくさみかくれて去られぬこひはくるしかりけり

物にかくれて又水のその下といひて、いとくしられぬ事をつよくいふのみ、

かへし女

みかくれにかくるばかりのした草はながからじともおもほゆるかな

水底にのみ有て上へ立出ぬ草は短をもて契りの長からじをたとへいへり、さて次の詞をおもへば此人だけのひくきをもそへたるならん、

このこやくしといひける人はたけなんいとみしか、りける

取をそへたり、

返しは、上手なればよかりけめど、えきかねばか、す、(三)又をとこひごろさわがしくてなんえまゐらぬ、かくいそぎまかりありくうちにも、えまわりこぬ事をなん、いかにとかぎりなく思ひ給ふるとありければ、女さわぐなるうちにもものはおもふなり、

さわぐなるうちにもものはおもふなりわがつれ、をなに、たとへん

となん有ける、

(三)志賀の山越の道に岩江と云所に、故兵部卿の宮家(元良)をいとをかしようつくり給うて時々おはしましたけり、いと忍びておはしまして志賀にまうづる女どもを見給ふ時もありけり、おほかたもいとおもしろく、家もいとをかしようなん有ける、とし子志賀にまうでけるついでに此家にて、めぐりつ、みて哀がりめなどしてかきつたりけり、

兵部卿の宮は元良のみこなり、志賀山越は北白川の瀧のかたはしよりのぼりて、如意が嶽ごえに志賀へ出たる道なりといへり、こは崇福寺へ詣るとの道なり、(新勅撰)とてし子、かりにのみ成る君まつとふりいて、なくしが山は秋ぞかなしき【濱臣云、鳴鹿といひて志賀山とよせたり、保孝

なすき【濱臣云、鳴鹿といひて志賀山とよせたり、保孝

(四)先帝の御時に承香殿の御息所の御さうしに、中納言の君といふ人さぶらひけり、それを故兵部卿の宮、若を

とこ(一一三参看)にて、一の宮と聞えて、いろごのみ給ふけるころ、承香殿はいと近きほどになん有ける、らうありをかしき人とありとき、たまひて、

物よく心得たるさまなるをいふ、

物などのたまひかはしけり、さりける頃ほひ、此中納言の君にしのびてね給ひそめてけり、時々おはしましたのち此宮をさくといひ給はざりけり、さるころ女のもとよりよみてたてまつりたりける、

中納言の君は後撰に出、とし子も此御かたにさぶらひしを、元良のみこ物のたまひし事拾遺集に見えつ、をさをさは字にては長々と書べし、専らなる事をいふ、轉じては専らとせぬかたへもいひつゞくるのみ、(拾遺集)承香殿中納言、人をせくあくだ川てふつのにのなにはたがはぬ君にぞ有ける

【冬云、金葉戀下、一つのくにのまろやは人をあくだ川君こそつらきせ、は見えしか伊勢物語にもみゆ】

拾遺集にいれり、神名式に攝津國島上郡阿久刀神社あり、そこなるべし、なにはかくれぬ物にぞありけるとい